明治三十九年一月一日發行
每月一回五日發行
明治三十三年十二月二十五日
第三種郵便物認可

女學世界

第六巻
第壹號



女學世界 第六巻第一號 目次

登録
商標

良薬にして口に甘し

登録 浅田宗伯先生直傳 商標

浅田飴

たんせき一切

肺病の持薬

ひきかぜ

よはき人

老人の滋養薬

登録商標



十二日分 金五拾錢

一週間分 金参拾錢

四日强 金貳拾錢

二日分 金拾錢

日本全國到る處の薬店に販賣す

（郵送料壹個拾錢）

本家

東京市神田區鍛冶町

大阪北久寳寺町堺筋

（電話本局 壹壹二一番）

（電話東 三九五八番）

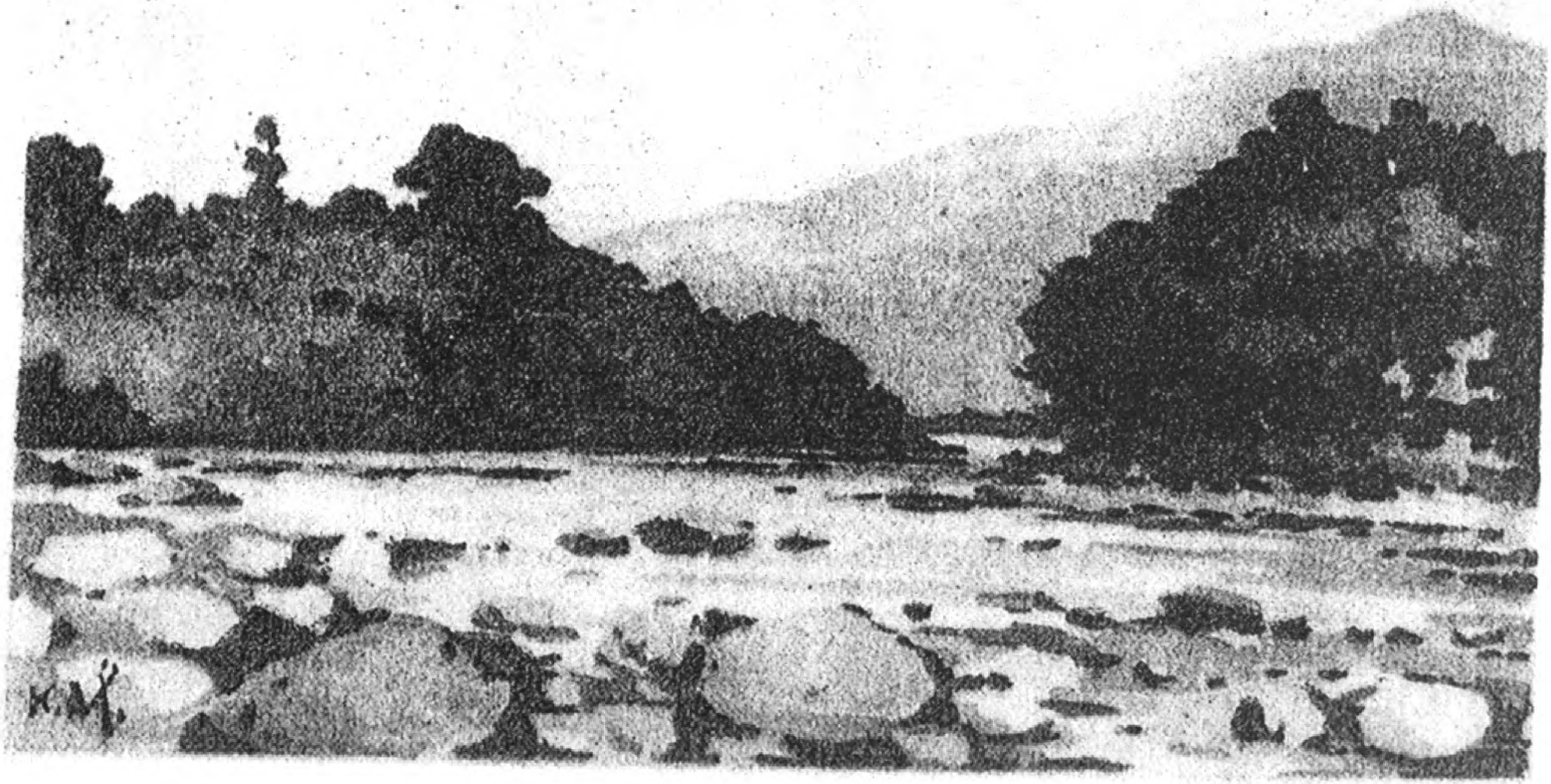
堀内伊太郎

姉妹

榊原蕉園女史筆



新年河



三宅克己筆

女 甲の一）

恭賀 ● 春の贈答品 ● 新年

外務大臣官邸厨房主管 宇野彌太郎
華族會館厨房主任 渡邊鎌吉 共著（新刊）

模範的料理書

家庭西洋料理

●彩色石版畫及びアートタイプ數葉入

洋装頗美麗 全壹冊
正價金九十五錢 郵税金八錢

西洋料理の書も澤山ありますが大抵經驗の少ない人又經驗に富んで居てもその人の談位を書き載せたものでとても完全とは云はれません此れは大家として有名なる渡邊氏と世界各國を遍歴して其料理方に精通せられたる宇野氏が多年實驗上の**スープ、ソース、卵、鳥、魚料理、菓子、サンドウイッチ**の二十二部品目三百四十餘に別ち附錄として食事の心得、食卓の飾付、盛り花、花束の造り方諸種の献立等凡て食事に關する事項を洩れなく記載し多くの圖解を挿みて説明を助けたれば如何なる素人と雖もこの一本を厨房に備へおきなば師につくの要なく如何なる料理にても隨意に調理することを得べし。

赤堀峰翁 赤堀峰吉 赤堀菊子 共著 第四版

家庭十二ヶ月料理法

和装美麗 全二冊
上卷正價金五十錢
下卷正價金五十錢
一冊郵税金八錢

落合直文著 小野鵞堂書

◎女子消息 雁のゆきかひ

和装全二冊 正價一冊金四十錢 郵税一冊金四錢

末荅庵矯菓著

◎實驗和洋菓子製造法

洋装全一冊 正價金六十五錢 郵税金六錢

赤堀峰翁 赤堀峰吉 赤堀菊子 共著 第五版

即席惣菜料理

洋装美麗 全一冊
正價金卅五錢 郵税金四錢

發行所 東京市日本橋區通一丁目（電話本局四一四番） 大倉書店

女（甲の二）

●新年の贈答品最好適書●

宮中御歌所寄人　中郵秋香先生新作
華族女學校講師　小野鷲堂先生淨書

新編手紙

（男子用）

木版半紙摺
無類の美本
男女各一册
定價四拾錢
郵稅四　錢

女子消息 文の手ほどき

本書は中郵秋香先生の新作にして 書簡文獨習者の爲に通俗平易なる 實用の文題百餘種を總振かな付にせられたるは他に其比を見ざる處特に小野鷲堂先生が 大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり

新編書簡文例

（男子用）

木版半紙摺
頗高尙優美
男女各一册
定價六拾錢
郵稅六　錢

新編 女子書簡文例

本書の文例は現代の文豪中郵秋香先生の腦漿より 迸出せしものなれば、一言一句津々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に陷らず流俗に同せずして眞に今日書簡文の好模範たり、加ふるに 書は筆硯界の巨擘小野鷲堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の龜鑑として上乘の書なり、特に上欄に類語數千句を掲げ書簡文を作習せんと欲する人をして 自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相待て斯道の完璧と稱すべきなり

中郵秋香先生著　增訂五版

文鑑 千草の錦

菊判和裝
定價五拾五錢
郵稅拾錢

此書は中郵秋香先生が三十餘年間讀書の餘暇、古學復興以來諸名家の文中金玉の響あるものを抄錄せられしが積んで數十卷と成りしを、中に就て男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論說、消息、物語體等無慮數百篇を選出せられ、之に加ふるに當代諸名流の 文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ、作習の模範と應用とに供せられしは、他に其比を見ざる最良の文鑑なり、國文學研究者は是非一本を座右に供すべき也

新編書簡文法式

（男子用）

總クロース
金文字入
定價五拾錢
郵稅六錢

書簡文の法式男女に別ちて大成せるものは、古來未だ嘗て有らず、蓋し書簡の法式のなからざるべからざるは、尙人に禮儀の缺くべからざるが如く、苟も人に禮儀なく、書簡に法式なからんか、其人如何に貴しと雖も又如何に富めりと雖、一日も交際場裡に立つこと能はざるべし、御歌所寄人中郵秋香先生深くこゝに感ぜられ、即ち男女に就きて各書簡文法式の撰著ありて之を世に公にせらる

新編 女子書簡文法式

西洋綴美本
定價六拾錢
郵稅六錢

◉女子は男子と自ら差別ありて 特に散らし文は小野鷲堂先生の書に係るものを挿入せり
此法式は元來封建制度の代に於ける尊卑上下に就きて 種々の段階を分つが如き煩を避け、今日の現狀に依り舊新を對照して以て時の宜に從ひ、適當の式を設けられしものなり、故に人間處世には一日も缺くべからざるは勿論、苟も筆を書簡に把る者は瞬時も座右を放つべからざる要書なり

發兌元　東京市京橋區中橋廣小路六　前川文榮閣

女（甲の五）

日本の家庭

▲一月一日發行　第二卷五號要目

◉紙數增加◉子供欄新設◉

- ◉平和の春（口繪）　古進　筆
- ◉おめでたう　記者
- ◉家庭の新年　山脇房子
- ◉西洋の子供　文學博士　芳賀矢一
- ◉愛想よき子供　大村仁太郎
- ◉臺所の改良　塚本はま子
- ◉わか家の子供　樋口閑林
- ◉書きそめ　麻生たつ子
- ◉大馬小馬（お伽噺）　福田琴月
- ◉お馬どう〳〵　せんせい
- ◉「童謡」お馬ピン〳〵　太　郎
- ◉子供を褒めること　笠峯樵夫
- ◉衣服の裏について　星　常子
- ◉家庭の干渉　せゝらぎ
- ◉新年中行事　紫英堂主人
- ◉主婦の學問　伊藤ふく子
- ◉わか水　幡　幽泉
- ◉家内狭くとも　記者
- ◉育兒片々　實驗生
- ◉子供の癖　沼田藤次
- ◉松の内　河井醉茗
- ◉正月のお遊び　おかさか
- ◉日本料理正月重献立　ゆふづき

▲一冊拾壹錢六冊六十錢十二冊一圓拾錢

學習院教授　大村仁太郎先生著

家庭教師としての母

和裝美本全一册●定價金七十五錢●郵稅金拾錢（進物用帙入金十錢增）

進物用帙入

- ◉第一章　婦人の本分は那邊に在る乎
- ◉第二章　母は如何にして其天職を盡すべき乎
- ◉第三章　母は如何にして從順の美德を養成すべき乎
- ◉第四章　母は如何にして誠實の美德を養成すべき乎
- ◉第五章　母は如何にして廉恥の美德を養成すべき乎
- ◉第六章　母は如何にして自信力と自覺心とを養成すべき乎
- ◉第七章　母は如何にして勉勵と秩序の精神とを養成すべき乎
- ◉第八章　母は如何にして勤儉の精神を養成すべき乎
- ◉第九章　母は如何にして禮讓の觀念を養成すべき乎

以下六章あり

附錄　母親氣質廿四種

專門大家十二名選評並に執筆

家庭講話　母と子供

和裝美本全一册●定價金六十五錢●郵稅金八錢（進物用帙入金十錢增）

進物用帙入

この書は●婦人の修養●家庭敎育●家庭衞生●家政●家庭の改善●小說●お伽噺●和歌●遊戲●料理法等について十二名の大家が、各專門得意の意見を述べられ、加ふるに地方の俊秀なる紳士淑女が實地經驗上よりしてこれ等の諸項目に關する有益なる意見を寄せられたもの丶中で特に卓絕せる且つ最も趣味に富むもの丶みを選抜して擧たものであります（總振り假名づき）

◉發兌　東京神田表神保町　同文館　大賣捌　東京早稻田 大阪備後町　同文館支店 吉岡寶文館◉

女（甲の六）

数年難治の慢性胃病を根治し 消化機能を強壮健全になす霊薬

胃病根治剤

従来世に胃病薬頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸剤（即ち重曹、マグネシヤ、苦味剤の如き一時おさゑムチスカシ的蓄式売薬のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を断つ良薬あるを見ず、本剤は独乙国高名大医ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効薬を配合し百方実験其奏効顕著なるを確認発売せし最も進歩せる完全なる新薬にして数年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壮ならしめ食慾を催進し便通を快くし気力を壮にし精神を爽快活溌にする空前の完全最新薬なれば従来種々雑多の胃病薬を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本剤を服し病根を断絶し無病強健の大幸を得られよ軽症は壹剤重症は弐剤慢性症は参剤にて根治確證す

（薬価）壹剤四拾弐銭　弐剤八拾銭　参剤壹圓拾銭　郵券代用弐割増し

新輸入 美容料 肉體色白新剤

本剤は近時仏国パリス貴紳淑女間に最新流行の発明剤にして如何程色黒き男女にても特別製弐剤を用ゆれば忽ち肉體**純白色に変化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雑多の色白薬を用ひて奏効なき人は速に本剤を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覚ゆ眞に奇効顕著の確證新剤価は並製金壹圓弐拾銭特別製分壹圓七拾銭

以上弐薬 **専売元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館薬房**

月やくおろし

本剤は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月経閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本剤参剤分を用ゆれば二三ヶ月間滞りたる月経にても必ず立處ろに流経す且もキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月経閉止及び**血塊**つ月経不通月経不順より起る子宮病血の道を全治し多年滞りの古血及**悪血毒血**を一掃するを確證す但し本剤は其奏効極めて**峻烈顕著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試薬あれ価は壹剤分七拾銭弐剤分壹圓廿銭参剤分壹圓七拾銭特別製分弐圓参拾銭

（注意）本剤の**大盛**を羨み近時続々怪しき無効な**類似偽薬**顕はる用薬者は深く注意ありて「専売元日新館薬房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證 新発見薬

医療売薬百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再発或は他病に変ずる憂なき廿世紀的改良根治新薬なり速に試み苦悩を脱せよ価は軽症根治分六拾銭重症根治分壹圓廿銭頑固劇烈の慢性症根治分弐圓卅銭 着金即刻送薬す郵券代用必ず二割増の事

以上弐薬 **専売元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館薬房**（電話下谷五四六番）

女（甲の七）

●東京小兒科院長 醫學博士 瀨川昌耆先生著●報知新聞家庭記者 天野誠齋先生編

增補訂正 實驗上の育兒 上巻

定價六十錢 郵稅十錢

下巻近刊

七人の愛兒を他人の手を借らず自身御夫婦にて恙なく育て上げられた實地經驗家の　瀨川醫學博士が丁寧親切に說明せられました育兒談は即ち此本です、吾兒の健全なる發育を望まるゝ父なり母なる人に是非共御一讀あられん事をお勸め申します、其内容の大體は次の目次でお分りになるでしよう

初生兒時代●分娩と生兒健康診斷●初生兒健康の特徴●產湯と熱浴●生兒の產衣●襁褓とおかわの扱方●初生兒の寢床●母子同衾の利益●大小便●末久利と新乳●健康なる生兒の兩便●乳の飲せ方●授乳の分量●授乳の時間●授乳分量の標準●授乳の回數●鵞口瘡俗にしろした●後の入浴と臍帶●臍突●月不足兒の育て方●生兒の抱き方●抱いて搖る害●脊中をたゝく害●綾掛に背負ふ害●頭髮を剃る事とお灸●黃疸●哺乳時代●健康兒の標準●生齒と病氣●睡眠●智慧付き●視線の固定●聽覺●發語●精神の發育を害す●哺乳兒の大小便●哺乳兒の營養法●產婦の食物と乳汁●鯉汁●母乳の分泌●母乳を飲ませて惡い病氣●恐るべき哺乳兒脚氣●母乳の檢查●代乳と養育●人工營養と死亡●乳母の撰定●乳母の養生●牛乳と保育●牛乳代用の誤解●乳の消化の時間●哺乳兒の食物●小兒の食べ物●斷乳●乳斷後の方法●牛乳養育●牛乳の薄め方●牛乳と體質●牛乳の取扱方●鍋で沸した牛乳●牛乳の沸し方●牛乳消毒器●牛乳消毒と清潔法●牛乳保育の誤解●煉乳●煉乳保育食物の拵へ方其他

發行 東京銀座大通新橋際 新橋堂書店

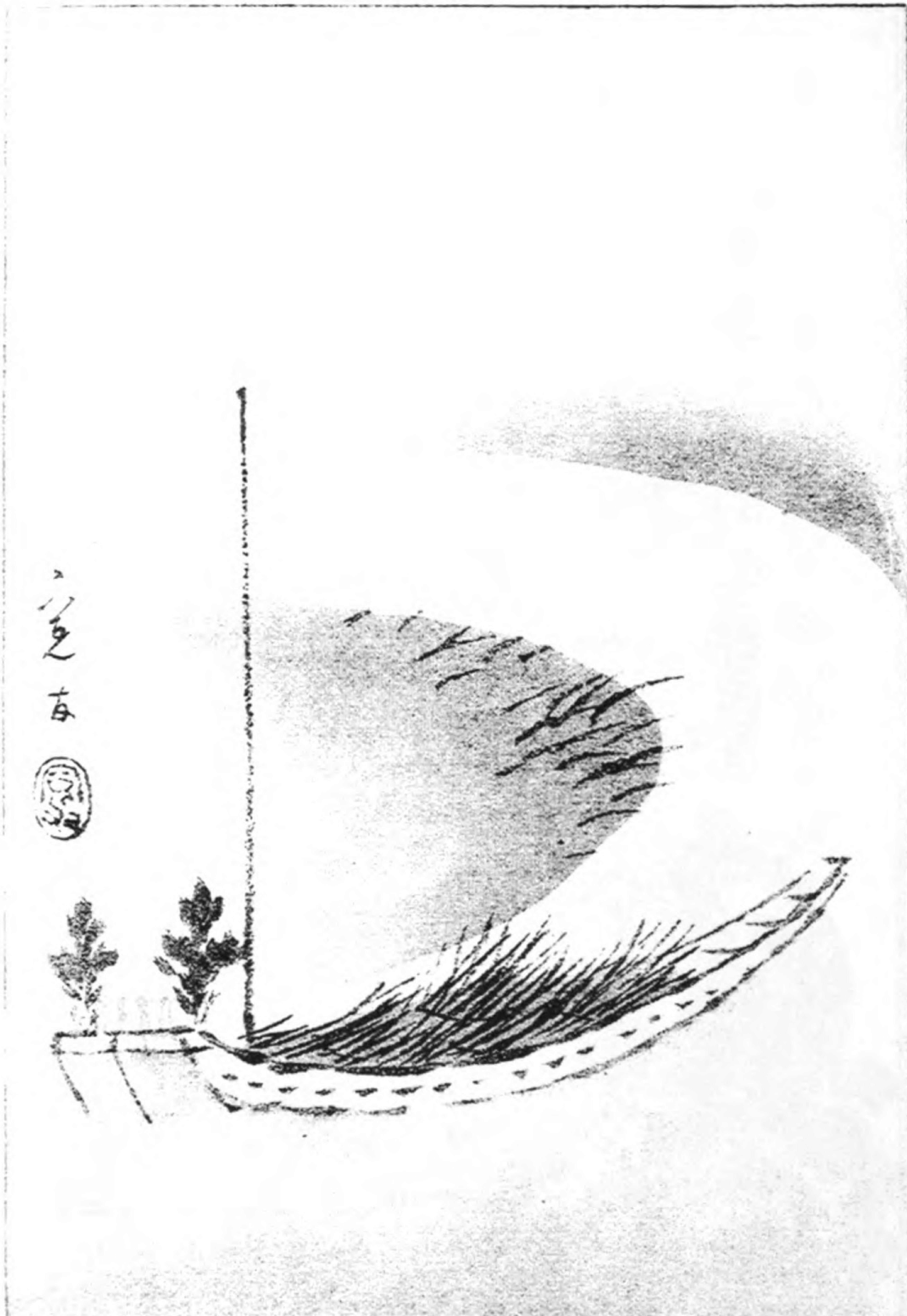
發賣 東京市麴町區有樂町 報知新聞出版部

元朝



河崎蘭香筆

荒木寛友筆



『世の進むに従ひ目薬にも
こんな立派な物が出來ました』



大學目藥



登録 商標

發行所 大阪北濱ヘブリン丸元祖
田口參天堂
各地藥店にあり
定價小瓶十錢●中瓶卅錢●大瓶五十錢
郵稅小二錢 中四錢 大八錢

大學目藥は帝國醫科大學醫院の處方に基きし貴重の製劑にして●はやり目●トラホーム●星目●血目●のぼせ目●かすみ目●突目●疲勞目●たゞれ目●打撲目●凝り目●其他總て眼病一切に驚くべき確効あり

かぜ ねつ りうまちす 良藥
大阪田口氏
眞正元祖、ハカリ印○北濱、參天堂
ヘブリン丸
各藥店にあり●五錢 十錢 十五錢 卅錢

●●世にかぜ藥は種々有ど一番効能確實にて且安全なるは大阪田口氏のヘブリン丸なり論より證據滿天下の實地經驗にて明白也此藥の効能確實にて世の高評を得たるより●●諸方に粗製の似物甚だ多し御求の節は大阪田口の名義とハカリの商標御改を乞ふ●●

女(乙の一)



女(乙の二)



毛のはへる事請合 ハロール

ハロールは歐米各國に於て造化の妙工を奪ふの奇効ありとの好評を博したる醫學博士シユロインゲル氏の秘密藥を當館主が深奥なる學理と老練なる技術とを以て多年の研究に依りて其秘を發き之に最近の發見に係るドクトルベンザム氏の生毛に關する新説を參酌し最新藥を配合したるものなれば價額は他の生毛劑に比し稍々高價なるべきも其効能の卓絶なる世間に有觸れたる技術と學理に暗き素人の製造したる濫造品の比にあらずまゆげはへぎわひげの薄を濃しやけどできものにて禿たるを生し陰毛等あるべき所に毛なきを生し禿頭病に奇効ある事請合なり前數年間の學術の進歩を應用し更に新藥を配合したれば一層有効確實となれり普通の生毛劑或は禿蓍丁幾等の舊式の生毛劑にて効なきと落膽する事なく是非本劑を試みよ内容増量改正定價七十錢郵券代用三錢切手二十七枚送れ

らい病必治藥

▲複方ヂノサール　一ヶ月分參圓

▲ヂノサール　一ヶ月分貳圓

此のらい病藥は永年ハワイ國に在留して癩病の研究に從事したる英國醫學博士ハドソン氏の癩病治療藥を化學的の方法にて分析し其主成分に最近の治癩新藥を加へ尚ほ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其効驗の確著なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日にても之を根治せしむる事は難けれども其病勢の甚しからざる中に貳圓分を四ヶ月位服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても六ヶ月位兩藥を並用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に趣き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救濟せんとする主趣に基き發賣するものにして無効なる藥品に非常の高價を付け大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を瞞着せんとする賣藥と同視する勿れ容體書に三錢切手封入本舖へ申込あれば委しく通報す

●原料暴騰し到底從前の定價にては收支償はず候に付定價を改正致候●

郵券代用は途中にて紛失の際調査の途なきに付可成小爲替にて願上候

本舖　三河國碧海郡刈谷町　益世館藥局主

醫科大學卒業藥劑士　從七位勳六等　中島龜之丞鑑製

女(乙の三)

乘りぞめ



一條成美筆

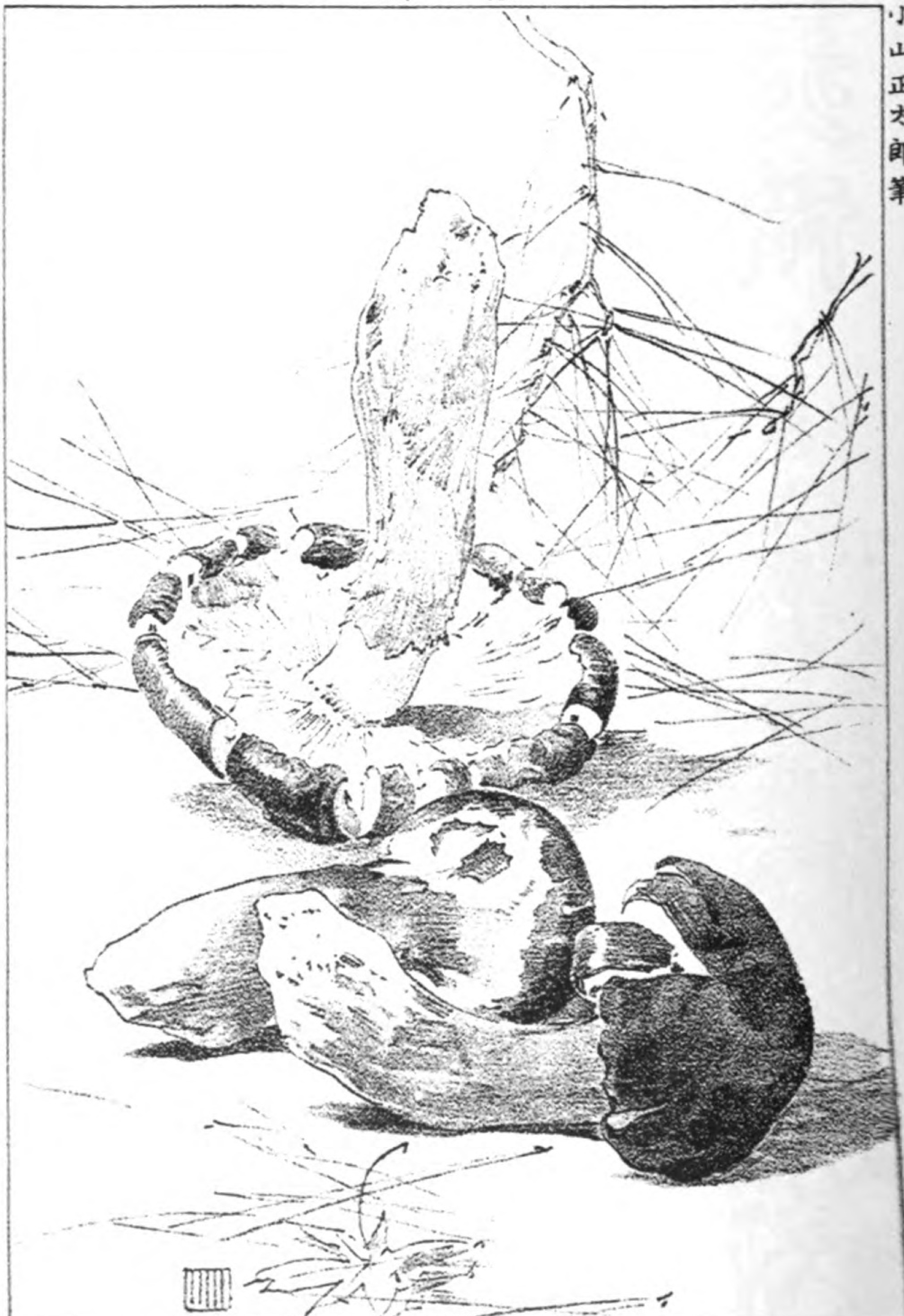
初日の出

一條成美筆



松茸

小山正太郎筆



冬木立



小山正太郎筆

恭賀新年


美術造花材料
各女學校御用
附屬品並ニ造花器械類
一式
營業目錄御入用ナレバ往復端書
ニテ御申越被下度候
天野卯兵衛
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
電話(特)浪花一六四三番

女(丙の一)

女(丙の二)

▲春陽堂發行圖書目錄進呈 小賣部宛往復葉書にて御申越次第送呈



女（丙の三）

著者	書名		定價	郵稅
華族女學校學監 下田歌子女史著	女子の心得	全	定價四拾錢	郵稅拾錢
同	女子の文藝	全	定價四拾錢	郵稅拾錢
同	女子の技藝	全	定價四拾錢	郵稅拾錢
シルレル原作 藤澤文學士譯	悲劇オルレアンの少女	全	定價四拾錢	郵稅八錢
坪内文學博士閲 坪内鋭雄先生著	文學研究法	全	定價七拾錢	郵稅拾錢
故尾崎紅葉君遺著	草もみぢ	全	定價五拾錢	郵稅拾錢
佛國シユー原著 原抱一庵主人譯	巴黎の秘密	全	定價五拾錢	郵稅拾錢
野口米二郎君著	英文 日本少女米國日記	全	定價七拾五錢	郵稅八錢
同	英文 お小間朝顔孃の書簡	全	定價七拾錢	郵稅八錢
故橘曙覽大人著 嗣子井手先生編	橘曙覽全集	全	定價七拾錢	郵稅拾錢
故橘井玉子女史著	家庭料理法	全	定價四拾五錢	郵稅八錢
下田歌子女史著	家庭學講義	全	定價四拾五錢	郵稅八錢
東京鐘淵病院長 橋本善次郎君著	衞生一夕話	全	定價參拾五錢	郵稅六錢
法學士 持地六三郎君著	經濟一夕話	全	定價參拾五錢	郵稅六錢
法學士 桐生政次先生著	法制一夕話	全	定價參拾五錢	郵稅六錢

●發兌元 東京神田裏神保町 **冨山房**
賣捌所全國各地にあり

袖珍名著文庫

校訂者 饗庭篁村 芳賀矢一 上田萬年 藤岡作太郎 幸田露伴 宮崎三昧 關根正直 諸先生

▲每編正價金二十錢郵稅四錢上製金二十八錢
▲每口繪(寫眞版、三色版、木版等)原畫縮寫挿入

- 第一編……蝶夢芭蕉翁繪詞傳附句集
- 第二編……近松浄瑠璃三種
- 第三編……雨月物語
- 第四編……小三金五娘節用
- 第五編……今昔物語選
- 第六編……近江縣物語
- 第七編……狂言二十番
- 第八編……西行山家集
- 第九編……風流志道軒傳
- 第十編……春花五大力
- 第十一編……俳諧水滸傳
- 第十二編……よものあか
- 第十三編……國姓爺合戰
- 第十四編……謠曲二十番
- 第十五編……世間娘氣質
- 第十六編……日本永代藏
- 第十七編……日本新永代藏
- 第十八編……萬載集才藏集選
- 第十九編……花月草紙
- 第二十編……鳩翁道話
- 第廿一編……絲手摺昔木偶
- 第廿二編……夢想兵衛胡蝶物語
- 第廿三編……同 後編

全部百册

▲詩歌小說戯曲史傳紀行隨筆雜論等每編國文學に關する珍本を網羅す。

圖書總目錄進呈

博文館發兌圖書の總目錄御入用の方は往復はがきにて申込まるれば進呈す

東京日本橋區本町三丁目　博文館小賣係

生徒募集

▲本校は齊家に須要なる和洋服の裁縫、手藝並に諸學科を教授し婦德の涵養に努む

▲本校は家庭的の誘導を理想とし監督嚴なり

▲本校は土地高燥、周圍閑靜勉學の好適地たり

高輪裁縫女學校

▲本校は修業年限二ヶ年(豫科六ヶ月、本科前期六ヶ月、同後期六ヶ月、高等科六ヶ月)を以て、婦女一通りの技能智識を習得せしむ

▲本校規則書は御申越次第直に郵送す

東京芝區二本榎壹丁目天神坂上

清韓旅行中ニ付年賀缺禮仕候

山本留次

恭賀新年

羽田福太郎

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵劵二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村　川名助次郎

● 增補 蓮月歌集　壹部金拾錢　郵稅貳錢

發行所　金澤市石浦町　北村書房

恭賀新年

山田靜三

謹賀新年

杉山常次郎

謹賀新年

併テ新倍舊御愛顧願

書籍雜誌

内外書籍並ニ雜誌類ハ何種ニ拘ハラズ總テ價格ハ無比ノ低廉ニ發送ハ最モ敏速ニ御取引ハ可及正實御便宜ニ取扱ヒ申候間何卒御愛顧御引立陸續御注文ノ程奉希上候

◉◉書籍雜誌目錄◉◉

(明治卅九年一月新刷)

改正新刷出來ノ目錄御入用ノ御方ハ郵便切手二錢(郵送料)封入御申越アレバ速ニ送呈致候

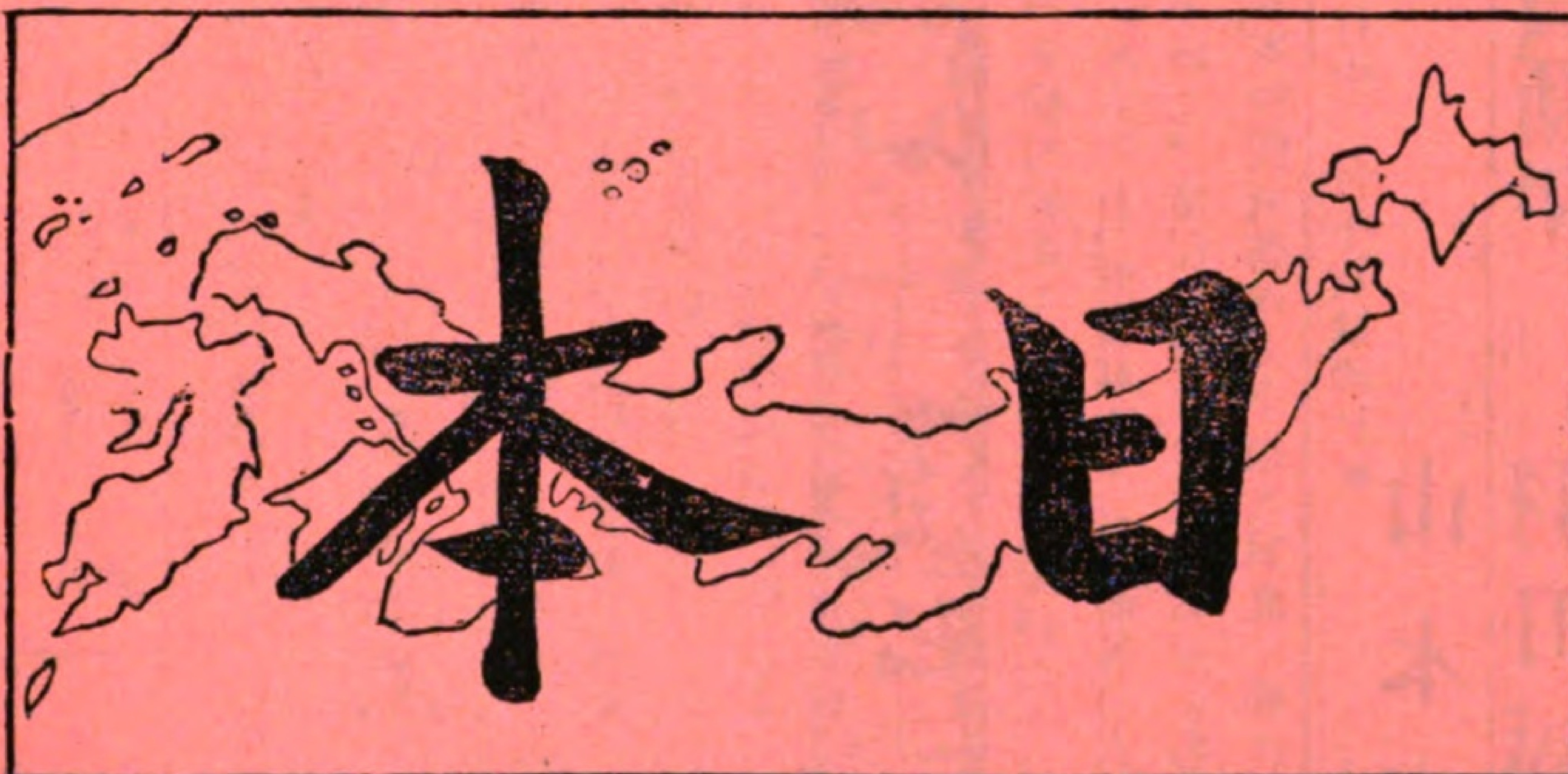
東京市神田區錦町二丁目角

勉強堂書店

:電話本局二百四十二番:

女(丙の五)

年中無休＝總振假名附



定價●壹ヶ月前金四拾錢●三ヶ月前金壹圓拾五錢●六ヶ月前金貳圓廿五錢
壹ヶ年前金四圓四拾五錢●市外ハ別ニ郵稅壹ヶ月金拾五錢宛

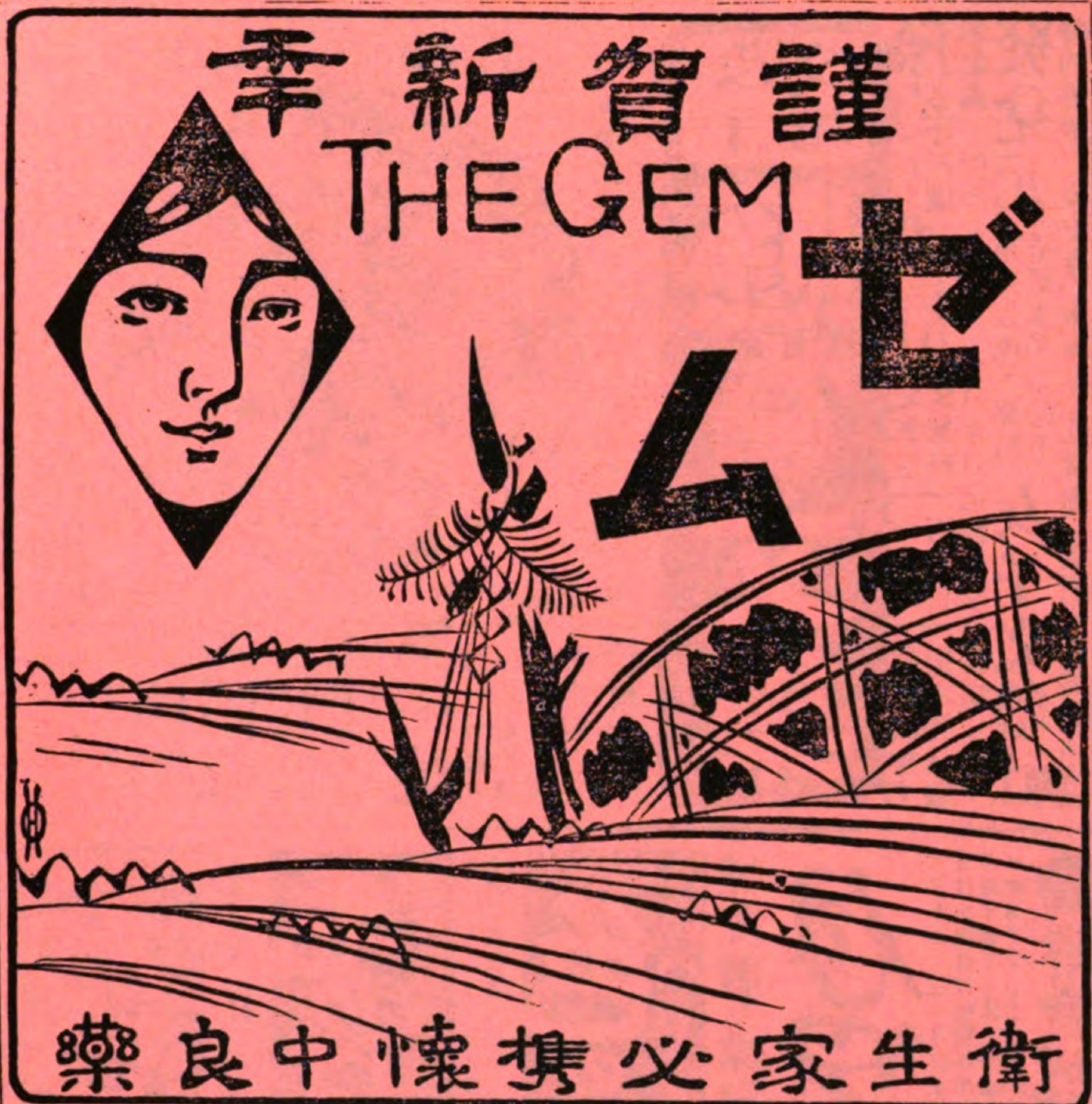
議論穩健にして時勢に阿らず權勢に怖ぢず是を是とし非を非とし言はんと欲する所は必らず之を言ひ行はんと欲する所は必らず之を行ふもの天下唯だ我『日本』あるのみ、文藝欄には幸田露伴、內田魯庵の二氏自ら筆を執り、家庭科學を初めとし其他家庭必讀の記事に豐富なる亦他に其匹を見ず、全紙錦繡の如く毫も卑猥の文字なく每號寫眞版を挿入するは勿論、別に日本畫報を定期附錄として月極の讀者諸君に進呈す

●見本を要する向は直接本社に宛て御申込を乞ふ

東京神田區雉子町卅二番地（電話本局六八九）

發行所　日本新聞社

女（丙の六）



女(丙の八)

偉大の名譽

ゼムは勇敢絶倫なる陸海軍將士の愛用を蒙り殊に
東郷大將閣下よりは鄭重なる禮狀を賜はり亦々戰勝國紀念として
ノーエル大將閣下の賞讃を忝ふせる光榮を得たり

ゼムは氣分を爽快ならしめ口中を潤し音聲を能くす、又氣候の變りめと風土異なる他鄕或は惡臭の場所に携帶し常に少量を用ゐなば時候あたり、水傷、流行惡疫を豫防する良劑なり。

ゼムは二三粒を含めば口中より優雅なる佳香を放ち人をして坐ろに爽快を感ぜしむ、又偉大なる効能と愛すべき美味とを有すれば何人を問はず必ず談話喫煙飲酒の際および食前食後に賞用すべき貴重の要劑なり

定價
- 優美高尚包 七十五粒入拾錢 百六十粒入貳拾錢 四百卅粒入五拾錢 九百粒入壹圓
- 新意匠容器ゼム入貳拾錢

發賣元 東京市日本橋區馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎

支舖 大阪市東區高麗橋二丁目 山崎兄弟商會

▲全國到る所の藥店雜貨店にて販賣す

兩內親王



今上第九皇女泰宮聰子殿下（明治二十九年五月御誕生）

今上第八皇女富美宮允子殿下（明治二十四年八月御誕生）

羅馬法王使節オーコンネル僧正



羅馬法王ピオ第十世陛下



文學士 戸澤姑射 淺野馮虛共譯

沙翁全集

◎第一卷 ハムレット 既刊三版 定價金八十五錢 郵稅十錢

◎第二卷 ロメオ、ヂュリエット 既刊 定價金八十錢 郵稅十錢

◎第三卷 ヴエニスの商人 三十九年二月上旬發刊

沙翁全集は抄譯に非ず梗概に非ず忠實親切を旨とせる完全譯にして飜譯者は當代最も適任なりとの令聞ある二氏全部三十七卷數月毎に一卷宛發刊の豫定なり發刊以來好評嘖々曰く此出版は眞摯大膽なる一大事業なり、大國民的文學產出の前提なり、譯述親切錯辭流麗なり、一夜漬の小說類と雜誌店に雜居せしむるは勿躰なしと

谷本文學博士、登張文學士序、

文學士片山正雄著

男女と天才

菊版三百五十頁寫眞圖入美裝一册定價金六拾五錢 郵稅拾錢

本書は最近の科學及哲學上の諸原理を基とし男女の性の區別を論じて嶄新奇拔精嚴崇高を極めたる原理を敎へ天才を以て徹頭徹尾理想の男子なりとし進で人生觀世界觀は到底二元論の外に出る能はざる所以を說き其之を貫くに雄大なる道念を以てしたり是實に天下の男性的男子をして意氣天に冲せしめ所謂阮殼及び廂髮をして顏色土の如くならしめ天下一切の女子敎育をして砂上の樓閣とならしめ而も同時に一切の婦人をして破顏一笑恍として理想の仙鄕に遊ばしむる天下の奇書なり

三 倫理 大 文學 雜 敎育 誌

丁酉倫理會

倫理講演集

●每月十五日發行

壹册定價拾二錢郵稅一錢○六册前金郵稅共七十二錢○十二册前金郵稅共壹圓三十二錢

現代倫理專攻名家を以て組織せる丁酉倫理會は我國學海の有力なる機關たるや言を俟たず從て同會に於て研鑽せし諸說は頓て現代の倫理問題に解決を與ふべき指針たるや明けし本集は之が機關として發行するもの若夫れ倫理界の消息に通ぜんには本書を措て他に求むべからず◎新年一號（一月十五日發行）には特に諸大家の講說山の如し從て紙數增大せり

帝國文學

●每月十日發行

一册定價金拾五錢郵稅一錢六册前金郵稅共九十錢十二册前金郵稅共一圓六十五錢

帝國文學は明治廿八年一月文科大學に緣故ある諸氏の組織せられたる帝國文學會の編輯に係り主として日本文學の進步を誘ひ帝國精華の發揚を期するものなり其論說は正大又謹嚴、詞藻は艷麗且つ豐富、雜錄は西人の詩想文致を紹介し、文學史料は皆是正確、雜報は眞を傳へて簡淨明快、批評は公を持して痛切適確なり、若し夫れ奔騰し來れる我文界の新潮流を知らんと欲する者は請ふ之を我帝國文學に徵せよ◎新年號（一月十日發行）には上田、芳賀、谷本、金澤の諸博士夏目、片山、尾上、戸川等諸學士の寄稿山の如く趣味津々たり

敎育研究

●每月一日發行

定價一册廿錢郵稅一錢五厘六册前金郵稅共一圓二十錢十二册前金郵稅共二圓三十錢

帝國唯一の初等研究所にして帝國唯一の模範小學校たる東京高等師範學校附屬小學校に從事する諸氏は近來奇矯突忽の空論や雜駁亂脈の組織道が往々我敎育を誤るを憂せられ同志相謀りて玆に初等敎育研究會を組織しライン氏が獨逸エナ大學敎育研究所に於て發表する練習所研究錄に則り着實穩健の有機的研究と醇正精細の敎育的資料とを主として其他敎育に關する萬般の事項を網羅せる機關雜誌を發表せらる本誌即是也世間の敎育雜誌を悉皆讀まんよりは寧ろ一の本誌を精讀したる方遙に多くの趣味實益を併收すべきは弊社の堅く信じて疑はざる所なり◎新年號（一月一日發行）には特に諸種の雄篇を收載し紙數增大せり

發行所 東京銀座一丁目二十二 大日本圖書株式會社 大坂東區北久太郎町四丁目支社

女（丁の二）

新年贈答進物品

大歡迎 **午歳新年繪葉書** 大好評

曙光

洋畫六大家合作
六枚一組二十錢

初午　和田英作
くらおき馬　滿谷國四郎
試奏　岡田三郎助
めぐる歳　藤島武二
朝暉　三宅克己
富士の馬返し　大下藤次郎

彩冠

青年洋畫家合作
六枚一組二十錢

午歳來　和田三造
二八の春　橋口清
野の元旦　小林鐘吉
はるごま　本多穩堂
迎光　橋本邦助
新馨　太田三郎

午の春

日本畫四大家合作
四枚一組十五錢

竹馬　梶田半古
馬曳き　水野年方
西洋槳棊　久保田米齋
繪馬　齋藤松洲

カレンダー女十二姿

太田三郎筆
十二枚一組卅錢

筆者が例のうら若い清新の筆に寫された、人の世の花、地上の星の、如何に趣深く諸君の書齋を飾るかは、今更特に事々しう云ふにも及ひますまい。で、茲にはたゞこれは一歳十二ヶ月、諸君が机邊の美くしき友たると共に、或は暦として、或は異形の繪葉書として亦優に其用を辨じ得るに、最新式裝飾畫であることを一言するに止めておきます、思ふに江湖の麗はしき愛畫家の君達や、自分の部屋の裝飾に意を用ひらるゝ方々は勿論、最も高尚優美なハイカラ的年始贈答品を求めらるゝ人々にとつて恐らく之に越す適當のものはないでございませう。

日本葉書會發行**新年繪葉書**は**洋畫日本畫兩六大泰斗**の合作にして最も優美高尚なるものなり**加**ふるに**青年洋畫家**六名もこれに連りて**縱橫無盡**の其**彩筆**を**發揮**す如何に劈頭丙午美術界に**新曙光新異彩**を放つ乎**見**!!

新年繪葉書の最好品!!

發賣元　東京日本橋本町　**博文館**

發行所　東京小石川久堅町　**日本葉書會**

女(丁の三)

洋裝



向て右より 清浦子爵夫人 大山元帥夫人 東郷大將夫人

艶麗





西洋美人の新粧

（泰西美姫）



幼年畫報



洋裝菊判頗美畫（毎月一回五日發行）正價拾錢 郵税五厘

第壹卷第壹號 限に り 一月一日發行

（極彩色石版密畫）

●表紙……………………武内桂舟君畫
●お正月嬉いな（うた）……………渡部審也君畫
●キツ子とニハトリ（お伽噺）……尾竹國觀君畫
●人形のお正月（家庭話）…………尾竹國觀君畫
●日吉丸（歴史）……………………武内桂舟君畫
●おめでとー（單語）………………名和永年君畫
●カラス（理科）……………………名和永年君畫
●乘物づくし（理科）………………名和永年君畫
●陸海軍の凱旋（軍事）……………木村光太郎君畫
●ポンチ竹馬太郎（いましめ）……山中古洞君畫

△お伽噺馬か鹿か（サヽナミ）△雪ダルマ△水禽△日の出△ミカンと、タドン△皇孫殿下の御學友△皇孫殿下御産所眞景△凱旋門と大山大將△おもしろい遊戯等何れも活版二色刷の美麗なるもの挿畫は桂舟、古嵋、竹舟の諸氏各得意の筆を振へり

▲附錄　皇孫殿下御肖像（菊判二頁大 極彩色寫眞版）

年刊十二冊…石版極彩色刷十六頁寫眞入活版二度刷十六頁

正價　壹冊金拾錢　郵税五厘

前金　三冊金貳拾九錢　六冊金五拾六錢　十二冊金壹圓拾錢（外郵税要）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女（戊の一）

明治三十九年博文館九大雜誌

太陽
第一號一月一日發行
正價參拾錢郵稅參錢
（第壹號に限り郵稅四錢）

實業世界太平洋
第一號一月一日發行
正價十三錢郵稅一厘五錢
（第壹號に限り郵稅貳錢）

日露戰史
第一卷一月一日發行
正價卅錢　郵稅三錢
（第壹號に限り稅三錢五厘）

寫眞畫報
第一號一月一日發行
正價貳拾錢郵稅貳錢
（第壹號に限り郵稅三錢五厘）

文藝俱樂部
第一號一月一日發行
正價廿五錢稅二錢五厘
（第壹號に限り　郵稅三錢）

女學世界
第一號一月一日發行
正價貳拾錢郵稅貳錢
（第壹號に限り郵稅三錢五厘）

中學世界
第一號一月十日發行
正價貳拾錢郵稅貳錢
（第壹號に限り　郵稅三錢）

少年世界
第一號一月一日發行
正價拾錢郵稅一錢五厘
（第壹號に限り　郵稅二錢）

幼年畫報
第一號一月一日發行
正價拾錢　郵稅五厘
（第壹號に限り　郵稅一錢）

（甲種）

博文館發行

圖書特別割引券

㈠圖書御注文は此券を切取り御添付の事
㈡有効期限は明治三十九年二月十日限り
㈢期限中は定價の一割引を以て特賣仕候
㈣豫約募集中の圖書は豫約價の三分引とす
㈤館友は館友規定引の外尚圖書五分引豫約品二分引の事
㈥總て前金の外無効とす

特別割引券

添　呈

迎春の祝意を表し例年の如く圖書雜誌特別割引券を呈上し愛讀諸君平素の御眷顧に酬ひんとす
●圖書御注文の方は甲種●雜誌御注文の方は乙種を添へ期限中御申込被下度希上候

（乙種）

博文館發行

雜誌特別割引券

㈠雜誌御注文は此券を切取り御添付の事
㈡有効期限は明治三十九年二月十日限り
㈢期限中一册賣は定價の五分引㈣册數に依り割引ある前金拂込は其金額の三分引とす
㈤館友は館友規定引の外割引せす
㈥一券は前金御注文の外は効用なし
㈦御申込の節は博文館小賣係宛のこと

女（戊の二七）

女子大學教授 文學士鹽井雨江主筆 各女學校教授賛助執筆

女子文藝

(毎月一回) 初號要目 (一日發行)

本誌は現今女學雜誌の覇王凡ての點に於て日本一なり

第一卷第一號 一月一日發行

寄書歡迎 苟も女子の作は選評掲載す(用紙半紙二十四字詰〆切毎月廿日)

口繪 石版極彩色一頁 本文三色刷四頁 寫眞版四頁 挿繪六十餘個

定價 一册拾錢 郵税一錢 **六册** 郵税共 六十二錢

見本 一月中郵税共十錢

叙事文、抒情文、消息文、新體詩、和歌、俳句等諸者文藝百花爛漫として、**艶**を**競**ひ**研**を**磨**ぐ**錦上花**を**敷**の**感**あり

女子文藝

本誌の文章は平易にして記事は實用しに適挿繪は極めて多く體裁內容共艶麗豐富なり

本誌を讀めば人生の樂園好個の安息所なる家庭趣味を味ひ得ると共に文藝々術の園に遊ぶ事を得

然も價は低廉にして大人も小供も學生も老人も讀みて尤も面白く趣味津々の中あらゆる世上の新知識を養ひ得るは本誌なり

現今の女子として女子文藝を讀ざるものは大の不幸なり

發行所 東京小石川久堅町 **日本葉書會**

賣捌 東京堂 東海堂 北隆館 良明堂

の一

女(戊の四)

女(戊の五)

海軍省御認可

日露戰役 海軍寫眞集

特製　全部光澤紙刷總クロース表紙金文字金模樣入美本

並製　石版彩色刷大和綴表紙

▲毎輯寫眞銅版五拾面挿入

四六二倍判横綴美裝

日露戰役開始以來大小幾海戰、戰へば必ず勝ち、敵の太平洋艦隊を旅順に殲滅して宇內を震駭せしめ、續いて日本海に敵の第二第三兩太平洋艦隊をも撃破して殆んど遺類無からしめ、渾圓球上を通じてその人間業にあらざるかを疑はしむ、本輯は艦隊幹部に於て這般空前壯偉の戰況を撮影せられたるもの、佐世保鎭守府に於て盡く集收せられ、編次して世に公にし、以て此曠古の大勝を紀念すべく、また勇戰將士の戰功を不朽に傳へられんとす、此に於て爲し能ふ限り價を廉にし、裝幀を美にして廣く頒布せんことを期す、當局海軍軍人は素より、籍に帝國國民に在る者は、皆繼續を賜はらんことを祈ると云ふ。

正價

第一輯　特製七拾五錢郵稅八錢　並製貳拾五錢郵稅六錢

第二、三輯　特製各八拾錢郵稅八錢宛　並製各參拾錢郵稅六錢宛

坪谷水哉君編纂

日露戰爭 凱旋みやげ

全一冊　太陽判横綴寫眞百餘圖　正價參拾五錢郵稅八錢

目次

◎高貴御肖像
◎皇太子殿下
◎從軍各宮殿下
◎滿洲軍總司令官
◎同總參謀長
◎黑木、奥、乃木、野津、川村、長谷川各軍司令官
◎各師團長
◎旅順
◎遼陽
◎沙河

◎黑溝臺
◎南山
◎金州
◎得利寺
◎大石橋
◎鴨綠江
◎摩天嶺
◎煙臺
◎撫順
◎鐵嶺
等外各方面六十枚百餘圖

發兌元

東京日本橋區本町三丁目

博文館

海軍機關大監　關重忠君撮影編纂（鮮明寫眞版百十餘枚）

日露戰役海軍寫眞 朝日の光

四六判二倍横綴洋布上裝　全一冊

正價壹圓　郵稅拾四錢

一等戰鬪艦朝日が、日露戰役開始以來、帝國艦隊の主力と爲り、毎次の海戰に赫々の偉勳を奏せるは、中外を通じて之を知らざる者無し。艦の機關長關機關大監は本務の餘技として、最も寫眞術に長じ、其の大本營の囑托によりて撮影せられたるもの、實に海軍戰況寫眞の精髓たり。而して今は其開戰の初より旅順、黃海、日本海等の海戰に至るまで、朝日艦が、勇戰大奮鬪の光景と觀艦式の壯觀と、總て數百種の撮影中より大監自ら粹を拔きて一百餘圖を集め、以て此の振古未曾有なる戰勝の名譽を不朽に傳へんとするもの乃ち此の「朝日の光」なり。

女（戊の六）

最近受賞

巴里萬國博覽會名譽金牌

第五回内國博覽會名譽銀牌

聖路易萬國博覽會名譽大賞牌

天下弌品

虔んで茲に光輝ある
戰捷國の新年を祝す

弊釀本印の義夙に無上の御好評を蒙り昨冬亦々増石の繁榮に
赴き候段全く御愛顧の賜と奉感謝候就ては尙一層吟味精釀の
上出荷仕候得ば何卒倍舊御愛用奉願上候

最上醬油

釀造元

千葉縣野田町

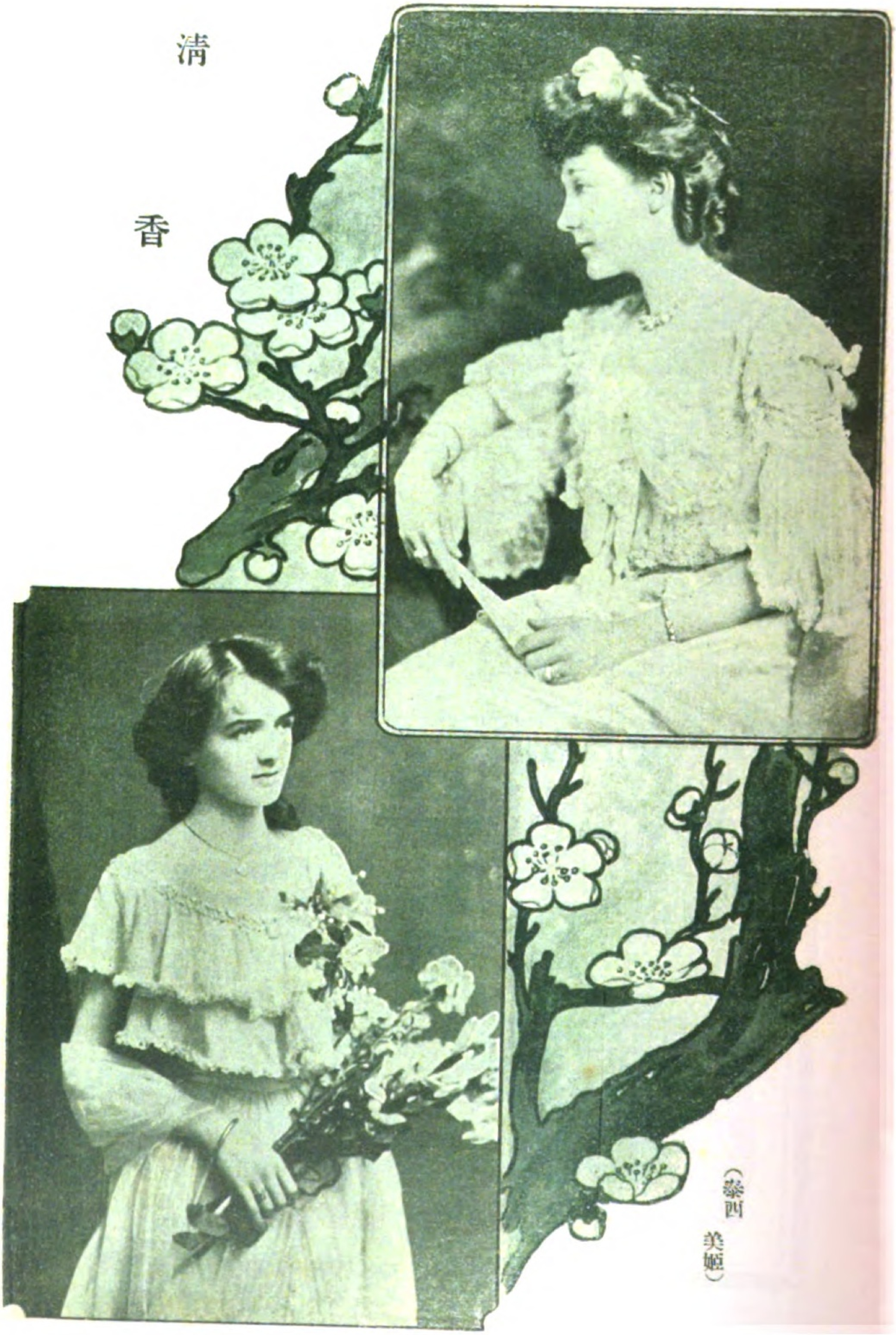
茂木佐平治

賣捌所

全國有名酒醬油店にあり

女(戊の八)

清香



（泰西美姬）

謹賀新年

滋養 大木五臟圓 強壯

●●●●●大木五臟圓が滋養補血劑として、身體弱き人、血の氣少き人、病後の疲勞、肺病の初期、たんせき喘息、勞症の如くぶら〳〵し居る症、心臟病にて動悸烈しく息切れする症、氣力減乏たる人、記臆忍耐力に乏しき人、過度に精神を勞う人、婦人産前後血の道、産後肥立惡しき人等一般の病症に適合ひ能く丈夫なる壯體に回復せしむるの大効あるは既に江湖の熟認せらるゝ處なり

藥價 卅五日分二圓、十五日分一圓、七日分五十錢、四日分三十錢、二日分十五錢

本舖 東京市兩國廣小路 大木口哲本店

發賣 東京市神田鍛冶町 大木合名會社

全國藥店に取次すにせ物注意



女(已の二)

恭賀新年

博文館主 大橋新太郎

大橋進一

恭賀新年

博文館編輯局

主幹 坪谷善四郎

巖谷小波
石橋思案
石倉翠葉
長谷川天溪
西村渚山
鳥谷部春汀
大町桂月
押川春浪
太田善男
奥村二秋
大竹竹舟
鹿野化骨
金子紫草
勝間舟人
武内桂舟

田山花袋
武田櫻桃
竹貫妻文
竹貫直人
鷹野止水
松原岫雲
國府犀東
遠藤鈴川
出野淺治
齋木菊雨
齋藤紫白
岸上質軒
木村小舟
鈴木西湖
（イロハ順）

博文館營業部

支配人 羽田福太郎
元方支配人 大野金太郎
副支配人 山田靜三
副支配人 杉山常次郎
副支配人 内山正如

事務員

宮川大壽
上村恭三
堀野賢龍
星見謙吉
田中六藏
關謹平
金子督太郎
松原濱之助
細野佐藏
長田千代松
松木玉之助

小峯正一
古賀豐策
兒玉幡太郎
有田利雄
永井泰
荒井芳太郎
番塲宗八
權藤文雄
横田地巴
塚脇十三
伊藤和三郎
廣瀬
村山

大谷濱次郎
繁田郁三郎
今井玉三郎
今井淳
福澤市太郎
林彦之助
青木傳四郎
富所三郎
中村長
貞一
憲總
磯岡鷲郎
松本勉治

女（己の二）

恭賀新年

明治丙午元旦

博文館印刷所

理事 大橋光吉

小石川區久堅町百八番地

事務員

佐藤憲斌　谷俊三　野中幹　久保民生　山田英二　市川七作　富井龍次郎　近山喜代三　飯塚市郎治　森川鋭吉　玉本角太郎

橫山弘識　加瀬富太郎　齋藤卯三郎　加藤綱三郎

浦山鐸太郎　井口俊三　小川豊太郎　渡邊倉之助　大塚義明　高橋正信　柳井清之進　中島謙次郎　麻生重郎　中津璋　龜井行德

有澤嘉男　小川德三郎

技手

安倍榮四郎　田丸信次郎　吉岡泰五郎　西鄕勝

祓川研太郎　鵜澤幸三郎　大江幸吉

職工長

吉田平吉　蛭沼武守　大崎福太郎　岡野勇五郎　森井信三

中西計枝　杉浦武雄　浦野米三郎　吉川藤吉

新屋敷政吉　眞部義信　鈴木作太郎　吉田勝太郎　千葉兼吉

岩佐登吉　多賀新太郎

博文館寫眞製版所

水谷景長

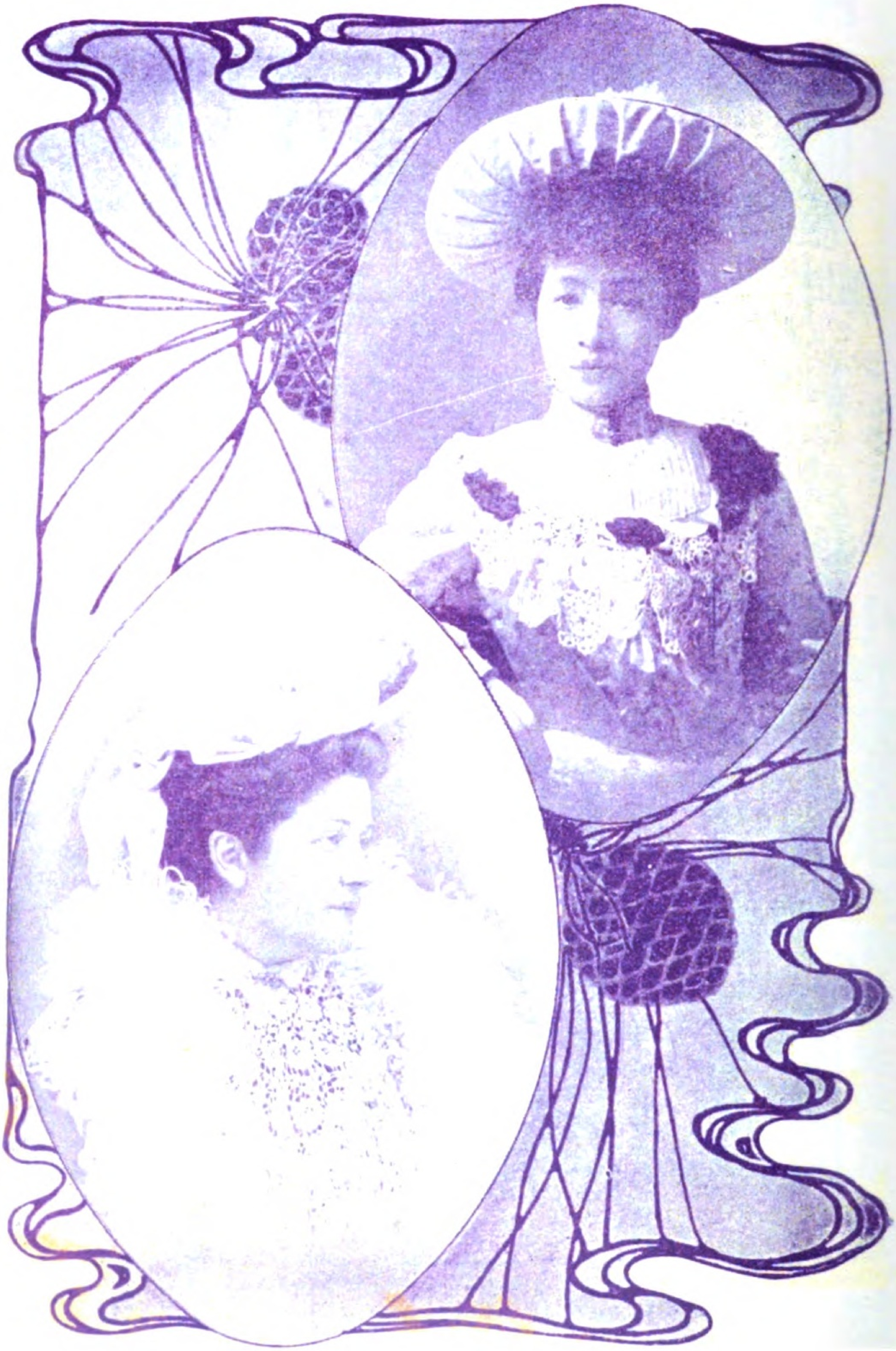
吉川深三郎

榊原鎌三郎　高山常吉

女(巳の三)

女(巳の四)

名流小照



關夫人村子

伊東中將夫人ヘリーンデハーン

村雨荘司先生編　小野鵞堂先生書

實用女子書翰文

◎半紙形横綴◎和装美本◎全壹册◎

▲和紙刷金六拾錢▲洋紙刷金參拾五錢▲郵税各壹册六錢宛

本書は、村雨先生が、實用を主旨とし、編纂せられたるものにして、いたづらに形容に流れず、温健優美なる女子の表情を認む可き、文章流暢なる書翰文を、流麗高雅なる筆蹟を以て、知られたる小野鵞堂先生の揮毫せられたるものなり、特に金屬版印刷に附したるものにて、其筆蹟は毫も肉筆に異ならずして、従來の木版刷と其趣を異にせり依て本書は家庭と學校とを問はず、書翰文範として、又習字手本として、婦人淑女に、最も好向のものなり。

小野鵞堂先生書　唐装美本全一册
三體千字文
▲定價金六拾錢　郵税六錢

小野鵞堂先生書　折本美製全四册
朗詠帖
▲定價一册三拾五錢　郵税一册貳錢宛

小野鵞堂先生書　和装全參册
消息烏丸帖
▲定價一册拾八錢　郵税一册貳錢宛

小野鵞堂先生書　美装全壹册
新古今和歌序
▲定價拾八錢　郵税貳錢

女(裏の一)

發行所　東京市日本橋區通三丁目　六合館

恭賀新年

内外各國洋紙
製紙原料大販賣

東京市神田區錦町一丁目十番地
合資會社 博進社洋紙店
電話 特本局千六百〇三番
本局二千四百十番

大阪市東區瓦町二丁目五番地
合資會社 博進社支店
電話 特東四百四十五番
東千五百〇八番

醫藥工業藥品
染料、賣藥 大販賣

東京市日本橋區本石町三丁目十八番地
合資會社 博愛堂藥店
電話本局二百八十六番

專務理事 山本留次
支店支配人 中村孝吉
本店副支配人 長沼恒次郎

本店

山本九兵　九里誠一
富谷松三郎　宗像仲吉
原田原　山本甕
金原要一郎　西尾約
黑澤倉治　長谷川金之助
上原董司　横山幸七
織田保次郎　上村新之助
大島久吉　月崎保司
杉山幸次郎　遠藤廣吉

支店

富田新太郎　松本作三
岡村九十九　小川德次郎
柳橋兵一郎　小林勝太郎
石井治郎　穗井田貞雄
柴田照三　藤井兵右衛門

博愛堂

林季三郎　今井儀等
江口修三　植松晴喜代
大島善五郎　海老原直一郎
今井作次郎　小和田力三郎

女(庚の二)

寫眞画報

開戰と共に生れ、戰捷に伴ふて進み、空前の盛運に會せし日露戰爭寫眞畫報は今や平和時代に入り、益ゝ其本領を發揮せんと新春よりは『日露戰爭』なる武裝を解くも、舊に倍する鋭氣と金裝とを以て江湖に見えんとす、新粧の寫眞畫報の如何に光彩を放つかは請ふ之れを實際に見られよ。

毎月一回八日發行
外臨時增刊發行

第壹卷第壹編一月一日發行

▲表紙「神馬」(極彩色石版)渡部審也君畫

▲口繪「列國の競馬」(極彩色石版)東城鉦太郎君畫

世界を競走場として英勝つか、獨勝つか、佛勝つか新進の日本最後の勝利を占むるか、觀客手に汗を握らん

▲光澤寫眞版は總て新意匠二色刷にて其華麗天下無比と云ふべく、卷題に掲げ奉るは

內親王殿下最新の御眞影

次に◎大山大將の戰時と平時◎五大海將と戰捷紀念◎大觀亭の伊藤大使◎歐米列強の主權者◎米國大統領の家庭◎北京の外交界◎同盟國皇室の美觀

◎時事繪畫 は現代諸名畫伯の筆に成り凱旋兵士◎巴里の正月◎初卯◎帝國議會の開院式◎歌かるた會◎曲馬◎東鄉大將の風流◎艦上の新年等美の極麗の極

◎時局寫眞版は社會の一大パノラマと云ふべく◎凱旋諸將卒の威風◎帝國陸海軍の華◎韓京の伊藤大使◎軍旗奉還式◎世界各國第一流美人◎大蛇と老猿との格鬪◎世界の名馬◎昨年の今月旅順開城◎當世百風俗◎現代五百名流◎戰地の滑稽行列◎美麗なる懸賞寫眞◎其他全部四十頁百餘個の寫眞總てこれ珍中の珍奇中の奇

◎記事 は趣味と實益の無盡藏たる事を期し新年の初編には本館編輯局員總出にて、其如何に面白きか云ふ丈け無益、要するに 寫眞畫報は無比の愉快なる家庭讀物なり

◎新年大附錄

戰捷紀念雙六 寫眞畫報部案 尾竹國觀君畫

右雙六の奇拔美麗は本誌のひそかに誇る所也

女(庚の四)

太陽判石版刷彩色表紙▲口繪＝石版極彩色刷二頁◎光澤寫眞版四頁◎寫眞版卅六枚本文六十四頁

正價一冊貳拾錢◎八冊前金壹圓四拾五錢◎十六冊貳圓八拾錢▲郵税貳錢宛

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

高雅



右より（一）江副令孃靜子（二）千家男令孃信子（三）吉野艦長未亡人佐伯すみ子（四）村田陸軍少將令孃琴子

和樂



本郷座正月狂言

▲大阪朝日新聞曰　一度び巻を繙けば知らず〳〵讀了せしむる感興あり、叙景の筆簡勁にして清楚、節々の波瀾曲折ありて讀者は先づ其景情の變化に眩めく感あるべし吾人は此書を本年掉尾の佳作として讀書界に紹介す▲女學世界曰　作意に於て教訓的意味を含み、波瀾重疊奇趣百出、高潔なる詩題と場面の變化に富めるぞ嬉し、結構宛ら芝居を見るの心地して芝居よりも面白く無難上乘の佳作（中畧）而も文章の洗錬なる、叙景の巧みなるは感興を引く事少なからず、記者は善良の讀物として此書を家庭の女子に薦む。



田口掬汀氏著

口繪 原色寫眞版刷 鏑木清方氏畫

前編再版後編 一月十五日發行

總クロース最美本定價八十錢小包料拾錢

紳士の讀むべき小説は之なり淑女の讀むべき小説は之なり人生に關する詩的教訓書として天下の批評家の齊しく認むるは此小説なり

▲中央新聞曰　著者は此美人の生涯に於て愛情の力の如何に偉大なるか眞實なる幸福は如何にして得らるべきかの二大疑問を解決せんとし讀過する間に人をして自ら省みざるを得ざらしむる處寧ろ一種の教訓書と見るべく之を氏の前著「女夫波」に比するに數等の上位に傑出せり要するに此書は本年の小説界にて最も紀念すべき作なり▲大阪時事新報曰　氏の文品は温健にして清新、人情の機微を穿つに於て一種の妙を有する事世既に定評あり、此「伯爵夫人」の一篇は殊に其賞譽を荷ふに適するものなり。

女（辛の一）

發賣元　東京神田表神保町　東京堂　同區裏神保町　上田屋

石橋思案君校　星野麥人君編　近日發行

紅葉書翰抄

全一册横綴美本紙數三百餘頁

明治の文豪尾崎紅葉山人が、自ら文章報國の四字を標榜して、其の一生を斯文の爲めに盡くせし功績の偉大なるは、茲に贅辯を皷するの要なし。宜なり、其の中道として玉碎するや、其の名ますます高く、今や其の斷翰零墨と雖も、世を擧げて珍襲せざるものなし此の書は諸家に秘藏する山人が生前、其の親朋故舊に送れる書翰文約貳百通を輯め、尚狹むに山人自筆の葉書數十を其の儘寫眞版に附せしを以てす凡そ其の人の眞相を窺はんとせば、其の書翰文を見るに如かず噫山人が、眞相の流露する筆の跡を偲ばんとするもの、此の書を熟讀すべきは素より、世の書翰文を學ばんとするものに絶好の指針を與ふる稀代の珍籍なり。江湖博雅の君子は、山人が小說以外に、其の書翰文の如何に章句の妙を極め、又如何に情誼に敦かりしかを、庶幾くは此の書に依つて知れ

發兌元　東京本町　博文館

宮中顧問官佐藤少將題字
文學博士井上哲次郎君序文　秋山梧庵君編

現代大家 武士道叢論

全一册洋裝大判
正價五拾錢
郵稅十二錢

○日本魂黑川文學博士 ○武士道を論ず井上文學博士 ○武士道は物部大伴二氏に興る重野文學博士○武士道細川文學博士 ○勅語と武士道松本文學博士 ○武士道論三好退藏君 ○武家時代の法律に現はれたる道德主義と武士道の話渡邊子爵○武士道と今後の敎育戸水寛人法學博士○大に士氣を振作せよ佐藤陸軍少將 ○時局と歷史敎育三上文學博士 ○大學講師等現代知名の大家の講話三十八項集めて此の中にあり

產科婦人科專門醫　稻生鑑次郞君纂著

實習產婆學

上卷　洋裝大判美本紙數三百餘頁
正價金七拾錢　郵稅拾錢

全二册
上卷
通常產

本書は斯道の專門醫にして、多年產婆養成の經驗ある著者が、其平素講述の稿本を基礎とし、之に佛國ペナール、アブラン兩氏の著書を始め、多くの佛獨兩國の學者の著述を參考として記述したるものにして、其說從來我國に行はるゝ產婆書に比して異彩を放てるもの多く、挿圖甚だ多くして、文章將た初學者をして了解し易からしめんことを務めたれば、產婆生徒の講習用としても、開業產婆の參考用としても、實に間然する所なき良書なり。

發兌元博文館

女(辛の三)

文藝倶樂部春期增刊第貳號

藝人出世譚

一月十五日發行
正價金貳拾五錢
郵稅金貳錢五厘

女(辛の四)

題して藝人出世譚と云ふ。藝界の名人が成功談、苦心談、逸話等を出來得る限り網羅し、新春劈頭の雜誌中最も興味ある讀物たらしむると同時に、一面に於て藝術研鑽の人をして、其名人の徑路を辿り、他日の成功を期せんとするの資に供せんとす。其如何に趣味深く、また如何に多方面なるかは、左に列記する人名に徵して知るを得べし即ち、

常陸山△梅ヶ谷△國見山△荒岩△八百藏△芝翫△羽左衛門△
猿之助△高麗藏△市藏△團藏△松助△莚升△小團次△時藏△
△菊五郎△梅幸△吉右衛門△訥子△壽美藏△女寅△源之助△
九女八△錦糸△米花△右團次△我當△鴈次郎△幅助△山口△
高田△河合△藤澤△伊井△角藤△川上△貞奴△喜多村△福井
△相生太夫△朝太夫△生駒太夫△語介△松太郎△攝津大椽△
越路△伊達△組廣△素行△小清△東玉△三生△綾之助△延壽
△梅吉△家內太夫△藤吉△虎丸△駒子△團五郎△伊三郎△少
瀬檢校△山本檢校△西△橋△古童△竹翁

の外あらゆる現時我が國藝界の名手約一百名に及ぶ珍談奇話の滾々として汲めども盡きざるは、之を發刊の曉に知り給へと云爾。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

恭賀新年

大橋省吾

（商號）
東京堂書店
文武堂書店
英學新報社

（位置）東京神田區表神保町
（電話）本局　百二十三番
本局　二百四十八番

◎讀書家諸彥の御便利を圖り新刊圖書雜誌は汎く蒐集陳列致置候間御來觀希上候

◎地方御同業者の取引は薄利を以て發送は非常の敏速に勉强致候間御注文希上候

書籍雜誌

何れの出版に不拘　勉强販賣

東京堂書店

◎書籍雜誌の委托一手販賣は獨特の擴張法を以て販路勉强致候間御申込被下度候

◎東京堂出版部（文武堂英學新報社）は擴張し良書續々出版可致候間御愛顧希上候

女（辛の五）

女(辛の六)

東京帝國大學文科大學長 文學博士、文學士、理學士 坪井九馬三先生題詞
文科大學教授 文學博士 星野 恒先生題詞
故文科大學教授 文學博士 文學士 三上 三次先生題詠
文科大學及諸大學敎授諸先生題辭序跋

中等國史地圖
國史地圖纂

文學博士 文學士 原秀四郎先生著述

全一册大判着色二十四面
細圖壹百四拾有餘挿入
明治三十九年貳月發行

全二册四六二倍版着色百
餘幅細圖千四百有餘挿入
明治三十九年六月發行

國史地圖纂は著者が大學院在學中の研究成績を纂輯せるものにして、實に今回大學院卒業に際して、卒業主論文に副へて提出し、因つて以て榮譽ある學位を得られたる、三種副論文中の隨一なりとす。其結構の大體は、**第一部** 地理分叙門 **第二部** 歷代地理門 **第三部**附錄より成り **第一部** **參拾餘幅四百有餘圖**を以て本邦所在の山岳、丘陵、谿谷、原野、沼澤、河流、海岸、島嶼より岩石、土壤、氣象、物產、人種、人口、田圃、境域、村落、都會、及び水陸の道路、港灣の設備に至るまで、皆例を擧げて、其性質、其影響及び其變遷の由來を解明し、**第二部** **五拾餘幅**を以て、國史歷代の地方制度、若しくは割據爭奪の變態、及び外交の局面、生產の狀況を記述し、且つ**八百有餘**の細圖を添附して、京師、邊鎭、郡鄕、藩封より、邊土の拓殖民族の盛衰若しくは城寨の攻守、戰陣の進退に關する史蹟の舊態、又は現狀を詳叙し、**第三部** **十幅壹百有餘圖**を以て、製圖の沿革、實地調査の方法より、神社寺院の地理的分布、及び其變遷、和歌、紀行文等の文學上の地理名稱、及び其遺蹟に關する圖書を掲げ、頗る斯學の趣味を喚起しむるものとす、之を通計すれば**壹百餘福壹千四百有餘**の**地圖**と**其略解**とを收錄し、國史古今の遺蹟を網羅して殆んど餘蘊なしと云ふべきものなり。

中等國史地圖は、國史地圖纂の諸圖幅中に就きて、其要を摘み粹を抜きて、稍其圖面を節約し、專ら中等程度の讀史社會に參考書又は敎科書を供するの目的を以て述作せるものにして**二十四面壹百四拾有餘**の**地圖**と簡易なる解說とを收錄せり。

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

近刊豫告

一戸直藏君著 ● **高等天文學** 全一册洋裝大判 帝國百科百四十編

理學士 福井政一君編 ● **普通物理學** 全二册洋裝大判 帝國百科百四十一二編

海軍省教育本部 大島貞益君譯 ● 英國水師提督 **ネルソン** 全一册洋裝 紙數四百餘頁

醫學士 石原弘君著 ● 醫學新書 **人體解剖學** 中卷 洋裝背皮總クロース 紙數五百餘頁

醫學博士 井上通泰君監修 ● **家庭衛生叢書** 第七編 洋裝大判美本 正價貳拾錢郵稅六錢

石橋思案君校 星野麥人君編 ● **紅葉書翰抄** 全一册横綴美本 紙數三百餘頁

樋口勘次郎君著 ● 高等小學 **作文及談話** 全一册背クロース 紙數二百五十頁

中村士德君 大久保千濤君著 ● **本邦地理詳說** 全一册中判並製 紙數約六百頁

第二高等學校教授 文學士 杉谷泰山君述 ● **處世哲學** 全一册洋裝大判 帝國百科百四十三編

法學士 南弘君述 ● **國家學** 全一册洋裝大判 帝國百科百四十四編

法學士 南弘君述 ● **政治學** 全一册洋裝大判 帝國百科百四十五編

法學士 辻宏吉君著 ● 新式 **英語作文書取法** 全一册四六判横綴本 紙數約三百頁

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女（辛の七）

高等女學通信教授

大日本淑女學會

▲貳ヶ年卒業▲講義錄月刊一冊參百頁▲講義平易懇切▲講師は專門の名家▲會費低廉

目下入學の好機　詳細なる規則は申込次第進呈す

女（辛の八）

本會講義錄之批評

▲報知新聞評　高等女學科の全學科をば知名の女子教育家が講述せるもの也、平易と懇切とを主とせるものなれば、何人も難解の處なかる可く、各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど、講述者の苦心を見るに足る、且つ有益なる科外講話の外に『姫百合と題する五十頁の附錄あり、博士學士の婦人に關する評議史傳衞生家庭等の文學を掲載して、一面雜誌の觀を備ふ、卷末更に田口掬汀の『學者の妻』といへる面白き小說あり。凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する書斯くの如きは稀なりと云ふ可し。

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲每日新聞評　米國の通信教授法を參酌せる者、文學平易說明懇篤を盡くせり

▲朝日新聞評　女生獨習の便を圖り平易懇切を旨とせる女學講義錄を發行せり

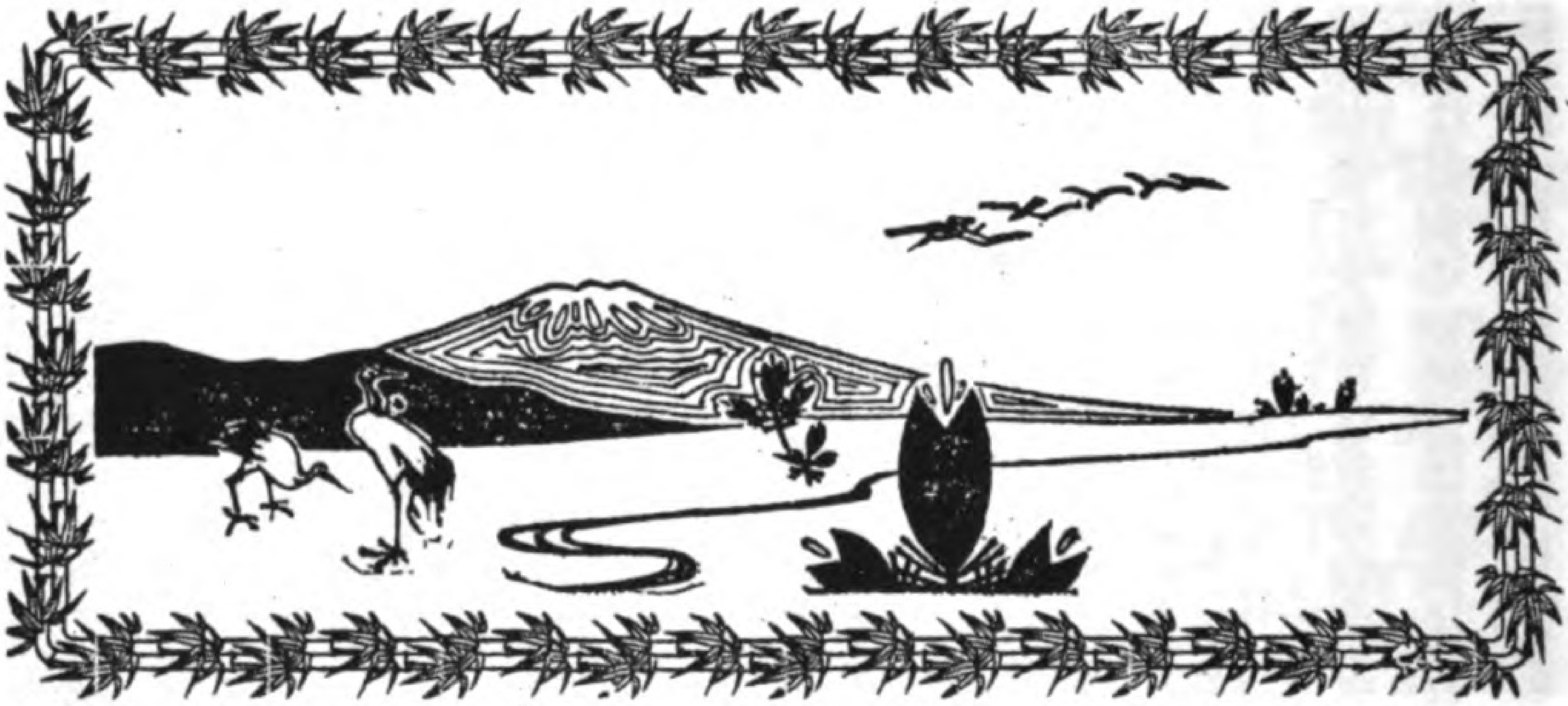
▲二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲貿易新聞評　從來の講義錄中最も進歩したるものゝ一、三百頁の大冊子なり

東京神田南甲賀町十番地（電話本局三千四百番）　◎大日本淑女學會◎



女學世界

第六巻第壹號

（一月一日發行）

平和の春

日露の戦雲収つて、吹く風静かに波和ぎて、荒びにし四方の景色も新玉の年と共に今や其の觀を改めて、世は太平の春となりぬ。
見よ、洋々たる濱邊の水を、波は笑を湛へて魚は淵に躍り、そこに大船の泊るにあらずや。
見よ、煦々たる旭日の光を、風は旗に眠りて鳥は空に舞ひ、そこに瑞氣の搖曳くに非ずや。
あゝ、芽出度い哉、平和の春、吾等は海に陸に大御光の射し添ふ御代の春を、謹んで祝ひまつるになん。

時論

日本女子道德の淵源

羅馬法王使節　大僧正　オーコンチル

光榮ある戰勝に依て日本帝國が世界的發展を爲さんとするの時、歐洲敎權の本宗たる羅馬法王ピオ第十世陛下は特に其法弟オーコンチル大僧正を派して我が皇室に懇親の意を致したり事は昨年十月に在り、我皇室に於ても又之に對して格別の御優遇あらせられたる由聞き及びぬ。左の一篇は僧正の女子敎育意見にして當時記者が、僧正の旅館に就て親しく聞き得たるものなりオーコンチル僧正は元と英國の人久しく羅馬に於ける米國神學校校長なりしが明治三十四年米國ホートランドの司敎に選立せられ、敎界に於ける德望家なり。

日本女子敎育に對する進言

日本の女子敎育は非常に進歩して居ると云ふことで、誠に目出度い事である、日本の敎育は男女共に通じて歐米に劣らないが、但だ玆に注意すべき事がある、それは一般の敎育に於て尤も人物を作ると云ふことに重きを置かねばならぬ、即ち單に學者や智者を作ると云ふことではない。蓋し人物と云ふは、單に學問のある、又知識

のある人のみを謂ふではなく、尙其上に道德の高く操行の正しい者を指すのである、今日に於ては世間の學者中でも心術の陋劣なる者があり、又智者でも奸佞邪智の者がある、此の如きものは決して人物とは云れない、學德兼備と云ふところで初めて人物が出來るのである、私は日本の敎育が果して此の如く學德兼備の人物を作るものでありや否やを詳に知らぬが之を歐米の今日に徵するに敎育が學者を作るに於ては遺憾はないが、人格を作るといふことに於て大に缺くる所のあるのは如何にも殘念な次第である、此の弊害は何れより來るかと云ふに主として智育偏重、意育缺如と云ふところより出たものである。

日本には智育、意育が並行して居るか否か、此點に於ても私は知らぬが日露戰爭に於て日本が空前絕後の勝利を獲たのは日本に人物があつた爲で、其の人物は一時偶然に出來たものではなく、多年の敎育によつて出來たものであるから、日本の敎育は確に人物を作る敎育であつたに相違ない、即ち武士道なるものが冥々の間に日本の人物敎育を支配してゐたと云ふことだけは論理によつて察せられるのである、器械の精巧と之を運用する知能とは勿論必要ではあるが、他の一方より忠君愛國の誠がなかつた日には何の役にも立たない、日本の凱旋は科學上の新知識と從來の武士道大和魂との合調によりて獲得されたものである、所謂是れ智育と意育との合調したものに外ならぬ。

意育が人物を作るに必要缺くべからざることは誰も之を疑はない、男子に取りてすら智育よりも意育の方が必要である、タトエば天文學の知識があつて日月星辰の回轉を能く知つて居つても自分の心界の擾亂、所謂情慾の亂脈を制止することを知らなければ何の役にも立たぬ、又法律學の知識があつて政法民法等悉く之を知つて居つても自分が之を守らなければ國家に取りて何の役にも立たない、又醫學の知識に富んでゐても流行病などの時國民の禍害を救はん爲に身を挺して之に赴く熱誠がなければ何の役にも立たぬ如く、國家危急のと

きに如何に兵法戰術に巧なりとて國家の爲に身を犧牲に供する至誠がなければ何の用もなさないのである、之等によりて考へて見ても、智育よりも意育の方が如何に大切なるかは明白なる所である、是れは男子に取りて既に然りである上は、女子に取りては尚更に然りと云はねばならぬ、女子は其の智性よりも其の德性を涵養しなければならぬ、女は智で働くよりも心で働くものである、女にして智識のみすぐれて德操が缺けて居つたならば、男子よりももう一層害になるのである、何故なれば『男子は法律を作るが女子は風俗を作る』と云ふ通り、女子と云ふものは一國德風の淵源である、處が其の德風の淵源たる者が貞節もなく德操もなく、唯學問ばかりを備へて居ると云つた日には國民の風紀は如何なつて了ふか分らない、成程其の弊風は直接國家に顯はれて來ぬであらうが、先づ第一自身の操行が亂れ、次に家庭の道德が亂れ、遂に延て社會の道德が亂れると云ふやうになつて了ふのであるから、女子と云ふものは善くても惡くても一國の風俗を作るに大なる影響あるものである、女子は德風の淵源であると云ふときには美であるが、敗風汚俗の源であると云はれた日には實にいやしむべきものである、此の方面より見て意育が女子に取りて如何に必要であるか知れないのである。

加之、女子一身に取りても良妻や、賢母や、貞女や、又理想的の婦人と云ふものは、如何なる敎育によりて出來るかと云ふに、申す迄もなく、智育ではなくて、意育である、昔から歐米諸國は勿論の事日本でも知識のみすぐれて意志の薄弱なもので立派な婦人となつた者は一人もありませぬぞ、智育ばかりでは所謂蓮葉お轉婆と稱するものが出來る、決して賢婦人は出來ませぬぞ、今日歐米各國で唯物論、無神論などが盛んになり、其の主義言論が敎育にも這入り、遂に敎育より宗敎を省くと云ふ主義に傾くのは決して慶賀すべきことではありませぬ、議論は姑く措き、遠からず其の結果が顯はれるでせう、否、既に其の結果が顯はれて居るのである。是れ實に今より大に注意しなければならぬ點であつて、若も日本の敎育主義、就中女子の敎育主義まで此の如

くならば、頗る寒心すべき事である、私は日本女子の教育のことに就ては詳しきことを知らない故何等の意見も申上ぐることは出來ませぬが、然し今の日本が西洋から來るものは何でも彼でも採用すると云ふやうな事は甚だいかない、殊に無宗教主義の教育をまで眞似するやうになるといふ事は大變間違であると思ふ故、一言御注意まで申し上げて置きます。

要するに今日の科學的知識などは生活上に於て必要なるには相違ないけれども、之が爲に古來德操を重んじたる教育を全く打棄てゝ了はぬやうに注意しなければならぬ、昔の教育法を稱して單に迂遠だとか、宗教教育を指して迷信臭いとか、種々に稱して排斥する風でありますが、然し實際に於て今日の教育が昔の教育の如く立派な人物を作らず、宗教教育の如く貞操の婦人を作らざるを見れば、左程まで威張る理由はなからうと思ひます、家庭に必要なる婦人、國家に必要なる婦人は女學士女博士よりも寧ろ無學の賢婦人である、畢竟今迄の教育には德育偏重と云ふ譏はあつたかも知れませぬが、今の教育は之に反して知育偏重と云ふ譏を免るゝことは出來ないであらう、偏重は何れにしても惡いが就中女子に取て知育の偏重は德育の偏重よりも尙更に惡い、理想を云へば知育と德育兩々相並行するに在りて、此時初めて完全なる理想の婦人が出來るのである、どうか日本の女子教育も永く此の如く知育德育の兩々相並行せることを切望するのである、今日では西洋教育の爲に旣に知育偏重の傾向ありはせぬかと思ふ故、特に意育の必要を述べて兩教育の平均を持せられんことを聊か一言致す次第である。

羅馬法皇ピオ第十世陛下は西暦一千八百三十五年六月二日伊國リエセ邑に生れ、父はジヨアン、バプチスタと稱し、母はマルガリタ、サンソニといふ一弟六妹あり、布衣より起りて教會の各位階を歴昇して終に一千八百〇三年法皇の位に就く。肖像は卷頭に在り。

女子と談話術

子爵　秋元興朝

從來日本の婦女子は寡言沈默を以て高尚優美と心得て居ました、成程女子の饒舌ほど厭なものはありません、饒舌は啻に人に嫌はるゝのみならず、己の品位をも失墜するのである故に饒舌と寡言沈默との何れを採る可きかと云へば無論後者を採つて前者を排すべきである、況や口は禍の門と云ふて不慮の禍を釀し自己の狂愚を示し、後で飛でもなきことを言つたと後悔するやうなことがあるから、尚更に氣を附けねばならぬ、語つて後悔することはあるが、默つてゐて後悔した例はない、この方面より見れば、寡言沈默は確に結構に相違ないがされぱとて寡言沈默が如何に結構であるかと云ふても、何時も又如何なる場所にも寡言沈默主義では洵に困るのである、日本從來の婦女子と語つて往々不得要領に了ることのあるのは、所詮幾分か此邊に原因して居るのである、勿論今迄の婦人は多く閨門を鎖して奧深き處にばかり居たのであるから、寡言沈默でも大した差支はなかつたのであるけれども、今日の婦人就中戰捷後の婦人に至りては交際術に長けたる外國婦人と交はる機會が最と頻繁になつて來ましたから、寡言沈默では通用しなくなつて來たのである、眞逆日本婦人は外國婦人と一切交際を結ばぬといふ譯には往くまい、既に交際を結ばずに居られぬ以上は、其の交際に最も必要なるものは談話であるから、戰捷後の今日には交際術の第一要件として、談話術を學ぶのが目下の急務と云はねばならぬ、平たく言へば、話方を練習することである、是れが最も必要である、語る可き時に語り、語る可き處に語り、語る可き方法によつて語るのは、啻に寡言沈默を破らぬのみならず、寧ろ寡言沈默をして最も價値あらしむる

道である、隨て高尙優美性を破るなどの憂は毛頭ないのである、要は語る可き方法によつて語ること即ち談話術と云ふものが緊要缺く可からざる事となるのである。

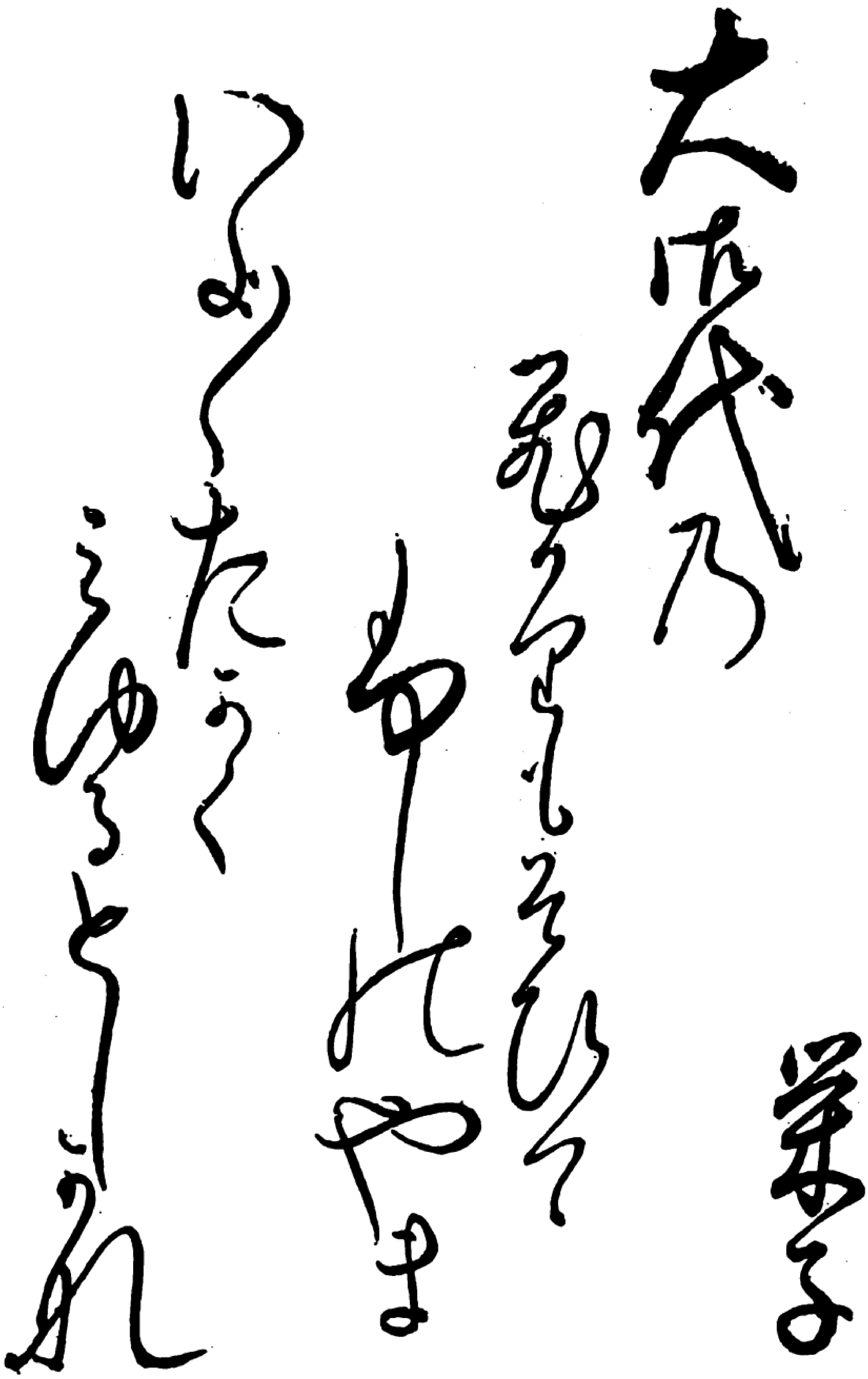
乃で日本婦人は相對座して話すとき僅か十分か十五分も經過と後は無言になつて了ふ、話と言ふ話も出なくなつて了ふ、是では餘りあつけない譯である、以來は日本婦人も歐米婦人の如く人と對座して居る間は間斷なく話を繼續し、己も愉快に、人をも愉快ならしむるやうに務めねばならぬ。

特に是れは汽車などに多く見受らるゝことであるが、外國婦人などは汽車の客室に居る際、如何にも面白げに談笑して旅情の淋しさを忘れて了ふ程である、日本婦人に至りては此の如き愉快は更になく、獨り空しく憂き時刻を車中に送るのみにて、側の見る目も氣の毒な位である、然し是れは日本婦人の絕體的に話の出來ぬところより來るものであるかと云ふに、決して然ではない、其の證據には

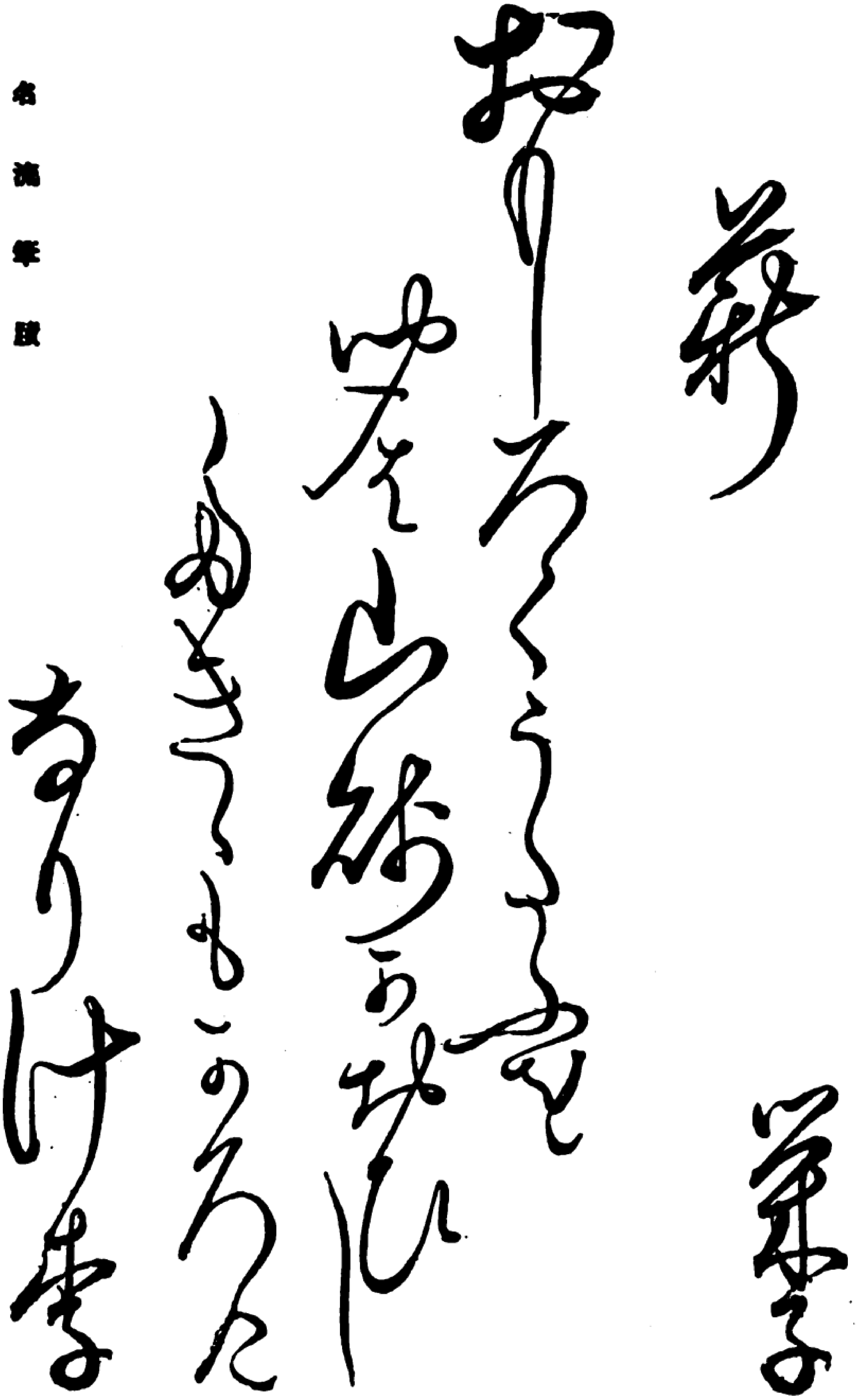
人の惡口話などをするときは隨分と饒舌る、此時に限りては丸で小鳥の囀るやうに中々話に富んで居てとぎれる暇のないほどの有樣である、願くは惡口の辯舌は頗る拙にして、否、寧ろ訥にして普通交際上の談話には極めて妙を得られんことこそ望ましい。

話下手と云はれるのは婦人のみに見受くる所ではない、封建時代の餘弊として男子にも矢張りある、近い話がホーツマスの失敗も畢竟談話術に妙を得ざりし結果のやうに思はれる、一般日本人は多辯を嫌ひ沈默を貴ぶ、それは結構であるに相違ないが、然しそれも時によりけりである、大に語る可き時に沈默、沈默と云ふやうでは大切の用が辨せられなくなつて了ふ、己の承知せぬ事を人に說伏せられて了ふと云ふやうなことでは、眞に殘念でもあり、氣の毒でもある、勿論ホーツマスの失敗は責を一人に嫁する譯のものではないが、然し此時に若も談論に妙を得て居つたならばと聊か齒痒い感がせらるゝのである、小村外相は日本人としては隨分交際の道

鍋島侯爵夫人筆



（其二）



名流筆跡

に巧な人である、けれども歐米人と相對座する時には或は數歩を讓りはしまいかと思はれる事もある。

今や戰爭も終局を告げた、されば、今後は専ら平和的交際を以て歐米人と接觸せねばならぬ、此際談話術は益々必要である、戰爭には男子を以て大國の露西亞と兵法戰術を以て相見えたが、戰後には女子を以て歐米列强と談話術を以て交際を結ばなければならぬ、今後は設令女子の獨舞臺にはならぬとしても、女子の出る可き幕は益々廣くなつて來る故に今より歐米人に後れを取ぬやう談話術を學ぶことを專一としなければならない。

名物論

下田次郎

一體日本は名物に富める國なり、先づ申すも畏きことながら、上には萬世一系の皇室を戴き代々その御仁政に浴し、其民は古來忠實の臣民として、皇室に仕へまつりて今に至れる、實に萬國無比世界唯一と誇稱するに足る。我が國體の萬國に冠絶するは、言ふまでもなけれど、この外尙澤山の名物あり、例へば風景の良きもその一なり、富士は勿論世界に響き渡れる名山、瀬戸内海の景色は、汽船の往復にも態々こゝを通るとて、外字新聞の廣告にも出すほどのもの、十數度通ふた自分には左程にもなかりしが、外國を旅行して歸つて見ると、成程瀬戸内海ほどの景色は、海といふ海何處に行てもなし、是も日本の名物なり。その他氣味の惡き名物には地震あり、氣味よき名物には陸海軍あり、前者は時々名物たる所以を示し、後者は昨年來一時に名を擧げたり。さるにこゝに此等の名物にもおさ／＼劣らざる名物あり、神代此方のものにして、富士の莊嚴なく、陸海軍の

威勢はなけれど、持つて生れた愛嬌と作りにて、世界の人を唸らせる、女といふものあり。外人の言ふ所を聞くに、第一日本の婦人は愛嬌あり、常に笑傾けて何所までも愛らしけれども、我等が國の女は眼するどく顔にケンあり、やゝもすれば叱り飛ばして、近寄るべからず。日本の婦人は一樣に髪黒く濡れ烏の色麗はしきが、我が娘の焦茶の髪は何事ぞ、またあの着物が珍らしい、背に角なものを負ふて居るのが面白い、紐の付いた木の靴をカラコロいはして歩くも妙ならずや、外には向けで内輪に歩くは益々妙、婦人のお辭義は如何に、體を直角に折りまげて凡そ二分は起きも上らず、分るゝ時またお辭儀してチヨコ〱四五間小走りに走り去る所に氣が附いたか、頭に挿せる金の「ピン」、鼈の甲の弦月の置物、四角な刺貫き、一から十まで、珍らしく、面白く、不思議にて、日本の名物知つて居るか、「フヂヤマ」だらう、「トーゴー」だらうの下には立たぬ婦人なり。

されば千九百年巴里の萬國博覽會にも、世界一週と云へる見世物出來て、各國の婦人を、自國の住居をしつらへ、自國の服裝にて出したる中にも、日本の女は最も人の目をひき、ことには千九百二年米國紐育にての萬國婦人展覽會には、世界十數ヶ國の婦人の出て居る中に、日本の女が巾をやりて、他所なら二倍の場所を占め、柵には作り花の櫻の枝を挿し並べ、座敷には頭一ぱい簪さしたるお姫樣が、琴の前に座つて御座るのが、一番の喝采にて、人だかり山の如しとは、さもありなんさもありぬべし。

要するに日本の女は世界の名物なり、外國人の日本に來るのは一は女を見に來るなり。されど斯る意味にて名高きは日本婦人の名譽なるが、日本婦人の外形は如何にも珍らしからん面白かるべし、されどそは要するに外形なり。日本婦人の最も誇るべく名物たる所以は、髪や形や風俗にあらずして、實に其性質にあるなり。見損つたか世界の人々、今度の戰さは誰れが勝たした、「トーゴー」は誰れが生んで誰れが育てた、「ノギ」の鐵の意志は誰れが吹き込み鍛へたか、日本の婦人を理解せざるものは、未だ眞によく日本を理解する能はざるなり。

その從順にして堪忍能く、骨身を惜まずして良く働き、家族の爲に身を捧げて自ら求むること少く、寡言にして功に居らず、女らしきが中にも、燃ゆるが如き愛國心と雄々しき氣象を藏するが如き、實に世界の一品、一般婦人の模範としてこれだけは何處に出しても耻かしからぬものなり。

されどこゝに一の飽足らず思はるゝことあり。其教育の如何にも低きこととこれなり。日本の婦人は世界文明國第一の物知らずなり、其精神の修養、見識の確立、知識趣味の多方等、文明國人として缺くべからざる資格修飾は、殆んど之を我國婦人に求むべからずして、話せぬ分らず屋の多きことあり。人間としての婦人、婦人としての運命等、自己存在の根本的大問題に就て、深く考へ思ふものはなくして、猫が子を產んだとか、飯が焦げたとかいふことに、笑ひ興じ、泣き悲みて、昨日とすぎ今日と立ちて、何のために生れたか、そんなことは私にはと、風が吹き雲が飛んだほどにも思はず、茫然として醉生夢死するが、日本では女の運命が極つて居るやうなり、天下之をしも悲まずんば何をか悲むべき。

古き人は暫く云はず、今の教育を受けつゝある若き娘が、不相變その氣にて、一向眞面目なる所なく、教育とは紫の包み提げて學校にゆき、先生の「御話」をきゝ、遠足に連れて行つて貰ひ、運動會に見て貰ふて、嫁入するまでに切り上げるもの、その他は廂髮結ひ出して、お友達と菫や星の噂して居れば、女學生は濟せるものといふ了見故、一向教育に實が乘らず、出る者も出る者も、藥拔けの殼ばかりにて、それで日本の婦人で御座ると、世界の檜舞臺に乘り出せるかと、まことに心配に堪へざるなり。

習ふ者も其氣なら教へる者もその氣なり、どうせ女だ分るものかと、元來素養なき先生の始めから眞面目にならぬもあり、又は眞面目にやつて來ても、ほんのその日暮しにて、さそふ水あらばいなんとぞ思ふの暫くの御勤めなり、いづれは入らぬ本を讀むのは大きに損、研究も何もあるものかと、口では教案の何のとはいふも

のゝ、心はあらぬ彼方にありといふ始末、これで女子教育は勃興せり隆盛なりと謳はるゝとは、不思議は代々に絶えせぬものなり。

今日の女子教育は教員と生徒と懸合ひの結果なり。日本の眞の名物は此の如くにして成るべきか。是まで通りの名物に甘んずれば論なし、息する美しき人形に終らんとならばそれまでのことなり。されどそれでは殘念にあらずや、婦人はより大に、より多くの意義あり、生命あるものなり、女ならぬ我等も人事ながら齒痒く情なく思ふなり、況んや身自ら婦人たるものおや。

世間は女子教育の必要を口に筆にうるさきまでに說きながら、たゞの遠吠にて仕事には寄り付かず、上面は熱心らしくして、內實は極めて冷淡なり。立派な婦人を作るには、先づ社會が此態度を改め、社會が眞面目にならざるべからず。次には教育家が一層の元氣を出して、研究もし、考へもし、働きもして、眞に女子を教育するとの氣にならざるべからず。之には當人たる女學生が、も少し確乎して、厭やな下品な甘たるき言葉などは廢して、も少し締りのある物言をなし、人としての婦人、婦人としての本領に就て考ふることを忘れず、日本婦人の美質を繼續することを怠らざると同時に、世界の文明、精神的の產物は男女共有の寶にして、從來の如き男子の專有壟斷は、人道に反するものなり、世界の眞理は男子に與ふるためにのみ偉人を探求せず、婦人も之を專有すべきの至當なるを思ひ、其教育を高くし、眼界を廣くして、眞に文明國の婦人として、世界の婦人界に立ち並びて耻ぢざるのみならず、違つた意味の名物たらんことを常住座臥に心掛け、努むべき所のものなり。

女子の遊學（上）

塚本はま

今から僅か三十年ほど昔に遡りますと、「女子の學問」といふ詞すら、耳新らしく聞えたもので、まして「女子の遊學」などゝ申すことは、よほど珍らしく思はれたものでしたらう。眞正に申しましたなら「女子の遊學」といふ詞などは全く無かつたものらしく考へられます。處が今日となりますと、女子が學問の爲に都へ出る、東京に上るといふ事はまことに普通の事となつて、鹿や狐の鳴くやうな山間の寒村でも、潮を汲み藻をひらふ海人の群でも決して珍らしい事實でなく、隣の漁師の娘は、女子職業學校へ入學したとか、向うの百姓の妹は渡邊女學校へ通つてゐるとか、裏の下駄やの姪が女子大學を卒業したとかいふ噂は、さして珍らしい音づれとは我れ人ともに感じないほどゝなりました、かやうな事からは女子教育の上からは、いふまでもなく一大進歩であつて、女子の幸福と申すことがらは、よほど結構な事であるのです。實に明治昭代の美觀として、誰れしも感謝の念を禁じ得ないでしやう。併し「物盛んなれば必ず衰ふ」、とか「幸極つて禍其の中に萠す」とか申しまして、この隆盛なるが如く見えます、女子教育の一新潮流の中にも、心配に堪えない不快な暗流が漂うてゐるやうに見えます。もとより、教育の普及とか隆盛とか申す事の中には、男子の教育でも女子の教育でも、何の時代でも何處の國でも弊害や惡風が伴はれまして、教育者の假面を冠る山師も出、教師の品格のない教師も在つて、一利一害と申すことは、こゝにも決して免れられない現象であるですから、あながち女子の教育にばかり或は女子の學校にばかり、あるべき禍根ではないかも知れませぬが、とにかく面白からぬ風潮があるやうです。

直言したら寒心すべき禍根が伏在して居はせぬかとまで心配するのも、敢て杞憂ばかりではないかも知れませぬ。かゝる有様ですから遂には、あまり教育界に立ち入つて貰ひたくない、巡査とか刑事とかいふ者すら、この神聖の女學校を監視し、どこの女學校の生徒には、かやうなのがあるとか、どこの女學校の寄宿舎にはどんな事が行はれてゐるとか、聞くも忌はしい醜汚なことを、肝心な女學校の校長や、その他の監督者が知らぬ間に、警察の署長や裁判所の人たちが知り、其女生徒の始末方は必要な學校の教員會では、評議もしないでお門ちがひの警察から、親里へ照會して、引取らせるの、退學をさせるのといふ事にまでなるといふ事實を耳にしますのは、眞に歎かはしい次第です。私は今、良家の無垢清淨なる娘たち、ことに多くは郷里で評判な學力も優等で、進歩的能力にも富んで居る、感心な娘だちが、一朝女學生として都に遊學すると、かゝる悲慘な有樣にまで落ち入ると申すのは、その原因がどこにあるか、その動機は何であるか、學校の不完全なるによるか、教育者の無責任なるによるか、家庭の無頓着なるに起因するか、抑々又本人の薄志弱行に基くか、果して然らば、如何にしてこの惡風に染まぬやう爲し得られやうか、如何にしてこれを十分に救濟し得られやうか、又女子遊學の傾向はなるべく止むるがよいか、又奬勵すべきものか、試みにその一二を述べてみませう。

○遊學の目的

世間なれぬ、田舎の質朴な少女又は妙齢の婦人たちが、たま〳〵東京などから歸つた人たちに、大都會の盛な形勢や大きな立派な學校が澤山ある事や、どこへ行つても男女の學生が滿ち充ちてゐる事や、その學生等は立派な裝をし、愉快げにして面白さうに暮してゐる事や、學校を卒業した人たちがよい職業を得て盛んな生活を營んでをる事がらなどを耳にして、どうか自分も東京にさへ、出たならば必ず立派な學業を學び了へ、十分な成功を得るであらうと、空中樓閣を胸中に畫がいて只何とはなく、東京に出たい都に遊學したいといふ考を

起し、資產のある者は親にねだつて、學資の仕送を乞ひ、資產のないものは、苦學をしてなりとも、自分の目的を達したいと、千萬人中僅かに成功した希有の立志談を夢みて、的もなく上京する人も少くないのですが、これが抑々間違の基なのです。私共より見ますると、女子の普通學、まづ高等女學校程度の學校は、既に各府縣とも、縣廳の所在地はいふまでもなく、その他有名な都會には、必らず建てられて、技藝の各種學校、主としては裁縫など敎へる所は、多くこれに附屬して設けられ、普通の程度に於ては、さして不自由を感せぬほどゝなつてゐますから、これらでは不滿足であると感じて、上京するものは少くとも普通以上、特種の敎育を受け、特種の技藝を修めやうとするものであるべきです。勿論その家の生活程度によつて、田舍の高等女學校で一通り勉强したのでは、不十分とおもひ、都會の空氣を吸ひ、都會の交際を覺え、都會の風俗習慣に熟する必要があつて、都の普通敎育を受けるものもありましやうが、とにかくわざ／＼都に出て、學問をするといふのには、隣近所の人も出るから、自分も出たいといふやうな、幼稚な模倣的の考へや、淺薄な虛榮心に驅られて物見遊散のつもりや、無形の裝飾品を得るなどゝいふ考では、全く遊學の目的が精神的に根元から間違つてゐるのです。

○女學校の選擇

まづ目的が立ちましたら、これに相應した學校を選むのが肝心です官公立の立派な女學校にも、細かにみましたならば、弊害惡風はありましようが、まあ槪して校則もとゝのひ規則も嚴重に設けられてゐますから、さほど心配のない方でしやうが、その代りこれらは入學の時期や資格や入學試驗がむづかしくて、多數の人が誰れでも入學が出來るといふわけでありませぬ、私立の學校でも專門學校令によつたり、高等女學校令に據つてをるものゝ中には、官公立の學校に增さつて、設備や敎育法の完備してをるのもありますし、よしや官公立の學校より其點は劣つて居るにしても、校長や敎師にいはゆる官吏的の尊大な風がない事や、校規學則にお役所向きの繁文褥禮が少い事などから、案外活氣のある學生や、融通の利く婦人を出す例は少くありませぬ。併しかゝる法令に準據するほどの設備も出來ず、資格のある敎師も少いといふやうな高等女學校擬ひの學校や、裁縫技藝の類を敎へる各種學校中には、隨分如何はしいのもないとは申されませぬ。かやうな學校を選擇するに

大日本女學會

●本會が十年來女學の通信教授に盡せる事畏くも　皇后宮の懿聞に達し特に御歌下賜の恩命を蒙りたり●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に奉戴し鍋島侯爵夫人會長として會務を監督す●今度新學期を開き會員を募集す　會則希望者は葉書又は電話にて請求あれ

●高等科（學期二個年）　月謝四拾錢　束脩四拾錢

○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎮子）○教育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歷史（大森金五郎）○萬國歷史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）○日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事衛生（同上）○小兒衛生（三島博士）○家事經濟（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖書（武村千佐子）○美學（島村抱月）○音樂（東儀季治）○揷花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田伴親）○法制經濟（岡戸諭介）○附錄機關雜誌「なでしこ」

●簡易科（學期二個年）　月謝貳拾錢　束脩貳拾錢

○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎮子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歷史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭教育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖書（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

目下貳卷迄發行　入會の好時機

東京市麹町區下二番町三七　**大日本女學會**　電話番町一三三〇

女（壬の一）

太陽

毎月一回一日發行　第拾貳卷第壹號　一月一日發行

寫眞銅版

富美宮、泰宮兩內親王殿下
韓國京城伊藤大使の園遊會
清國談判委員三名
京城に於ける伊藤侯
昔日の伊藤侯と大隈伯
奉天の滿洲軍總司令部
河野廣中氏外國民大會委員
朝風の進水式
一望千里(東蒙古風景)
西洋馬の名畫、時代風俗人形
米國首府の馬の彫刻
帝國大學對文部省
懸賞募集寫眞(其一、二、三)

▲論說▼

- ●戰後の三大要務……島田三郎君
- ●文明の新紀元……文學博士　姉崎正治君
- ●國民將來の覺悟……文學博士　箕作元八君
- ●對韓策の方針……伯爵　大隈重信君
- ●大學獨立問題……文學博士　井上哲次郎君
- ●國民家庭論……男爵　金子堅太郎君

▲學藝▼

- ●進化論……理學博士　石川千代松君
- ●河の話……寺崎留吉君
- ●河川の話……近藤虎五郎君

▲文藝▼

- ●月夜遊女……泉鏡花君
- ●化政姿繪のひとひら……笹川種郎君
- ●ミルトン失樂園……土井晩翠君
- ●西遊記を飜案したる馬琴の苦心……饗庭篁村君
- ●黄金鱗……岩野泡鳴君
- ●東西の御苑……巖谷小波君
- ●望郷の歌……薄田泣菫君
- ●元祿文學……佐々醒雪君
- ●寶暦年代の地方川柳……井上劍花坊君

▲雜纂▼

- ●日露戰爭に於ける露國財政……海軍主計中監　窪田空々君
- ●ひのえうま……岸上質軒君
- ●喇嘛敎の起源……寺本婉雅君
- ●金貰の話……陸軍軍醫總監　石黑忠悳君
- ●教育史上の午の年……橫山健堂君
- ●白河舟中の一週間……坪谷水哉君

新年附錄

▲短篇小說▼

- 雪の丸子……江見水蔭君
- 中川心中……齋藤柳浪君
- 氣持……小栗風葉君
- 白鳥……田山花袋君
- 六盲撫象談……石橋思案君

年刊十二冊▲臨時增刊年四回(定價同一)
▲四六判二倍大紙數二百五十六頁
▲光澤寫眞版四頁普通十六頁▲本文中寫眞版數十個挿入

正價　一冊參拾錢▲郵稅參錢宛(一月一日發行に限り郵稅要四錢)

前金　●四冊壹圓拾錢●八冊貳圓貳拾錢●十六冊四圓貳拾錢　外に要郵稅

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(三の二)

實業世界 太平洋

第五卷第壹號 一月一日發行

毎月二回 一日十五日發行

太平洋は本邦實業雜誌の巨擘として名實兼れ備はれるは中外既に定評あり。本誌生れて茲に三歳來春を以て第五卷第一號を發刊せんとするに當り、偶々日露戰爭全く其局を収め、日本民族の發奮一番、世界の舞臺に立つて大に活動すべき時機は正に到れり。本誌の本領を發揮すべき時機亦た此秋なり。有爲の人士が本誌を伴侶とし、本誌に待つ所あらんとする時期亦た實に今日に在るべし。是に於てか本誌は來春を期して着々刷新を圖り、以て多數讀者の希望に應ずると共に愈々出でゝ愈々一代に大雄飛を試みんと欲す。其の改良の細目に至つては一々此に縷述するの限りに非ずと雖も下に掲ぐるものは即ち來春早々本誌の內容を組成すべき欄の大要なり。若し夫れ口繪寫眞の銅版に至つては珍を蒐め奇を盡しアート紙四頁光彩陸離として本誌以外容易に其類を見出し難かるべし。苟も當代の人と生れて志を實業に寄せ、而して本誌を讀まざるものは未だ共に語る可からず。

論說と訪問

第一號概目左の如し

- ○根本的經濟問題　日本興業銀行總裁 法學博士 添田壽一君
- ○貿易論　男爵 金子堅太郎君
- ○寸燐業の合同　商業局長 森田茂吉君
- ○日本鑛業と戰後經營　三井鑛山會社專務理事 團琢磨君
- ○營口と大連灣　日本興業銀行理事 井上辰九郎君

▲時代人物▼實業教育界の七星(月旦)●男爵岩崎久彌氏の平生●十五銀行頭取園田孝吉氏の成功譚●五拾餘歳の成功者其他

▲調査資料▼維新以來貿易の發達

▲實業世界▼東北凶作の與へたる教訓 農科大學教授 理學博士 横井時敬君●樺太の漁業 岸上理學博士●目出度松樹 林學士 三村鐘三郎君▲世界の實業▲飜譯▲質疑應答▲貿易事情

▲海外渡航案內▼南洋渡航手引 副島八十六君●滿洲の實業●各國渡航問答、日本力行會長 島貫兵太夫君

▲家政案內▼商家の松の內●守田寶丹の人員採用法●其他

▲職業案內▼ビルブローカー

▲內外談叢▼午歳生れの實業家●今昔江戸名物●三菱合資會社茶話●實業家榮華物語●東京一の給双紙屋●實業家奇聞錄其他

▲喜劇▼五人久松●通俗文學其他

▲成功指針▼責任を全うせよ 鐵道作業局長 官工學博士 平井晴二郎君●青年訓 米國大統領ローズヴェルト君●學生訓、慶應義塾長 鎌田榮吉君

▲雜錄▼新年の御使物●馬喰物語●遼河の水運

● 新年附錄 滿洲實業地圖(三度刷 縱一尺八寸横二尺六寸)

發行日

毎月二回一日十五日發行

定價

◎壹冊正價金拾貳錢 郵稅壹錢五厘

年刊二十四冊▲外に臨時增刊發行四六二倍毎紙數百十二頁▲アートペーパー寫眞版四頁

前金

●六冊金六拾八錢●十二冊金壹圓參拾五錢●廿四冊金貳圓六拾錢▲外要郵稅

▲臨時增刊▼

臨時增刊の發刊は第五回內國博覽會の時以來暫く休止したり。今や我國多事多忙にして、定期の刊行を以てしては悉く讀者の需要に應ずるに足らざらんとす。是れ本年度より機宜を見て臨時增刊を公にせんとする所にして、亦た本誌が發展の一途たるに外ならず讀者願くは刮目して之を待て。

(壬の三)

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

日露戰史

四六判二倍（太陽同形）毎編本文二百餘頁寫眞版十二頁毎月二回發行

正價一冊參拾錢●八冊貳圓貳拾錢●十六冊四圓廿錢▲郵稅一冊貳錢五厘

干戈已に戢まり、戰氛茲に銷す、戰勝の將士は陸續として凱旋し來り、我が日露戰爭實記は客臘を以て、秩序整然として完了す。筆硯復た新たに、文献頗る徵すべし。日露戰史を完成して、功勳を傳へ、警醒に資する者、今を措いて其れ何の時をか俟たんや。本書卷を頒つこと十數、一卷毎に一大戰局を詳敍して全編を通ずれば、首尾貫徹脈絡紊れざること實縷の如し。而して毎戰或は從軍して、實相を目擊したる人の筆に成り、或は最も精確なる材料に因りて之れを記述し、猶且陸海軍當事者の校閲を經たれば、洵に唯一無二の好戰史たることを疑はず。第一卷成るに及び、一言を辯じて以て此書の出づる所以を諗ぐと云ふ

日露戰史　第壹卷　一月一日發行

▲日露の危局と戰役初期の海戰

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（王の四）

（壬の五）

文藝倶樂部

毎月一回　一日發行

第拾貳卷第壹號

一月一日發行
本號に限り郵税三錢

（壬の六）

三十九年度の文藝倶樂部

年刊十二册▲定期增刊年四回（定價同一）▲菊判三百廿頁▲木版摺錦繪一枚▲原色版一枚▲寫眞版アートペーパー二頁、普通寫眞八枚挿入

正價｛一册貳拾五錢　郵税貳錢五厘

前金｛●四册金九拾五錢●八册金壹圓八拾錢　十六册金參圓五拾錢▲外に要郵税

●新年大附録　實用と趣味とを兼ねたる　**名媛繪葉書双六**

現代浮世繪畫界の泰斗梶田半古氏に依囑し縱横に揮灑せしめ彩筆一見恍然たらざるものなく是れを極彩色石版縱一尺八寸横二尺五寸に印刷し殊に使用後繪葉書に流用し得る最新案最美最麗なる天下無比の雙六を添ゆ

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　**博文館**

○色白く艶をだす
松澤ホーサン石鹼

本品縮圖
登錄商標



大形廿錢
小形十錢

○芳香の永く保つ
ムスク香水



大瓶金壹圓
中瓶六十五錢
小瓶二十五錢

○全國到る所賣藥小間物化粧品店にあり
○近來にせ物多し御注意
御買求の節には**松澤名義**を乞ふ

東京日本橋區本石町四丁目

芳香藥種問屋 **松澤常吉** 化粧品部

五大軍醫合議製劑

藥價 五週分壹円、三週分六十五戔、二週分四十五戔、一週分二十五戔、二日半分十戔

本舖 東京銀座壹丁目 大阪南久寶寺町堺筋東



全國各藥店にて取次販賣す

博文館雜誌廣告の利益

一 廣告の商業に於けるは蒸汽力の機械に於けるが如し蓋し廣告は商品販賣の原動力なればなり。

一 博文館の雜誌は其發行部數頗る多く其販路内國各地は勿論、遠く世界各國に普及す。

一 博文館雜誌の廣告は其効力最も偉大にして廣告料金は其割合極めて低廉なり。

一 各雜誌の廣告料金其他の件は御照會に依り詳報す

東京日本橋區本町三丁目

博文館廣告部

女(王の八)

は、第一その學校の敎務上の實權を握つて日々生徒を敎育監理する人が、どういふ經歷のある人か、いかほど學德の高い人か、どのやうな性質の方かを、十分敎育上經驗のある人たちに就いて聞き正し、決して規則書面に名を出してをる、校長や敎員の名のみを當にしてはなりませぬ、地方の學校と異り、東京の私立學校には、いはゆる掛持敎師なるものが多數を占め、一週僅かに一時間、甚だしきは一ヶ月一回ぐらゐ某學科の講義を擔任さるゝ方も、決して珍しくありませぬから、敎師といふて地方の如く生徒と親密とはなり得ず、甚しきは生徒の顏も名も覺えぬといふわけです。まして生徒の素行や性情を監督し、矯正して參るといふやうな事は及びもつかぬ事で誰れがその任に當るかと申せば、營利に敏い事務員とか下級の敎員とかですから、勿論間違が多い筈です隨て何先生が、何學校の講師であるといふ事があつても、その先生に親しく薫陶を受けるといふ事は殆ど出來ぬのです。一例を擧げますと某私立の女學校で大規模の新敎育を施し、多數の生徒を集めてをられますが此が或時某博士の講義を參觀しました節などには、二百何十人かの組と、百七八十人の組と二組合併で大講堂に集つて、講義を聞いて居られたですが、何せ四百人からの人數ですから後の方の女學生は、講師の聲もろくには聞こえず、黑板の文字もよく見えぬ爲、お互に怠屈まぎらしの雜談や、何かで貴重な一時間を過ごしたのを見て深く笑止に思ひました。增して裁縫學校などになりますと、生徒の學力など一向かまわずして、入學さする傾がありますから有益な講義でも、これを理解し得る人ばかりでない爲、敎育上何の利益もなく、却て時間を空費するの惡習慣をつける事があるやうです。夫れのみならば、まだしも取處がありますが、かゝる有樣からして比較的學問に熱心で、技術を學ぶに忠實な、勤勉者は人を押のけても前に進み、敎師に接近して十分に講義を聞かうとするのですから、自然生存の競爭がはげしく、謙遜の德を守つたり、己の欲する所を人に施したりはかりして居ては、まるで學問も藝術も進歩せぬわけですから、學術技藝の敎育が、不十分であるのみならず、敎育上第一に必要な人格を高めるとか、婦德を養ふとかいふ事は全く出來ぬ次第です。世の荒い波風にまだ揉まれぬ、風俗の厚い地方の質朴な女學生が、暖かい親の膝元を離れて、かゝるあさましい風俗の女學校にはいりましたなら、初めは驚きあきれてつまはじきもしましようが、朱に交れば赤くなる道理、遂に

は悪いともをかしいとも思はず、これを當然として、自分からする事を恥ぢぬやうな事にまでなりますから、その品性を損ひ、その婦徳を害する事はどれほどか分りませぬ。假令田舎で學び得ない立派な技術を學び得たと致しても、その技術を使用すべき肝心の精神が、悪習慣になれて鈍くなり、人格を落し德義を傷けたならば、わざ〳〵莫大な學資を費して、都に遊學して何の益がありましよう。獨り益のないのみならず、一身一家の非常な損害で、大きく申せば國家の大不利益であるのですから、學校の選擇は十分鄭重にせねばならぬのです。終りに一言申上ておきたいのは地方から上京した女學生が、入學すべき適當な女學校を見出し得ぬ爲、間に合せるといふ考で評判のよくないのもかまはず、不十分など知りながら、よくない女學校に假に入學する事です。一度不規律なる所にはいりますと、他日よき學校へ入學しても、不規律な悪習慣がついて十分よい結果が得られず、又その規律正しいのが苦しく感せられて遂に成業せざる事が往々あるものですから實に謹しむべき事です。

人生の洗濯日

停春

花が咲くに就け、紅葉が散るに就け、造化は何時も、極めて婉曲に、而も極めて嚴肅な意義の教訓を人の耳邊で私語かないと云ふことはないが、殊に新年の狂賀を歡迎する歳の端に立つては、莊嚴且沈痛な無言の大說教をし、新年の來着を報ずる曉の警鐘に和して、答へよや人の子、人生の新たなる一頁は又も開かれしぞ、汝はこゝに汝の韓紅なる血汐を以て汝の事業を大書せざるべからずと響くかと思ふと、又一面では、哀れなる人の子よ、汝が百年の一頁は又もや落ちたるぞ、汝は汝の新に翻したる一頁若くは其以前に翻したる數頁乃至數十頁を白紙にて翻へしたることはなきやと鳴るかとも聞こえ、或は更に汝が前途の事業を筆記する爲め殘されたる汝の餘白の猶幾頁あるかを計へよと告するかとも聽かれる。其說教は、聽く人の心次第で、千萬無量の意義に聞えるのであるが、詰る所、汝の既往を改めて汝の新たなる生命に就けと云ふ一語に歸着するらし

い。して見れば、新年は人生の洗濯日とでも謂ふべきであらう歟。

其處で新年が果して人生の洗濯日でありとすれば、人たるものは、所謂洗濯日の洗濯日たる所以を實にして、我も人も心の洗濯をし、身の洗濯をし、樂みの洗濯をし、禮儀の洗濯をし、元氣の洗濯をし、勞働の洗濯をし、將た夫婦の間では愛情の洗濯をし、親子兄弟の間では親みの洗濯をし、友に對しては交誼の洗濯をすると云ふ工合にして、斯に新らしい豫算を定めて、此の新らしい一年の旅路に上るが、則ち實に新年に處する道の本意であらうと思はれる。現に昔の人も此日を歌ふに「願くは梅花と倶に自ら新にせむ」と云ふた。自ら新にするとは、取りも直さず人生の洗濯をすると云ふことである。

而して所謂人生の洗濯には、何處で何う云ふ工合にするかと云ふに、先づ家庭が其洗濯場であるのである。新年は家庭の時代で、天下の事は家庭の事に成り、天下の人は皆家庭の人に成る。一國の政治家も此の日は家長に成り、忙しい實業家も此の日は亭主に成り、文人も、學者も、宗教家も、教育家も、軍人も、其他の人も、此の日は家庭の人に成り、一國の元首と雖、此の日は一國の元首たる資格を以て政治的に世に臨まず、王室の主、民族の族長と云ふ資格で、言換れば民の父母と云ふので、家庭的に、乃至社交的に、君臣の禮を洗濯し、或は其赤子に對する親みを洗濯するのであるらしく察せられる。

して其洗濯の仕方と云へば、其れは言ふまでもなく多端であるが、既往の不足を一洗して、新らしく生命を得ると云ふ大精神から割り出せば、必ず中らないといふとも遠くはないのである。今手近な一二例を擧ると、小出粲氏の歌に、

むかへつる今朝の心のまゝなれば
いかに樂しきことしならまし

と云ふのがあるが、此は明に新年と共に樂みの洗濯が出來得ることを歌ひ、若し其洗濯し上げた樂みを汚すことがなく維持すれば、則ち同年多幸な、生活をなし得ることを示したもので、よい戒めの歌である。新年と云つても、何も別に大晦日に變つた日が出ると云ふではない、唯樂しいと思ふが樂しいので、何となく氣がの

びやかに成り、昨日の我身とは生れ變つた樣に思ふが、即ち樂みの洗濯が出來る證據で、此の日の心だに失はなければ、年中樂みに盈ちて過ごすことも出來るのである。

また例へば、餘りに世帶じみて聊か鼻につく細君も、今日が新年だと云ふので、眉を掃ひ、衣紋を整へ、改めて良人の前に年のことほぎごとを陳べる場合に、我が妻ながら見かはすばかり美くしく見へ、又其改まつた所に威儀も見えて、自づと家庭の禮儀も洗濯され、今更の如くに新婚の當時が、憶ひ出されて、夫婦の愛情も斯に洗濯されると云ふは、是れ人情の常である。此の道理を會得して、十分に人生の洗濯日たる新年を活用するのは、宜しく人の心掛くべき事であらうと思ふ。

夫婦の間で然るばかりでなく、年中用のない親類も、一年に一度の年賀狀で親みの洗濯がされる者であり、時には互に不快な感情を懷いたことのある友も、昨日の鬼が禮に來て、同く交誼の洗濯がされる例しもある。此等の事から考へて見れば、年玉の取り遣りや、年賀狀の交換なども、全く之を虛禮として斥ける譯には參らない。否、むしろ年玉にも、年賀狀にも、多少の趣向を凝らし、同くならば、受取る人を喜ばせて、所謂洗濯の效果を多大にするのが必要である。

要するに、新年の慣習を利用し、若くは新年に對する人の感情を利用して、以て人生を洗濯をする方法は、固より一二ではない。所で何れにしても之が洗濯塲は家庭であるから、家庭の主宰者たる主婦は、大に工夫をなし、家庭の全員に、心の洗濯をし、身の洗濯をし、樂みの洗濯をし、禮儀の洗濯をし、元氣の洗濯、勞働の洗濯等をする便宜を與へ、家庭と家庭との關係を洗濯する手段をも盡さなければ成らないのである。中には、家庭の經濟を洗濯して、冗費を省き、堅實な基礎の上へ家庭を立てる爲め、家計豫算を調成して、之を嚴守することや、家庭の風儀を洗濯して、秩序があり、活動があり、和樂があり、敬虔がある家風を作ることもや、家庭の交際を洗濯して、親族故舊の親みを厚くすることや、差寄りは新年其物を十分に樂しく且つ有益に過ごす方法を案ずることなどは、特に主婦たるものに在りて意を用ひ、一年の計は元日に在ると云ふ其新年に於て、首として好い慣例を開くべきである。



新橋停車場の光景

THE "JOGAKU SEKAI" ENGLISH COLUMNS.

Conducted by ISOH YAMAGATA.

女學世界英語欄

山縣五十雄擔當

THE GREATEST WOMAN.

Some time ago an old but interesting question was put to the members of a ladics' society in America, and a prize was offered to the lady, who wonld give a correct answer. It was: "Who is the greatest woman in history?" Various answers were given, naming women celebrated in history. Yet the prize answer held the name of none of these. This is the way it read:

"The wife of a man of moderate means, who does her own cooking, washing and ironing, brings up a large family of girls and boys to be useful members of society, and finds time for her own intellectual and moral improvement, is the greatest woman in all our history."

I commend the above to the serious thinking of my fair readers.

最大の婦人

先達て陳腐ながら面白い一問題が米國の婦人協會會員に呈出せられ正解者には賞品を與へる事となりました．それは「有史以來最大の婦人とは誰ぞや」といふので．種々の答解は歷史に名高い婦人の名を擧げて寄せられましたが．しかし正しき答解は是等婦人の誰をも擧げては居ませんでした．その答に曰ふ

「中等の收入ある人の妻となりて料理洗濯火熨斗を自らし多勢の子女を養育して社會に有用の人となし又己れの智を研き德を進むるの餘暇を見出す女こそ有史以來最大の婦人なれ」と

私は以上の答を讀者諸孃に薦めて御熟慮を願ひたいと思ひます．

DOMESTIC STRATEGY.

At a certain meeting the other day, I heard two men talking. The younger man complained that he could not get his wife to mend his clothes. "I asked her to sew a button on this vest last night, and she hasn't touched it," he said. At this the older man looked wise and said, "Never ask a woman to mend anything."

"What would you have me do?" asked the other.

夫の計略

先日ある集會で私は二人の男が話してゐるのを立聞きましたが．若い方の人はどうも妻がいくら言つても衣服の破綻(ほころび)を直してくれないとこぼして居るのです「現に昨晩も此チョッキにボタンをつけてくれと言つたのに妻はそれを手にもとらない」と言ふと老(ふ)けた方はしたり顔して．「君．女に物を繕つてくれなんて頼んぢやいかんよ」

「どうしろと言んだ」

"Simply do as I do," was the assured reply. "You haven't been married very long, and I think I can give you some practical advice. When I want a shirt mended I take it to my wife, flourish it round a little and say, 'Where's that rag-bag?'

"'What do you want of the rag-bag?' asks my wife. Her suspicions are roused at once.

"'I want to throw this thirt away; it's worn out,' I say, with a few more flourishes.

"'Let me see that shirt,' my wife says then. 'Now, my dear, hand it to me at once.'

"Of course I pass it over, and she examines it. 'Why,' she is sure to say, 'I never knew such extravagance! This is a perfectly good shirt. All it needs is——.' And then she mends it."

「僕の言ふ通りにするのさ」と斷乎として答へて「君は結婚してからまだ間がないのだから僕の方が實用的の忠告を呈し得られると思ふよ．僕がシャツを繕つてほしい時はそれを妻の所へ持つて往つてね．暫くそれを振廻すんだそしてボロ籠は何處だと問ふのさ．

「ボロ籠に何御用です」とおいでなさるね．先生さてはと思ふのさ．

「このシャツを抛込むのさ．このシャツはもう古くなつて着られない」と又もやそれを振廻しながら言ふと．

「どれお見せなさいあなた此方へお出しなさいつてば」

勿論僕は渡してやるさ．すると先生それを檢べてみて「あら贅澤つちやありやあしない．これはまだどうも成つちやゐないぢやありませんかこれはあの——」で早速繕つてくれるのさ．

CONVERSATION.

THE NEW YEAR'S DAY.

Hana-ko: Good mo ning, Yuki-ko San, I wish you a happy New Year.

Yuki-ko: The same to you, my dear Hana-ko San, and I hope you will continue to befriend me as of old.

Hana-ko: That's exactly what I hope you will do to me. Really I can hardly thank you enough for all the favours you bestowed upon me during last year.

Yuki-ko: You are far too complimentary. But now having exchanged compliments of the season, let's talk less formally.

會話

新年

花子．　お早う雪子さん．明けましてお芽目出たう．

雪子．　お芽出たう．花子さん．相變らずお心易くお願ひ申します．

花子．　私こそお願ひ申します．舊年はいろいろお世話になりまして御禮は詞にも盡しかねます．

雪子．　あんな事を仰有つて．それはさうともう新年の御祝儀がすみましたから固苦しい御挨拶はよそうぢやありませんか

Hana-ko: (smiling) Yes, that's right, my dear. It is rather funny that people look quite serious and talk solemnly on this particular day, isn't it?

花子.(莞爾して) ほんとうにさうね.雪子さん.皆さんが今日に限つて眞面目(まじめ)になつて固苦しい事を言合つてるのはをかしいわねえ.

Yuki-ko: Quite so, I could not help laughing outright this very morning when Onabe, my maid servant, greeted me with a most formal "I wish you a happy New Year, Miss Yuki-ko." You see she is such a rude woman at other times.

雪子. ほんとうね.私は今朝お腹を抱へて笑つたのよ.女中のお鍋が改まつて「お孃樣.明けましてお芽出たうございます」と申すのですもの.いつもはあんなに不作法な癖に.

Hana-ko: But I know she is at heart a good woman. She simply adores you and if she behaves rather rudely, it is not of course intentional.

花子. でもあの人は氣質(きだて)がいゝやうですわね.もうもう貴孃(あなた)の事をほめちぎつて居りますわ.不作法だつて態とするのぢやありませんわね.

Yuki-ko: That's true. She is very good to me and I love her dearly. Only she is an awful chatterbox. I never saw her remaining silent. The other day my brother made us nearly die a-laughing by alluding to her talkativeness.

雪子. そりやほんとうよ.私にはもう深切にしてくれますわですから私も可愛がつてやるの.只ね恐ろしい饒舌女(おしやべり)でいつだつて默つてた事はないわ.先日も兄からお鍋の饒舌の話を聞いて顚倒(ひつくりかへつて)笑つたのよ.

Hana-ko: Indeed, how did he make you laugh so?

花子. どうして?

Yuki-ko: He wanted us answer the question: "On what day of the year does Onabe talk least?" We thought much, but gave up at least.

雪子. 「一年中お鍋が一番お饒舌をしないのは何時だか言つて御覽」と兄が問題を出したの.で皆で隨分考へたけれどとうとう答が出來なかつたの.

Hana-ko: Well?

花子. それから

Yuki-ko: And when we asked him to give his answer, he said: "Why, on the shortest day of the year!"

雪子. で.兄樣の答はと聞くと兄の申すにはね.「一年中一番日の短い時ぢやないか」だつて.

Hana-ko: O ho! ho! ho! How funny!

花子. お.ほ.ほ.ほ.おかしい事.

Yuki-ko: But are you not going to school to be present at New Year's ceremonies? If so, I shall accompany you.

雪子. それはさうとあなたは新年式に學校へいらつしやらないの.往らつしやるならお伴致しませう.

Hana-ko: Very well, let us go then.

花子. さう.ぢや參りませう.



伊東中將夫人社交談

中村鈴子

夫人マリー、フラバーズは佛國巴里に生れ、今より十七年前妙齡(十八歳)の身を以て八重の汐路を渡り、遙々と今の海軍中將伊東義五郎氏に來嫁されました。人と爲り優雅誠實、良人と琴瑟頗る相和し、四女一男を擧げられたので、家庭敎育の健全精到なるは申すまでも無く、一昨年まで壽を保たれし姑君には特に忠實に事へられ、起臥の介抱を人手に委ねず、十年一日の如く孝養を盡されたのは、知人の誰もが歎美する所であります。夫人は婚嫁の初より我邦婦人に親交を求めらるゝと熱心で、特に赤十字社、愛國婦人會などの會務には一身を獻げて働かれつゝあり、實に彼國の長所と我國の美質を兼備せられた御方と申して宜しいので御坐います。記者が霞町の御邸に夫人を訪問致したのは、黄に紅に染まつた梢から霜の朝日に滴る十一月末でありましたが、薄草色の西洋門を入り、錦を織り成せる楓樹四五株と、野茨の纏へる瀟洒な枝折戸を左に見て、三十三珊彈一個を置かれた御玄關に刺を通じ、早速應接室へ案内されましたが、此室は數多き和洋の美術品を以て巧妙に裝飾されてある中に、最も目を引くのは、ピアノの後側に覆はれたる寺院打敷の金襴、愛兒の肖像臺に掛けられたる紋散らしの錦、古代佛國

人の描いた油畫肖像、精巧なる象牙彫刻品、水仙を挿める七寶の花瓶、其他一々數へ切れませんが、彼我の粹を集めて來客を喜ばしむるは、夫人の趣味豊富なるを證據立て、此處に置かれ彼處に挿まれたる內外知人の寫眞は、社交に練達せらるゝ夫人の行徑を想はしむるのであります。軈て向手の扉を推開いて出で迎はれたる夫人は、中肉にして丈高く愛のこもれる明眸、威の備れる秀眉、締つた口元など、希臘の女神像を其儘と思はるゝ風姿、房々とした眞髮(金髮でなく)は薔薇の如き雙頰を引き立せるので、紫紺色天鵞絨の洋服長裳をサラリと引かれ、靴音徐かに歩み寄られし御物腰は、天の使かと存じられたのです。夫人の日本語は極上品で、淀みなく訛りなくスラ〳〵して居る上に、表情を惜まぬ眞率な話調で、記者の唐突な質問を一々叮嚀に應答されました。

▲橫須賀へ御出張

海軍の傷病兵の爲めに、御用を致したいと存じて、昨年の七月から橫須賀の方へ出向きましたが、其頃は未だ歸航された人も少う御座いまして、格別勤務も無いやうで御座いましたから、東京の方の繃帶巻でも御手傳ひ致したいと存じましたところ、地方からの通ひは橫濱が限りであるとの事で、勤務も出來兼ました。其頃鍋島侯爵夫人と花房男爵夫人が橫須賀へ御越しに爲り、傷病兵の帽子が不足であると云ふ御話を伺ひましたので、司令長官(井上大將)の夫人と御相談して、帽子など縫ふて居りました內、追々傷病兵も歸られて御用もある樣に爲り、ズット滯在致して今年九月に此家へ歸つて參りました。ハイ愛國婦人會の方も評議員に加はつて居ります。イヱ御役には立ちませんが、日本の爲に一生懸命に働きたい精神で御座います。

▲日本語の稽古

私は十八歳で此家に嫁に參りましたが、言葉には實に困りました。尤も良人とは佛蘭西語で話しますし、實母も五年ほど日本へ一緒に參つて居りましたから、家の內だけは別に不自由もありませんでしたが、日本へ參つた以上は、何卒日本の御方と親しく御交際を結

びたいと存じ、言葉の稽古の爲めに教師を頼みましたところ、其人はタ、、カ、、と申す彼の吃りで御座いまして、良人は不在であり、私は何も存ぜぬゆゑ、正直に此人の言葉を習はうと致しましたが、如何も難かしくて／＼イクラ稽古しても眞似が出來ませんでしたから、二箇月ばかりで止めました。それで私は生涯日本語を習ひますまいと諦めましたが、後に吃の教師であると判つて、難かしかつたのも道理と可笑しう御座いました。それから子供の守に雇ふた婦人は教育も相應にある者でしたが、これと話しを致すので、五六個月の間に大層慣れました。畢竟五年程の間、耳から頭脳に蓄へて置いた言葉が、一時に働いたものと見えます。



▲丸髷で日本服

西郷さん（故從道侯）の奥様、樺山、川村、仁禮、井上さんの奥様方とは、以前から御懇意に願ひまして、特に西郷さんの奥様には、嫁入の際から一通りならぬ御世話樣になり、本當に親類も及ばぬほど御懇意に願つて居ります。最初の内は士官の奥様方を訪問致しても、御病氣だとか、

御不在だとか仰しやつて斷りなさる方がよく御座いましたか、內實は日本室へ御座らせ申すのが、御氣の毒で御斷りしたなぞと云ふことを聞きましたから、私も折角日本の御婦人方と御交際致したいと望むのに、それでは遺憾な次第と考へまして、それから日本の服を着初めました。ハイ日本の服を着初めました時は、小紋の紋付を拵へて、井上さんの奧樣と鮫島さんへ上りました。其後髮も丸髷に結んで見やうかと存じ、西鄕の奧樣に御相談致すと、見つともないでせうと御心配なさいました。それで私は內所で一度試して見やうと存じ、水油を付けて結つて見ました處、家の者は善く似合ふと申しました。ハイ髢なしでは直ぐに毀れるさうですから、少しばかり入れましたが、髮が長う御座いますから、大きな丸髷が出來ました。其後西鄕の奧樣が御病氣で赤十字社へ御入院中、丸髷に結んで頭巾を被つて參りましたが、玄關を通つて行きますと、向ふから西鄕さん(從道侯)が出て來られました。ソコで私は御挨拶申し上げましたが、知らぬ婦人と思召して、不思議な御顏を遊ばして居らつしやるので御座います、私が頭巾を取つても未だ御分りになりません、私が「伊東で御座いますよ」と申し上げたので、初めて御心付かれて、「ヤア實に見違へた」と御笑でした。それから伊東大將の御招待に預つて良人と一緒に紅葉館へ參りました處、女中なぞ少しも心付かぬ樣子で御座いまして、或方が良人に向つて「御連れの婦人は何方ですか」と御尋ねになつた位でした。ハイ日本服に厚板の帶でも、少しも心持が惡くは御座いませんし、髷も決して頭の具合が惡くありません。履物は三枚合せの草履で、チヤンと坐つて日本料理を頂きました。其折の年で御座いますか、丁度二十二三の頃であつたと存じます。

▲食物

良人も洋食が好きでありますから、大抵洋食を主に致して居りますが、時として日本食を望まれる際には、私も矢張り一緒に頂きます。米の御飯も好きで御座いますし、大抵の御料理は頂きますが、唯だ魚軒と餡

ばかりは、最初から今以て如何しても食られません。鰻は佛蘭西にも御座いますが、料理の仕方が日本と異ひまして、大抵切身にして葡萄酒で煮るので御座ます。

▲日本人の洋裝

近頃は皆樣の洋服の召しやうが御巧者になられまして御座ます。これも一寸面倒なものでありまして、日本在來の肌着や筒袖襦袢を下に着ますと、上着の洋服が不格好になりますから、下着の注意が大切だと存じます、佛蘭西では、子供の内からコーセットを着けますが、小さい内は、麻で軟かに作つた物を用ひ、漸々成長するに随つて堅く致します。これを始終用ひて居ると、自然胸部が擴張して、體格が宜しくなるやうで御座います。洋裝の事に就ては何れ後日詳しく申上げませう。



▲日本婦人の體格

上流の令嬢方は、小さい時から襦珍の帶を締め、平常でも整然と帶を結ばれるので、胸部を壓迫して、幾分か踞み加減な體格になられはせぬかと存じます。而して下等社會の娘達は、軟かな木綿の帶を締めて居るから、令嬢方とは如何も格好が異うやう

に思はれます。殊に田舍の婦人は、細い帶をグル〳〵巻いて居たり、緩かに衣服を着て居たりする故か、胸部が令孃方に較べると、餘程廣い樣ぢや御座いませんか。骨の軟かな内に堅い帶を占めるのは、身體の發育に害があるかと存じます。

▲御息女の敎育

當年十六歳になりまする長女は、小さい時分チヨツト神田猿樂町の佛和女學校へ遣しましたが、良人が佛國公使館附となつて、彼國へ參りまして四年間滯在致した間彼國の學校へ遣しました、左樣娘が七歳の時に參つたので御座います。保姆は前申し上げた日本婦人で、十二年も子供の世話を任せたので御座いました。娘は小さい頃から日本語は用つて居ましたけれども、十一歳になつて彼國から歸つたものを、日本の小學校へ出したところで、中途からでは覺えるのに困難でもあり、又十一歳の者を六七歳の子と同じクラスに入れても不愉快を感ずるだらうと存じ、築地の女學校へ入れました。彼の學校は日本の學課も少しは雜つて居りますから、丁度兼ねさせるに都合が宜しいのです。併し學校で兩方學ばせると何樣も學力に不釣合の點もありますから、午前だけ學校で佛蘭西の學課を修めさせ、午後は宅から早川光子さんの御家へ遣はせて、日本の地理、歴史、文章などを習はせて居ります、音樂は一週に一度づゝ幸田さん(延子女史)を招いて御敎授を願つて居りますので、繪畫は最初日本繪の先生に頼みましたが、緻密な洋畫を先に學んで後に日本畫に移つた方が順序が宜からうと良人が申しましたので、此頃は佛蘭西の方に頼んで居ります。

此時夫人の命に應じて佛英和辭典を持ち來られし令孃は、海老茶の洋服に丈なす鬒髪を結び、美しい眼元に笑を湛えて記者に一禮され、續いて三人の妹君、一人の弟君も此室に來られて、靜かに睦しく母君の側に侍べられし樣、奥床しく見受けました。夫人は記者の言葉に就て、時々佛英和辭典を閲されつゝ話されたので御座います。

▲令孃に就ての注意

年頃の娘を監督するに就て、佛蘭西は特に嚴重でありまして學校卒業までは殆ど社會の雑談を耳に入れさせぬやうに注意致すので、演劇なぞ如何に高尚な脚本でも大抵戀愛を含みますから、堅い家では決して娘に見せません。親しい來客の中でも、子供の耳に觸れて惡い話をする人の側へは出さず、又親が連れて行く知己の家でも、男女の關係を話さぬ處ばかり擇ぶと云ふ具合で、却々嚴重に注意致します。大概十八歳で學校を卒業致すので、交際社會へ出すのは其後でありますが、一人だけでは勿論の事、お友達同士ばかりでは、決して出さぬ風習であります。



▲佛國生活費と獨身

斯様に處女を嚴重に取締るのは、佛蘭西婦人の獨身で世を渡る者が隨分あるからで、其境遇になつた際には、男女の關係を頭腦へ入れて置かぬ方が安全であると云ふ方針もあるのでせう。佛蘭西でも生活費が膨脹するに連れて、結婚が難かしくなりまして、士官などは三萬法の持參金を有たない婦人とは結婚が出來ない事になりました。

▲小兒の質問に就て

成べく男女に關した談話を聽かせぬ様に致しても、子供は研究的精神の盛んなものですから、種々な質問

を致しますが、何處でもよく質問致すのは子供の生れる事であります。佛蘭西では小さい子供に『世界の物は總て神が造るので、吾々人間も神樣に造られたものであります、神樣はキャベツの中へ其造られた赤子を入れて置かれるのを、赤子の欲しい家で善さそうなキャベツを見立てゝ買つて參り、產婆や看護婦がキャベツの皮を剝いて出します』と話し聽かせるのですが、それでは何故母親さんが床に臥して居られるかと質問の出るともありますので『風邪を引いて居るとか、又は赤子が病氣ゆゑ介抱して寢て居るとか申して置くのです。何でも神の奇蹟を基として言ひ聞かせますから、年頃になるまでも此點は極曖昧な者で御座いまして、堅い家の令孃なぞは、結婚の時まで何も知らぬ者が往往あるのです。而して御嫁入りの前晚に母親が大體の話を聞かせ、婿君の言ひ付けは何に寄らず背くなと云ふやうに敎えます。

▲小兒の賞罰

何でも神樣の敎を基礎として申し聞かせますので、善く敎を守れば天國へ昇ることが出來、背けば地獄へ落ちると云ふとを聞かせます。クリスマスの前夜に新らしい靴をストーブの前へ列べて置き、善い子供には神樣が此靴の中へ良い物を入て下さると言ひ聞かせ、玩具などを入れて置きますと子供は本當に神樣からの賜と思ひまして、クリスマスを一年中第一の樂みとして居るのです。子供が神樣は何處に居るかと質問致すと『神樣は貴く大きなもので、吾々の眼には見えないが、何處にでも在まさぬこと無く、而して始終汝達を守つて下さるから、汝達は一人で何樣な處に居ても、決して恐いことは無いと敎へます。斯う云ふ話が頭腦に沁み込んで居りますので、子供に臆病と云ふとは御座いません。

▲蓄妾に就て

宅の子供に學ばせて居る日本歷史の敎科書中に、誰誰の妾と云ふ文字がありますが、子供が妾と云ふのは如何いふ者かと質問致すと、チョット說明に困ります。尤も佛蘭西などでも、醜い事をする人イクラもありま

すけれども、極々秘密にしてありますから、妾といふ名闕は書物の上にも談話の上にも子供の耳目に觸れないのです。私は素より大の日本好きで、十七歳から十八個年も此地に住つて御交際も追々厚くなるに隨ひ、御婦人方の貞淑の德は敬慕致すので御座いますが、これと同時に御氣の毒でならぬ點をも感じました。それは御夫婦中の睦じいのに、兩親との折合が惡いばかりで悲しい離婚をせられる事と、良人が妾を置いて、貞淑な奥さんを虐待する事とで御座います。西洋の婦人の事と較べて觀ますと、實に御氣の毒で、今少し御婦



人方が氣力を御出しなさらなければと存じます。佛蘭西でも、前申す通り隱し女を持つ人がありますけれども、イクラ下等社會でも妾と情婦とを同棲させることは決して無いのです。若しも下等社會で良人が關係の女を連れて來た時は、一時間經たぬ内に攫み合つて髪の毛を搔り取り、其女を家の外へ逐出して了ひます。總て彼地の婦人は、良人の不品行を知つたが最後、直ぐに夫婦の交際を斷つて、雇人などの前で用談だけは致しますけれども、差し向ひになれば、一言も口を利きません、大概は直ぐに離別を申し

出て實家へ歸り、子供は裁判所の判決の日から、父より養育費を貰つて母に引き取られるのです。而して妾腹の子を妻の側で育てる事なぞ、無論ないので御座います。土地變れば風習も違うのは當然と申すものゝ、妻君の心情の煩悶は異るものでは御座いますまい。日本の御婦人の忍耐謙遜の美德は誠に感服致しますが、此愛すべき御婦人の爲めに、何卒男子方の御注意を願ひたいものと、始終ひそかに熱望致して居ります。

▲葬儀に就て

一生の訣別の悲しさは、何處も同じでありますが、西洋人は總て情を隱す事を致さぬ故か、多勢の前でも構はず、泣くので御座います。葬りの式は風こそ變りますが似寄つたもので、通夜の折、死者の側で飲食なぞは申す迄もなく、話し聲も立てず、極靜肅に聖書を誦するので御座います。日本では、通夜の際、酒を飲み冗談を言ひ交はして、家族の悲しみを紛らすとか、埋葬の際笑ひさゝめきながら棺側に随いて歩くと聞きましたが、私は信じません。尤も極無敎育の社會には如何か知りませんが、普通の良家で、悲哀の絶頂に在る家族の前で、笑ひ興じたり、恣に飲食したり、左樣な事が出來る理由がないぢや御座いませんか。若し左樣な事が御座いますならば、死者の側に集まる者は、眞情のない知己と申しても宜しいでせう。

▲武士的悲哀

私が未だ日本の事情に通じませぬ際、不幸のあつた家へ御悔みに上つて、其家族の方が涙も見せず、時として笑ひ顏で挨拶なさるのを如何にも奇異に感じたので、良人や子に別れても悲しまれぬのかと考へました。これは西洋婦人が何人の前でも心一ぱいの歎を表すのに較べて、宛然人形のやうだと思つたのです。所が漸々内情が解かりまして、日本婦人は非常に辛抱強くて、心に泣いても眼に泣かぬと云ふ眞の武士風の貴い點を有つて居られる事を悟りました。近い例では、乃木大將の御令息の事で、如何に國家の爲とは申しながら、大切な御子息を兩人まで失はれた親御樣の御歎は耐るまいと存じた處、親御は衆人の前で少しも悲しい御顏

を見せられなかつたと聞き、其忍耐の御強い事に驚きました。斯樣な武士魂が一般の人に在ればこそ、今度の大戰にて全勝を得られた事と感歎致して居るので御座います。

關夫人勤儉尙武談

婦人記者

大久保利通、坂本龍馬、後藤象次郎其他の偉人豪傑と刎頸の交を結び、勤王家を以て世に聞え、維新後就官して宮城縣控訴院檢事長と爲り、高等法院陪審官と爲り、鳥取縣令と爲り、德島縣知事と爲り、山形縣知事と爲りて治績の擧りたる關義臣氏、今は貴族院議員と爲つて居られますが、夫人村子は茨城縣士族久米遊歌氏の妹君で、嚴格な武士的敎育の家庭に生長せられ、此處に鍛へ上げられたる大和魂は丈夫を耻ぢしめらるるばかり、弱者に厚き同情の淚を灑がるゝは、日本婦人の典型と申して宜しいので御座います。記者は龍駕勢南に行幸あらせられました翌日、麻布一本松に高き生垣を繞らせる御邸へ訪問致しましたが、空色西洋門の兩側は杉、檜、椿、高野槇などが、枝を交へて廣く小高く位置を占めて、梧桐の落葉二つ三つ其間に亂點し、中央の少し黃ばんだ芝生に幾株の小松の叢を成せるは、却々に興趣がありました。大きい扉を開いて導かれし洋風應接室は坂本、後藤、高杉、大久保諸豪が少壯時代結髮帶刀のチョーク畫肖像を四壁に高く揭げられて、往年の壯圖を忍ばしめ、書棚に積まれたる和漢洋の雜書は、宛然小圖書館の觀あり、ストーブ棚の置物は、石膏の少女、銅製の馬、陶製の雀など位置よく列び、鉢植の蘭は幽香を室に滿せつゝあつたので御座います。軈て出て來られた夫人は、藍微塵の紬小袖に三紋附黑魚子の羽織を召され、丈のスラリと高い眼眸に威のある上品な御風姿、寒暄の御挨拶も叮嚀に濟まされて後、私など昔話しばかりでと談緒を開かれました。

▲變れば變るもの

私は本年四十八歳で、六人の女兒と三人の男子の親で御座いますが、亡した子供を加へますと、十一人の子を擧げましたので、最早孫もあるお婆さんで御座います。今少しで五つ昔を過すのですが、實に變れば變つたものだと存じますヿ。極嬉しい事と極悲しい事だけは、五歳位の折の事も覺えて居るもので、御承知の通り國家の革命とも申すべき時に育ちました事ですから、親子水盃を致して別れたり、又無事に再會致したりなぞ、樣々な事に出遭つて參りました。父は水戸の藩士で、國元へ參つたり、東京に居つたり致したので、邸は丸ノ内の唯今中山侯爵の御邸のある處に御座いましたが、彼の櫻田御門の騷動の折なぞ、丁度御雛樣を飾つて樂んで居た最中で、驚いた事なぞ今に能く覺えて居ります。尤も父は開國主義の人で、日本は何時までも斯うしては居られぬ、必ず外國と通商貿易を開かねばならないと申して居りましたが、其頃英國人が一分金や二分金を袋へ入れて澤山持ち去つたなぞと騷ぎ立てる者のあるのを見る毎に、何でも用心堅固にして貿易すれば決して心配は無く、國運を盛にすることが出來ると諭す位でした。矢張り浪士と同じ水戸藩でありますから、心苦しい場合も御座いましたやうです。長州征伐を始めとして、上野の戰爭まで、一段落濟むかと思へば、又々と云ふ塩梅で、安い心もありませんでしたが、唯今から考へますれば、夢のやうで御座いますヿ。私の生立ちます頃、各藩武士の家庭は、迚も今日のやうに氣樂な次第には參りませんでして、親々からも始終變に處する覺悟ばかり言ひ聞かされて居りましたから、子供心も自然大人びて居りました。唯今は宅の娘共が何時までも幼稚氣が脫けないと存じますが、それだけ世の有樣が變化致したので御座いませう。

▲夫人殿君の訓誡

丸ノ内に住居ました藩士の家族は、實に窮屈なものでありました。氣儘に物見遊山に外出なぞ致せば、閉門と云ふ罰を受けますから、家にばかり小さくなつて居りまして、江戸に住みながら江戸知らずに暮したの

ですが、婦人は斯う云ふものと思つて居りましたから、別に辛いとも存じなかつたのです。前申上げた通り、世の穩かならぬ際ですから父から始終心の固め方を申し聞かされて居りましたには『是れまでは日本國内の小さな爭鬪だけで濟んだが是れからは海外の諸强國を敵手とする塲合が隨分あるだらう、小國の日本が大國を敵手とするには、大和魂を磨かなければならぬ。其大和魂には男女の差別は無い、婦人の柔弱浮華となつたのは德川時代からの事で畏くも天照大神、神功皇后を始め奉り、烈女名婦の大和魂は歴史上に數へ切れぬ程ある。女子は何でも我國上古、中古の氣風を持ちて、國家大事と云ふ觀念を片時も忘れてはならぬ、イザと云ふ曉には、女ながらも相應の働きをして大君に盡すが宜い』と善く申して居りました。



▲重代の寶と勤儉

御承知でも御座いませうが、鎧の一番下に鎖編の肌衣を着けますが、萬一の用意に、此肌衣へ一分金や二分金を編み付けて置き、平常鎧櫃へ整然と藏つてありまして、出すのは虫干の時ばかりです。是れは如何ほど家計に窮しても手を付けませんで、代々子孫へ讓る寶物と致すのが堅い武家の風習でありましたから、父も斯う云ふ事に深く注意致し、國に事ある時は、如何に大和魂があつても兵卒が

澤山なければならず、兵卒を集めるには兵糧が基で、兵糧を備へるには軍資、先立つものは金である、次に大切なのは名刀で、柄は小倉で巻いても、中身は百兩ぐらゐの物を持たなければならぬ」と申して居りました。其の頃の百兩はチヨット唯今の千圓位にも當りませうから、隨分刀には金をかけたので御座います。併し餘裕のある家計ではありませんから、平常の儉約は非常なもので、衣類は絹布を用ゐないのは申す迄もなく、三食とても粗末なもので何時も『兵糧に窮した際には、馬蹄で踏んだ物でも食べなければならぬ」と云ふ心掛で居りました、重代の寶物と申すものは、唯今考へると馬鹿氣たやうな次第で、櫃の底に藏つて置く金があるなら、有益の事に活用した方が宜いのは至當の論でありませう。併しながら先祖の物を重んじて、子孫に遺すと云ふのは、家を堅固にする礎で一家が堅固であれば、一國も堅固と云ふ道理から考へますと、是れも一つの美風かと存じます。

▲地方人の堅志

勤儉で祖先の遺物を重んずるのは、地方の人殊に農民の長所で、却々感心する事が御座います。良人で德島縣の知事を致して居る時分、衛生會を奨勵致したいと存じ、僻地の農民達にも其趣意を説き聽かせましたが、素より衛生思想なぞの無い人達ですから、僅かな會費でも難かしいので、一個月五錢どころぢやありません、一錢でも首を捻つて考へるのです。それが如何いふ家かと申すと、不動産の可なり有る家で御座いますよ。都會の人が聞くと嘘のやうですが、實際の事情を知ると無理もないと存ずるのです。私は或農家へ出向いて八十歳ばかりの老婆から話を聞きますと、斯う申しました『御承知の通り田地はありましても、取り入れた米穀を賣拂つた金は、地租や地方税や地價割や戸數割を納め、肥料を買ひ農具を買ひ、田畑を少しづつ殖す資本に使ふので、家に少しの餘金も御座いません年暮には、新らしい手拭を一筋づゝ買つて、それを被つて御正月に氏神樣へ御參り致すのですが、餘分に買ふ物はそれ位な事で、始終切り詰めた生活を致して

居ります、私の倅は眼も悪し體も弱くて役に立ちませんが、孫が善く働いて居りますから、三年も經ちましたら、田地を一町ぐらゐ殖せる積りで御座います」と。先づ斯う云ふ調子で御座いますから、衛生方は格別注意致さずとも、毎日善く勞働して自然身體も壯健なので御座います。私は斯う云ふ人々の堅固な志には感心したのですが、流行病のよく蔓延する縣下ですから、懇々と衛生の必要を説き、『家に眼病があつたり、身體の弱い人が出來たりするのは、餘り不潔だから起るので、肥料の臭氣は農家には止むを得ぬ事ながら、便所の掃除など善く注意すれば、餘程變つて來て自然家族が無病で暮せるのです、會の入費も不都合ならば收穫の際纏めて一時に納めるが宜しい、それまでは私が立替て置きませう』と申した處、善く道理が分つたと見えまして、快く入會しました。斯樣な人達に限つてちやん／＼と會費を納めて、決して世話を燒かせません。

▲半都會風の田舍家

自在鍵に燻つた鐵瓶の吊してある圍爐裏があるかと思ふと、片隅に破れ靴が置いてある、二重廻しが下げてある、先づ斯う云ふ風な不釣合な家がよくありますが、斯樣な家は悪くすると息子が金を暴く費つて先祖の遺産を亡くす事があるのです。金も上手に費へば、家も國も益しませうが、農家などでなまじ都會の眞似して、少し氣を弛めやうものなら、折角手丈夫に仕上げた財産を潰して了ひます。一錢の事にも首を捻る人達がイザとなると、案外道理に明るく持續致し、安受合の人が往々立消となるもので御座いますよ。

▲愛國婦人會勸誘に就て

愛國婦人會の初めて生れましたのは、丁度良人が山形縣に再度の知事となりました頃で御座いますが、私も日清役、北清事件の際、軍人遺族の援護に就て、深く必要を感じて居りましたから、同會の趣意に賛成致して、出來るだけ會員を拵へたいと存じ、及ばずながら勸誘に盡力致しました。會では縣知事の夫人が勸めるのは鶴の一聲である縣民が忽ち承諾するだらうと言

はれますが、それは大きな御考へ違ひで御座います。廢藩の當時舊藩主が縣令となつて居られた頃には、威光を笠に着て承諾させる事も出來たでせうが、今は情勢が違ひますから、却々出來るものぢやア御座いません。軍隊に隊長が號令を懸けると、兵士が一齊に捧げ銃を致すやうに參れば世話なしですけれど、左樣は參りません、趣意書には僅か一年に一圓の會費としてありますけれども、地方の人には其一圓が却々容易でないので、私の一了簡には參りませんから、良人と相談致してからと申す者が多う御座います。一年に一圓の會費さへ、早速返事の出來ない者は到底駄目だと仰しやる方もありますが、決して左樣なものでは御座いませぬ。僅か一圓……一圓どころか一萬圓が一厘缺けても一萬圓にならぬ道理で、手堅く考へるほど、容易に返事が出來ないのが當然で御座います。それですから私は斯う云ふ人達に幾度か趣意を繰り返して、『決して無理に勸めは致さないから、善く考へて眞實に國を愛する精神の起つた時、來年でも再來年でも入つて下さい』と氣を永く勸めて、時を待つて居りましたが、其内追々解つて參つて『成程家にも適齡の伜があるから、今に皆樣の御厄介になるかも知れませぬ』なぞと申して、入會する人が多かつたので御座います。特別會員や一時金を出す人は、素より上中流で何の雜作もない事ですが、是れは人數が極少いのですから、骨は折れるけれども、一番多數な通常會員……會の爲めに大きな勢力でありますから、此通常會員を一番大切と思はねばなりません。前にも申した通り、再三熟考して入會した者に限つて未納の憂ひなく、それは／＼感心なもので御座いますよ。

▲眼を惡くした原因

昔の家庭の事ですから、別に學問も仕込まれませんが、唯だ婦女一通りの讀物の外に、經書とか歷史とかを讀むのが大好きで御座いまして、近頃眼が惡くなりましてから、ツイ觀るのが億劫になり新聞位が漸で御座います。ハイ地方へ參つて居る時分、晝間は來客や何かで暇がないので、夜分臥せる前に新聞を見ました

が、各地方新聞を殘らず見ますと、十八種ぐらゐも御座いますから、ツイ〳〵夜を更かして、時とすると鷄の鳴いたとも御座いました新聞の要處は屬官が一通りは眼を通すので、私が見る必要も無い次第ですが、何樣も大體の處を見て置きませんと、世間の事情が判りませんし、又良人に對する諷刺なぞ、他人が見て何とも氣付かぬ事でも、思ひ當る節なぞを善く發見するものでして、隨分熱心に讀んだので御座いますが、近來眼の疲れましたのは、これが爲めだと存じます。

▲御子達の敎育

私は子供を皆な東京に殘して、良人の任地へ參つて居りましたので、姙娠致すと東京で分娩して直に私だけ任地へ參つたので御座います。子供は就學の都合上是非東京に置かねばなりませんから、確乎した者に監督を賴み、赤兒は牛乳や乳母で保育させて、九人の子供を何樣か斯樣か手離して育て上げました。併し一個月に二回ぐらゐは必ず樣子を見に出京致して居つたのです。娘共は華族女學校へ遣はせますが、卒業までは、澤山な學課に追はれて裁縫や家政を實地に仕込む餘裕が御座いません。それで卒業後、同校の專修科を踏ませますが、此專修科は一家を持つのに一番直打があると存じます、却々學校を出たばかりでは、萬事


三國一の婿君

に不熟練ですから、餘所樣へ差し上げましても、直ぐに御役には立たないので御座います。娘共は皆內氣で御座いまして、御友達が遊歩にと御誘ひ下すつても滅多に御伴は致さず、家に居て裁縫を致して居りたいと申します。イエ私も行き屆くどころぢや御座いませんので、唯だ子供がこれでは困ると存じた事の無いのは僥倖であると存じて居ります。イクラ親だからと申して、此方から威光を付けては服從致さぬもので、子供の方から信用して崇めるやうにならなければ甘く參りません。

支那漫遊談

伯爵　土方久元君

淸國漫遊を了りて此頃歸朝されたる土方伯爵に、淸國婦人社會の一斑を伺はうと存じて、小石川林町の御邸へ參りました。伯爵は茶の練仙臺の袴に、琉球飛白の小袖、黑魚子の羽織を召され、手づからストーブを焚かれ、記者の問に答へられました。

▲西太后へ謁見

西太后へ謁見の際は、御叮嚀の御言葉があつて、來遊を喜ばれ、粗末な土產物に就て御禮など仰せられたが、唯僅かの時間でホンの儀式的の應對でした。西太后の左右に侍する者は、悉皆男子なので、女官は一人も居ない。太后も私も椅子に腰掛けて(他の各國は大抵立禮であるが)禮をしたので、實に御前間近で謁見しました。左樣御服裝はたしか黑い光澤のある物であつたと思ふが、何樣も衣服などの細い事は男に能く判らんから……。

太后は今年七十歳であると云ふに、實に若々しいもので、漸と五十位にしか見えない。謁見と云ふ事は、近來の事で、以前は却々難かしかつた。過日も榎本に會つて聞くのに、榎本なぞ全權公使として往つて居る間に一度も謁を賜はらなかつたさうだ。近來は我國から往つて居る公使や書記官の夫人は時々參内して拜謁が出來、殊に支那語の出來る夫人には親しく様々の御物語りもあり、太后が至極子供好きなので、子供のある者は子供を連れて參内すると云ふ風です。然るに彼國大臣達の夫人は一生に一度も謁を許されない者が多い、寧ろ謁を許された者が殆ど無いと言つても宜しい。實に階級が甚しくて尊大なものださうだが、日本人だと奏任官の夫人でも容易く謁見が許される。總て支那の夫人は貴賤とも家の中に隱れて居る風習だから、五十日も滯在の間に、婦人は往來でチラホラ見たくらゐで、近接した事は殆んど無かつた。

▲肅親王の家庭

肅親王の皇女御三方が、私の宿所へ來訪されたと報知新聞に書いたのは間違ひで、王子が來訪されたのです。彼の記事が出た時、直ぐに訂正を申し込んで置いた。何樣して王女が來訪される筈が無いのです。併し肅親王の御息所は非常の日本好きで、日本婦人の家庭教師も雇はれてあり、幼い王女二方は、日本人で支那警務局の役人をして居る川島難波と云ふ者の家へ預けて教育を頼んで居られるさうだ。も一つ感心な事は、肅親王の妹君で、此御方は妙齢の時蒙古の王子に嫁がれたさうである。蒙古と云へば、支那婦人は恐ろしがつて居る處だのに、深宮に人と成られた王女が入輿されたのは、却々英邁な事で、御家庭の美風を想像し得られるのです。

▲貴婦人の平生

詳しい事は知らないが、彼國の婦人は何も仕事をせぬと云ふのを一番の虚飾として居る、其證據に貴婦人になるほど爪を長く延して、何も用事をせぬことを示して居る。尤も縫物を見たり畫を描いたり位はして居るし、

刺繍などは却々巧妙な者がある。近頃日本の敎育が行はれてから、毛糸の編物をする婦人が大分出來たさうだ。併し一般の貴婦人は御化粧が一ト仕事であらうと思はれる。

▲烈　女

支那の烈女ほど氣の毒なものは無い。身分のある家で良人が死亡した時、妻が未だ年若であると、親戚は其妻に殉死を勸める、勸めるばかりで無く、遂に强迫して自殺させ、烈女の名を得させて、家名を揚げやうと計る者がある。烈女の名が上聞に達すると、一家にとつて此上もない名譽とするので、若し之に反して再婚でもすれば、實に大不名譽で、一家の耻辱此上も無いと云ふのである。斯う云な次第で、其犧牲となる烈女は誠に氣の毒なものだ。自殺は鴉片でさせると云ふ事です。

▲門閭旌表の濫用

門閭に旌表すると云ふ事は、昔からの遺風で、私が歩いた處にも、忠とか孝とか貞とか云ふ札の貼つてある家をイクラも見受けた。けれども是れが甚だ覺束ない旌表である。一例を擧げると、私が北陵、明陵などへ行つて見たのに、文皇帝の陵など規模こそ宏大であつたが、甚しく破損して居て、少しも修繕した事は無いらしかつた。ソコで北京の顯官に話すと、未だ一度も往つて見た事がないと云ふ者が多い。尤も支那顯官の旅行は從者も多く要るし、億劫である上に、旅舍で賄ひは一切しないから、地方へ行くには、米、醬油、味噌、鍋、釜などを携帶せねばならず、隨つて出不精になるものと見える。斯様な出不精な役人達に人民の忠孝が詳しく分らう筈はないから、實に宜い加減な旌表で、中には忠孝の札を商家の招牌のやうに心得て掛けて居る者もあり、誠に滑稽千萬な話しなのです

▲道　路　と　家　屋

私は世界各國の都會へは大概行つて見たが、支那の都會ぐらゐ不整頓で穢い所は見たとが無い。道路の修繕は全然しないから、雨天の道のわるいこと話しにならぬ。尤も支那人は雨が降れば少しも外出しないので、誠に不精なものです。近來道幅の廣い街は、道路改修に取りかゝつて居るが、中央が高くて兩側がドンと低いから、雨が降ると水が澤山溜つて、子供など往來で溺死すると云ふ慘話もある。家屋の周圍も穢いもので、宮城さへも塀や垣が壞れたり、門の屋根に草が生へたりして居る有樣です。唯だ規模だけは宏壯なもので、萬壽山の宮殿(西太后の離宮)など驚くべきものだ。支那の總てが漠々たる事は、長途の汽車に隧道のないので判つて居るのです。

▲日本人の羽振

近來日本を重んじて、身分ある家では、是非子弟を日本へ留學させなければならぬ、日本語を話さねば幅が利かぬと云ふ風になつて來た。それで日本人を載せた馬車の馬丁は、肩で風を切り大威張で大道を駈けること、丁度明治の初年頃、横濱で外國人を載せた車夫が威張つたのと同じ具合で、これは實に私共が愉快に感ずることであります。

▲座敷の裝置

宮家を始め貴族の家を大抵訪問したが、室內の樣子は何れも同じ風で、繪畫の扁額などは一向掛けてない。何處の家でも見受けるのは、壽の字や福の字の額で、何故斯樣な詰らぬ物を掛けてあるのかと思つたが、善く聞けば、皇帝や太后から下し賜はつた貴重品であるとの事です。床の下には火が焚いてあるから、靴の中まで暖くて實に心持が善い、庭は唯だ方形中庭があるばかりで、庭木など一本もなく、植木鉢もない家が多い、一體に植物の趣味に乏しいと見えるのです。併し時節柄で菊花の鉢植ぐらゐは偶に見受ける事があつた、本箱は澤山室內に積まれてある。

▲動物

植物趣味は乏しいが、動物の方は隨分愛する。尤も一般に實用的からでもあらうが、豚や犬や鷄など何處でも澤山に居る、旅行用の駕は前後に馬を附けてあるが、其馬は實に柔順で怜悧で、人の言葉を善く聽き別け、御者が右へ左へと口で言ひさへすれば其通りになるので、總て言葉の善く解るのには感心しました。私は元來馬を大切にする方で、家の馬丁にも始終言ひ聽かせて居る、「汝達が主人に無理を言れると忽ち激昂するだらう、馬も口こそ利かぬが腹の立つことは同じだから、決して虐待してはならぬ」と。

▲支那の饗應

支那の貴族間に唐突な訪問は決して無い、前々から招待狀を出して返事を取つて置く、是れは主に料理に時日を費す爲めと考へる。食物は實に奢つたもので、料理に念を入れると非常なものです。主客座定まれば例の支那茶を出し、菓子は鉢へ三品ぐらゐ盛つて給仕が持つて廻はるのを、客は宜い加減取つて茶皿の縁へでも置くので、紙へ載せて出すと云ふ事はしない。それから取り替へ引き替へ澤山な御馳走を出して、迚も食べ切れるものぢやアありません。酒は葡萄酒其他樣々の洋酒も出すが、支那酒が主である。支那の酒は略日本酒と同じだが、日本酒よりアルコール分が少いから頭に上らないで宜い。上酒は紹興酒と稱へて、何十年と經つた古酒だから、風味は實に佳いのです。而して客が酒を一口飮むと直ぐに給仕がコップへ注ぎ入れ〳〵するから、到底飮み盡すことは出來ない。料理の中で手數のかゝるのは、キンコの蒸燒で、これは壺へ水を盛つてキンコを入れ、其壺を繩でグル〳〵卷いて、繩の先へ火を點けるのである、スルト繩は次第〳〵に燃えて、遠火で中のキンコが煮える、これは三日も掛つて氣長に煮るから、實に軟かになつて好い味な物です。其他蒙古の蕈、燕の巢なぞと云ふ珍味が出るが、燕の巢はトント鮫に似た味で非常に旨い、汁物も數多く出るが、味噌汁は更に無く、大抵獸鳥の肉汁で拵へたものだ、ハイ香の物は支那が本家だから、却々結構な物がある。飯は一番後に出すが、これは蒸炊にしたものと見えて、ザゴ〳〵して居る。善く人が支那では、甘いと旨いとを一緒にし

て居るやうだと言ふが、成程と思ふ節があると云ふは他でない、彼國は附味が贅澤で味醂も砂糖も澤山用つてあると見えて、何でも非常に甘い。而して又何でも工合よく溫かに出來て居るから、腹心地が極宜い、中にはアルコール火の上へ掛けて出す品もある。旨いことは皆旨いが、私共の口には少し油濃過ぎて、澤山食べられない。支那人の肉色の良いのは、この油濃い食物を常に取つて居るからであらう。何樣な賤民でも肉類を食ふので、穢い巷など通ると屋臺店に肉類の鍋を掛けて居るのが列を成し、賤民が群集して立食して居る。それで支那の賤民は、日本の貧民に較べると肉色が宜い。軍機大臣の瞿鴻機といふ人は、大層瘦せて弱さうに見えるが、大の肉嫌ひなので、其母堂が心配して、飯の下へ鳥の肉片を隱して食べさせやうとするけれども、決して食はぬさうである。

▲食　器

古代陶製の食器は、却々高尙優雅な物であるが、是れは極少數で、一般は獨逸製の日本食器を用つて居る。この獨逸製は日本畵の花鳥風月や人物などを模樣にした皿鉢で、日本製に違ひなく見えるが、能く〳〵見ると模造である、却々油斷のならぬ奴です。

▲衣服の贅澤

貴族の衣服に就て驚いたことがある。醇親王の御招待に預つて參つた時、親王は油垢でテカ〳〵した服を召して御座つた。これは數日前から御案内があつて上つたのだから卒然常服で迎へられた次第でもなからう、帝室費が不足で親王方も不自由なさるのではあるまいか抔と、同行者が噂しましたが、其後親王を御招き申したところ、却々以て非常なもので、毛織の立派な服を召して來られた。これは皮の上へ獸毛を飛白に織り立てたものと見えて、軟かな光澤のある物でした。後日私は日本への土產物を少し買はうと思つて毛織店へ行た時、醇親王が召された通りの毛織があつたので、試に價を問ふと、我國の價にして一萬圓以上と聞いて一驚を吃したのです、支那では一般に赤色を好むと見えて、男子でも赤色の服を着て居るのを善く見受ける。名刺も赤を

用ひ、贈物の箱など我國で白木の箱へ入れるに反し、彼國は赤紙を貼るのです。白色は總て不吉となつて居るのです。私が支那の貴族に贈つた土產物ですか、それは西陣で出來るテーブル掛や壁掛や漆器などでした。彼國貴族は斯う云ふ物を最も喜ぶのです。

▲化粧

化粧は一般に上手で、老人でも厚化粧であるが、皆頰を赤く染めて居る。これは見慣れないとチヨツト可笑しいが、見物に列んで居るところなぞ見ると、實に美しい冴え〲して居る。西洋では、未婚の女は却つて化粧をしないで、結婚後年を取るに隨ひ化粧を盛に遣る。畢竟年を取ると天然の美を失ふから、人工を以て之を補ふのであらう。

▲公子

私が諸貴族に招かれた返禮に、此方で招待する時、酌人を聘ばうとしたけれども、北京廓內に妓を入れるとは一切出來なんだ。然るに彼地には、公子と稱する男妓があつて、誰でも之を聘ぶので、私も其公子を聘んだ。これは十三歲ぐらゐから十九歲ぐらゐ迄の美少年で、女とも見ゆる者もある。直ぐに客の傍へ寄り添ふて肩をチヨツト叩いたり、膝に手を懸けたりして、却々人馴れたもので、常に貴族の玩びとなつて居るさうだ、少し年を取つた公子は專ら音樂なぞ遣つて客を取り持つのである。廓門は夜に入つて〆切ること、丁度昔の丸ノ内の見附の樣であるが、これはホンの掟だけだから、チヨツト一時閉て置いて、後は開放してある。これは人民の往來の便利を計つたのでもあるが、廓內から藝妓買ひなどに出掛ける人の都合をも計つたものとの話です。

▲蓄妾

支那で蓄妾の盛んなのは周の遺風なので、春秋にも諸侯は十五人としてある位です。それで唯今以て、妾の多いのが妻の働きとして賞讃されて居る。貴族の緣組となると、輿入れの時に妾を連れて行く者もあるが、是れで一家が治まつて行くのは妙な次第だ。（中村鈴子）

世界奇聞

田島梅子

▼骨牌遊戯は、紀元前千年の頃、已に支那に行はれたりしが、印度は之よりも更に古く、此遊戯の起原は多分印度なるべしと。

▼世界中、海岸線と小山とを最も多く有する國は希臘にて、國内到るところ十八里以上、海より距りたる地方なく、又五里以上、山を離れたる土地なしと。

▼ヨルダン河の流れ入る死海の水は、太洋の水より八倍即ち二十六パーセントの鹽分を有すと。さらば一升の水の中に二合五勺の食鹽を含む割合なり。

▼西比利亞の大部は、盛夏の候と雖も猶に地下六尺六寸まで凍結し、一世紀以前に埋めたる棺を開くに、内なる死體は依然として少しも形ちを變へざるなりと。

▼血液が全身を循環して、心臟より心臟に廻るには僅かに二分時を要するのみと。

▼固形體の物質中にて最も輕きものは、向日葵の木心なり。然らば燈心、芋殻も又數歩を讓るべし。

▼南部カリホルニヤ州には、左り利の人間ばかりにて組織せる倶樂部あり、其會員の二千人に滿ちたりしは、今より八年前なりき。

▼普佛戰爭の當時、包圍されたる巴里の市民が其年の九月十九日より、翌年の一月廿八日迄に、五十四個の輕氣球を以て獨逸軍の重圍を脱して全國中に配達したる書狀の總數は實に二千二百萬通に及べりと。

▼世に象牙の需用は大なるものなるが、球突、ピアノ鍵板、小刀の柄、其他に使用せらるゝために、一年間七萬五千本の象牙が費さるゝ由。

▼或る統計家の說によれば、十九世紀の間に起りし文明國の諸戰爭の爲めに失ひたる人命は少くとも三千萬人を下らずと。

▼印度に於ては九歳未滿の女兒にして、戸籍上有夫者五十萬人、十五歳未滿の女兒にして、寡婦たるもの五萬人ありと。

▼トランスバール(亞弗利加)の鑛山は、產金地として世界第一の稱あるが、其產額は一年に三十萬弗に上る。

▼最近五十年來カリホルニヤ(米國)にて採掘せる黃金の量を合すれば、高さ一丈五尺、幅一丈八尺、長さ三丈六尺の金塊となるべしと、然らば可なり大なる土藏に充滿するほどなるべし。

▼雨の降る時間は、從來の統計上、午前三時より八時までを最も多しとす。

▼ナイル河の第一瀑布と第二瀑布との中間地方は、終歳雨を見ざる地方にして、又世界中最熱の土地なるが、同地の土人は外國人より雨の空中より降り來る話を聞くも、一人として信ずるものなしと。

▼黑人の皮膚と雖も、初めより黑きにあらず、初生の時は稍や黃色を帶びたる白色にして、月々年々に黑くなり滿十歳に達する頃完全の黑色となる由。

▼英國にて牛乳搾取の爲めに養はるゝ牝牛五百萬頭あり、一年一人の平均飲量二斗五升。

▼葱を喰ひて、口内の息氣を止むるには牛乳を飲むを良しとす、又不

（家庭唱歌）

四季の團欒

作歌　靜間舟人
作曲　山田源一郎

一

春の彌生は　庭の面の
花の木蔭に　團欒して
翳す櫻や　桃の酒
酌めども盡せぬ　樂しさよ。

二

夏の夕は　打水の
露の白玉　打解けて
端居に語らふ　兄いもと
そよ吹く風の　涼しさよ。

三

秋は蟲の音　菊紅葉
千草は園に　咲き亂れ
月さへ軒に　照り添ひて
賑はふ家こそ　嬉しけれ。

四

冬の夜寒の　團欒の內
枯木に花と　置く霜の
翁を中に　寄り集ひ
圍む火桶の　暖たかし。

四季のまとゐ



眠症に陥りたる時は、温き一杯の牛乳を毎夜就寢前に飲用すべし。

▼サモア群島の土人に一の奇習あり、若し不眠症に陥りたる時は、太き竹筒に蛇を入れて其筒口を蔽ひ、筒中にて蛇の蠢動する音を聞きながら寢に就けば、直ちに熟睡し得る。

▼佛國にては丁年以上の國民にして其四分の一は未婚者なり、これ該國の人口減少する重なる原因なりと。

▼人口增加の比例を推せば露國が二億萬人、獨逸が一億萬人に達する時、佛蘭西は猶四千萬人に止まるべし。

▼ロンドン市にては每日四百人づゝ新たに生れ、每日二百五十人づゝ新たに小學校に入る。

▼飛魚は能く水面上一丈四尺の高さまで飛ぶ。

▼雷鳴の音の最遠距離は四里以內なり、遠雷の聲など云へど、その距離僅かに三四里にすぎず。

▼一頭の鯨を屠る時、其の肉、油は非常のものなるが只その舌のみにても能く一噸の鯨油を採り得らるべし。

▼先頃綠蘭土にて捕獲したる鯨は、嘗て見ざりし巨大のものなりしが、其重量は通常の象八十八頭に比敵すと。

▼露西亞の汽車と汽船は、聖書を無賃にて運搬すべき旨、政府より命ぜらる。

▼佛國の植民事業は官吏が先鋒となりて失敗し、英國は宣敎師と商人率先して成功せり。

▼支那の商店にて尤も華麗なる店飾をなすものは葬儀社なり。

▼世界第一の大仕掛ある電信局は、ロンドン中央電信局にて、一局に三千人の技手を使用す。

▼自轉車の本場、米國のシカゴ市には自轉車作りの職工五千人あり。

▼世界中最も危險多き鐵道は露國にて其損害旅客百萬人に對し三十人の死傷者を出す割合なり。

▼ペートル大帝の設立したる露西亞の帝國圖書館は、藏書の數百二十萬に上る。

▼空氣は海面上四千尺（信州輕井澤の如き地）以上に至りて漸く清潔となる、この度にては、空氣一立方吋に不潔なる塵埃分子三萬四千を有するに過ぎざれども普通の都會にては同量に三千萬餘即ち一千倍弱の不潔分子を有すと、都會生活の健康に益なき事知るべし。

▼一年中晴天の多きは西班牙にては一年間三千時間、伊太利は二千五百時間、英國千四百時間日光を受くる割合なり。

▼世界の都府中、巡査の最も多數なるはロンドン（一萬四千人）、次は巴里（六千人）、次はニューヨルク（三千八百人）。

▼電話の最長距離は米國セント・ルイス市とボストン市との間に設用せらるゝもの距離七百里あり。

▼伊太利とシ、リー島との間を往來せんとて設計されつゝある海底トンネルは、一里。

▼全世界の人類は一分時間に六十七人死し、七十人生るゝ割合なり。

▼世界の人口を假りに一千と見做せば、亞細亞は五百五十八、歐羅巴は二百四十二、亞弗利加は千十一、亞米利加は八十二、大洋洲全體と北極地にて七の割合となる、即ち全世界人口總體の二分一以上は亞細亞にあり、亞細亞の人口は大部分支那人なり、即ち支那人は世界人口の半分を占領す恐るべし恐るべし。



佛國中流の家庭

ミセス、フラワーズ述

私が佛蘭西の首都を知る様になりまして以來、十年有餘も巴里は静穏で、然も、諸事、滑かに活動し、繁榮して居たのであります。さるを、米國の家族などは時々手紙だの海底電信だので、巴里の何處邊で某といふものが、狂氣じみた宣言書を草したとか、海の彼方のアメリカでは何うやら佛蘭西が矢張革命の危機にでも近づいて居はせぬか、私どもも、その危險のある近傍に居はせぬかなど〻心配して、街へ出るにも氣をつけて、危い處へ近づかぬ様にせよなど〻いふてまゐりました。

もし、こんな考を抱いて巴里に參り、實際を見ますと、案外で、そんな馬鹿氣た機會は殆どありませぬ。詰り巴里に就いて私共の耳にする、あらゆる事柄は眞の佛蘭西の代表的生活です、其の生活といふのは中流社會にのみ見らる〻のでこれは外國の人々の殆ど想像して居た以外の事柄であります。

中流社會といふ言葉は、あまり、愉快な言葉ではありませぬが、兎に角、佛蘭西の中流社會には又上下の二種があります。で中流社會の下層といふものは相當に注意するの價値はないではないが、概して趣味の少い家庭で、小賣商人、中等官吏などで僅かの收入で生

活をして居るのであります。從つてかういふ階級の家庭は質素な生活をして薄い儲の範圍內でやつて行くので別に智力上の運動に加はらうといふのではなし、年年小供のために小金でも貯へるくらゐが此上なしの望みであります。然し、そうはいつても、佛蘭西の財政上の勢力は此等の人民の上にあるので厶います。普佛戰爭の賠償として獨逸から要求された六百億フランの金額を、數日の間に整へたのは、實にこの階級の團體があつたからで、その潜勢力は外面から想像し得ないものが確かにあるので厶います。

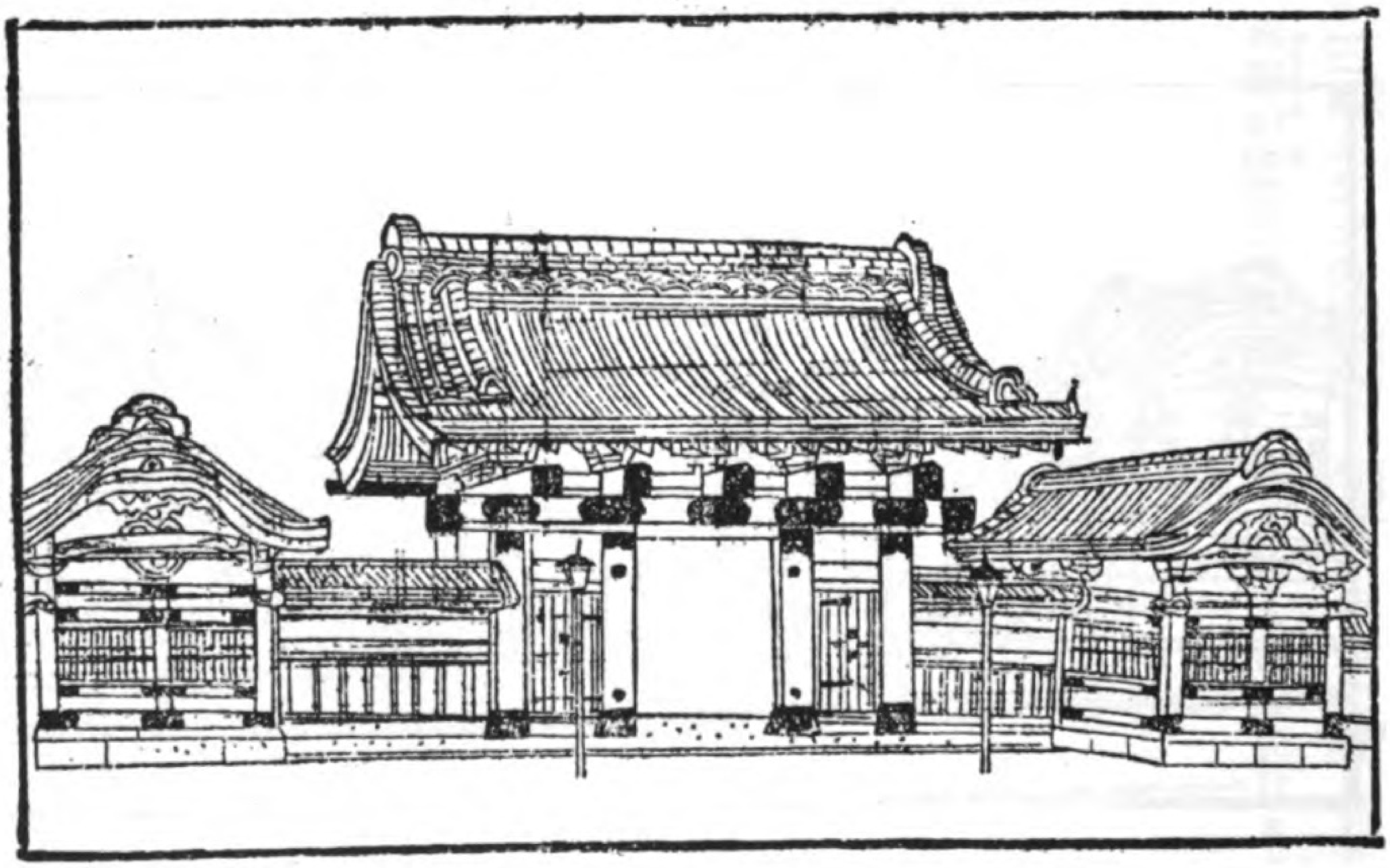
之に反して中流社會の上層は佛蘭西の智力を司どる階級を含んでゐるので、何でも古典的の教育を受けるのが最大必要で、どんな智力上の運動（藝術にせよ、科學にせよ、文學にせよ）にでも關係するのが義務であると覺悟して居るのがこの種の家族である。博士、美術家、記者、醫者、機關師とやらに眞にその人々の人格の價値が資格や、財產の以上にある、といふ人士はこの階級から出來ます。此等の佛蘭西人は即ち國民の道德的代表者で就中この種の巴里人は共和國の眞の貴族である。然し、斯う申したからとて、必ずしも、他から離れて一階級をなして居るといふ意味ではない。たゞ人生といふものに對して一定の意見を抱いて、それに從つて、行動して行く人々である。

この事を說明するには、妾の佛蘭西の朋友の中から或る二家族を引出して御話するが宜からうと思ひます。この二家族は長い間、妾と親密にした人々で、前に申した、中流中の上層社會の代表者で、然も、その最も適當な代表者だらうと思ひます。その中の一人は大學敎授の家庭であります。主人は賤しい煉瓦工の孫ですが、全然自己の力、自己の頭腦から今日の位置を作り上げた人で、高い譽を負ふて師範大學を卒業したので厶います。そして氏は高級敎授になる準備をして、終ると、間もなく敎授に任命されました。これは佛蘭西に於ける最高の大學の稱號でこの收入は一年に七千乃至八千フランであります。この方は二十八歲

の時に、一人の愛らしい令嬢と結婚いたしました。この令嬢は大した嫁資は無かつたのですが、美はしい家庭に人となり、その父親は名士で博愛の心と、品性の高いのとで知られた人でした。

偖て、この若夫婦は結婚の當時收入が年に一萬五千フランでしたが、これ位の收入では巴里の如き贅澤な都會では、非常に儉約をせねばならなかつたのです。それから十一年目には旣に四人の子供が出來まして、この時からは餘程困難な暮向になりました。而し、この方等は愉快な、眞に理想的に幸福な家庭を作り

門づくし（一）大名門



ました。然し、其の幸福や希望は、眼に直に訴へる様なものではなく、無形なところにあるので、慥に模範的家庭と思はれました。其頃の住家は、パンセオンの近所の、庭園のある一風變つた小家で、朝になると、夫は講義に出掛ける。妻は家に居て、巧みに經濟を行ひますが、これ等が眞正な佛蘭西の家庭生活の眞相を示す一例でせう。妻君は四人の小供の衣服も、自分の衣服も、若い女中を相手に殘らず自分で縫ふので、小供の敎育なども、勿論自分で訓練けます。それが、又、注意周到なもので、佛蘭西の家庭生活の最も秀でた、最も著しい特質の一

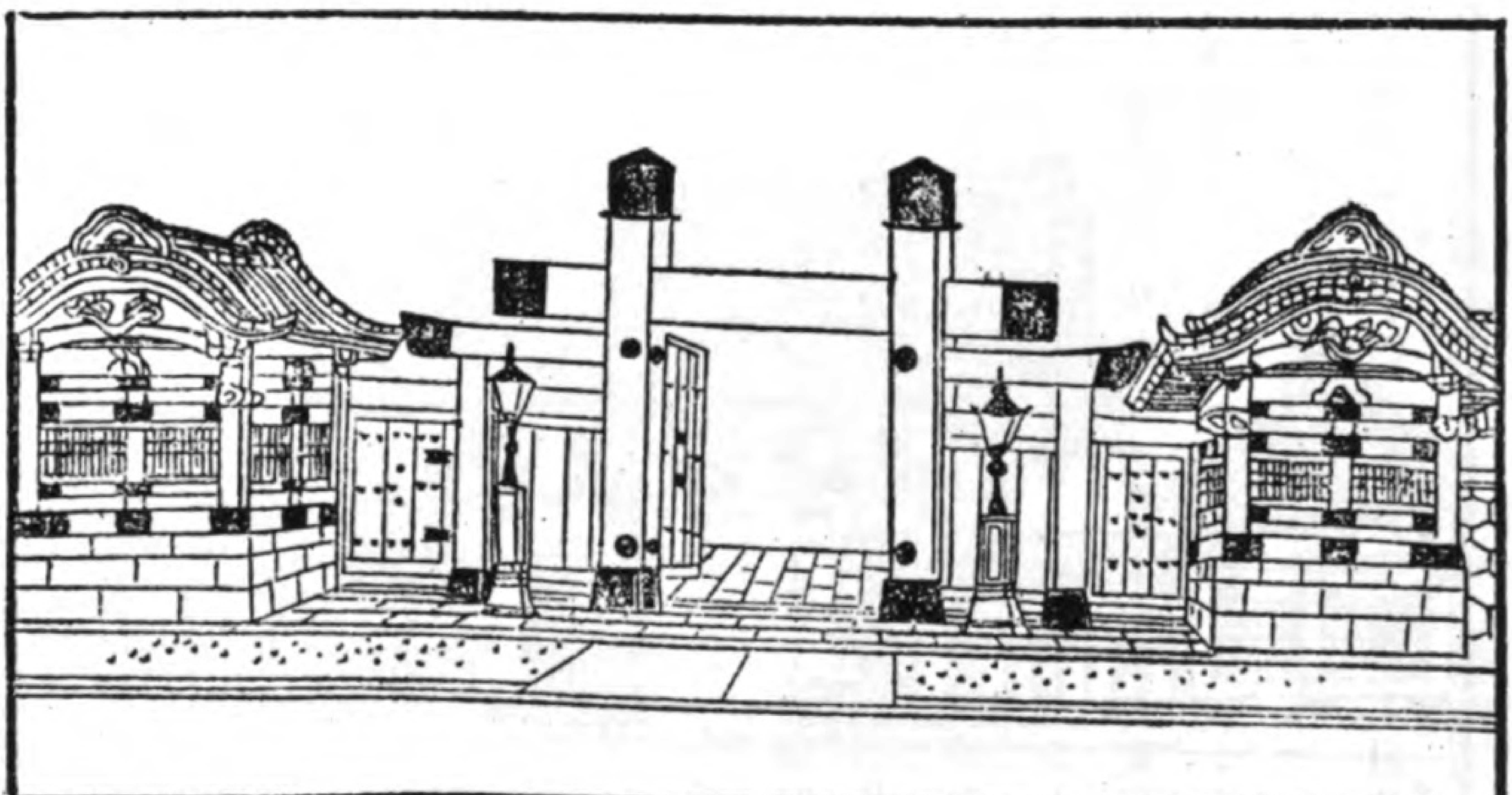
は斯うもあらうかと感心される程でした。佛蘭西人の間には女兒の教育は母がする、男兒の教育は父母兩人でするといふ、格言がありますが、誠に無理からぬことで、このお母さんの仕打の行き届いたのを見ると、なるほどと合點が參ります。こんな風に奥樣は常に家に居て、小供の教育から、何まで、一手に振舞はれるのですが、然も、時々天晴れ艶かに着飾て、交際社會へ顏出しする時間は、悠然あつたのでムいます。

夜になれば、夫妻毎時も一所に食事をして、濟ば一時間ばかりも、聲高に讀書をする。夫は又批評雜誌の原稿に筆採るのです。それから、種々な學術會の懸賞論文を草されます。斯うして避暑の費用を作ります。で、ピレニースに一寸した別莊と云ふほどではありませんが、家がありますから、玆に出掛けるのでムいます。それから、毎年少額づゝ娘の嫁奩として貯金するのであります。

また土曜日の晩は必ず在宅でして小さな客室で美妙な音樂を奏で、樂しさうに家内打寄て話合ます。ですから、玆で茶卓を圍んで、文學とか、科學とか、藝術とかを話したり、論じたりする爲めに大學に關係のある方々が陸續と御出になります。

さて又他の一方の家庭と申すは美術家です。（夫婦とも美術家で）

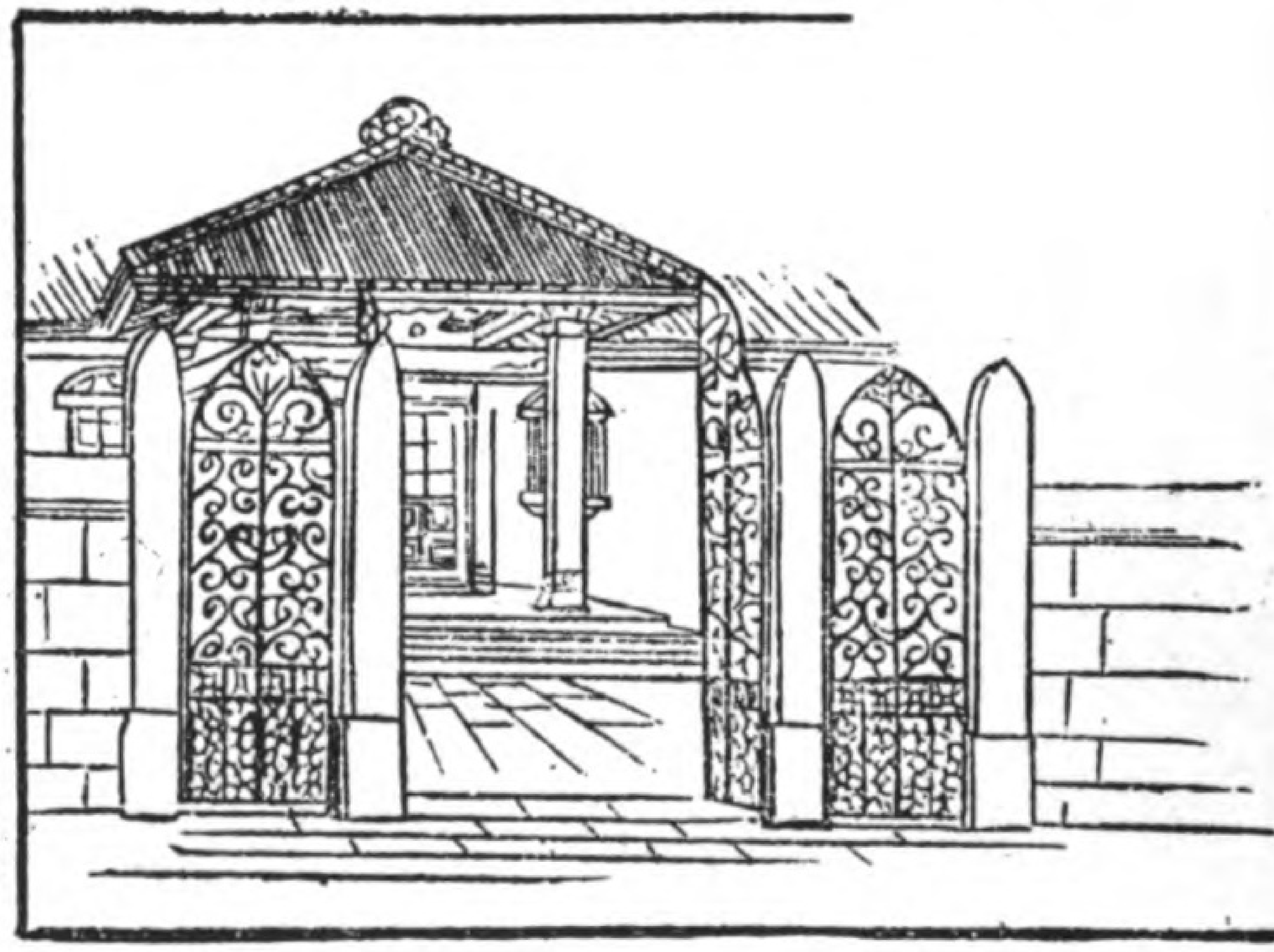
門づくし（二）大名門



金もなか〳〵持つて居ました、年々三萬フランの收入があつたので、更にこの方たちの御兩親が逝くなれば、その遺產を合せて、六萬フランの收入があるほどの富を持つことになるといふ譯です。その上、夫の繪を賣るので每年非常に增殖して行くのでした。この方は「三月會派」の靑年畫家中の一人で、殊に敎育ある佛蘭西人に間間々見る多藝多能な人でした。奧さんも又稀有なる天才と持囃された婦人で、每年「三月會」に出品されて居ます。且つ音樂にも堪能でした。

この家族を模範的と申す所以は金がありながら、毫しも事物の上に贅澤を盡さず、前述の、「敎授やその奧さんが止むを得ずに切り詰めたのと同じやうな、ごく淡白した

門づくし（三）西洋門



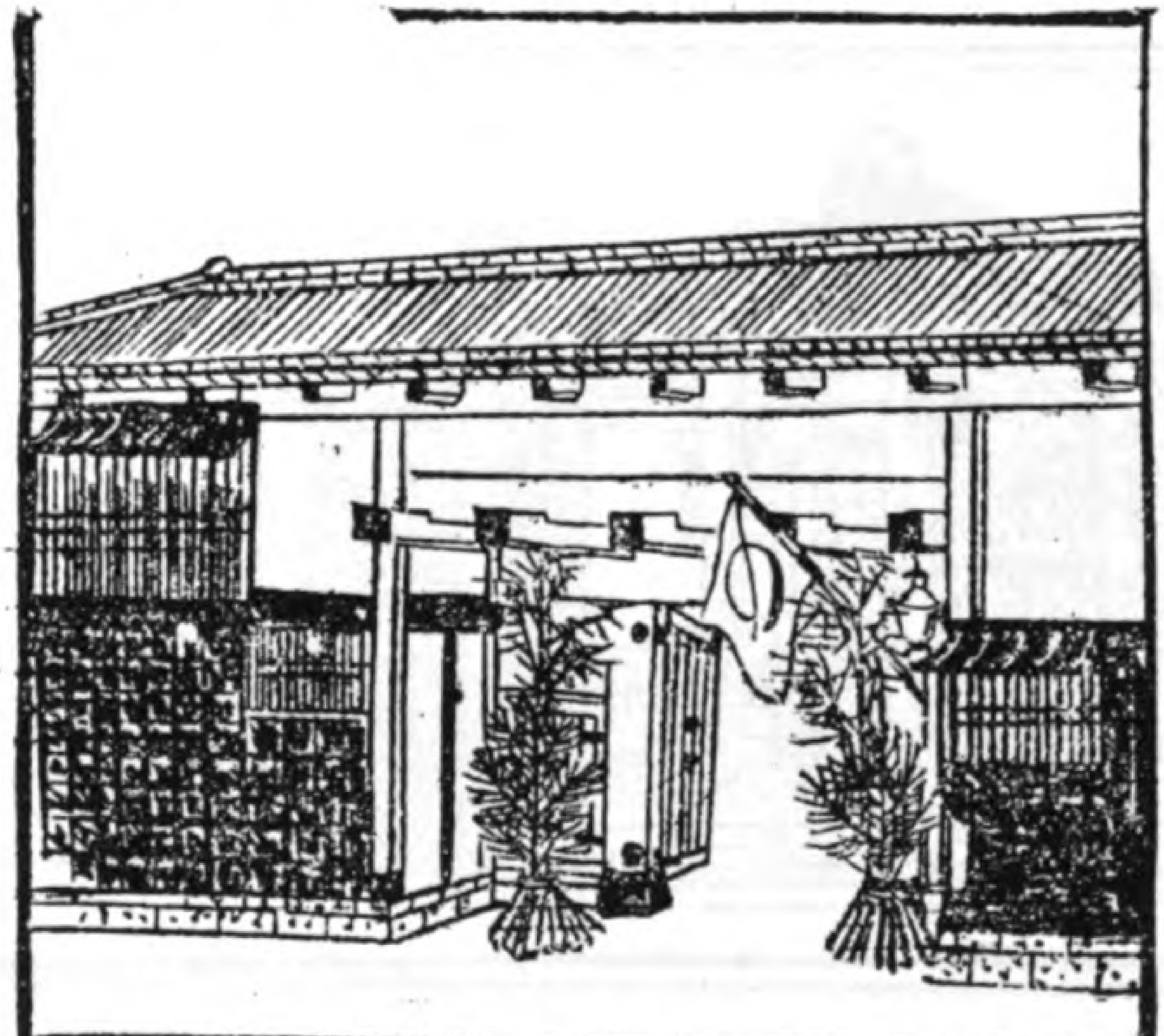
生活をやつて居ました。奧さんは、家政も、小供の敎育も他人任せになる身でありながら、矢張り前の敎授の家庭と同じく、綿密に心を配ります。而して夫妻とも、閑氣な生涯を送れば送られるのに、一寸の隙もなく仕事に熱中するのでムいます。で、夫の願望といふのは、美術に新方面を開き、自分が敎へられ授けられた美術の極技、美術の遺產ともいふべきを持續し、尙ほそれに自分の創造の或るものをも加へて、後世に殘したいといふのでした。で、寸陰の油斷もなく常にこの藝術に盡さうとし、奧さんも亦この夫に對して藝術上の好伴侶で、實際如何な繪でも、先づ奧さんと充分論じた擧句畫板を取るといふことでした。

この夫婦間に奢といつては時々綺麗な掛氈や、美しい古器物の碎片を買ひ集めるばかり、夫が如何にも趣味の有るやうに配列されます。も一つは、毎年ブリダニーの舊住居に引込む前に、一寸として避暑旅行をすることです。

以上二つの例で、佛蘭西の中流社會が常に抱いてゐる意見の大要を伺ふことが出來ます。妾は亞米利加で、之に能く肖た人々の例を澤山に知つて居ますが、然し一階級の人民が悉く同じやうなことを爲て、同じ生活をして居る例は見たことはありません。

で、佛蘭西の最も美はしい家族の特質は、僅か數語の裡に綜合されるので、それが又凡てに適用されます即ち働く事、資本には手を觸ずに収入の中から生活費を出す事、小供の爲めに毎年貯金をする事、その成育を親しく監督する事、出來る丈け美はしい教育を施す事等で、この思想は、子孫から子孫に殆ど義務のやうに傳へて行くので、これは、最う動きの取れぬ普通の思想になつてゐるのであります。佛國的にいへば、この思想あつてこそ始めて、一家族が成立するので又斯る人民が眞の佛蘭西を組織するのであります。實際に佛蘭西の經濟的富は獨り個人の財産から出來て居るのではなくて、均しく群集の僅かづゝの經濟から成り立つので、その大なる美術、科學、文學の發展は、個人の才能によつて收めらるゝと共に、規則正しい勸勉の聚つた結果に依つて收めらるゝのであります。誠、この爲に佛國の空氣には始終智力の氣が犇々と摑ら

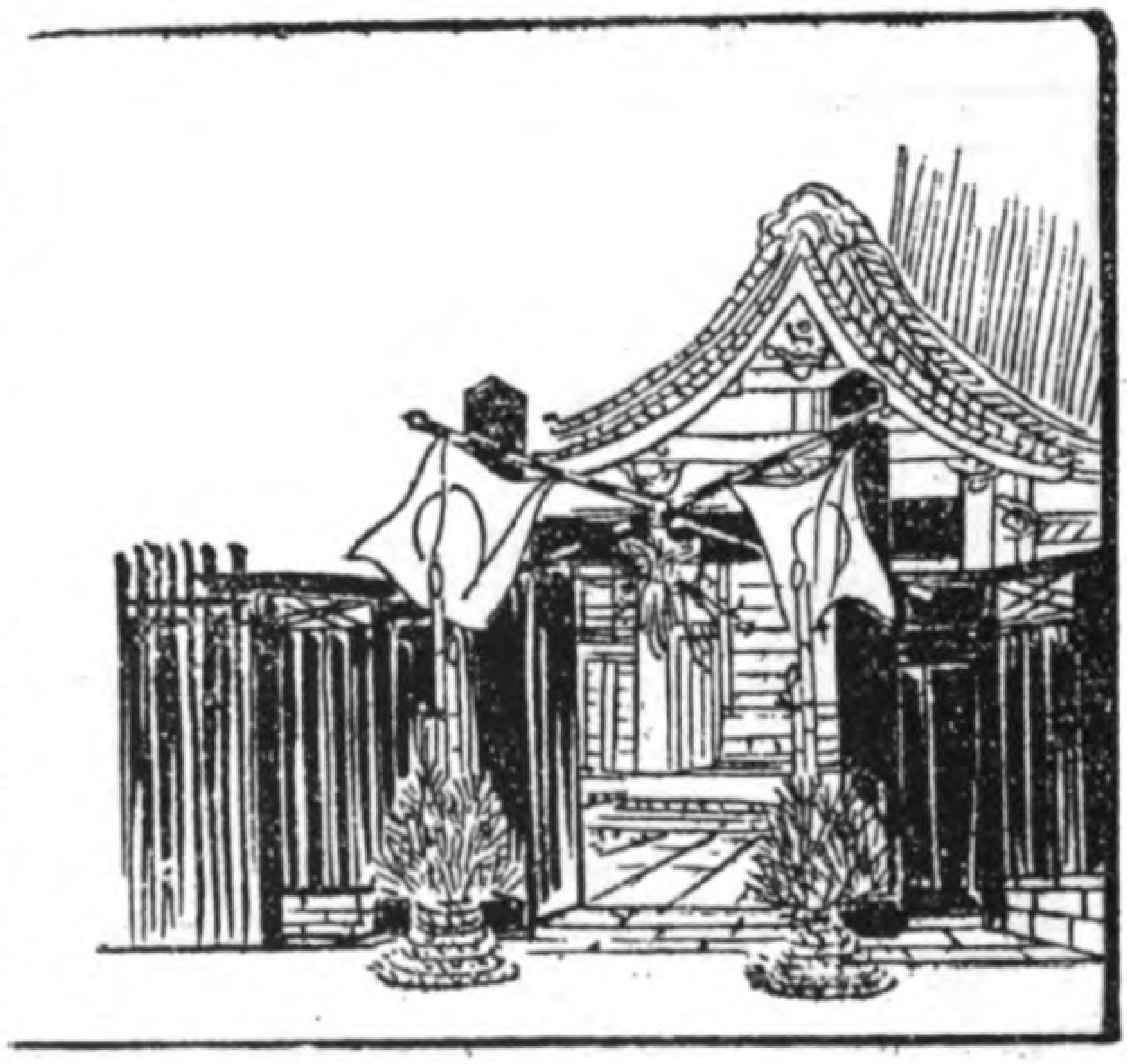
門つくし　（四）　長屋門



れて、その潜勢力は時々パスチュールだの、プービドチヤパンヌだの、ルナンだの、モーパッサンだのといふ尖々たる火光が煌き出るのでムいます。是等の人々はすべて、中流社會の出で、彼の佛蘭西革命を惹起した人々の子孫なのであります。

ところが、現在では内外兩面らか極く壓迫されて居るのは、この中流社會であります。何故かといひますと、全體、十九世紀の世の中で、名譽とか、體面とかを維持して行くには金錢財物に豊かであるといふことが一番肝要であります。ところで、この物質とか、金錢とかいふものに、萬事都合の善いのはあまり社會の表面に出ない俗衆でムいまして、表面に立つて俗衆を導いて行くといふ中流のものは、この點には、なか／＼に不利が多いからであります。

門づくし（五）冠木門



然し、平穩である、無事であるといふ感想は寧ろ、餘り物質的でない、勘定高くない處から來るので、從つて、これが却つて、巴里を樂しい、悦しい都とする源泉となるのでムいます、詰り斯ういふ處から、却つて、全市が完全な一つの作物でもあるかのやうに、筋肉となるもの、神系となるものが綜合して、全都の美と、優雅とを飾ること〻なるのであります。而して又、すべての家庭がそれ／＼に完全なものであつて、それが又、趣味や生活やが一致して居るのでムいます

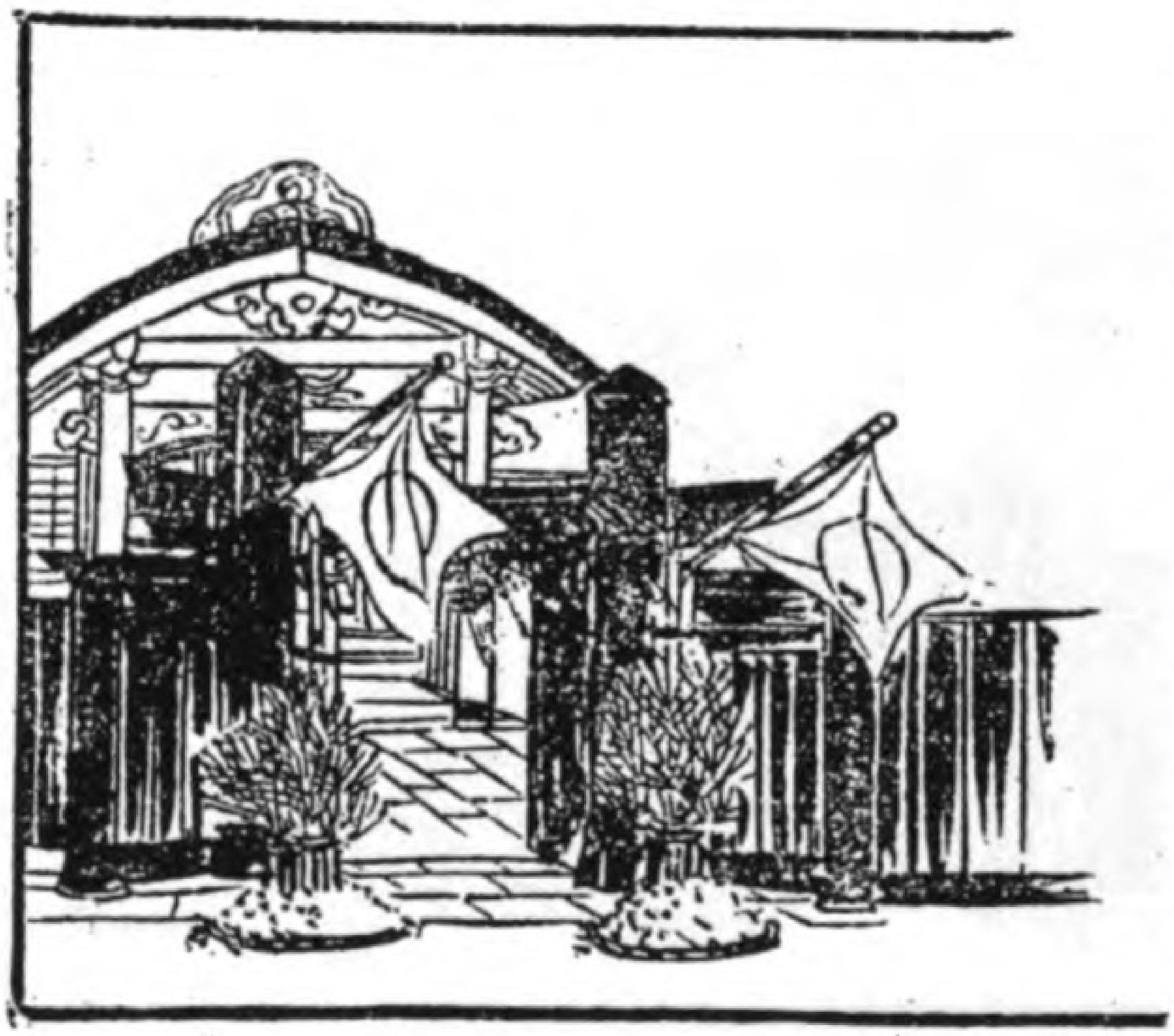
佛蘭西人には家庭といふことが直に調和といふことである、妾の知人で亞米利加に植民地を所有て居る佛人が、嘗つて妾に「どうも、貴女がたの家庭は、充分足つたといふ處が無いやうに思はれます。何だか寂寥の

やうな氣持がしてそこにある、家財道具がたゞ放り散らしてあるかの樣に思はれます」と申したことがあります。

で、佛蘭西人が米人と違ふところは、こゝで又、その美點もこゝにあるのでムいます

妾は以前一人の友人と、さる佛蘭西の名家に一年暮らしたことがあります、この家に米國人の這入つたのは妾共が始めてなのでしたが、氣前のよい、愉快なお婆さんが一人ありました。そのお婆さんへ非常に懷いて行きますと、其のお禮心が、さま〴〵に心を使つて妾どもを「敎育してやる、敎育してやる」と口癖のやうにいつて居ました。が、お婆さんと骨牌遊びなぞしても一向に面白くない。又妾は乾酪が嫌ひだから、匙も付けずに居ると、若い時の訓練が好くないからだと言ひ。それから張物をしても下手ですし、物を放抛にしたり、亂雜くに束ねたりするので、平常、お婆さんに「亞米利加の敎育は確かに底拔けだ、左樣で無ければ這麽事は無い筈だ」と叱言をいはれました。で、妾どもは少くも三ケ國の社會を觀察した者の自信で居るのに、このお婆さんに會つては全然小娘扱にされてたのでムいます。

門づくし（六）冠木門

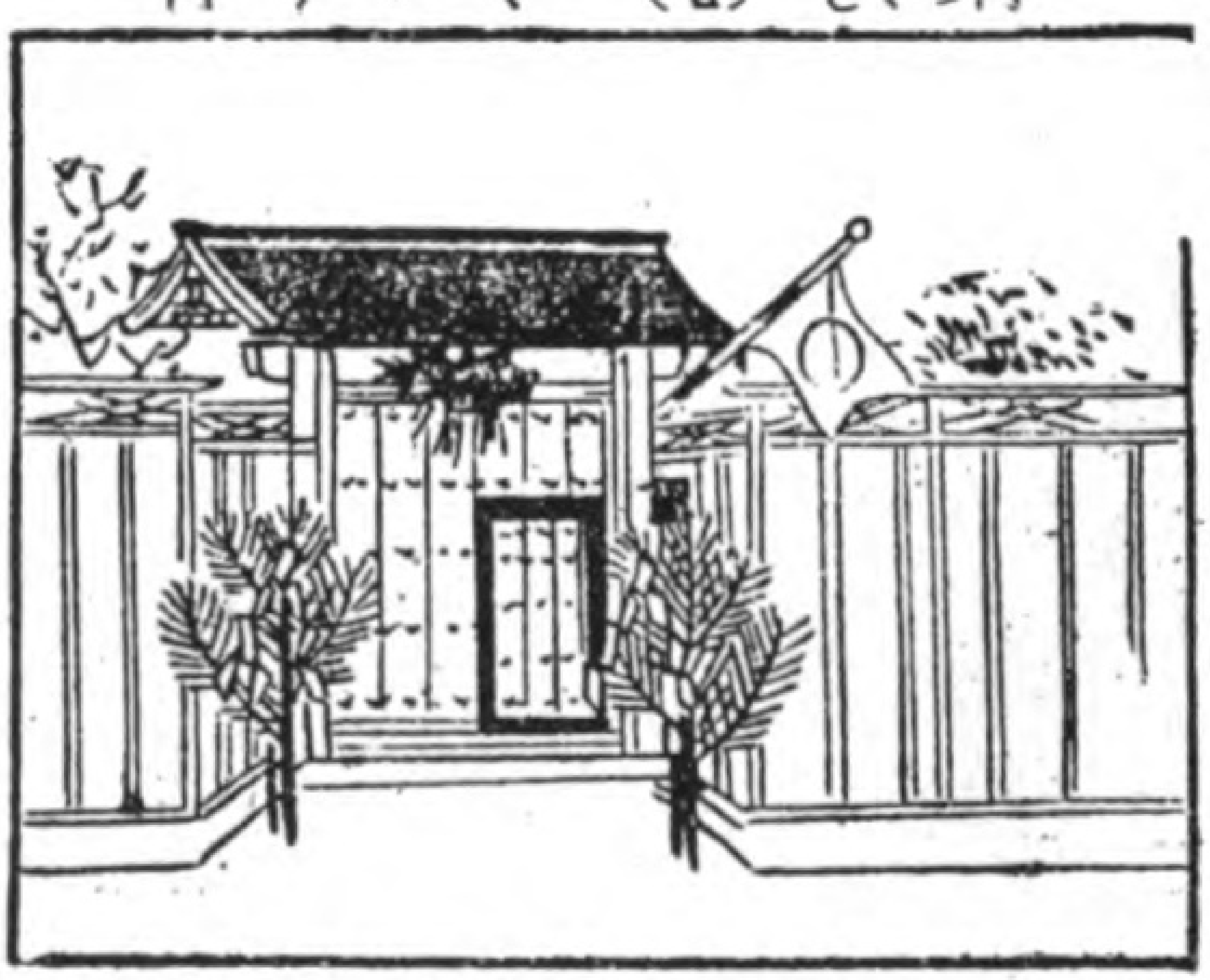


夕方になりますと、男の方は聲高に讀書する、妾どもは裁縫をする、森閑と立籠られた空氣の中には、絕えず微な、菫の香が漂つて居るやうで、這麽時には妾は再び母の膝の傍で補綴物をした小供の時代に復つたやうな感がしました。所謂「若い人々」で晩餐などをする時には我れともなく、人馴つい樣な心地になりました。丁度イヴが林檎を欲がつた際の感情をもつて居た

のでせう。

序に言ますが佛蘭西人は今でも、なか〳〵高聲に讀書する習慣があります、これは到る所で聞かれるので嘗て妾は若い人と暫く話合たことがありますが、この方は言葉の遣方が如何にも上手でしたから、知合になつたので、その言葉では、家で高聲に讀書した習慣の結果ださうでムいます。夏になつて、その方のお母さん一週に一度づゝお出くだすつて、辭遣の稽古をして被下といふことでした。

佛蘭西の家庭では、妾共のやうに物質的の愉快が取られません。餘程の良家でも、客室に火を焚くのは、眞實に客の來た時か、應接日かに限つて居ます、今でも記臆して居るが、私がループルで棕櫚を買つたことがあります。枯れぬだらうかと商人に訊くと、其答が斯うです。「それは大丈夫ですが、此奴なか〳〵氣の恕せぬ奴で、貴方は一週間に一度は室の中で火をお焚きなさるでしやうが、此奴は全體冷たい所で育つたのですから、不意に溫められると、直きに枯れて了いますからね。」這麼風で、ループルの人達には一週間に一度以上火を焚く家が有るのを想像することが出來ないのです。


門づくし（七）くゞり門

ドムーラン氏は、アングロサクソン人種の優ぐれた證據の一として、妾ども家庭に於ける多くの快樂をば擧げました。勿論是には間違はないのですが、而し、甚麼ものでも缺點はあるもので、妾は時々、その優れたといはれる物の物質上の秀て居る點、美處を充分に利用して行くといふことは、殊に婦人には困難ではなからうかと思ひます。

國民としては、絶えず擴張し、開展して行くので無てはならない。金錢にせよ、地位にせよ、修養にせよ——すべて、左樣です、然し婦人としては、寧ろ、必

要を認めて後始めて改良して行くといふ方が當然と思はれます。

所で、妾共の亞米利加では、すべてが、何事によらず、個人的で、個人に重を置きますが、佛蘭西では一般の休養、平穩といふことを重んずるのでございます。尤も米人とても全然情の方面に缺けて居る譯ではありませんが、然し、近頃になつて、亞米利加の個人的の考が海を渡て、舊世界の佛蘭西の休養的なのと接觸する樣になつたといふのは實に賀すべきことです。

殊に幸のことには、妾はこの二個の思想と云はうか、考といはうか、詰り二つの習慣が相觸れ、相接した例を二三度も見たので厶います。

それは、一人の佛蘭西の奥さんでしたが、前にお話申した家族のお奥さんに似たり寄たりで、おなじ模型に箝る方でした。外に一人亞米利加の若い、美人がありました。佛蘭西語と美術との研究に一年間一人で大陸に渡つた人ですが、奥さんが、この婦人に問ふた事があります、「貴女の夫の方は貴女が居らつしやらなくて、何うして、お暮しになるでせう。」すると、婦人は平氣なもので「然うで厶います。妾が國に居りましても、夫婦が顏を合せるのは稀しか厶いません。夫は終日、外で――妾は旅籠に住んで居ました――夫婦とも在宿の時は、毎時もお客がある始末ですから。」この答を聽いた奥さんの顏色、今でも憶ひ出します。

門づくし（八）くゝり門



も一つ、佛蘭西の奥さんと、亞米利加の處女との問答があります。之は一層適切な例と思ひます。奥さんは所謂「娘のことは他手に掛けない」といふ人で、その家族は七百年間の佛蘭西敎化の凝つた塊とも見るべきもの。又亞米利加の乙女の方は二人で、一人は十九、他は二十一。その話によると、何か新い穿鑿、

新しい研究を爲に海を渡てやつて來たといふのです、しかし、話したのは其中の雛菊の様に美しい若い方で、話は自分の希望を述たので。全で聽者はあつても無が如くで、獨白の様でした。

「妾は色々な事を知りたいと思ひます」眞實の根源から種々な智識を得たいと思つて參つたので、佛語、獨語、伊語、皆、習ふやうになりました。其故山ほどの仕事がムいます。佛語には餘程熟して參りました。もう二ケ月も勉強して居るのですもの。それから美術も覺えたいと思ふて居りますが、妾は今、美術は凡て精神の言葉即ち精神の表現だと信ずる時代に居りますので、妾はそれも調べたいのですが、マア兎に角、妾の考が間違つて居るが正しいか、美術家と會つて色々と唯して見たうムいます。書物で讀みますと妾の考は正しい様ですけれど、また書物は何事に限らず、美しくばかり書て居る様な思も致しますから、美術家に會つて妾の考の正しいか誤かを質して見たいと思つて居ります。



門づくし（九）　冠木門

聽かされた奥さんは開いた口も塞がらず。漸々のことで、「展覽會に就いての御意見は如何でムいます」と一寸と言葉の隙を見て、丁寧に訊ねました。

「えゝ、展覽會でムいますか、妾どもは未だ參りませんので、彼處には近世の繪ばかしで妾どもは未だそこまでは進みませんですから。佛國の美術では、妾はまだダビドまで學びました丈で、其次は直ぐナポレオン時代でムいます。はい、妾は埃及の美術から始めました。米國に居ましても、美術のことを論じに來る客は絶間が無いので、五百人以上とも話し

て見ましたが、どうも明埒しい要領を得ませんので、常妾計喋るのが僻で困ります。まだ熱心にやつて見やうと思ふ望みは、幾つか持つて居ますが、甚麽所を目掛け進んだら好いか解りませんので。

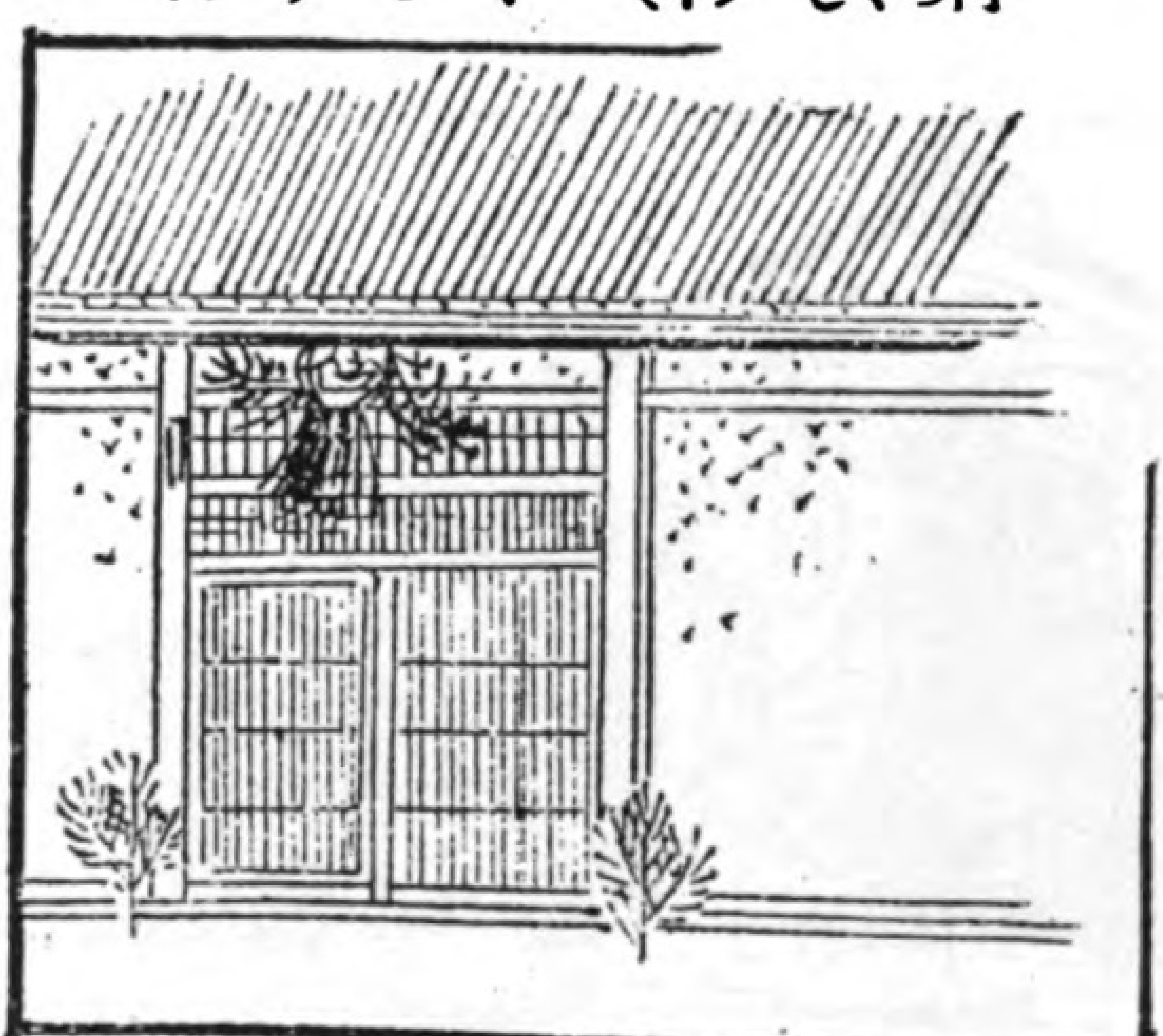
二人の問答は甚麽ものでしたが、其後度々佛人の奥さんは、あの方達の望みは什う成功たかと、妾にお尋ねになりました。

結極、這麽風で、佛蘭西の婦人は亞米利加の婦人に會ふと、何より先きに驚いて了うのです。佛蘭西の婦人は何處までも内氣で優容で、從つて、家庭は温和といふこと、調和といふことに特色があるので、物質的よりは、直に精神的の娯樂、精神的の慰藉といふことに多くの長處があります、これは妾たち米國の婦人の多いに學ぶべき所だらうと存じます。

元來家庭といふものは、國それ〴〵によつて異ひますから、各國を總括して御話しすることは、容易でありませぬ。そして今まで佛國に遊んだ外國人で、最も觀察の行屆かないのは、その家庭だらうと思ひます。佛蘭西人は家庭を愛することは一通りではありませぬ。併し佛語のうちには私共英米人が好んでいふ「家庭」といふ言葉はない。「ホイーエ」といふ語ありますが、此語は私共のいふ「家庭」には當嵌らないのです。

佛蘭西人は、此の家庭といふことを、充分に言現はす言葉を持つて居らぬかと思ひます。何故かといへば、佛蘭西人の、家庭といふ言葉の中に含まるゝ、事柄は所詮これに代ふるに「ホーム」などゝいふ言葉を以つてするのは慊らぬので、恰も印度の或る婦人が愛といふ言葉が、エル、オ、ヴ、イの四文字からなると知つて、却つて慊き足らず思ふたと同じ思ひがするのであるます。

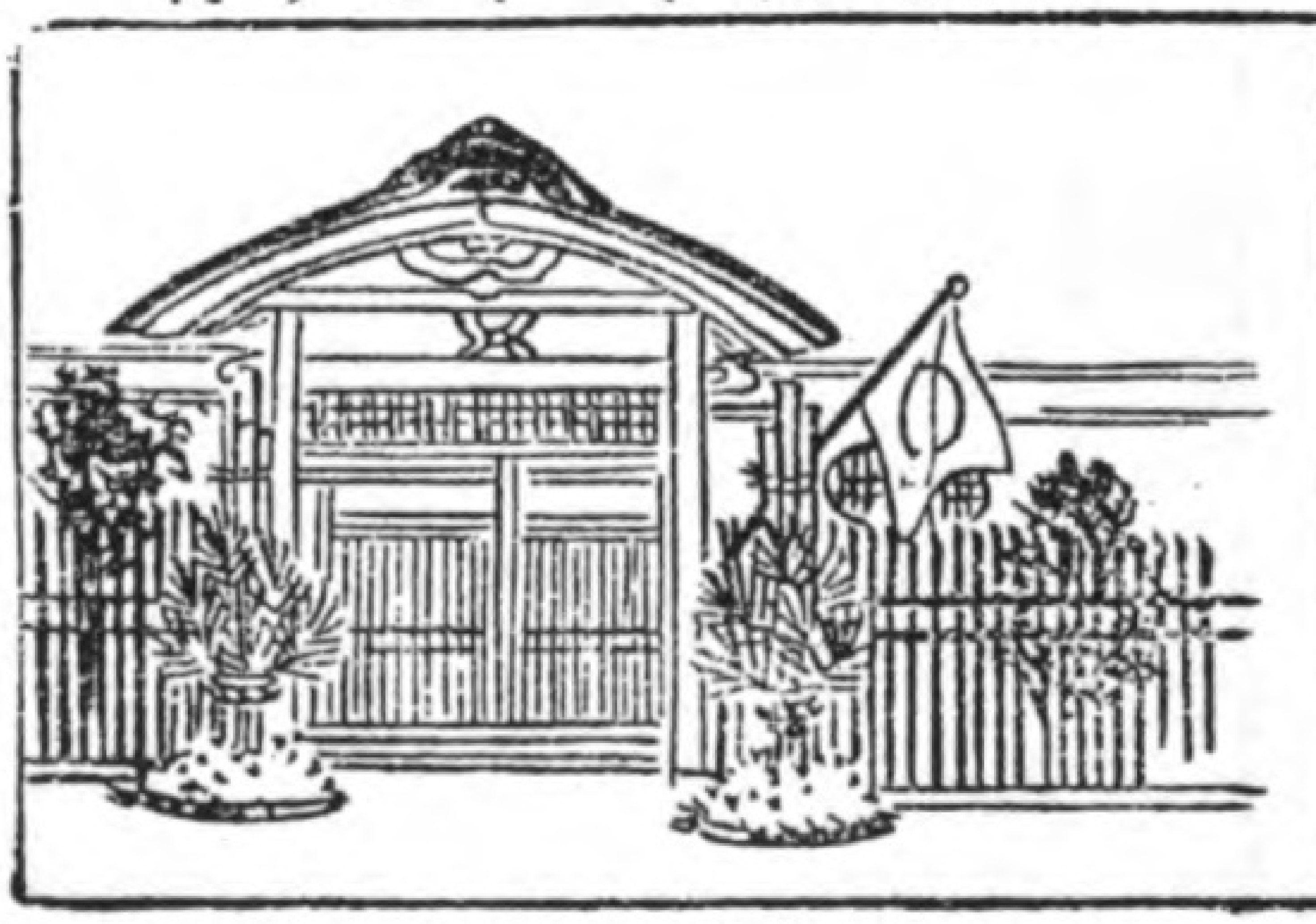
門づくし（十）くゞり門



先づ英佛両國民の家庭といふことに對する觀念を比べて見ると、英人の方は抽象的で、大抵は家庭といふ觀念が成立ちます。譬へば世界の何處にか旅行したとする、行く先々で午後の五時になれば茶釜を取出す、それから蒸氣が騰つ。英人に對つては、それが、祭壇の表號ともなれば爐邊の表號ともなるので、即ち家庭とも、小英國とも思はれるのであります。

處が、佛蘭西人の方は具體的で、物質的です。或は特別な家と場所がなければ承知せぬので、其家には、それ〴〵特得な家族を含んで居る口碑が傳はつて居る佛人は斯ういふ家を非常に敬愛して、どうしても、これを立退くことを爲ません。よし又避暑なぞに出掛けるとしても我家と同様な家を其地に建てるのが普通になつて居ります。從つて旅館や下宿屋の二階には、これが佛國民の小摸型の人々には見付からぬ位です。

門つくし（十一）くゞり門



詰り、佛蘭西人が容易に外來人を家庭の内部に入れぬ點は、幾分か支那人に似た傾のあるのも、要するに右の事情の結果です。俗な事柄に觸れて、家庭の平和を妨げられるとか、變化を來すとかいふことを防ぐのも其一方便だらうと思はれます。

斯ういふ次第ですから、私共外國人には佛蘭西人の生活に關して多く知ることが出來ないです。それで、巴里は一面は實に市ですが、他の一面は假裝の市です。多くの遊覧場や、接待人やの大部分は外來人の爲めに、その賑を保つて居るのであります。全體からいふと殆ど巴里全市が世界の市場で、世界中の異なつた國民の集合所とも見られるので、これ等の國民は、四海兄弟といつた様な社會を形づくつて居ます。從つて各自に特徴と云ふ様なものは自然となくなつて居ります。私共が巴里に行つて見たり聞いたりする、詰り巴里で交際する人々は悉皆斯ういつた様な人民ば

かりで、寫實小說家などは能く新材料を、茲に得るのであります。これ丈ならば、決して巴里のみに限られる譯ではありませぬが、その倫敦や紐育と違ふ點は、寧ろこの外にあるのです。

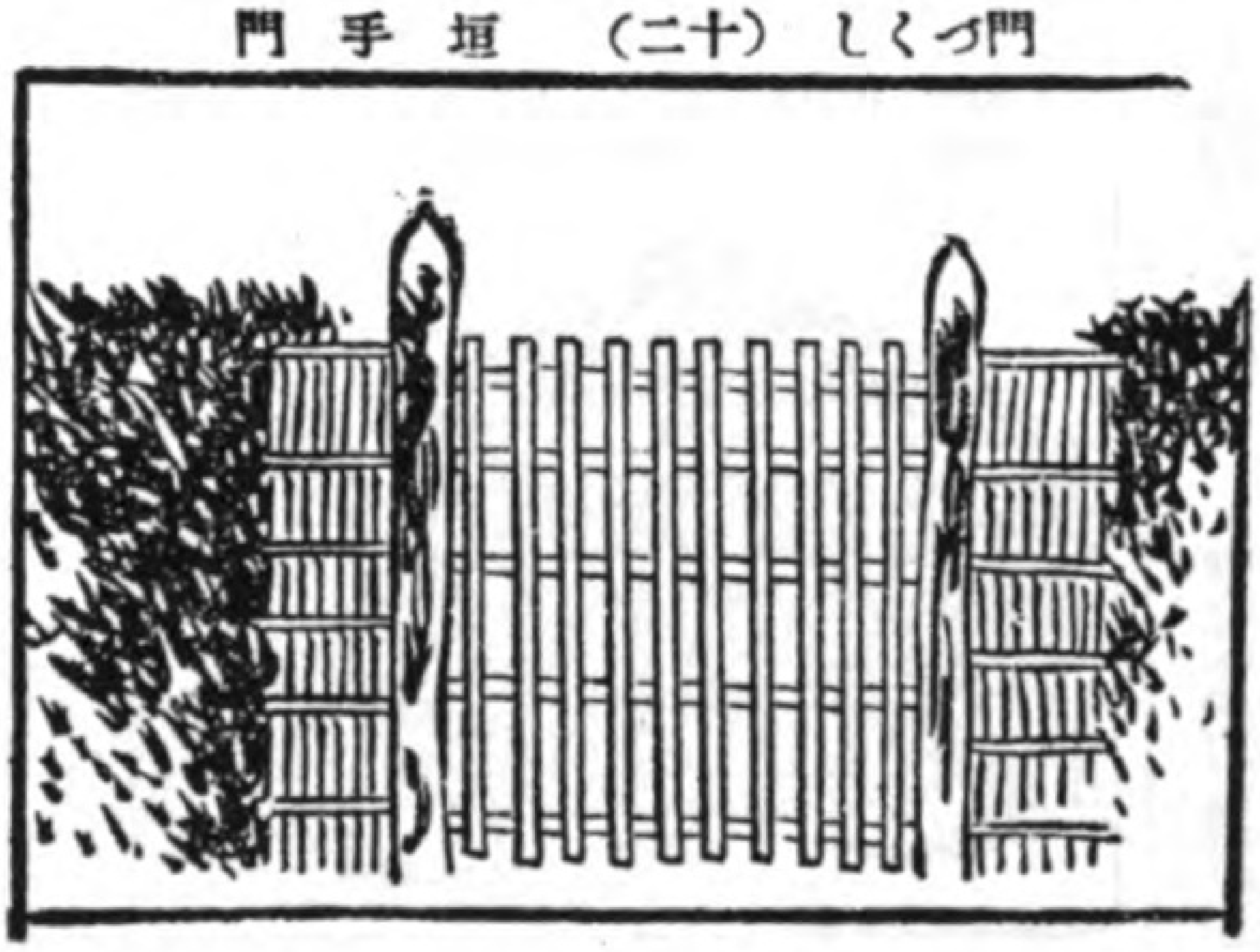
　倫敦や紐育では、其處に起つた事柄によつて、その國全體の有樣、倫敦なら英吉利、紐育なら米國といふやうに國中なべてのことが、直ぐさま、それで、推察することが出來ますが、巴里では、然うはゆきませぬ。巴里の都人と、佛蘭西の國民とは同一の定規には箝らないのであります。

　從て佛蘭西人の生活に就いて幾分でも、研究を試みられた人々は、大抵はこの事に關して述べて居られます。又多くの新聞が、事實を誤つて評價し、輕重を顚倒して掲載して居るといふことで、氏は、こんなことを申して居ります。

「記者たちは、必要といふ點より、ある一事實を評するにはあらで、新奇といふ着眼より、事實を記載するは、讀者の多く氣付かざる所なり。』

　それで、巴里市中では百五十萬の人民が一日十時間から十二時間づゝも働いて、三百六十日止まないのです。

門づくし（十二）垣手門



●アリス嬢の逸話

嬢のことは過般我國に漫遊された當時の新聞雜誌にて、遺憾なく紹介されたが、こゝに未だ耳新しき一の逸話がある、過般嬢が我國に來られて、例の大汽船マンチユリヤ號で長崎から布哇へ渡航された途中、何れの海上であつたか夫は知らぬが、航海中の無聊を慰する爲めでもあつたか、突然同船客の一人なるロングウオース氏に、着服の儘で海水に游浴を試みやう、嬢がやれば自分も屹度後から這入るからと挑んだ。が如何に挑まれたからとてと、ロングウオース氏は少しく躊躇をして居つた、するとアリス嬢は遂がは父の氣象を受け繼いだゞけあつて、自分で委細構はず先きに海中に飛び込んだので、ロングウオース氏も今は致方なく自分も嬢の後を追ふて、サもきまり惡る氣に婿殿じみた樣子で游いで行つて、暫くして二人共々船に上つたと云ふ話である。

新年の遊び

一陽來復して人の心も自然に新らしく長閑なり、家の内には和氣滿ちて笑ひ聲のさゝめくあり、戸外には門松のみどり色深ふして日の丸の旗は春風に飜がへり道行く人の顏も暢びやかにして和氣を帶び、乙女は遣り羽子童は紙鳶あげに餘念なし、さるほどに正月は一家内の和樂を增すべきよき折なればいづこの家にても家族團欒して睦み語らひ或は、歌がるた福引双六などそれ〳〵に興味の多き遊び事の催ふしあるべし其の遊びの中に就て尤も無邪氣にして、罪なきもの二三を撰まんか、

△さがし物

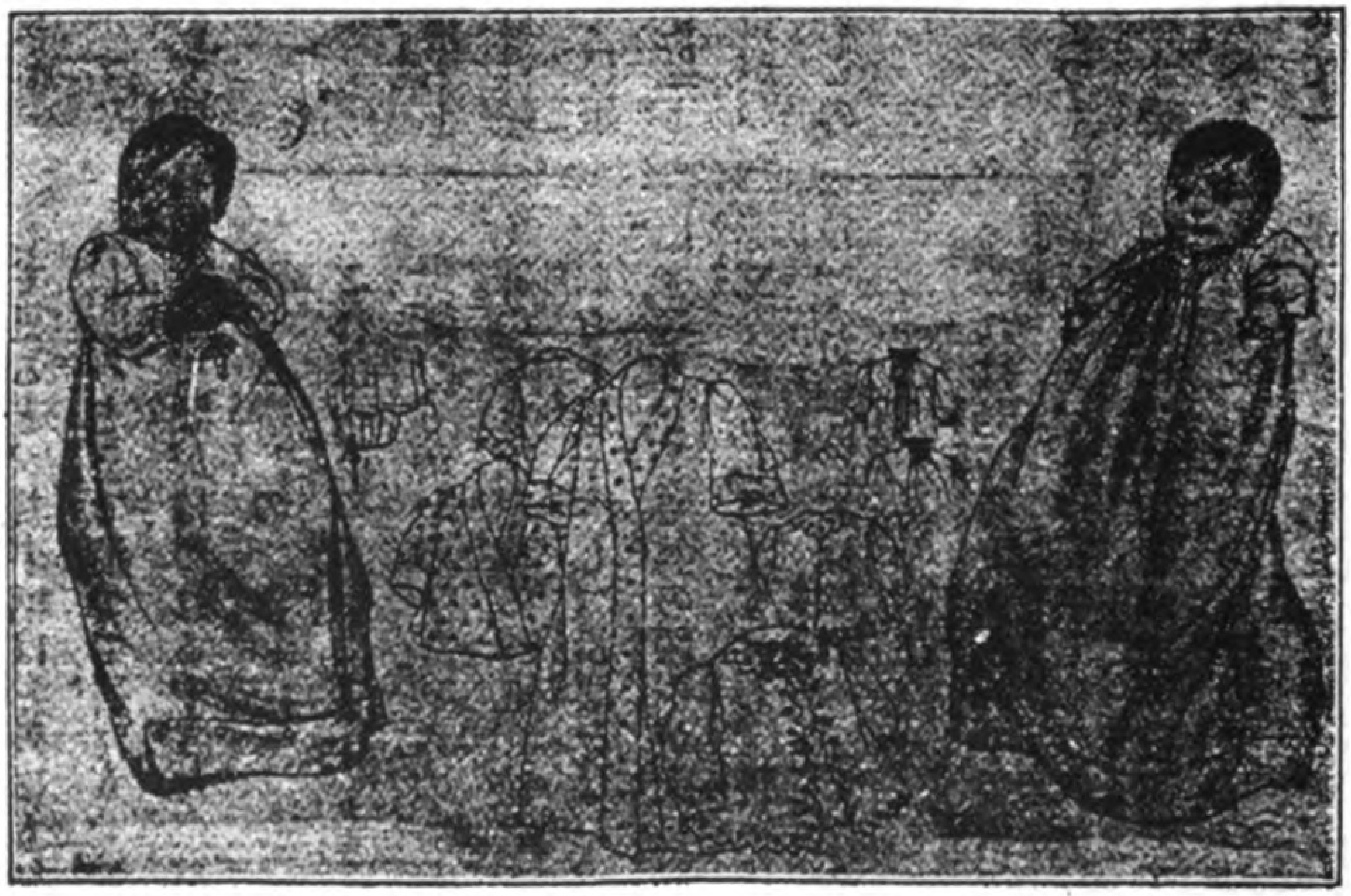
これは極く稚なき小供に向く遊びなり、まづ一定の座敷を定め置き、そこへ指環又は懷中時計などを隱し置き、各々それを

赤坊の着物

（右）不斷着（首と手首の周圍に細かな襞をたゝみ、紐にて寛く括り、足は全部蔽ひ切れた樣に仕立つべし、但し二呎六吋より長かる可からず、（材料はカシメナかリンチルなど適當なり）

（中）きもの（長いのや短いのや、いろ〳〵、重にフランチルカシメナ等にて作ろ、是はもと日本の着物より出でたるものなり）

（左）寢衣（冬季なればフランチル、夏季なればキャラコかリンチルを用ふるをよしとす總體圖に示す如く寛かに仕立て、裾の所は鈕若しくは紐にて留めあれば、赤坊に着せて蹈脫ぐことなく、從つて寢冷の患なし。）



捜し出して勝負を爭ふ遊びなり、最初に見出せし人は態と知らぬ風して坐につき、他の人々が大抵見出し、一同席に就きし後、指名の順序にて其所在を明かすなり、品物が障子の棧にあるを知らずして蚤取眼にて捜すなど、いと興ある遊びなり。

△目鼻づけ

これも又極めて稚なき少女の遊びごとなり、壁若しくは襖子に眼鼻のなき人の顔を書きたる物（繪草紙屋にて賣る）を貼りつけ置き、目を蔽ふて一人づゝ厚紙にて造れる目鼻を持ち行き、手さぐりにて其顔に貼りつけるなり、或は額に鼻がついたり、耳の上に目がついたりして、見て居る人の腹の皮をよらす所ろがこの遊びの趣向なり。

△さゝやき

これはひそ〳〵話の聞き違ひを生じて可笑味をつくる趣向なり、まづ四五人環形に坐し始めの人が極小聲で何事か隣りの人へさゝやくとそれを又隣りの人へも自分の聞いたと思ふ通りにさゝやき次ぐなり、さて一番終りにさゝやかれたる人が、其事柄を一坐の人に話して見ると、其事柄は案外にも初めさゝやきし人の言ひし所ろと全で違つて居たり、飛でもない誤解を生じたりして頤がはづれるやうな事あり

△癖の當選

これは一座の人々に「ハイカラ」とか、「大食家とか」「放螺吹」とかいろ〳〵其人の癖を見立て（尤もなるべく罪のなき所を取るべし、決して其人の弱點とする處を取るを避くべし）、投票をなし、それに福引を添へて出すなり、さて其の福引が大に興を添ふるものなれば見立をおもしろくすべし、譬へば「ハイカラ」には卷煙草、「放螺吹」には吹竹、「大食家」には大飯匕の類なり

△人買ひ

これは老若男女混み入りの大一座にて尤も嗜味ある遊びなり、まづ買手となる人を二三人別室に置き、他の坐敷にて毛布を頭より被ぶせて其の誰れなるかを分らぬ様にし、右の買手の前につれ行き價をつけさせ一番高く値ふみした人に賣る時、始めて被づきを去るな

り、そこで三百圓のお婢どんが顯はれるかとおもへば、又三錢五厘の文金高髷の令孃が顯はれ給ふなど頗る可笑しき遊びなり。

兒童の貯蓄

兒童や少女をして貯蓄心を養はしめるのは一家永遠の爲めであるのみならず、畢竟又一國繁榮の基である。

又小供に貯蓄心を養ふのは單に金錢を貯蓄するばかりでなく其の人格と性情を養ふものである元來貯蓄といふものは人に明日の希望を與へるものである、殊に貯蓄は人を快樂ならしめ又勤勉ならしめ、誠實ならしむるものである、殊に貯蓄心を有するものは僥倖心を去り、怠惰心を去り、放逸心を去らしむるものである。

小供の貯蓄心が其の人の心の上に働らきを及ぼす實

赤坊の着物

(右)浴用前垂
(中)外套(カシメヤにて作る但し頭巾は寒中なれば是よりも深くし、もつと地質の温かき物を選ぶ可し)
(中)涎掛(リンテル又は廣東ネルにて作る)
(左)ゴム靴
湯たんぽの被ひ(フランネルにて作る)
哺乳瓶の袋(フランネルにて作る)
靴(羊毛にて作る)
帽子

奥樣向きの下駄

は塗臺の元祿小町の光澤消しか、或は蠟色で高さは一寸七八分、是れに繻珍厚板模樣の鼻緒……地色は灰色、寂茶オリーブなどが專ら流行致しますが、夫れ等をすげて表は何れも本南部で三圓以上四圓五十錢位です



例を見るのに、嘗て某伯爵夫人が獨逸公使の家族と箱根から汽車を同ふして歸京された事がある、汽車が小田原についた時に伯爵夫人が金米糖を當年十二三歳の獨逸公使の子息に與へられました、すると其の子息はそれを頂いて直ちに附添の從者を呼び、その懐中から十錢銀貨を出しこれで半紙十枚を買つて來いと命じましたが、從者は二十枚買つて來ましたから、公使の子息は十枚といつたのに二十枚買つて來たのはどうした譯かといと不興氣に言ひました、從者は半紙一帖は二十枚で一帖より少しは賣らないとの事を申すと、子息は十枚の紙を大切そうに懐中に收め、殘りの十枚で紙袋を造り、その金米糖を一々分配して之れに收め、東京へ歸る土産に致しませうと袋の上に父母姉妹より奴婢の類に至るまで悉く其の名を記して鞄の裡へ收めました、伯爵夫人はこの景狀を見、大に感服し、貴子はどうしてお金をお持ちですと問ひますと、私は父上より毎月學科勉强の賞與として十錢づゝ貰ひます、私はそれを貯へて置きますと申されたから、伯爵夫人は成程と、この子息が平常の心掛の綿密なるに感心されたといふ事である。

僅か十枚の紙でも無益には費さないといふ節約の心さへあるに況して一掬の金米糖を分配して家族一同の土産にせんといふ心掛の周到なるは中々大人も及ばぬほどで斯る大家に育つた小供にしてはこの心掛のあるは、平素から貯蓄心の養成をした結果であると言はねばなりません。

家庭の秩序

日本の家庭は何だか始終ごた〳〵と用事たらけで、女中ばかりでなく、奥様までが朝から晩まで働らいて居るやうでも、少しも片附かぬのは、一體どういふ譯かと申すとこれは家庭上の仕事に秩序がないからであります、その不秩序にも種々あるけれども、就中最も用事の妨げとなり、仕事がごたつくのは客の出入の不規則なのと、飲食物に手のかゝるのが多いからであります、お客の方は用事がすんでも容易に歸らず、主

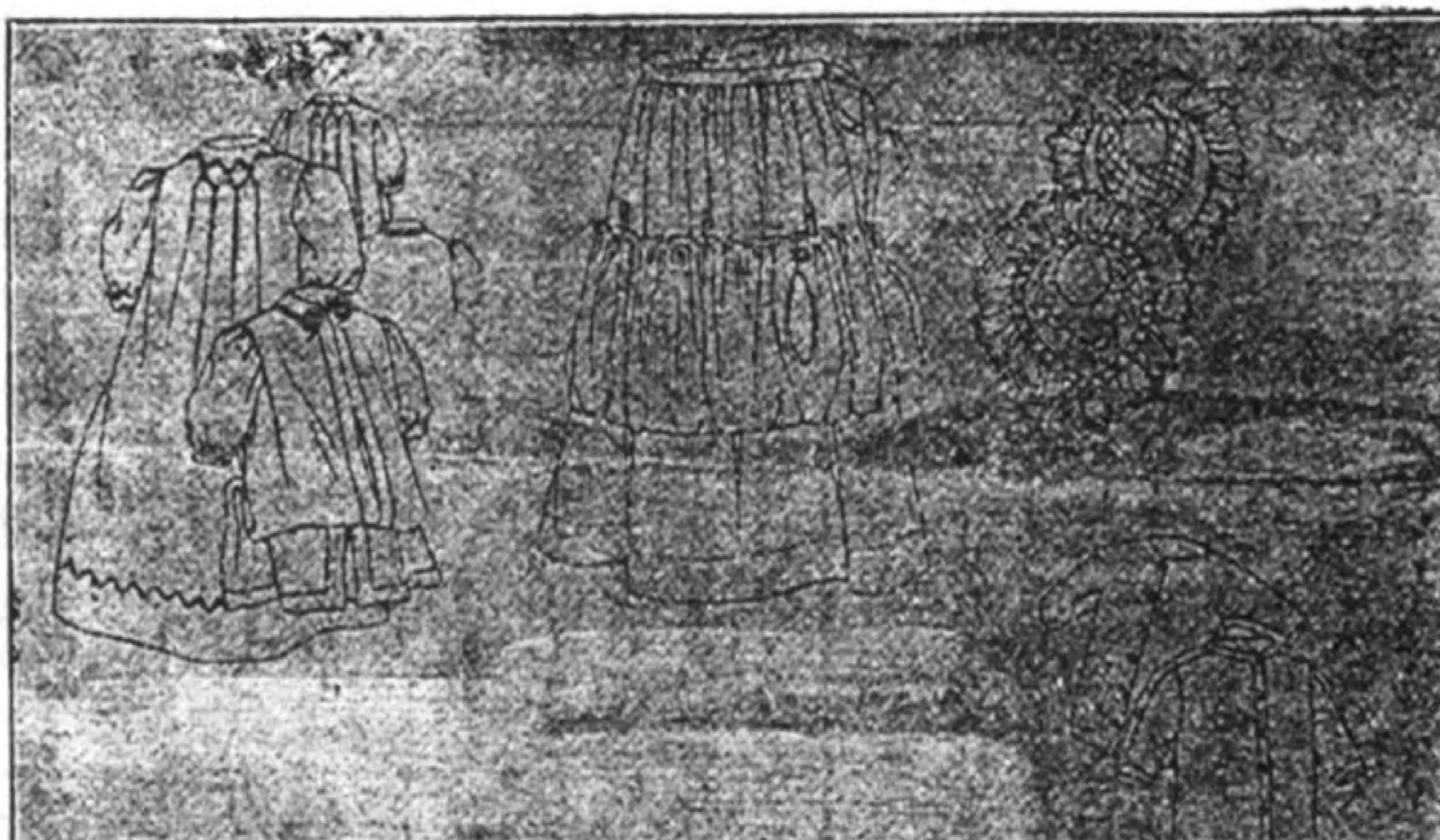
人の方でも客が來たなら、是非何か出さねば濟まぬ樣な氣になつて、御飯時でもないのに酒を出し、馳走を注文するといふ風ですから勝手元では思ひ掛ない仕事が出來て用事はすべて番狂はせになるのであります、ですから、家事を整へる方からいへば、此方から招請した客の外は食物など一切出さぬといふ西洋風にしたならばよからうと思ひます。

赤坊の着物

（右）涎掛
（中）赤坊用襦袢
　　　女兒用　袴
（左）上衣（フランチル又はカシメナ）にて作り、襞の取方縁の飾縫ひ等は總て圖の如し

令孃向きの下駄

お品の能いのは矢張り塗臺で鼻緒は繻珍の元祿模樣が宜しう厶いますが、美索那織と申して一寸緞子のやうなもので金泥銀泥を以て元祿模樣を出しましたのが最新流行で厶います、色氣は元祿茶……茶の赤味を持たもの……或は茜色が流行で、相變らず出ますのは梅鼠小豆等の繻珍で厶いますが價格は前同樣三圓から四圓五十錢



小遣帳しらべ

西洋では買物の拂は一週間毎ですが日本では一ト月毎、地方によッては二タ月目或は半年一度といふやうな習慣になッて居ります、つまり日本は西洋に比べると悠長なのでありますが、仕拂ひ日の期日の短かいだけ、それだけ、冗費のたゝぬ譯であります、日本風の世帶では一ト月經

つて月末の拂ひが多いのに驚ろいて、來月からは大に儉約をしやうと思ひ乍ら、矢張支拂期日が長いので知らず識らずの間につい冗費が嵩むといふ樣な事になります。尤も一月拂といふ風習を今日直ぐに改めるといふ事は出來ないにしても、せめて小遣帳を一週間毎に調べる事丈でも實行したらば確に利益がありませう、さうすれば前週の支拂ひに鑑みて冗費を省くやうになります、西洋では生活費の事のみならず、洗濯でも、掃除でも、三度の食事の献立でもすべて一週間の間の事を皆土曜日の夜に定めて置き、食物の如きも煮炙して置いて差支ないものは一週間分一度に調へて置くといふ工合ですから、家の用事は非常に捗取り、且つ經濟となるのであります。

庖厨の經濟

いづくも同じ世帶持といふものは家事萬端に注意深きものですが、別けても西洋の家持は細かい處ろに行屆きます。たとへば晩餐の食卓に馬鈴薯一ツ殘りても直ぐこれを翌日の料理に加へ、葱や、人參の切端までも鍋に入れて甘汁の役をつとめさせます。又三度〱煮立てる肉を用ひては何かにつけて不經濟故、炙り肉などは例へば日曜日に七八斤も一時にこしらへ置き、月曜、火曜は其肉をちよつと温めて今度は少し風を變へて他の料理に仕立て、新らしき者の樣にして食卓に上すことゝなツて居ります、サンドイッチの殘りなどは翌日それを細かくして馬鈴薯を湯でゝ擂つたものにつゝみ、パン粉をつけて揚げ、ざつとコロッケのやうにして膳部に上すなど、同じ材料を無駄のないやうにして使用するのは中々巧みなものであります。

▲流行の婦人下駄

戰爭中景氣の沈んで居たゝめ何れも手控へて居たのが平和克復凱旋と云ふので俄かに仕入れに掛つたゝめ一層景氣付いて又幾分か騰貴したやうな形で昨年に比べると總じて三四割高でムいませう一般に社會が贅澤になつたのですか安い物よりは上物の賣行きが宜いやうで總用よりは履き宜いのと云ふお好みの方が多く臺は益す低くなつて一寸四五分と云ふ處が專ら流行致しますが鼻緒は又少し太目になつたやうで昨年の今頃は五分と云ふのが專ら流行ましたが今年は六分が最も出るやうで是れは低い下駄には餘り細くない鼻緒の方が反つて履き宜からでせう

宮中の御獻立

申すもいと畏こきことにはあれど、新玉の年立ちかへる今朝錦鷄勇ましく曉を告げ渡り九重の空、紫の雲棚曳きそむるころ、我が大君、后の宮、御二方には御寢所を出させ給ひ、御盥嗽ありてより、もろ〳〵の御儀式行はせ給ふ事は天が下の民草の諸共に仰ぎまつる次第にこそあれ、わけてこの芽出度き元朝の晴れの御膳の御模樣に就ては、九重の上の御供饌、定めて御鄭重なる御設あるべしと萬民の等しく冀ひまつる處なれば、聊か洩れ承はるまゝにつゝしみて記さん

　兩陛下正月三ケ日に聞召さるゝ御儀式の膳部といふは至極鄭重嚴肅なるものにて、上代延喜式の節會などに取り行はれし嘉例を御用ゐ遊ばさると申す事にて、まづ黎明には曉の御湯漬と申して一汁三菜の御膳を聞召され、次に晴の御膳と申して同じく二汁五菜の御膳に向はせられ、次に朝の御膳となり。一汁三菜、御二の膳に同じく一汁三菜、御三の膳に又二菜の御膳を聞召され、次に御晝の御膳に一汁三菜、御二の膳に一汁三菜、御三の膳に同じく二菜、それより御夜食に一汁三菜、御二の膳に一汁三菜、次で夜に入り御奥にて御盃事あり御雜煮を食召す、概略まづ右樣の御儀式にて都合六度び、式御膳に向はせ給ふなりと洩れ承はりぬ、さて元日の御式膳の献立を記し奉らんに

曉御湯漬

一　味噌漬　甘鯛
一　御汁（すまし、水菜、玉子引）
一　鰹煮　氷豆腐
一　御飯

晴御膳

曉、御湯漬済み、續いて晴御膳を召させ給ふ

一　附燒　小串鯛
一　菱葩
一　淺漬大根

この菱葩と申すは民間のお雜煮にあたるものにて薄く平にのべたる

御餅を燒き、その上に菱形に切りたる小豆餅を置き、中央に一旦湯にて味をつけたる牛蒡に御味噌を引きたるものをのせ下の御餅を半月形に折返し御紙の上に置きたるものなり

同御二の膳

一 割海老、燒鹽
一 雉子酒
一 砂糖煮　勝栗
一 御吸物　蛤

雉子酒と申すは雉子の抱身を鹽又は醤油につけたるを薄くへぎて御盃に五切を入れ上より御酒をつぎたるものなり

朝御膳

一 御鱠(霜降鯛、高砂湯波、紅梅かん、花生姜金柑)
一 御汁(摘入牛ぺん、志めじ茸)
一 御煮物(小鴨、土筆)
一 御漬物(奈良漬、守口大根、白瓜)
一 御飯

右は一の御膳にて左に御飯、右に御汁、御飯の向ふに、御漬物、御汁の向ふに御鱠、中央に御煮物を配置さるゝなり、御鱠紅梅かんはよせ物を紅梅にうちぬきたる物、金柑は葉附の金柑にて、霜降鯛、高砂湯波などすべて御料理の外形によりて種々の名あるものと思ひ奉るべし



同御二の膳

一 附燒鯛
一 時雨煮　卸し身鱚
一 御煮染　小はら木湯波
一 御汁　鱸

同御三の膳

一 御炙物　小鯛
一 砂糖煮　隱元豆

御晝御膳

一 御鱠(鹽鮭薄重、巻さより、白髮栗)
一 御汁　魴鮄
一 煮物　鱚、若大根
一 御漬物
一 御飯

同御二の膳

一 鱧　源氏燒

一煎上　はた白
一田夫　みじん　昆布
一御汁　鯛

同　御三の膳
一御炙　小鯛
一砂糖煮　百合根

御夕御膳
一煮凍り鯛
一御汁(小花豆腐、生姜入)
一御煮物(よしの海老、花菜)
一御漬物
一御飯

同　御二の膳
一附焼　鯛
一飴煮　巻鯉
一御汁　春子だひ
一和か煮(筍、木口松茸)
右御膳の外大膳所より別に次の御鉢盛等調進致すなり



一日の出蒲鉾　二色玉子
一時雨煮　鯛さから麸
一照焼　さわら
一新山茶花
一煮浸し　餅
一煮染　長芋　〆どうふ
一御吸物　鰈
夕御膳終らせられて後、夜に入り御奥にて御盃事あり、此時御雑煮を捧し上ぐるなり
一御雑煮(かゝみ大根、小芋、水中貝、煎海鼠、尿高餅)
一向栄(松風焼さより、数の子、花かつた、蜜柑)
一御吸物　鯛
右は元日の御式御膳なり、猶二日三日の御膳は元日と御取合せに多少相違あれど大體は元日に準じたるものなりと洩れ承はりぬ

新年の料理

松廼屋主人

(一)重詰もの

第一重——七種（鮭の小串焼、二色玉子、花くわい、松葉串、蓮根のり巻、結び昆布、つぶ椎茸）

△鮭の小串焼

生鮭の肉（生鮭を得難き地方にては鹽鮭、又鹽鰤を粕漬にしたるものにてもよし）を一寸四方に切り、これを味噌又は薄鹽にして小串にさして焼きあげるなり

△二色玉子

二色玉子は蛋白と黄身とを分けてよくかきたて角なる器に黄身ばかりを半分ほど入れ、これを蒸して又其上へ白身を入れ再び蒸しあげ冷えたる後、よきほどに切りて用ふ

△花慈姑

慈姑をざつと茹でゝ皮を去り、後絹糸にて花の如き形にきるなり、尤も始め湯煮する時少し鹽を加ふるもよし

△松葉串

銀杏を割りて後炮碌にてよく炒り、薄皮をとり、これを松葉に五粒ばかりづゝさし、味醂、醤油、砂糖にて煮るなり

△蓮根海苔巻

これも蓮根を湯煮して皮を去り竪一寸二分に切り又これを細く割りて淺草海苔を火にあぶりよきほどの巾に切り右の蓮根を一本づゝ巻くなり

△結び昆布

青昆布を水につけ置てよく洗ひ一寸ほどの巾にきりこれを三つ折に疊みて適當の大さに結びて切り後、湯にてよく煮、柔らかになりたる時味醂、醤油を入れて又よくよく煮るなり、さて醤油のよく昆布に染みたる頃砂糖を加へ又暫く煮てよし、又椎茸も同じく水につけてよく洗ひ味醂、醤油にてよく煮るなり

右の如く七品を一品づゝ煮たるを重の中へ詰め合す

なり、尤もこれは品の取り合せを示したるまでなれば地方により魚菜にそれ〳〵の習慣あれば、其土地に随ッて取り合すべし、七品は五品にてもよしと知るべし。

第二重――三種（小餅甘露煮、牛蒡飴煮／搗栗砂糖煮）

△小餅甘露煮

まづ小餅をよく洗ひ、これを串にさして素焼にしたるを醤油と味醂にてよく煮つめて後飴を加ふべし。

△牛蒡飴煮

牛蒡の皮をこきさり水にて洗ひ一寸許りに切りたるを巾二分位に割りこれを十分薄くきざみ水にてよく洗ひ笊にいれて水をきり置き、さて鍋を火にかけ、右の牛蒡を空炒にし、牛蒡より少し水氣の出たるに醤油を加へ蓋をせずして箸にてかき廻しながら煮るべし、さて飴を其中へ入れ飴の溶けるを見はからひ火より外しこれに罌粟の炒りたるをふりかけてよし

△搗栗砂糖煮

搗栗を洗ひて鍋に入れ、水にてよく煮、柔かになりたる時醤油を加へ、又暫時煮たる處へ白砂糖を入れて煮つめるなり。

右の取り合せも又好みによりてどの樣にするもよしタトエば搗栗の代りに小慈姑の飴煮したるもよく、餅の代りに若さぎなどするもよし

第三重――五種（小ゑび素焼、蓮根湯煮／芹湯となし蜜柑、はり生姜）

小ゑびは生なれば申分なけれど素焼にしたるものにてもよし、ざつと湯煮して皮を去り一分許りの小口切にし、又蓮根はざつと湯煮し皮を去り十分薄く小口に切りてよし、次に芹はよく洗ひ湯煮してかたくしぼり五分ばかりに切りて置くべし、蜜柑は皮を去り白き筋をとり一袋づゝに離して置くべし、次に生姜はよく洗ひ皮をとり纎に打つべし。

右の如くしたるを重につむる時は一品づゝ置場を分ち綺麗につめ合せ置き別に二杯酢を作りて汁注器に入れ添へて持ち出し小皿によき程盛りて後前のかけ

汁を用ふべし。
又此酢の物の代りに數の子を重詰にし又は鮭の氷頭鱠を用ひ、或は銚子に蜜柑を添へあるは大根、蕪など花形にして三杯づゝを用ふるなどあり、又重詰を用ひず前の如き品々を鉢盛にして客の前へ出す事もある。

（二）吸物膳

吸物は昆布松魚の煮出しに醤油にて味をつけて、これに鹽鱈を倚ぎりにして水につけ置きたるを入れて暫時煮て直ぐに用ふあしらひは青昆布の細く切りたるか海苔など添へてもよし、吸口には柚子皮をへぎ、又味噌汁にて鴨など用ふる事もあり、又蛤などを用ふるには貝のまゝよく洗ひざつと口を開きて後貝をすくひあげ其煮汁を裏漉にかけこれに醤油を加へ鹽梅して後用ふべし高等なる料理には鶴、雁など用ふる方多し。
吸物膳には盃を打つて出づるを本式となせど略する時は前の重詰其外をのせたる大盆の上に三組の塗盃を臺にのせて置くべし酒は必らず屠蘇を用ふべし、尤も銚子に入れて出すべし。

（三）雑煮餅（熨斗餅、霜餅うす切 銀杏大根、芹、芋の子）

大凡一天四海の中、上は紫雲たなびく九重の奥より下は津々浦々の賤が伏せ屋に至るまで凡そ家として正月三日雑煮を祝はざる家はなく、又其の家々土地々々の習慣によりて種々の仕來りある事故一概には言ふべからねどまづ其の概略を言はゞ昆布と松魚の煮出しにて醤油にて味をつけ清汁をこしらへ置くべし、さて餅は小鏡餅の習慣あり、熨斗餅の習慣あり、土地によつて様々なれどまづ大抵人數に應じて薄くあぶり、これを湯にて煮置き、火より外し置き又霜餅を細かに切り湯にて洗ひ水氣をきり置くべし。次に銀杏大根の皮をさり竪四つに切りこれを小口切にしてざつと湯煮して水氣を切り笊などに入れ置くべし、又芹、京菜いづれにてもよし湯煮してよく揃へ堅くしぼり五分切にして置くべし、芋の子は皮をむき二分位の薄みに切り、これも湯煮して水を切置くべし、
以上五品にて用ふる時は清汁をよく煮立て餅の湯煮

したるを杓子にて二切のせてすましの中へ杓子の儘暫く入れて暖め、椀に盛り其上へ右の大根、芹、芋の子、蒲鉾など少しづゝ上へ置き其上へ清汁をかけてよし、斯くすれば餅は軽く、汁は粘らずして風味極めて佳きものなり、又右清汁の代りに白味噌を用ふる事あり。

（四）膾　鰤、大根、柚子

膾は、鰤を三分計りの賽の目に切りこれを酢につけ置き、大根を膾引きにて引き塩を少し入れてよく揉みてかたくしぼり右の酢につけ置きたる鰤の中へ交せ、食塩にて味をつけ、柚など薄く切りたるをけんに用ひてよし、又生盛として大根、海松などあしらふもよし、けんは金柑の葉つきの儘用ふるもよきものなり。

（五）煮物｛棒鱈、大根、牛蒡、胡蘿蔔／昆布、蒟蒻、芋の子｝

棒鱈を四五日間水につけ置き柔かになりたるを細かに切り、これを味醂と水にてよく／＼煮置き充分柔かになりたる時醤油を加へよく煮置き砂糖をいれて又煮るべし次には大根の皮を去り五分ほどの輪切にし又牛蒡を湯煮して一寸位に切り太さは二つに割り、にんじんの皮を去りて三分位の斜に切り昆布を洗い巾四分計りにたゝみて結びよき程の大さに切り、又芋は皮をとりよき程に切り置きこんにやくのよき程に切りたるを食塩にてもみよく水にて洗ひたるを前の鍋を煮たる跡にいれてよく／＼煮染でよし、こは正月の煮〆物として用ふるものなり。

（六）焼物

焼物は鰈、鯛、魴鮄、鰤などよし、いづれも鱗を去り腹を開きて素焼にしたるものなり。

（七）中皿

中皿物は塩引鮭の焼きたるものに蜜柑など切りてあしらひたるものよし、又は蒲鉾に栗きん團をあしらいたるもよし。

（八）猪口もの

これは田作、黒大豆、牛蒡など煮たるを用ふ、田作はよく煮たてたる湯の中へいれてかきまわし、笊に入れてよく／＼水にて洗ひ、これを醤油ばかりにて炒り煮にし、砂糖又は飴など好みによりて用ふ、牛蒡は細

くきざみて右田作のあとへいれて煮るべし、黒大豆は水に漬け置て湯にてよく煮、柔になりたる時醤油を加へ又よく煮染て後砂糖を加ふべし、一汁三菜なれば中皿物の猪口は用ひざるをよしとす。

(九)汁

本膳の汁はつみ入、又は魴鮄、すゝき、銀杏、大根など用ひてよし。

(十)菓子

粒入羊羹、千歳餅、腰高饅頭など用ふべし、いづれも楊枝一本を添へて出すべし

(十一)茶

茶は平常と違ひ福茶と言ひて茶の中へ梅干と昆布を入れて出すべし、尤も濃茶なれば大なる茶碗へ十分煮立たる湯にて人數に合せて茶を入れ湯も見計らひて入れたる後昆布と梅干とを入れて持ち出すべし。

▲新年の重詰料理

▲羽子板蒲鉾　魚の肉を蒲鉾の擂身になし、四寸計りの杉の羽子板へ附けて蒸すべし、而して其上に紅にて色々の模樣を附するなり

▲羽子の小鴨　小鴨の作身を細かく叩きて丸め醤油味醂の煮立てたるへ鴨の皮を入れて更に能く煮、夫より皮を取出して先の丸めたる肉を入れて煮、之を冷まして小羽を三本づゝ羽子のやうに刺して出すべし

▲松風細魚　細魚を腹より開き骨を去りて鹽水にて洗ひ能く水を切りてうれらせ竪に串に刺して焼きこれにテリを敷き芥子を振掛けて用ゆ

▲雪の梅　長芋を一寸に切りて五角とし梅の花形に剝き茹でゝ味醂、砂糖、鹽にて味を附け別に長芋を茹でゝコシコにしてウキ粉を少し混ぜ、それにて梅の花を包みて蒸籠に掛け蒸すべし

▲末廣筍　筍の子の皮を剝き、これを茹でゝ穂の方を一寸五分位に切りそれより四分位づゝの切掛にして開けば末廣の形の如くなるべしそれを味醂、砂糖、酢と合せたるものにて煮附け唐辛子の味を加へて能く附きたるを出して盛り合はすべし

以上は重一個に見積りたるものなれど獻立の都合にて羽子板と羽子と松風細魚と雪の梅とを各一重となし末廣筍を一重となし凡て三重とするも佳なり(石井泰次郎氏調)

洋食　一品料理

稚鶏のサラダ

よく煮た鶏の冷たくなりたるを細かに切り、又オランダ三葉を鶏の半分位細かく切り、若し鶏も三ツバが二合位あらばサラダ、ドレッシングを大匙三杯の割合にて一緒によく混ぜ合はせ、鹽を適宜に入る可し、三つ葉を除きてもよし。

魚のサラダ

煮たる魚にても又焼きたる魚にてもよし、細かく切り、サラダ、ドレ

ツシングと混ぜ合はせ、萵苣の葉の上にのせて出す。

スクラムブルド、エッグス

鶏卵三個、牛乳を大匙三杯と塩を小匙に半分と胡椒一振とを皿に入れて二三度かきまはし、揚鍋にバターを小匙に一杯入て其とけたる時前の材料を入れて下よりまぜながら煮る可し、堅くなるまで煮る可からず、軟らかき方却而よし熱き内トーストと共に食すべし。

鶏のポットパイ

鶏を骨のまゝ細かに切りて深鍋に入れ、鶏一羽に一升の割にて沸騰湯を注ぎて一時間煮、塩を小匙に山盛一杯入れて又一時間煮、其間に鉢へ麦粉二合を篩入れ又塩を小匙に半分とベキンパーデを小匕に二杯入れてよく混ぜ合はせ、一合位の水を注ぎて捏れ、之を匙にて沸騰ち居る鶏の鍋へ落し入れて鍋の蓋をなし、猶十分間煮る可し、熱き内出すべし。

エスカロプト、オイスター

鉢の底に牡蠣を一層ならべ其上にパン粉を五分程の厚さに置き、又其上にバタを細く刻みて散布し又塩と胡椒とをふりかけ、次に再び牡蠣パン粉胡椒を順々に鉢が一杯になるまで重ね入れ、一番上にパン粉を置きて、上から徐ろ／＼牛乳一合と牡蠣の汁一合とを注ぎて三十分間其儘になし置き、後火の強きオーブンに入れて三十分間狐色になるまで蒸焼にして鉢の儘膳に上す可し。

揚げ豚

片側に五分位脂肪身のある豚肉を五分位の厚さにおろして塩をふりかけ揚鍋を火にかけ（脂肪は入れず）鍋の熱したる時豚の切身を入れて三十分間そろ／＼と度々ひつくりかへしながら揚ぐ可し、熱き皿にのせて直ちに膳にのぼすべし。

チャーマン、トースト

鶏卵一個を皿の中にてよく攪きたて之に塩を小匙に半分と牛乳一合半又は牛乳と水をまぜて同分量丈加へ、パンの片を其中に浸し、揚鍋に脂肪を小匙に一杯入れて熱したる時前のパンを入れて一側狐色になりたるときかへして他の方を揚ぐべし、熱き内ジヤム又は砂糖をつけて食すべし。

鹽鮭の牛乳かけ

鹽鮭を五きれ皮を取り、骨を去りて細かに切り、水を盛りたる鉢に入れて一時間鹽出しをなし、水をこぼして熱湯を注ぎ、別にクリーム、ソースを拵らへ、ソースの出來たるとき湯より鮭を出して鹽水を瀝とり、魚をソースの内に入れて其煮立つまで掻廻し、胡椒を一振入る可し。

鹽加減甘き時は新に鹽を入れてよし、熱き内煮た馬鈴薯又トーストにのせて食すべし。

キヤベージのサラダ

サラダには甘藍の心の葉を用ふ可し、其葉を極細かく刻みて一時間冷水に浸して、水より出して清潔なる布巾にて水をきり、鉢に入れて、適宜にクリーム、サラダ、ドレッシングと混ぜ合はすべし。

ドオナツ

大なる鉢へ一合半の砂糖と大匙一杯のバタと鷄卵の黃身を二個入れて一緒にかきまぜ、また一合の牛乳と四合の麥粉と小匙一杯のベーキンパーデと香付のために肉荳蔲を入れて一緒によくかきまぜ、又少許の麥粉を入れてあまり堅からず丁度手にていぢれる位になして板の上にのせて三分位の厚さにのばし、丸き輪に切り拔くか又は細長く切りてねぢり、深鍋に其三分の二位の脂肪を入れて、沸騰たるとき右の輪を二個三個宛入れて片側狐色にならば、ひつくりかへして片方をあげ、出來上りたる時半紙の上にとりあげて白砂糖をふりかくべし、尤も揚ぐる時ひナが芋二三片を鍋に入れてドーナツを焦がさぬ樣にすべし、こがす時は脂肪を損ふ虞あり。

フライド、フキツシユ

小魚の鱗を去り水にて洗ひ、清潔なる布巾の上にのせて乾かし、魚が小さき時は全體又大なるときは一寸位の厚さの片目におろして揚ぐべし、揚げ法は始めに魚に鹽と麥粉をふりかけ鷄卵一個をよくかきまぜて其内に今の魚を浸し、之をパン粉の內にまるめこみ、揚鍋に脂肪を半分位入れて脂肪の沸騰ちたる時魚を入れ、一方狐色になりたる時他の一方を返して狐色になるまで揚げて、皿を温めて盛るべし。

ポーリガード、エツグス

鷄卵四個を沸騰ち居る湯の中へ入れて二十分間茹で、冷水に浸して殼をむき、半分に切りて黃身を出し、白身を細かくきり置き、揚鍋にバタ大匙一杯と麥粉大匙一杯とを入れて滑らかになるまでよくかきまぜ之に牛乳一合と水一合とを少し宛加へかたまりの無くなるまでよく攪廻し、其沸騰ちたる時細かく切りたる白身と鹽を小匙に半分と胡椒二振とを加ふべし、之を四きれのトーストの上にかけ又とり置きたる黃身を裏漉にかけながら其上にふりかけ熱き內出すべし。

潰し馬鈴薯と蕪菁

皮をむきたる馬鈴薯と蕪菁とを同量宛軟らかになるまで煮、湯をしぼりて滑らかになるまでつぶし、又は粗き裏漉にかけバタと胡椒と鹽とを加へて味をつけ、熱き內食す可し。

フライド、ポテト

まづ入用丈の馬鈴薯の皮をむきて輪切にても賽の目にても適宜に切り、一時間冷水の内に浸し置きて後、清潔なる布巾の上にのせて乾かし深鍋に三分の二位の脂肪を入れ、脂肪の熱したるとき薯を入れ、狐色になりたるとき、半紙の上にとり上げ、塩をふりかけて、熱き内食す可し。

ビーフ、カツレツ

牛肉を薄き切身に切りて塩と胡椒とをふりかけ、皿に鶏卵を入れてよくかきたて、其中に肉を入れ次にパン粉の中にころがしおき、揚鍋に脂肪を半分許り入て脂肪が煙り出す程よく沸騰たる時、肉を入れて両側共狐色になるまで揚げ、皿に盛りて熱き内食す可し。

ビーフ、ローフ

牛肉一斤と豚肉半斤とを極細かに刻み大きな鉢に入れ又塩を小匙に一杯、胡椒を小匙に四分の一、パン粉を一合とをよく攪き立たる鶏卵を一個と、沸騰湯一合と、セージ又は細かに刻みたる葱とを入れて一緒にまぜ合はせ、之を長く丸き形となして焼鍋に入れてオーブンに入れ一時間乃至一時間半焼くべし、薄く輪片に切りて食すべし。

カスタードの製法

二個の鶏卵と、大匙二杯の砂糖とを一緒にゆるくなるまでかきたて、これに二合半の牛乳と、少量のレモンか肉荳蔻かを入れ、之を平鍋に熱湯を入て其内に茶碗を入てオーブンに入れ、二十分乃至三十分茶碗の内のカスタードが固まるまで蒸焼にすればよし、熱き内にても又冷めてからにても食してよし。

鳥の蒸焼

まづ鶏をこしらへて清潔にし豫め玉子又は肉を刻みて拵らへたる詰物を腹につめ、背を下にして大きな焼鍋に入れて塩を鳥にぬり、又麥粉をぬり、其上に一合半の熱湯にバタ大匙一杯を溶して注ぎ、火の強きオーブンに入れ、鳥にぬりたる麥粉か狐色になりたる後は火を弱くし、十分間毎に鍋の湯をすくひて鳥にかけ、三四度は鳥をひつくり返すべし、四五斤位ある鳥ならば二時間位焼く可し、胸の肉が軟らかくなりたる時はよく焼けたるなり、食するに熱き内にても又冷めてからにてもよし。

ミルクジエレー

和製の寒天一本を二三分間冷水に浸け置き、深鍋に牛乳三合と砂糖大匙に二杯入れ、又先の寒天を入れて、寒天がよく溶るまでかきまはしながら煮、レモンを二三滴又はワニラを入れて香をつける可し、冷めたる鉢に入れて冷えたる所に置きてかたまらす可し。

エスカロプト、ポテト

煮たる薯の冷めたるを六個位小さき賽の目に切り、クリーム、ソースを拵らへ、鉢にクリーム、ソースを一層入れ其上に切りたる薯を置き、又其上にクリーム、ソース又薯と順々に薯のなくなる迄入れ、上にクリーム、ソースをかけ又其上にパン粉をふりかけ、十五分乃至二十分間火の強きオーブンに入れて焼き、鉢のまゝ出す可し。

オムレツ二種

鷄卵三個を皿に入れて一二度強くかきまぜ、小匙にて一杯のバターを平たき滑かなる揚鍋に入れて鍋をゆりながらバターをとかし、其こげぬ内卵を入れて固まるまで鍋を穏かに揺動す可し、鷄卵の上に鹽を少しふりかけてまき熱き皿に盛り直ちに供すべし。

又肉オムレツは鷄卵のオムレツと同様の仕方にてこしらへ得但し鷄卵の固まりかけし時料理したる肉を細かく刻みて大匙に三杯その上にのせ、オムレツを巻き熱き内供すべし少量の葱と胡椒を肉に加へてよし。

ポテト、ケークス

味をつけたる潰薯の冷めたるをまるめて小さき菓子の様な形となし、メリケン粉の内にころがし、揚鍋に大匙一杯の脂肪を入れて脂肪の熱したる時薯を入れ、片側狐色になりたる時ひつくり返して他方を揚ぐ可し、熱き内食すべし。

スポンヂ、ジエレー

寒天一本をよく洗ひて二三分間冷水につけ置き、鉢の内に鷄卵の黄身二個と大匙二杯の砂糖とを入れてよく一緒にかきまはし、寒天と深鍋に入れ三合の牛乳を注ぎて火にかけ、寒天がよくとけるまで煮、之にかきたてたる黄身と砂糖を入れて一分間かきまはし、火よりおろして其少し冷める間に別の器物の内にて白身をよくかきたて、鍋の中のものがさめきらず未だ温かなる内に加へ入れて、ワニラ又はレモンを小匙半分入れ一緒によくかきまはし、冷たき鉢に移し入れて、固くなるまでさますべし。

スチユード、キヤベージ

甘藍を半分に切りて、一時間水に浸け、水より出して茎を去りて葉を細かに刻みて湯の沸騰ち居る深鍋に入れ極めて少量の炭酸曹達を入れ鹽を小匙に一杯加へて二十分間火を強くして煮湯をしぼり、バタ大匙一杯と、少しの鹽とを入れて、一寸かきまぜ、熱き皿に盛る可し。

女子と英語（津田梅子女史）

女子が英語を研究する事は近來非常に熱心になつて來たやうですが、これは必要上から來たもので、現に文學を嗜まふといふ人々に取つては日本の文學は範圍が至つて狹いから、それに甘んじて居る事は出來ませぬ、そこで勢ひ外國文學を學んで一層範圍を廣くせねばなりませぬ。それには外國語と申せばいくらもあるものゝまづ一番手近でよろしいのは英文學であらうと存じます。

女子の英學はどうかといへば科學とか秩序だつた緻密な議論などはあまり好みませぬ、まづ一番好むのは小說とか詩でございます。又會話は機敏だから之れ丈は女性の方が早く上手になつて行くやうでございます。

又女子と小說といふ事に就ては私はあまり干渉を致しませぬ主義です、成程西洋の書籍にはラブとふいとが澤山である、戀物語なども多いのですが、私はこれに就ても矢張り同一の意見でございます、それは勿論男女間の劣等なる情ばかりを目的としたものならば斷じて讀ませては不可まいと思ひますが、其他の書籍上にある戀などゝいふ事に就ては決して甚だしく干渉しては行けませぬ。いくら止めた處ろがこれが抑も自然の情の發展なのですから惡い方面でさへなければ敎へなくとも自然に知る事です。

若し又書籍上のラブが惡いといふ事であれば、現在日本に發行して居る日々の新聞紙の三面種はどうしたものでせう、三面種といふものゝ中には西洋の書籍にあるラブ以上の醜い事が書いて在りはしませんか、メトヱ所謂ラブ物語を以てこれに比べたところが決して三面種のやうな醜いものはございませぬ。

若し又そのラブ物語の爲めに青年子女が惡い方に感染して行くのを恐るゝとしてもそれは姑息な話です、寧ろ十分にそれを鍛へて、メトヱどんな物を讀んだところがそんな惡い方に誘はれぬまでに訓練をする方が更に當然な事ではありませぬか、

メトヱばアーピングのスケツチブツクの中には「妻」があるから、その本を讀んではならぬといふ事は私は決して贊成いたしませぬ、「妻」は誠に結構です、妻があの位の貞節を夫に盡すなどは誠に此上のない美事でせう。あれを青年男女が讀んだとて何處に惡い事がございませう、さればと申して私は決して青年男女に戀物語を讀めと奬めは致しませぬ。

運命と人相

糸左近

山の中に隱れてゐる世捨人ならいざ知らず、苟しくも此の頻繁なる世の中にゐる以上は、何うしても人と交はらねばならぬ、交れば必ず「彼は如何なる人か」といふことを口にこそ出さね、自問自答せぬといふ人は恐らくあるまい。「文雄樣は仲々の好男子なれど、柔弱取に足らぬ人らしい」とか「花子孃はお轉婆然として居れど比較的情に脆いやうである」などゝ、判斷するではありませぬか。斯樣にこの判斷は國と國との外交術にも應用せられ、教育家が生徒を薫陶する上にも參考せらる、其他裁判官警察官は言ふに及ばず朋友の交際結婚の見合等一々之を用ゐぬといふことは無い、添うて間も無き夫婦の情もこの判斷に依て温められ、結び固めし友垣もこの判斷に依て破るゝことがある、併しこの判斷にして百發百中必ず當れば甚だ重寶なものではあるが、人の心は十人十色、さう容易に看破の出來るものでは無い、それ故昔より東洋では人相術なる法を考窮し、西洋ではPhrenology（骨相學の義）なる學問を今に研窮してゐるのである。けれども甲は多く駄法螺であるし、乙は大抵牽强附會に近い、そこで余は嘗て中學世界誌上及び其他の雜誌で、診斷學的人相法を述べたこともあるが、その後又色々と研窮し、今度は生理學上より比較的確實と思ふ節を聊か述べて、讀者諸君が新年の御慰とし、且は批評を乞んとするのである。

一世の英雄奈破翁が、其の將校を擇ぶには、必ず鼻の大なる者から採用したとのことであるが、これ其の當の得たる仕方かといふに、決してさうとは限られぬ、何となれば膽力の强き者は鼻の大なる人に多いけれど鼻が大きいから必ずしも膽力が强いとは斷定出來ぬからである、猶英雄は大抵髯あるけれど、髯の無い者は英雄で無いと言はれぬやうなものである。即ち奈破翁の髯が無つたのを見ても髯無きは凡人の相であると早合點出來ぬことが了るでせう。すべて論理は斯ういふやうに斷定しては往々不合理を來すことがある、例へ

ば『四足の者は獸類である』とは言へるけれど、『四足で無いなら獸類で無いと』は言へぬやうな道理である、されば次に述ぶる事柄もその御積にて讀まれたい。又人相であるから、身體中の事は殘らず平均に述ぶべき筈なれど、就中頭蓋顏面には、腦及び視聽嗅味等の大切なる器官が在て、精神の情意は主に其部に表はるゝものであるから、余も亦其部に殊の外重きをおくのである、これ亦諸君が諒せられんことを乞ふ。

△剛と柔

偖身體の大小から論ずれば



其心と言ひ、其腕力と言ひ、一般に大なる者は剛且つ強、小なる者は弱且つ柔なるは通則である、これ獨り人間のみで無く禽獸蟲魚に至るまで、この通則を免れぬ、彼の像は獸類中でも最も大なるものであるから、常は悠々寛々小兒の守などしてゐるが、いざといふ場合は猛烈なる虎をも狩り殺すやうなものである、斯く長大者を賞め上ると、然らば豐太閤や源九郎は其の身體短小であつたけれど、長大なる清正を使ひ、辨慶を從はしめたで無いかと直に批難を受けるであらうが、これ其の前以て申た通り例外であるのみならず、他の部分に於て、絶世の豪傑た

る人相を備へてゐたに違ひ無い、けれど今又短小者の勝負をすれば、長大者は遲鈍の姿、短小者は敏捷なる相であることも、これ亦參考すべきである。兎に角度量のある御大將と言へばスラリと丈が大きくて體重の貫目もタップリ有るやうに思はれ、切つて廻すとでも形容すべき剃刀的の才子は瘦せこけた者と想像せしむるやうな道理である。斯の如く身體一般の大小に於てすら、斯うであるから、況んや心靈の舍る腦髓に於ては尙更である、さうして其腦は固より頭蓋骨內に在るから、頭蓋骨の大なる者は心も亦大なりと推論せねばなるまい、昔より仁者智者と言はるゝ華盛頓やフランクリンの帽子の大きかつたは其の好適例である。

△腦

夫れ腦は大腦小腦延髓の三部から成り、大腦は頭蓋の前部と上部を占め、小腦は其の後部に位し、延髓は大腦の下部に在るもので、心靈の存在するは即ち大腦である、さうして其の大腦は白質の纖維塊と灰白質の細胞とから成り、白質は其の內部を造り、灰白質は其の表面に蔓こつてゐる、此の灰白質が即ち心靈の力を發起するものなれば、腦の大なるに從ひ、灰白質も亦多くあつて、其の心力の大なる證據である、故に頭蓋骨の大なる者は他人を指揮し、他人に長たる的の能力あるけれど、頭蓋骨の小なる者は比較的に多く教育を受けて之を補はねばならぬ、彼の白痴と稱せらるゝ者を見るに、大抵頭蓋骨が小さくて、普通人の腦は其の重量平均四百目あるにも拘らず、白痴は百五十目以下の者すらあるとは爭はれぬ事實である。

△心の働き

次に心の働きは腦の各部之を異にするもので、例へば某の部は視力を掌り、某の部は聽力を掌どると言ふが如し、乃ち之を大きく分けて言へば前頭骨の方は智力、後頭骨の方は情、顱頂骨の方は意思である、故に其部發達して居れば、隨つて其の心力も亦これに伴ふは理の當然である、西洋の骨相學者に言はしむれば、

之を色々に細別し、情の部でも嗜欲極端に言へば劣情は耳の周圍にあるし、高尚なる情例へば愛國の情、親子の情及び友情等は後頭部でも、次第に上中下に在つて、その中劣情ならぬ戀愛即ち夫婦相愛するなどの情は後頭部の最下方にある、又意志力を發する部でも、宗教を信ずる意志、道徳を守る意志は斯々、その他食欲の情、音曲の情、秘密、摸擬、記憶、秩序、敵愾などゝ大約五十部程に分けてあるが餘り細かく當嵌めると例の牽弱附會になるのである、然れど其の中劣情ならぬ戀愛心は後頭部の下方に在る事、及び顱頂骨部に意志力を有する事だけは、動物や小兒を參考にして其說の信ずるに足る可き事を研究したのである。

如何なる動物の頭蓋を見ても、その顱頂部の低くして面積の少いことだけは確かである、又同じ人間でも其の意志力の乏しいもの程大抵動物に似たる顱頂を有つてゐる、これ其の顱頂部に意志力の在る證據であらう。次に猿や鷄を御覽なさい、彼等は食欲淫欲の盛んなるもので、腦髓は唯耳の周圍に於てのみ發達してゐる。次に鴛鴦や雁は後頭部の下方が大であるから、如何なる結婚式を以て夫婦となるかは知らねども、一たび夫となり、妻となれば、綢繆纏綿その愛や永久にして、必ず姦夫姦婦否姦雌姦雄を持たぬやうである。然れば昔の袈裟御前や靜御前の如き、情を一人に許し、金城鐵壁決して心を他に許さなかつた貞女は、嘸や此部の發達してゐたものであらう、若し我が言ふ此說が果して眞理ならば、今後の結婚見合に於ては、『何うぞ後を拜見』と言はねばならぬ、冗談は措いて、小兒は勿論戀愛の情の有らう筈は無いから、此部は大いに發達して居らねど、漸々年を經るに從ひ、發育して來るを見ても其の說の無根據ならぬことが了るでせう。

前額は前にも述べたる通り、智力を掌る部分であるから、其の面積も廣く、餘りお出額でも無く整然と醜くからぬが賢者の相である、亞弗利加人や亞米利加の土人は其の額狹く、低く、且つ鋭角をなしてゐる、故に大腦の占む可き場所が少い、隨つて心靈の力を發する灰白質も亦多からぬは言ふまでも無い、宜なり彼等

は白人の奴隷となつて、何を發明するでも無く、唯生計に汲々してゐるとは憐れむべき次第である。

右の如く人間の能力は腦の各部に在るものであるから、其の能力を使用する場合には、頭及び體は、其の働く所の腦の方向に動くものである、例へば深思默考するときは自然に頭を低れ、意志の強固なる時は頭を垂直にし、感情の盛んたる場合は頭を後方に低るゝものである。男子と女子とを比較すれば、男子は智に富み、女子は情に厚いものであるから、男子は俯向加減になつてゐるし、女子は仰向加減になつてゐる、但し耻かしがつて俯向いてゐるはこの限りで無い、故に婦人が愛情極まつて其の小兒と接吻する時は必ず頭を後に傾け、頸にて頭を左右に振りながら『嗚呼可愛ア何うしたら可からう』と叫ぶさうである、又智者と愚者とを比較すれば智者は頭を低れてゐるが多く、之に反し井の中大海知らずといふ如き小人は、傲慢面をなし、頤を差出してゐるは誰でも能く知る所である、「熟るほど下を俯向く稻穗かな」とは之を詠んだものではあるまいか。

△眼

次に眼に就いて聊か述べよう、全體眼は外界より智識を取入るゝ所の大切なる門戸であるから、此部程人相家の材料になる處は殆んど無い、されば昔明王使者を日本に遣はし豐太閤の容貌を窺はしめたるに、使者復命して曰く「彼の相貌は甚だ平凡である、されど眼光炯々として人を射、仰ぎ見ることが出來ませぬ」と王之を聞いて大いに兵備を嚴にしたとの事である、斯の如く眼の相は肝要なものであるから、これに就いて詳しく述ぶれば際限が無いのみならず、余の述べんとするは、解剖學生理學等から其の根據を取るのであるゆゑ、他日又これのみに就いて詳しく話しませう、併し今最も通俗的に說明し易き點を言へば、眼球餘り大ならず小ならず黑白明瞭にして而も不動の位置に据ゑてゐる底の人は其の智力に富み、且つ意志の強固なる相である、之に反し眼球をパチクリ屢瞬いてゐるか、

或はキョロ〳〵廻して瞳を一つの方向に定めぬ的の者は、智力意志力共に發達せぬ所の愚相である、何となれば眼球を動かす所の動眼神經や外旋神經は唯運動のみを掌どるもので其の外部に分布し、知覺神經即ち外界より知識を取入るゝ所の視神經は眼底の網膜に分布して居る者であるから、キョロ〳〵瞳を定めぬ的の者は其の感覺一つも心裏に深く印象せぬ證據であるからである、深思默考する時に眼瞼を閉づるを見ても、この說の正當なることが了るでせう、この外眼瞼細長く外眦に皺ある的は悠々寬大たる長者の相で眼球突出せるかの如き姿は神經の過敏なる證據である、この理由を述ぶるには腦と交感神經との關係などを述べねばならぬから、之を略して次は鼻に移りませう。



△鼻

鼻は顏の中央に高く聳えてゐる山であるから、大いに目立易く、從つて人相學者には重要なる材料を與ふるものである、さればこれ亦一冊の書物となる位多くの說もあるけれど、その中米國ホーレル氏の說甚だ面白ければ、爰に譯出しておきませう。

氏曰く、凡て同物は同質より成立つことは萬物一般の通則である、故に長き樹は其の枝葉も亦長く、短き樹は其枝其根皆これに應ず、試みに彼の葡萄樹を見よ、其の枝が年を經て這ひ廣がる程根も亦廣がるでは

無いか、これと同じく、人間も其手長ければ指足胴など皆長く、其手短かければ其反對になるものである、而して心身の關係は妙なもので、身體の强きは心も亦强く、心の弱きは身體も亦弱い、これ等の道理を推窮して考ふれば鼻の大小形狀等に依つて心の如何を窺ふことが出來るのである、乃ち鼻大にして高ければ、其の機關の構造もこれに適ひ、鼻孔も亦大きく、空氣の肺臟に通過することも自由自在なるが故に、肺臟及び其の他の構造もこれに應じて廣大となり、從つて心も亦廣大である、これと反對に鼻低く鼻根小さき者はすべて之に適合するから心も亦小さく、遠大なる事業を企てざるの相である、然れども鼻の大なる者は慾情も亦大にして、飲食の慾色情及び其他の私慾悉く熾んに逞しうしたき相であるから之を愼まねばならぬ、鼻の小なる者は其心小なる代りに小心翼々學問技藝を勵み、却て成功の人となることがある、されど肺病に罹り易いから大に注意せねばならぬ、又鼻の尖りたるは鋭き相なれば、心も亦敏捷怜悧にして、斯る人は大抵唇薄く、辯舌爽かに、喜怒哀樂の感情を發し易く、總ての動作は迅速なる相である云々と。次は耳、口、音聲、髮毛、皮膚の色等に就いて仲々面白い話も澤山あるけれど、餘り長くなりますから身體一般の話を述べて、」他日に讓りませう。

△筋質と心質

夫れ人の相は億兆皆之を異にしてゐるから、心も亦之に應じて千差萬別ではあるが、之を大きく別れば筋質性心質性の二相に歸するものである、筋質性の相は筋肉の發育十分にして背は高く、顴骨は隆起し、前齒大きく幅廣く、身體中の諸骨もすべて突起し、音聲は濁つて大きく、容貌自ら剛壯で、腕力も亦强きものである、斯る人は勞力を厭はず、直立直行して一歩も讓らぬ風であるから、凡て破壞の精神に富み、好んで闘爭をなさんとする傾向あるものである。心質性とは身體筋骨共に細くて小さく、唇薄く鼻尖り、聲は淸くて鈴の如く、すべての擧動が頗る神速敏捷である、此の

相の人は心力の強き割合に、體力が弱いから、智力意思よりも寧ろ喜怒哀樂の感情鋭く動もすれば、それが爲に思慮理解の能力鋭敏なるにも拘はらず、大器晩成的の立派な偉人とならずして、一生を終ることが多い。然らばその二大別の人相に何も一得一失ありとせば、天下如何なる人も圓滿無缺の相で無いかと言ふに、決してさうでは無い、成程圓滿の相は少いには少いが、彼の英名を不朽に垂れたる、拔群の偉人華盛頓其人の如きは筋質性心質性の二相を平均したる完全無缺の相であることは、その眞像及び寫眞に依て判斷せらる、宜なる哉彼は才と德と兼ね備はり、所謂仁義智勇なる者も偏重偏輕無き君子として、億兆の民に敬慕せられだとは、嗚呼亦人相學の無根據ならぬを證して餘りありと謂はねばならぬ。

終りに臨んで一言したきは、人相學は現在を判斷するもので、其人の過去未來をトひ知る譯には行かぬ、彼の筮竹をガチャ〳〵動かしながら、『貴君は四十歳にして運が開けます』などゝ斷言する輩に至つては、駄法螺と言はうか、愚と言はうか、否斯る無學の賣卜者に我が一身の吉凶を觀て貰ふ人の方が遙かに愚なるのである。何となれば人々自然に稟けたる我が性質を顧み、其の足らぬ處を補ふやうに注意し、即ち筋骨は衛生に適うて太らせ、心力は學問道德を磨きて發達せしむれば、その人相も亦自ら善良になるからである。吳人越客に春を賣るの娼妓は如何に素人風をしても、自ら卑しき品格あるけれど、それ天賦に備はれる人相では無くて、元は無邪氣な可愛らしい風采があつたのである、されば危險なる色白藥を服んだり、或は老人が皺を除かうなどゝいふ頓でも無い望みを起さずに、體力と心力との平均を維持し、内外の調和を求め、身體强健に氣格高尚なれば、相貌求めずして立派になり、何と無く紳士或は貴女たるの風采備はり、數多の人に敬慕せらるゝものである、彼の美容術美人法の奧義秘傳は茲に存するのである、嗚呼茲に存するのである。

▲衞生顧問▼

(問)芽出度花と珍重さるゝ彼の福壽草は實にも尊き强壯藥になりますとの事、果して實際に候や實際に候はゞ其服用法等を敎へ賜はりたし。（京都の扇子）

(答)何れ「素人藥物學」に詳しく書きませうけれど、今簡單に述ぶれば、心臟强壯劑である、それ福壽草が莖を生じ花を開くは寒中であるが、其根は何時も絶ることの無いものであるから、其根を取り、水にて能く洗ひ、之を空氣中に乾燥し、然る後、之を細かに挫き、再び乾かして瓶中に入れ密栓して貯へればならぬ、用量は一日に二瓦乃至三瓦を百瓦(半合强)の溫湯にて五分時間煎じ、これに苦味丁幾二瓦を混じ、白糖を加へ、其の煎じ詰つた丈水を入れ、一日三回に分服すれば可い、但し一週間以上連服しては宜しく無い。

(問)正月に用ゐる屠蘇は害無ものに候や承はりたし。（京都の幸子）

(答)屠蘇其物は害無れど、之を包める赤い色の袋は往々有毒なる色素にて染めたのが有りますから、白色の袋を用ゐられたい。

(問)數の子、胡蘿蔔の滋養價及び飯と餅との優劣を何卒一月の誌上にて御敎授を乞ふ。（神田のきく女）

(答)數の子は其の蛋白質を以て論ずれば牛肉雞肉にも、勝るけれど其の消化吸收の點に於ては非常に劣等なものであるから、餘り食り食はぬが宜い、胡蘿蔔は植物性食物中にては比較的蛋白質を多く含み、消化も亦左程惡しく無いものである。飯と餅との滋養分を比較すれば餅の方が蛋白、脂肪、鹽類悉く多くあつて、含水炭素の量は殆んど同等であるから、飯の方劣るが如しと雖も、其の消化吸收の點に於ては、矢張飯が宜い、されば勞働者に非る限りは、餅よりも飯を以て常食とせればならぬ。

(問)大根は健胃劑となるものなりなど言ふ方もありますが、通常の煮方にて食するも功あるものに候や御敎示を乞ふ。（信濃の諏訪子）

(答)大根中には例のタカヂアスターゼを含んでゐるから、之を「オロシ」として用ふれば、糖分を消化するの助けとなり、且つ其の辛きために消化器を刺戟し食欲を促がすものである、けれども餘り食り食へば却て是等の功を無にするものである。

(問)長男七歳は二三年前より冬に向へば必ず耳だれになりますが、其の豫防法及び治療法を御敎示の程御願申候。（房州の某母）

(答)寒風に吹かれぬやう注意し、藥用石鹼を微溫湯に溶し、之をスイトといふ器械に含ませ、耳中に注いで洗ひ、然る後耳を傾けて能く拭ひ取り、綿をつめて置くが宜い、但し可成醫師の治療を乞ふが上分別である。

(問)種痘は生後何十日經てから行へば宜しく候や及び其後の心得を聞ふ。（長州の初產婦）

(答)五十日を經れば差支ありませぬ、而して之を行うたる後は少くも

一週間はガーゼ綿紗をあてゝ繃帶しおき、其部に異物の附かぬやう注意せねばなりませぬ、これより三年毎三回も行ひ然る後は七年毎に又二三回も爲すが宜い、但し天然痘流行の兆ある時は何時にても種痘するが肝要である。

（問）風邪になつた時の心得を問ふ、斯く申せば勿論お醫者にかゝれと仰せられ候はんが、さう一々醫療を乞はれぬ事情もこれ有り候へば、何卒御敎へ玉はりたし。（美作のくさめ女）

（答）温脚浴をなし發汗せしめて寢るが宜し、即ち攝氏五十度位の温湯に膝まで入れ、其上油紙を被ひ蒲團をかぶせおき、暫時經つと湯は冷めかゝるから、其の時又湯を取換へ斯くの如く二三度行うて就寢せば輕き寒冒は大抵治ります、但し五十度の温は初め仲々堪へられぬ程の熱さである。

（問）瘰癧は不治の症に候や。（大阪の道頓母）

（答）治療さへ宜しければ、必ず全治致しますが、早く眞なる治療を加へぬと、取返のつかぬやうになります。

（問）某書に夜分寢る時の頭の方向は、東難南病西壽北福也と出てゐますが、何か根據のある說でありませうか、及び衞生上の御高見を伺ひたし。（九州の師範寄宿女）

（答）始めて斯る語を聞きますが、根據のある說とも思はれませぬ、頭の方向などは、其の室内の都合で何れにても差支ありませぬ、牽强附會の說を立てたら論ぜられぬこゝもありますまいが、狹き室内に僅か五尺の身、何ゾ必ズシモ論ゼンヤ東西ヲです。

（問）私儀天性筋肉薄弱、動もすれば感冒に襲され易し、依て何か强壯藥を服用致さんと欲す、左の藥品中何れを用ひて宜しく候や、即ち次亞燐ソマトーゼ、メカナアスメーゼ、ナゲストーゼ、肝油、但しこの外にも適藥有之候はゞ御敎授願上候、年齡は二十五歲に候。（山口縣熊毛郡バンリウヲヨ）

（答）斯の如き問は日に〳〵參りますが、失禮ながら藥の何物たるを了解なされぬ不文明的の方と思ひます、何となれば藥は病に用ふるもので、假令筋肉薄弱なりとも何病でも無ければ生理的の人と謂はねばならぬ、然るに病者の取るべき物を取れば進んで病者になるやうな道理であります、之を極端に言へば藥は必ず一害の伴ふてゐるものと斷定しても宜しいのである。されば運動、滋養、空氣、光線、精神の愉快等の普通衞生を守つて天賦の薄弱を補ふ方が萬全の策である。今一歩進めば身體の抵抗力を作つて病の入込む餘地の無いやうに養はねばなりませぬ、彼の萬艱を排して戰ひし凱旋の勇士が筋骨を見玉はずや、縱し婦人の身なりとも、櫛風沐雨的なる進取の健康法を講じ、藥品に依賴するが如き弱い心を捨てねばなりませぬ、衞生の衞は守るといふ字、守るばかりでは露軍の策、難攻不落と稱せられし旅順の城も遂に何うなりましたか、嗚呼進取の勇は亦以て萬事に應用せねばなりませぬ、これ日露戰爭に依て得たる大なる寶であります。めでたし〳〵。

來月よりは又連日藥物學を述べ、且つ續々顧問に答へませう。

三ツの希望

現時の日本は維新以前に比較すれば、文明の點に於て、人智の點に於て非常なる進歩發達をなしたりと雖も、未だ過渡の時代たるを免れざると共に、女子敎育に對しても、施設すべき急務の少からざるを覺ゆ、就中適切なるもの三種を選べば、

▲體育　體育の必要は今更茲に說くを要せざる可し、特に高等敎育を受けんとする女子にあつては、一層體育の必要有る可し、從來我國にては、女子に體育を奬めず、寧ろ其の必要なきもの丶如く見做され居たり、蓋しこは體育の助となる可き趣味ある遊戲法の極めて少かりしにも因る可く、女子體育の振はざる元より其の處なりしなり、故に日本女子大學にては茲に見るありて熱心に體育を奬勵し、各種の新遊戲を歐米より輸入したるに、生徒等は之を好みて技に熟達せるもの亦た少なからず、始めは果して其嗜好に投ずるや否やを危まれたる事迄も意外の好結果を奏したるは誠に喜ぶべし、仍て遠からず體育館(是迄日本に無し、例令ば內に大なる水槽を造り波を起して、女子に游泳を稽古せしむるなど、其他諸種の體育に關する機械機具を設備せるもの)をも新設せんと目下計畫中なり。

▲讀書　女子が書籍をあされば御轉婆に成ると云ひ、臺所の間に合ひ難きを說くなど、世間には種々の批難を言ふものあれども、余輩は大いに女子に向つて讀書を奬勵せずんばあるべからず、現今の日本婦人を見るに讀書癖の殆んとあらざるは一大缺點と謂ふべく、書籍を愛讀せざるが故に、其智識は淺劣にして、其趣味も嗜好も到底男子に伴ふ能はず、爲めに男女共通の談話を缺きて、男女の交際は到底出來ざるに至る。元來、家庭に於ける賓客の接待は、妻君の役目にして、客待は女子の受持なるべき筈なれども日本の女子は、來客に應接するの資格を有せざるが故に、常に良人たるもの代つて之を爲さゞる可からず、從つて良人に迷惑を掛け居るは事實なりとす。尤も一部の婦人社會には新刊の小說類を愛讀するものあれども、それとても維新前に、今の婦人等の母や伯母が所謂草双紙を愛讀したると何等の差違も非ざるなり、兎に角日本現時の婦女子には、讀書に依りて其智識を啓發せんことを希望せざるを得ず。

▲英語　世人が普通見る所よりも、吾人は尙ほ一層廣き意味に於て英語に重きを置くものなり、英語が殆んと世界の通用語なるは云ふ迄も無けれど、爰に特に英語を重んずる理由は、英語を習ひ居る內に生徒は之に依つて自から一種高尙優美なる品性を養ひ得べしと信ずるが故なり。學校に於て英語の時間に、其讀本の講義が、賞讚すべき美譚なりし時の如き、生徒が感淚を流しつゝ之を謹聽せるを見る事屢々なり、敎師は他の學科を講義する時と同一の態度口調を以てせるに關はらず、斯の如き結果を見るは、英文學に一種の特長が有るに依らずんば有る可からず。蓋し英文學に依りて吾人は充分にハートの方面に於ける敎育を成し得べしと信ず。ハートの敎育即ち情育は、是迄の日本には殆んと顧慮する者も非らざるが如き有樣なれど、是大なる誤りにして、寧ろ女子には智育や體育よりも遙かに大切なるものとす。(松浦政泰氏)

太平樂譜

巖谷小波

春の初の吉例のお屠蘇、これも御祝儀とあつて、禁酒中の旦那様も一杯聞召せば、下戸の奥様も一寸お甜めに成り、御隱居様は藥だと云ふので召し上れば、お子さん方も甘いからシヤブつて御覽に成る。其他書生も車夫も、乳母も女中も、今日ばかりは、天下晴れての盃事、何れも面が茜色に染まうと、元より酒が云はせる太平樂。これも今日斗りは御免とあつて、云ひ度ひ事を云つて居るのを、其儘蓄音機に取つて、一つ此所でお温習をして見る。

其一　旦那様

まづめで度い！　かうして家内打揃つて、無事に正月が祝へると云ふのも、全く　聖代の餘德と思はんけりや成らんが。これを、余一家に取つて見ると、蓋し乃公のお陰に他ならずだ、年取つた親も居りやア、厄介者の妻子も居る。書生も置いてあれば、車夫も抱へてあり、子供には乳母をつけて、臺所には下女を働かす、この家内を合算すると、上下十人以上に成るが、その中で、乃公一人を除いては、皆不生產的動物で。更に語を換へて言へば、上下十何人と云ふ米食虫が、皆乃公一人のお陰で、腹も減らなければ、凍えもせずかうして正月に成つたと云へば、人間並に屠蘇が祝へるぢや無いか。

それに何ぞやダ。この有難い旦那様を、動もすれば馬鹿にして、召使の者共までが、勝手な陰口をぬかし居る。實に怪しからん話ぢや。

萬一この乃公に、何か一身上の故障が出來て、不時に非常な損耗をするとか、乃至一旦健康を害して、三寸息絶、萬事休矣と成つた曉にやア、彼等十何人の動物は、忽ち路頭に迷はざるを得ん。それを思へば、乃公は此家の大切な本尊、決して麁末には出來ん筈ぢや。さア、さう思つたら謹んで酌をせんか！

其二　奥樣

おめで度う存じます。ですが、このお正月を、かうしてめで度くお祝ひの出來るのも、誰の爲めだと思つてらつしやいます。イエサ、それは貴郎の仰有る通り、此一家何人と申す者は、皆貴郎の御厄介者、云はゞ脛嚙りに相違御坐りません。

が、旦那樣！　只御脛を嚙りは致しませんよ。不束な私でも、憚ながら一家の妻、國で申せば内務大臣と、大藏大臣とを兼ねて居るんで御坐ります。

かうして人出入も多く、婢僕も澤山御坐いますれば、經濟上にも、取締にも、生易しい事では御坐いません、と云つて、一々貴郎のお耳に入れる譯にも行かず、大抵の事は自分一人で、捌いて參らなけりやァ成りません。その上にまた時として、外務大臣の樣な眞似も致さにや成らず、子供を學校へやる樣になれば、また文部大臣の心得も入ります。

それほど一人で大役を兼ねて、それでもまァ落度も無く、誰から不信任の議決もされないで、首尾好く年を越した腕前も、ちつとは見て戴かなけりや約らないぢやありませんか。

ほんとに、そんな好い大臣が、碌に月給も貰はないで、不平も云はずに働いてるんですもの、餘程難有く思つて下ださらなけりや成りません。年暮に帶を買つて、戴いた位で、そんな大きな顏をされちやァ、私だつて文句が云ひ度く成りますワ。

其三　御隱居樣

イヤめで度い事ぢや。倅も嫁もあの通り機嫌よく、孫も達者に成人してかうして家内が揃ふての正月は、何度繰返へしても惡く無いものぢや。ふゝゝ、自分の年寄るも忘れてのウ。

ぢやが、云へなら私にも不平がある。さうで無くても老人は、邪魔にされ勝のものぢやから、入らん憎まれ口は利き度も無いが、どうも此頃の樣に、倅からも嫁からも、除外物の樣にされて居るのは、ちイと斗り好い氣持はせん。

成る程倅も孝行な、嫁も親切にしてくれる、芝居が

明いたと云ふては見せてくれ、花が好いと云うては連てつてくれソレ花電車が通る、凱旋門が出來たと云うて、慰樂事にはよう誘うてくれるが、さて家の事に成ると、この私の意見も聞かずに、何も彼も二人して、勝手に極めてしまふのぢや。

　無論私は老人ぢや。舊弊者の頑固婆ぢや、今時の事は何も知りやせん。が、この家の事に付いては、昔からの慣例を、憚ながら倅には負けぬ。イヤ、またその筈ぢやないか。それにこの私を差し置いて、何でも當世々々と、當世風を吹きまはされるは、どうも虫が好かぬのぢやテ。



　此間も地所の事で、ほんとに私は腹が立つた。彼所は阿父様の代に、殿様から拜領した所ぢやから、どうでも持つて居らんならんと云うのに、倅は何うしても云ふ事聽かず、今はあんな地所を持つより、株とやらが利方ぢやと云ふて、株も株、あの臭い瓦斯の株に代へてしまつた。阿父様がお聞きに成つたら、何と云つてお小言やら……

　イヤ、阿父様の御生存の時分は、倅も親の云ふ事を聞いたが、私に成つてからと云ふものは、女ぢやと思ふからか、頭から馬鹿にし居つて、子供同然の扱ひぢや。イヤ子供にも及ばんかして、此頃では孫までが、私を馬鹿にして云ふ事を聽きやせん。それと云ふも倅や嫁が、何でも當世ぢやと云うて子供に行儀を仕付け

んからちや。

年は取つてもまだ世間の事は聞える。新聞もよう讀める。さう耄碌はせん心算。而もこの家には大切な親ぢや。さう甘うは見て貰ふまい。

其四　坊ちやん

おめでとう〳〵！　おめで度うがすんだら、僕ア遊びに行くんだ。紙鳶！　紙鳶！　紙鳶を早く出しとくれ！

ナニ、戸外へ出るなら外套を着ろ？　馬鹿云つてらア、子供は風の子だイ。外套なんか老爺の着るもんだ。

そんなら衣服を着替へてけ？　何故だイ？　汚すといけないから？　汚すといけない衣服なら、何故初つから着せたんだイ。全體僕ア、こんなピカ〳〵光つた、シユー〳〵音のする衣服は大嫌だ。でもお正月だからツて、無理に云ふから着てやつたんだ。

ア、〳〵、面倒臭いなア。また衣服を着替へるのか、全體お正月もいゝけれども僕アほんとに厭ン成つちまう。衣服を餘計に着換へさせられたり、知らない人の前へ行つて、無暗にお辭儀させられたり。知れ切つて居る自分の年齢を何遍も〳〵聞かれたり………

何でもいゝから、早く戸外へ行つちまうんだ。嬢や一所にお出でよ〳〵！　ナニ厭だつて！　可哀さうに、好い衣服を着たもんだから、すつかり因循しちまやがつた。

其五　乳母

ほんとに坊ちやまは仕方がありやアしない。だんだん御成人遊ばして、此頃ぢやア書生さん方がお相手だもんだから、氣斗り荒くお成り遊ばして、とても乳母なんぞ手甲に合やアしない。

手甲に合はないと云やア、お孃さまだつて隨分難物だよ。あゝ見えてなか〳〵の御癇持だから、一度强情を張り出したと來ちやア、髪をむしる、顔を引掻く、なんぼ御主人様だつて、あんまりだからお手を摑むと、今度は唾を引かけた揚句が、まるで生爪でも剝かれる様に、ギャア〳〵云つて泣き立てるんだもの、……泣かれりやアもう往生、一も二も無く此方が惡いと成つて、

奥様にやア忌味を云はれる、御隠居様にやア睨まれる、ほんとに乳母ッてエ役も、あんまり儲からないもんだねエ。

其六　書生

乳母さんはさう云ふが、坊ちやんだつて随分難物だぜ。

成る程此頃は、ちつと亂暴に成つたらう。亂暴はまア活潑なんだから、男の子として必ずしも咎む可らずだが、只恐れるのは時々書生部屋へ入つて來て、机の上を引かき廻はされる事だ。

此間もインキを飜して、本を眞黒にしてしまつたが、それが生憎借物なんで、僕が友達に酷くやられちやつた。



大切のペン軸を折られたり、買立ての筆を坊主にされたりするなア、毎度の事で、僕もかうして食客に成つて、學資も出して貰つてるからは、玄關番や庭の掃除で、敢て不平も訴へんけれど、彼の小主人公の暴虐には、實に閉口せざるを得ん。イヤ乳母さん！半夜洋燈の陰暗き所、私かに暗涙に咽んだ事も、蓋し一

再にして止まらずだよ。

其七　車夫

君、そんな事云ひますが、私なんぞは猶ひどいや。どうせ牛馬同様の稼業だから、どんなにされたつて仕方の無ェ様なもの〻、あの旦那が茶屋入りをして、自分達ア甘ェ酒を飲み、奇麗な奴ゥ側イ置いて、温え座敷でふざけてるから、そんな事にやア氣も付くめェが、戸外に待つてる私等を見なせェ、ピユー〳〵ッて寒風を聞きながら、供待の隅にちゃこまつて、火の消えた居爐裡の代りに、提灯を行燈にしてェる仕末だ。ほんとにその提灯の蠟燭よりやア、此方が涙を零してるんだア。

其八　下女

何ですねェ、皆さんお正月早々から、さう泣事斗り云ふもんぢやありません。ホヽヽ

そりやア私達だつて、云ひ度い事アいくらもありますサ。けれども今日は云ひませんよ。ハイ、云はないツたら云ひません。何しろお正月は嬉しいワ。平生はやかましい御白粉も、今日は付けてもい〻と仰有るから、思ふさま付けてやつたら、こんなに奇麗に成つちまつた。

それに衣服もこの通り。ナニ、よく似合つて？　それも奥様に戴いたのよ。この半襟は御隠居様のお歳暮、……それにまた一夜明けりやア、御親類の奥様や、御客様や御出入の者から、それ〳〵お年玉が貰へるから、お正月位嬉しい事アありやアしない。

ねェ乳母さん！　さうぢやありませんか。ホヽヽ

ナニ、私ばかり、ケラ〳〵笑ふッて？　どうせ私はおめで度い事よ。だからお正月なんぢやありませんか。

▲悲劇

批評家「實に今度の御作は好いですな、怖ろしい程凄いです。セキスピアだつて彼様には行きません。

作家「御褒めに預つて恐れ入ります、何處がよろしう御座いましよう、

批「左様ですな、三幕目の汽車の衝突、あれがマア一番ですな、

滿洲軍司令部の歡迎



國風發揚

かけまくもかしこき　我天皇は、天壤無窮の宏謨に循はせられ、惟神の寶祚を御繼承あらせられしより、明治元年十二月廿八日と云ふ、目出度御日に、皇后宮を立てさせ給ひ、日の如く月の如く御ならびましまして、此國をしろしめし給ひ、國の光りのいや榮えに榮えて、曠古の大戰爭たりし、昨年來の戰役も、平和の光榮をもて八紘を光被し、五十年前より國家の怨みとせし樺太も我國にかへり、十年以來國民の恥とせし旅順大連も、我國の所管に歸し、今や世界の一等國となりて、全權大使など授受せらる、めでたくたぐひなき國運となりしは、全く大御稜威のしからしむるところにて、かゝる隆昌の大御代に、生れあひたる吾等のさちは、云ふも更なる中にも、かゝる、大御いそしみの御暇には、敷島の道を、御すゝめ給ひ、年の始ごとに、歌御會の御催しなどありて、賤がしづなる吾等のよみいでたるふしをも、みそなはし給ふなん、げにもこよなくありがたきことにこそ、今明治五年よりの、御製幷に御歌など拜し奉るに、國をおもひ、民をいつくしみ玉へる、大御心のほど、げにかしこくて、涙の外は、いふべき言の葉もなくなん、次にかゝげたるぞ、其御製幷に御歌にこそ

御製

▲風光日々新
日に添へてけしきやはらく春の風よもの草木にいよ〻ふかせむ

▲新年祝言
年立ちていはふにいとゞ直なれとわか世の道をおもひけるかな

▲迎年言志
いはふそよつかふる人もほと〳〵に道にたかはぬ年のはしめを

▲都鄙迎年
みやこにも遠き里にも新らしき同し年をは打迎へつゝ

▲新年望山
あたらしき年を迎へて不二のねの高き姿をあふき見るかな

▲松不改色
ふかみとり色もかはらぬ松か枝のときはかきはの末いはふなり

▲鶯入新年語
あたらしき年のほきこといふ人におくれぬけさの鶯のこゑ

▲新年祝言
あらたまのとしもそはりぬけふよりは民の心やいとゝひろけん

▲庭上鶴馴
なれ〳〵てへたて心もなかりけりわが九重の庭にすむ鶴

▲竹有佳色
うゑおきし庭の呉竹よゝをへてかはらぬ色のたのもしきかな

▲河水久澄
むかしよりなかれたえせぬいすゝ川なほ萬代もすまんとそ思ふ

▲四海清
沖つなみよりくる船も年々に數そふ世こそたのしかりけれ

皇后宮御歌

（明治五年）
敷島やたゝしき道の春風は昨日にけふと世にのとかなり

（明治六年）
あらたまる年の光によろづ民いよゝみかけ天地の道

（明治七年）
はつくにをしらしゝ御代の姿にも立ちかへりゆく年のゆたけさ

（明治八年）
ひなみやこ迎ふる年ののとけさにしらす〳〵もうたふ御代かな

（明治九年）
ゆたかなるとしの光もそへてけり雪をときはの不二の芝山

（明治十年）
君と臣のこゝろの色にうつさはやいつもかはらぬ松の緑を

（明治十一年）
まつりこと直らぬ代と鶯も年の初音をいそくなるらむ

（明治十二年）
日のみはた高くかゝけて國民のあふくや年の光なるらむ

（明治十三年）
いつくしみひろき御國にすむたつはもとの海路も思はさるらむ

（明治十四年）
おほ君の千代をねさしのくれ竹はもとすゑ同し緑なりけり

（明治十五年）
天つ日のてらさんかきり神風やみもすそ川の末はにこらし

（明治十六年）
大八洲みうつくしみの廣き世は海の千里も鄰なりけり

▲晴天鶴

ふしのねもはるかにみえてあしたつの立舞ふ空そのとけかりける

▲雪中早梅

ふりつもる檐の雪をはらはせてけさこそみつれ梅の初花

▲綠竹年久

こゝのへのうてなの竹のふかみとりかはらぬかけそ久しかりける

▲池水浪靜

いけみつの上にもしるし四方の海波しつかなる年の始は

▲雪埋松

海原はみとりにはれて濱松の梢さやかにふれる白雪

▲水石契久

さゝれ石のいはほとならむ末までもいすゝの川の水はにこらし

▲寄國祝

あらたまの年をむかへて萬民ひとつ心に國いはふらし

▲社頭祈世

とこしへに民やすかれといのるなる我世を守れ伊勢の大神

▲日出山

山のはにかゝれる雲もはれそめてのほる朝日のかけのさやけさ

▲巖上龜

動きなき秋津島根の岩の上に萬代しめて龜はすむらん

▲梅花先春

春風もふくや遠してあらたまの年の初日に匂ふ梅かな

明治廿八年　（廣島御滯中につき御休會）

天の下にきはふ世こそたのしけれやまのおくまて道のひらけて

明治三十年　（皇太后陛下御崩御につき御休會）

（明治十七年）

あふき見る日まはゆき大空にたつかれたかく聞えけるかな

（明治十八年）

つかさ人君をことほく大庭に雪間の梅も咲初めにけり

（明治十九年）

年々にみとりそひいく呉竹のかけこそ御代の數なりけり

（明治二十年）

のとかなる年やたつらむ大庭のみいけの岸による波もなし

（明治廿一年）

ふる雪をしのぎてたてる松にこそ千年へぬへきかけはみえけれ

（明治廿二年）

よろつ代の龜石にこそかゝりけれなかれたえせぬ宇治の川波

（明治廿三年）

神代よりかはらぬあしはらの國のさかえを限り知られぬ

（明治廿四年）

神風のいせの内外の宮柱ゆるきなき世を猶祈るかな

（明治廿五年）

岩戸あけし神代おほえて山のはをいつる朝日の影そまはゆき

（明治廿六年）

よろつ代を君にさゝけて大庭のいはれゆたかにかめのあそへる

（明治廿七年）

さしのほる朝日のとけき大庭に春もまちあへす匂ふ梅かな

（明治廿九年）

あまつ日のひかりをうけて位山峯のほと〳〵にのほる御代かな

我とむとみそなはすらし遠近の田つらのけふりにきはひにけり　（明治廿二年）

さかえゆく御園の松にひなつるの千代のはしめの聲をきかはや　（明治廿三年）

よのほとのあらしはたへて呉竹の雪しつかにもあくるそらかな　（明治廿四年）

大君の千代田の宮の梅の花ゑみほころひぬ年のはしめに　（明治廿五年）

いくさ船いかりおろしてあた浪も寄せぬ御代の年いはふらし　（明治廿六年）

大内の山の岩根にしけりゆく小松の千代もみそなはすらん　（明治廿七年）

鶴の羽のかさねて祝ふ年立ちて山さへゑめる心地こそすれ　（明治廿八年）

東宮妃御歌

新しき年のほきこといひかはす袖にもかをる梅の初花　（明治廿五年）

年波のたてるあしたは海原もあらたまりぬる心地こそすれ　（明治廿六年）

動きなくさかゆる御代を岩の上の松にたとへて誰か仰かぬ　（明治廿七年）

ふしの根をいよ〳〵高くあふくかな新まりたる年の光りに　（明治廿八年）

明治卅一年　（御大喪中につき御休會）

▲田家煙

小山田の里のけふりもとしとしにたちそふ世こそたのしかりけれ

▲松上鶴

風のことしつまりはてゝ千代よはふたつかれたかしみれの松原

▲雪中竹

この上にいくへふりそふ雪ならむたかむらたかくなりまさりつゝ

▲新年梅

たちかへる年の朝日に梅の花かをりそめたり雲間なからに

▲新年海

あつさ弓やしまの外も波風の靜かなる世の年立にけり

▲巖上松

苔むせる岩根の松のよろづ代も動きなき世は神そもるらん

▲新年山

ふしのねににほふ朝日もかすむまで年立空の長閑なるかな

東宮御歌

▲新年梅

新玉の年の始の梅の花見る我さへにほゝゑまれつゝ

▲新年海

船こゝにしるしの旗手打なびき浦にきはしく年たちにけり

▲巖上松

ふきさわく嵐の山のいはれ松動かぬ千代の色そ靜けき

▲新年山

あら玉の年のはしめにあふけ人君がみいつのいや高の山

▲撰歌之部

新年梅（明治卅五年）

梅の花ほゝゑむ見れば草も木もうれしき年のはしめなるらん
權掌侍正六位　藤原道子上

さき出てし軒端の梅をまつほめて年のほきことゝいひおくれけり
宮內屬　臣中臣鹿島進胤德上

大君のみうたはしめにうたはれて梅もうれしき年やしるらん
皇后宮職屬　穗積小舟上

海原の濱もしつかに年たちて春めく磯に梅かをるなり
東京府平民　水野鎭三母重子上

あら玉の年立庭にさく梅はたゝ一花もうれしかりけり
愛知縣平民　貝谷鉦二郞上

うれしくも年の始に梅さきぬかめにやさゝんかさしにやせん
秋田縣平民　石川喜之助上

新年梅（明治卅六年）

ゆたかにも朝しほみてりわたの原年の初日の影をうかべて
京都府平民正七位　則武正副上

あらたまの年のはしめのよろこびをたゝへたりともみゆる海かな
東京府士族根岸敏女　澄江上

ふしのねの雪の光りにあけそめて年立かへる田子のうら濱
愛知縣士族　中野知佳上

うら濱にあまのよひこゑとよむなり年の初網幸こそあるらし
兵庫縣平民　小出楢子上

のとかにも年たつ浦の初あびきおものゝ鯛やまつかゝるらん
岐阜縣平民　西村幸之助上

船は皆みなとに入りて年のたつあしたしつけき海のおもかな
熊本縣平民　北里直樹上

巖上松（明治卅七年）

あら波のよする磯邊の岩の上にことそともなく立てる松かな
雅樂師正八位勳八等　豐時郞上

はひかゝる蔦のかつらを注連にして神さひたてり岩の上の松
臺灣總督府鐵道部書記　竹下種具上

年をへし松も小松と見ゆるかなれさす岩ほのかけたかくして
東京府士族　松浦辰男上

波風をしのきて立てる海中のいはほの松を心ともかな
京都府士族　進藤朔子上

わたなかのいはほに立てる一つ松常世の波や種はよせけん
大阪府平民　藤村叡運上

さかえ行春のみ山の岩の上に生ひ添ふ小松かずもしられず
石川縣平民　北川すゞ子上

ちやはふる神代の松か島つ島鵜戸のいはやのうへに立てるは
鹿兒島縣士族　宇都宮村雄上

新年山（明治卅八年）

かちときの聲に動かぬ山はあらし世は靜かなる年のはしめに
沖繩縣知事正四位勳二等男爵臣源朝臣繁上

いくさ人いさをゝつみし山の上に年の初日やさしわたるらん
權典侍正四位　藤原文子上

世はなへてにきはふ民のかまど山けふりのどかに年たちにけり
靜岡縣士族從八位勳八等　吉田實上

あらたまの年たつ柚か弁はしめ一日にきはふ山のおくかな
愛知縣平民　鈴木源太郞上

つはものにめし出されしわかせこはいつこの山に年迎ふらん
山梨縣平民陸軍二等卒大須賀昌二妻　まつ江上

ためしなき年を迎へてあふくかなおほうち山のたかきみいつを
富山縣平民　田村直喜上

中殿歌御會

抑も、歌會のはじめを考ふるに、古は只相會して之を賦するに過ぎざりし如し、歌學の漸く盛んなるに及びて、自ら席上の法式をも設くるに至りしにて、其式の最も盛んなるを、中殿歌御會と稱し　天皇良辰を撰びたまひて、清涼殿に御し、歌會を行はしめ給ふ儀にして、管絃の御遊びあり、歌人に祿など賜ひしとぞ、

貞治六年中殿御會記に、

中殿の宴と申侍ることは、後冷泉院天喜四年閏三月に、畫工の櫻花を感じ給ふて、大納言師房卿(大御門右大臣)に勅して、新成櫻花といふ題を獻ぜしめ、清涼殿(中殿是也)に群臣をひきて、御製を加へられ、絲竹の宴遊ありしよりこのかた、白河院康和元年三月左大辨匡房に勅して、花契二多春一といふ題を獻ぜしめて、宸宴をのべられき云々、

とありて、崇德院、順德院、後醍醐院より以降、盛んにとり行はせられし旨など見ゆ、それより後世に至りて宮中にては、毎年正月の歌御會始、毎月一回月次會等の設けあらせらるゝに至りしものゝ如し、

後水尾院當時年中行事に、

正月十九日、御會始あり、兼日ふれらる、宮方へは、勾當内侍奉書にてまゐらす、入道親王などへは、宮方より傳へらる、攝家方門跡大臣などは、和歌の奉行より傳へまゐらす、その外は、和歌奉行折紙ひとつに書つられて、ふれしらするなり、秉燭の比おの〳〵參あつまり生の御はかま御引なほし袙をかされてめす、云々

とあり、其以來盛んなりしさま見ゆ、これなん、今日年々のはじめに、御とり行はせらるゝ歌御會始の御式となりしと推し奉る、

かゝる御式には、それ〴〵の役員も備はりて、いと〳〵嚴かにとり行はせられたるが如し、今其中の主なる事などをあぐれば、

一、讀師——御前にて披講すべき懷紙又は短冊などを整理して、貴賤を次第す、
一、講師——其歌を讀み揚げて、賤より貴に至る、
一、講頌——講師の讀みあぐる每に、更に、衆口同音に其歌を詠吟唱和するをいふ、

一、發聲＝＝講頌中にて、最も先きに其歌の上句を詠じ出すをいへり、其詠吟するや、貴人の歌は、二回以上を例とし、天皇の御製は、五回若くは七回に及ぶを法とす、

一、席者＝＝文筆をよくする人を撰びて、其日の事を序せしむ、或は漢文、あるは和文にて、字句を彫琢し、纖巧を極むるを例とす、

凡て歌御會には、會日以前に豫め題を設くるあり、之を兼題といひ、席上にて出題するもあり、之を當座といひ、當座に多くの題を設けて、人毎に之を探り取らしむるを探題といへり、

▲其他の歌會

其他別に、代始の歌御會ありしが、其儀は、中殿の御會には及ばざりしも、尋常の歌會の比にあらざりし如し、院宮以下にも、此等の歌御會あり、其朝臣武家平人に至るまで、或は良辰景を賞して、之を催し、或は二月廿二日の水無瀬宮の法樂歌會、二月及六月の廿五日に、北野の法樂歌會ありし如く、法樂影供(人丸供養の事)等の爲にも、之を行ふ事ありて、普通一般に、歌會の行はれし事、いともく盛んなりき、「心のたね」に、歌會の事など記せるを見るに、大凡、此時代一般に行はれし、歌會のありさまを知るを得べし、今其重なることを抄錄すれば、左の如し、

歌の會には、あらかしめ事とる人をさだめおく也其名は

一、點者＝＝又判者ともいふべし、もろ人の歌のよしあしを評し點ひきてえらぶ人を云ふ、つどへる中にて先達の人たるべし、云々

一、詠吟＝＝又讀師なども云ふべきにや、兼題當坐の歌ども讀みあぐる人を云ふ、おほやけざまには講師などのたまふとぞ、云々

一、助吟＝＝詠吟者を助くる人なり、其作法は後に云ふべし、かしこき御わたりには讀師などのたまふにや、云々

一、行事＝＝よろづつぎ〳〵しく故實など知りたる人にゆだぬべし、(中畧)かしこき御わたりには、かゝる人を奉行とのたまふとぞ、云々

一、給仕＝＝これは、かみ中下、おしなべて何事にもしか云へば、過なるべし、末坐少年の人二人三人事をとるべし、云々

會の日は兼て定め置きて、行事よりつどふべき人々のもとへ、題をつかはしてあないすべし、人々歌よまば、やがて點者に見せ、添削を乞ひ得ておき、其日會事へ携へ行くべし、

會の席は床の上に、神像をかけ、前に机をすゑて、物どもそなへ、其前に文臺をおくべし、

其日契りたる日より少し早く行きて、次の間に待てをるべし、其時とならば行事あないして席につく、點者よりつぎ〳〵にたちいづべし、

さて後行事立ちて、神像のかけものをかく、但し初よりかけてあらば、簾幅なでかゝげて、座中の人々に會釋すべし、其後一人づゝ靜かに膝

前へすゝみて、懐紙を文臺に乘せおきて、禮拜すべし、
次に行事いでゝ、文臺を取り入れて、讀むべきついでを整へ、又持出でゝ、よきほどの所にすゑおくべし、
次に助吟者詠吟者も立出づべし、助吟坐につきて、文臺の懐紙をとりて、我が左の方におき、一ひらづゝ文臺にのするなり、詠吟其を讀みあぐべし、
事終りて、詠吟者助吟者ともども坐にかへりつきて後、行事饗の事をもよほすべし、(中畧)
當坐の式は、行事題かきたる短ざくをもりたる硯蓋をとりて、卷頭軸よむべき人の前に持行くべし、さて後元の所へおくを、おの〳〵一人づゝ立てとり來るへし、
次に給仕硯箱を配りて後、おの〳〵たゝうがみに題の字をしるしおきて歌を案ずべし、
歌に點者の許を請ひて後、短册にかき行事に見せて、さて神前に供すべし、
其後行事出でゝ硯蓋をとり入れ、短尺のついでを調へ持ち出でおくを、助詠詠吟出て講する事、おほむね懐紙に同じ(中畧)
次に行事硯ぶたを神前にすゝめ拜して退く、其次におの〳〵ひとしく禮拜すべし、さて後に行事神前を元の如くになほすべし(中畧)
上件の事どもおはりて、おの〳〵點者亭主へいはひごとを、述べて、會釋すべし、さて行事懐紙短册をとぢて、うら書をする也、其後に饗膳盃酒の事ありて家にかへる、とあり、

▲現下の希望

されば、かゝる古儀を斟酌し、古禮を取捨して、吾々學びの道をたどり、文の林にわけ入れるやからはもとより、一般の國民たち、月に花に良辰佳節を撰び、あるは世の隆んなるをめで、或は、世のありさまの弊をなげきたる折々に、歌會を催して、知れる友垣、集れる人達の間に、其德をみがき、其交りをあつくしなば、いかばかり國の爲ともなり、大御心に添ひ奉るべきかと、

本年の歌御會始の御題「新年河」を拜し奉るにつけ、又明治五年以降の、御製御歌など拜し奉るにつけ、又世のあり樣、男女の交らひ、彼れのまとゐ、くれの會など、只管驕奢にあらずば、淫靡に、粗野にあらずば、豪華をもて其はへとし、高尚閑雅にして、質實諄厚などの風は、かりそめにもなく、趣味豐富にして、崇高なる品格を養ふべき、國民一般の樂み少なき折からをおもひ、

せめては、此歌會をもて、かゝる國家的國民的、はた家庭的良風の一としなばと、おもひせまりて、古への例しなど、とりいでてつゝかくなん、

山形縣女子師範學校長津田元德謹んで記す

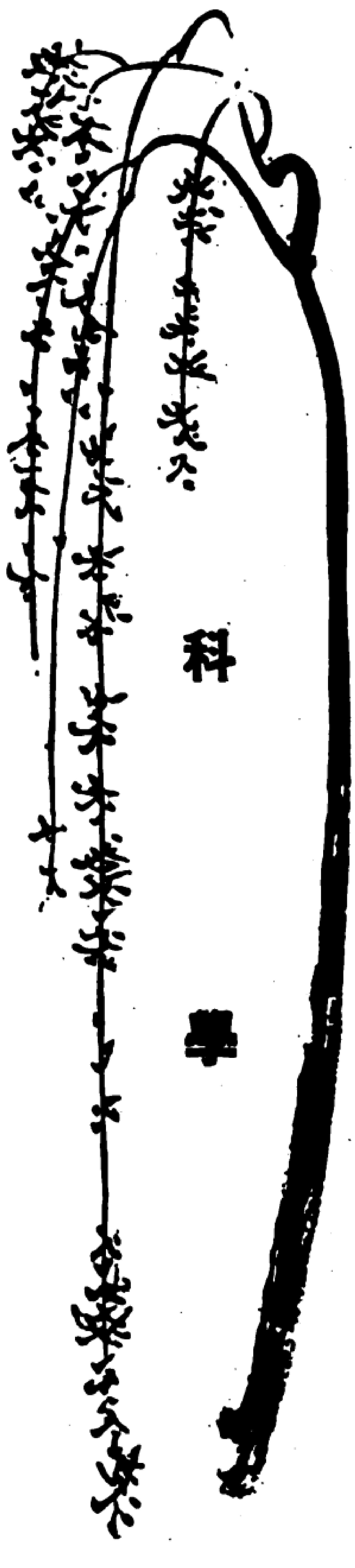
小圖書館　(佐々木信綱)

思へば御地を去り、この田舍住の身となり候てより、はや一年になり候。その後、心に忘るゝひまもなく候へども、何くれと雜用に取りまぎれて、委しき御便も致さず。誠に申譯なきことゝ存じ居り候。

山里人を相手に、田畑の實のりものゝ善惡ならでは、語り草とてもなき朝夕の生活、姿も心もいかにひなびゆき候ふらむと、我ながら思はれて候。夫ことも、氣樂なる生活に、病もおひ／＼快くなりゆき、今は殆どもとに復せしやうに候まゝ、憚ながら御安心下され度候。

さて先頃より、日々植木いぢりにのみも過しかね、つれ／＼慰めむよすがにもと、村の子供を集めて折々書物讀み聞かせ、又雜誌かし與へなど致しをり候に、所せき田舍の事とて、しばしのまに村中に知れ渡りて、土曜毎に集り來るもの、書物貸してくれよと申し來るもの、日々に數そひゆき申し候。とにかく敎育の助ともなる事なれば、よき事してけりと、夫もひそかに喜びをり候。しかる處、此程ふと思ひつき候て、此よき折失ふべきにあらず、かつや人々も增しゆきては、限りある書物を一人々々に、貸し與ふることもなしがたければ、これをしほに、此村里に、ふさはしき小圖書室にても起さんかとて、幸ひ昨年祖母の世を去り候より、住む人もなくて明き居り候ひし、うしろの山かげの隠居所は、庭も廣くあたりも靜にて、誠にふさはしき所に候へば、こゝに藏書を托しては、小供らのみならず、一般の人々にも見せしめ、好學の人々のたづきともなさむと存じ候。ついては、私どものみの力にも參りかね候ことに候へば、日頃御懇意相願ふ方々へも申し上て、何分の御助力願ひたく、御許には殊に御故鄕の村の事にてもあらせられ候事ゆゑ、つね／＼格別の御交り致しをるに事よせて、まづ私より御願致すにて候。もとより里人らの讀物にて候へば、何の書、くれの書とこと／＼しきものにはなく、只御子供様方の月々御讀みすてなされ候雜誌、小冊子の類、又は御不用になりし新聞紙など、御殘しおきの御必要もなきものもあり候はゞ、何卒御惠み下されたく、又御懇意の方なども御語らひ下されて、私どもの此企御助け下さらば、此村人の爲にもいかばかりか喜ばしき事なるべく、何分にも御心ぞへいたゞきたく、長く御不沙汰がちにて、手前用とてかくは申し上る事、いかにも勝手がましく候こと、あしからず御ゆるし給はりて、何卒御夫の君にも宜しく御申上下され候やう、御願申上候かしこ。

科學



新年の河

河西天放

遠き上つ代より、流れて止まぬ君が代のためしに引かれた名譽は言はず、比類なき大捷軍の國威を以て、世界の舞臺に大飛躍を試むべき、首途の此の芽出度き年の始めの詠進御歌の題に、畏し、「新年河」と下された、自分が即ち其の「河」である、と思へば、何となし胸も轟き、氣も昻つて、身の上咄しもつひ誘ひ出される。

如何なる仕合せぞや、日本の「河」と生れた身には、サハラの河の天折も知らず、シベリアの河の氷責めにも逢はず、一月一日から十二月卅一日まで、欝蒼たる山峽を流れ〳〵て、太平洋日本海の大海原に、親しき友達と會合の樂を思ふまゝにして居る、サハラの河の天折とは何かと仰るか、其は春の日永に追つて申上げやうが、先づ一通り自分の生涯を御咄しまやう。

自分の生れた處は言ふ迄もなく、高地の斷崖の地層と地層の間から湧き出る「泉」である、泉の源は雨や雪で、地上に降つた雨雪の三分の一は其まゝ蒸騰て行つて了ふが、殘り三分の一は土の中へ滲み込んで泉となり、崖から湧き出る、即ち自分はかくして此世に「河」と生れて來たのである、猶殘り三分の一は、地の上を流れて自分と合體するので、自分は此等の潦水を合せ、

他の泉の細い流れと段々に聯合して、骨も太り、肉も肥え、始めは羊歯の下潜る隱れ水などゝ詠まれた身の、遂には兎や狐には飛び踰えられぬ程になり、夫から丸木橋、土橋、木橋、鐵橋、舟橋と、人間に散財を懸ける代りには、舟をも浮べ、筏をも運び、發電機をも廻し、交通運輸生活の上に、隨分爲めにもなつてやるし、行く〳〵田へも廻り路をして、灌漑もしてやる、ある歷史家は自分等を稱讃して、人類文明の徑路、開化の要素とまで言つて吳れたが、或はそう見えるかも知れぬ、自分達は別に讃められたさに舟を背負つたり、發電機を廻したりするのでは無いので、來るものは歡迎し、往くものは追はず、賑かな都會の中央を鷹揚に流れる時も、千古斧斤入らずの深山幽谷を閑々と逝く時も、岸も見えぬ大江に揚げる大浪にも、目高を追ふ子供の足から立つさゝれ波にも、同じ樂しさを以て、斷えず運命の進行を續けて居るのである。

「河」といふのは自分の苗字である、名は場所により、境遇に由つて色々に變へられる、生れてから少し大くなつて平原地へ出る迄は溪川と呼ばれ、夫から大河となるのであるが、日本は山國であるから、學者は我々に「荒河」といふ勇ましい總名を付けて、平原地から發する河と區別して居る「荒」といふ語は、人によつては「亂暴」の意味を以て解釋するかは知らぬが、我我は決して理由なしに亂暴はせない、人間が態と我々の搖籃たる山間の森林を伐り盡して、水を久く含み貯へて居られぬやうにしたり、我々の世渡り舞臺たる「河底」よりも低く田を作つて居ながら、相當の設備をせないものだから、我々は別に惡氣があつての上からでは無いが、仕方なしに大水も出やうし、田畑に汎濫もするのである、ナニ人間が態々我々の河底を高く作へるのでは無いが、日本は火山國で、到る處火山灰が多い、それが自然に風化して細くなつて居るから、どうしても泥が多く流れる、それに何せ勾配が急なものだから、水嵩が增せばどうしても小石大石も厥轉がして行く、此等のものが、段々に溜るから、どうしても底が埋る、掃はず置いて吳れゝば、別に新しい河底を低

い處へ作へて流れるのだが、人間にはこれが大分迷惑と見え、どうか河底を變へて呉れるなと、堤防を築いて賴むから、好意上其まゝ不自然の高い河底の上を流れて居てやるので、一體學問の力で相當の工夫をすれば、其まゝ河底を低くすることも出來やうのに、それもせず、其癖あの信玄堤のやうに根から確乎りした本式の堤防でも造ることか、粗末の受負工事で御茶を濁して居る報ひは、つまり一朝大水出に逢へば、滅茶々々に切れて了



河の第一期

ふので、誠にハヤ御氣の毒ながら、自由、活潑、活動は我々の性分である以上、惡しからず思つて貰はねばならぬ。

かやうな譯で、先づ「荒河」の『荒』といふ語を『活動』といふ義に解して戴くとして、さて我々「荒河」は大別三段の生長發育をする、其の各段々になつて、勿論活動の工合も違ふ、第一區は、人ならば少年期で、一番高い源流である、こゝには自分達の仲間が大勢集つて、相集る中間に臼のやうな低い地面を作へ、夫から終に一筋の『荒河』とな

る、水は此の盆地に鬱積し、勢は中々強大であるから、とう／＼其の最も手薄な所を切り破り、深い谷路を作へて、搴々と流れ下る、此の深い谷路は『荒河』の第二區で、人ならば青年期、血氣旺盛で、勢力集中、當るべからざる大活動の時代である、さて此の谷路、即ち兩岸は斷巖絶壁と形容すべき第二區を過ると、人ならば成人期、我々『荒河』はこゝに持つて來た泥砂を棄てゝ、洋々と流れ下り、海へ落付く、帆影に朝日夕日を受けて、

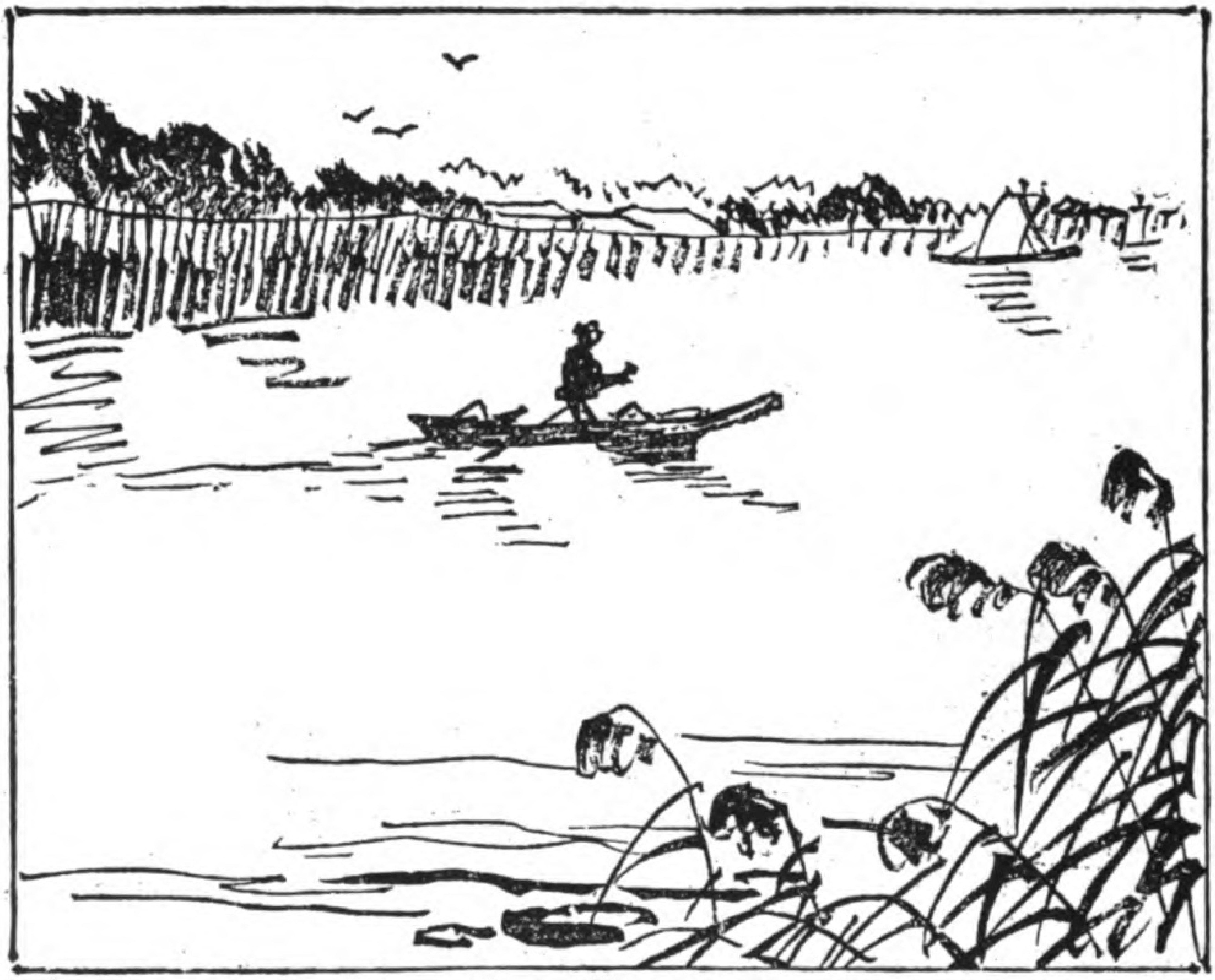


河の第二期

舟唄長閑かに上り下りするのは、此區間である。

誤解されると、迷惑だから、一寸斷つて置くが、一般に我々『河』の天職は、地貌の平均作用が重なる一つである、即ち此の地面の高い所を削り、低い所を埋めて、平らにせやうといふのである、これがよく考へて貰へば、人間には無論必要の事で、若し不賛成とあらば、試みに此の永年、我我の流れて止まぬ活動の此結果をゼロにして考へて貰ひたい、先づ我々は信州や甲州のやうな臼谷區の平野から、我々の運んで埋めた

泥砂を取つて、元の湖水なり、險阻な山谷にして貰はねばならぬ、夫から我々は各荒河の平原と呼ばれて居る沃野を、殘らず元の海原に戻して貰はねばならぬ、利根川八十里武藏野の平原、信濃川五十里越後の平原、木曾川の平原、石狩川の平原、殘らず海となつたら、今日の日本は殆んどあるまい、支那中華の大平原は黄河楊子江の平原である、南印度の大平原は印度河ガンゼス川の平原である、つまり我々の此の最大天職は、其他の天職



河の第三期

と相待つて、人間世界の基礎を置いたと言つてもよからうと考へる。

かう言譯をして置いて、我々『荒河』の三區割に就き、其の活動の實際を少し咄さう。

第一區は水源區である、場所は山地で、河底は勾配が急である、勾配が急であるから、水の勢は强い、元氣付けば小石位は隨分推し流す、此の小石は河底や岸を削ること鑢の如しと言はうか、小石許りでない、水其の物も亦河底や岸を削つて濁る、第一區は即ち水蝕力及び運搬力の働く領分で

ある。

第二區へ行く、こゝにも水蝕力も運搬力も働くが、第一區よりは弱い、そして大きな礫はこゝに沉澱む、第三區へ行く、こゝには沉澱力が專ら働く、即ち新しい地面を作へる仕事をするので、汎濫每に地面の土は殖える許り、國の領土は益々增加する事になる、大體に於てそうなるのである、我々の河口には何れも、大なり小いなり見る『三角洲』といふもの、あれが其中一番遠く運ばれた泥砂の堆つたので、大水



耶馬溪の水成岩

の時には割合大粒の砂礫を運んで行く、三角洲で有名なのは、ナイル河の三角洲で、古代の埃及文明は此處に發生した、此堆積土は肥料に富んで居るから、埃及では、昔から小麥を作るに肥料は入らず、從つて人間一生の生活費用が、五六十圓もあれば澤山だと言はれた程である、人間一生の生活費用五十圓とすれば一年の費用は一圓內外なり、假りに今日本人一人の生活費を平均五十圓とすれば埃及人の生活は日本の五十分の一なり、河の恩惠の効大なる知るべし、此の三角洲の

廣さは二千二百萬方キロメートル、我が凡そ百三十萬方里、樺太まで合せた日本全領地の四十倍餘である、印度のガンケス河口にある三角洲はナイル三角洲の約四倍ある、古代印度の文明もこゝに發生した、もつと大いのは黄河の三角洲で、中華の地全體之れである、即ち支那文明の中心である、早い話が利根川の口にある霞ヶ浦の鹿島半島、あれが矢張り三角洲で、佃島は隅田川の三角洲である、尤も三角洲の原因や出來る工合は、海水運動との關係上非常に入り組んで居て、人間の學者といふ連中にも、未だ頸を捻つて居る場合が少くない、どうか我々「河」といふものゝ活動は一寸見たやうな簡單なものでは無と承知して戴きたい。

興に乘じてつひ咄しが長くなつたが、然しこれは全く我々の天職についての御咄しであつて、初めから人間を目安にした仕事では無いから、いくら人間の御爲めにならうと、決して恩顧に懸ける譯でも無ければ、從つて御禮を受ける積りもないのである、これも御承知置きを願つて置く。

實に思へば思ふ程、我々の生涯は愉快で堪らない、見給へ、あの野馬溪の絶景を、あはれ全く我々の拵つたものである、亞米利加のコロラド河へ行けば、底無谷の絶景が見られやう、如何な大磐石でも、我々の根氣よき働きの前には、鋸で木を挽く如きものである、其間を躑躅山櫻紅葉の美しいのを眺めるから、時に深潭に暫し渦き、時に急湍飛瀑を奔下し、秋は霧の覆面に音を忍び、冬は勇ましき雪崩を呑み、魚の泳ぐに任せ、鹿の飲むに任せて、廣濶なる平野の懐に入り、洋々と一視同仁の海へ注ぐ、其樂みや悠々たりとは、我々「河」の爲めに作らへた文句であらうとやうに思はれる、我々「河」は、之を動物に比較へれば、活氣充溢せる野の若駒で、之を國に比へれば、戰捷の新日本である、此の芽出度い新勝國大活躍の第一年、而も「午」の年といふ此年の始めの詠進歌題に、「新年河」と下された大御心の畏こさに感佩して、限りなき御恵の露の末なる我々日本の河々は、こゝに謹んで流れ盡きせぬ君が代を三唱するものである。

天の配剤

梅蕾子

凡そ此世界の中で最も大きな力と云つたら此自然の力より大きいものは無いで有う。否此世界も自然の力を以て出來たのである自然の力程廣大無限のものはない、而して又人間の淺果な智惠では到底想像しおしはかる事の出來ない實に微妙なものである。大海の水一時に湧き立つて海嘯となつて押し寄せて來て幾千萬の生物の命を取るのも數百萬の目にも見えない微細なバクテリアが瞬くひまに殖えて行くのも皆之自然の力である、皆一つの



目的を以てなされつゝあるのである、非情の草木が日々大きくなつて行くのも無心の蠅が人の食物をなめるのも一つの意味なくして行はれる事はない思へば自然程意味の深いものはない而して自然の力程大きなものはない我等も矢張り自然の限りない力の内に養はれて居る一分子の身である、其僅かの一分子に過ぎない身を以て限りない自然の力を數へ

立てるのは恰も蟷螂の斧に等しい事ではあるが此一分子たる自然の目に見、耳に聞えた處を數へて見樣と思ふのである。

自然は實に此世界の凡の生物の内の強いものを殘して、弱いものを次第に滅亡させる、而してなるたけ皆強くして負けない樣にと云ふ事を常に奬勵して居る、併し世界と云へば大變に廣い樣ではあるが、廣大無限ではない、矢張り限りがある、夫れ故其中に住む處の生物にも矢張り限りが有つて、無限に繁殖するならば終に居處が無くなる、而して生活して行く食物がなくなる、其處で自然は工夫をこらして成る可く何でも強いもの勝と云ふ事にして、而して一方では互に競爭して少しでも強くならう、少しでも長く此世界に殘らうと云ふ事に勸めさ



せた、此處に所謂生存競爭と云ふものが起つたのである、此生存競爭の盛に行はれる結果は、實に面白い現象を現はして來た、如何に此生物に變化を來したか、又之から先如何に變化しつゝ行くか實に面白い働きをする樣になつて來た、生存競爭とは何でも其身を強くして、他のものに負けまい、而して自分の子孫をなるたけ廣く此世界に增さうとして各々の間に起る競爭である、凡そ此世に生命を持つて生れたものは、如何な小さなものでも大きなものでも、強いものでも弱いものでも、等しく此競爭をして居る我々人間の樣

な感情をもち、智識を有する動物を初めとして、庭に咲いて居る可愛らしい花や、美しい蝶に至るまで、一日も一時も休む事なく、皆此競爭の爲めに齷齪として居るのである、夫で此競爭に勝たうとするには、如何云ふ事が必要であるかと云に他のものから犯されても、夫を充分に防ぐだけの力が無ければならない、（たとへ其物に勝てない迄も）而して此多くの生物の間に立つて、充分に自分の食物を取るだけの力を持たねばならぬ、其次にはなるたけ自分の子孫を絶やさない様に、益々繁殖さして行く處の力も無ければならない、之等の條件に適つたものは何時迄も此競爭界に立つて行かれる、けれど此内の一つでも他のものより弱く、浸害されて、夫れに負けるものは終に生物の仲間から押し出されてしまふのである、夫れで兎に角己れの身を安全に保つて行かれる様に工夫をしなければならない、生命有つての物種で自分と云ふものが無事に暮して行かれなければ、子孫を増して行く事は出來ないわけである



牛が常に口をもが〳〵さして、始終物を嚙んで居るこれは動物學上で反芻動物と云ふ種類に屬するもので常に草を食べる、即ち草食動物である、之れは只牛ばかりではなく、他にも澤山ある此等は何故如彼に常に口を動かして居るのであるかと云ふに一反呑み込んだ食物を、又吐き出して嚙んで居るのであ

る、此動物には胃嚢が四つある、それでまた人間が開けない大昔に牛も一つの野獸で、他の獸類と一所に野や山に棲んで居たが此種の動物は皆身體が大きくて、肉が美味しい處から、常に他の肉食動物から目を付けられて居たのである、處が之等の動物は草を自分の食べものとする處から、勢ひ木の茂つた處より廣々とした野原に行つてゞなければ充分に草がないつまり木の有る處なら自分の身體を隱して他の恐ろしい動物には見付からない様にして食物を食べる事が出來るが、野原でなければ食物がない、誠に困つたわけで食物を食べる間は身體が何處からもまる見えになつて居るから、何時猛獸が犯して來るか知れない、其處で如何しても緩々と食べて居る事が出來な



い、仕方が無いからまづ何でも食べるだけの、食物を取り込んで行つて、何處か安全な場所に行つて、緩々と食べ直さなければならない處が我々人間の様に鎌で刈つて籠につめ込んで運ぶわけには行かないから、彼等はまづ夫れを何處に取り込んだかと云ふに、腹の中に入れるのである、即ち其胃嚢の中にまづ詰められるだけ一ぱい大急ぎでつめ込んで而して木蔭や岩の蔭に行つて、初めて本統に嚙んで消化させるのである、つまり胃嚢が斯んな事に使はれるのであるから、一つでは足りないで、初めに荒消化にして一度飲み込んで、又出して消化すと云ふ風に、皆其度に入る嚢が異うので、

都合四ッの胃嚢を持つて居る。

反芻動物の祖先は斯んな境遇に居た爲身體を安全に保つて食物を充分に得樣とした結果、他の動物とは胃嚢が異つて來て、其爲他の動物から犯される事を免れたのである、是れが即ち反芻動物となつた所以である。

又馬の前足を解剖して見ると、通常の動物ならば五ッの指骨があるべき筈であるのが、此動物には僅かに中指が一本あるばかりで、他に何もない、此骨組みは馬と云ふ動物が出來た時に、巳に斯うなつて居たかと云ふに、決して而うではない、大昔此世界に居た馬が今化石となつて所々から掘り出される此馬の有樣や骨組みを調べて見ると、最も古い時代には矢張りちやんと五本の指を持つて居た、處が馬も牛も何かと一所に野や山に居た時分は、我が身を防ぐ處の道具がない、只逃げるより他に道が無かつたので、自然早く走ると云ふ事が此動物に取つては何より必要で有つた、夫れでなるたけ足は細く、輕くして不要ないものはなるたけ省いて、走るのに便利にし樣とした結果、五本有つた指が次第に無くなり終に今日では中指の骨が僅に一本殘つて其兩側に小さい昔の骨の趾が少し殘つて居るばかりになつた。

其他ジラフ俗に麒麟と云ふ動物は、首が大變に長い彼は常に樹木の若芽を好んで食ふものであるから、其芽を得る爲めには、如何しても高い處まで首をのばさなければならない、此必要から自然々々に今日の如くに首が長くなつたのである。

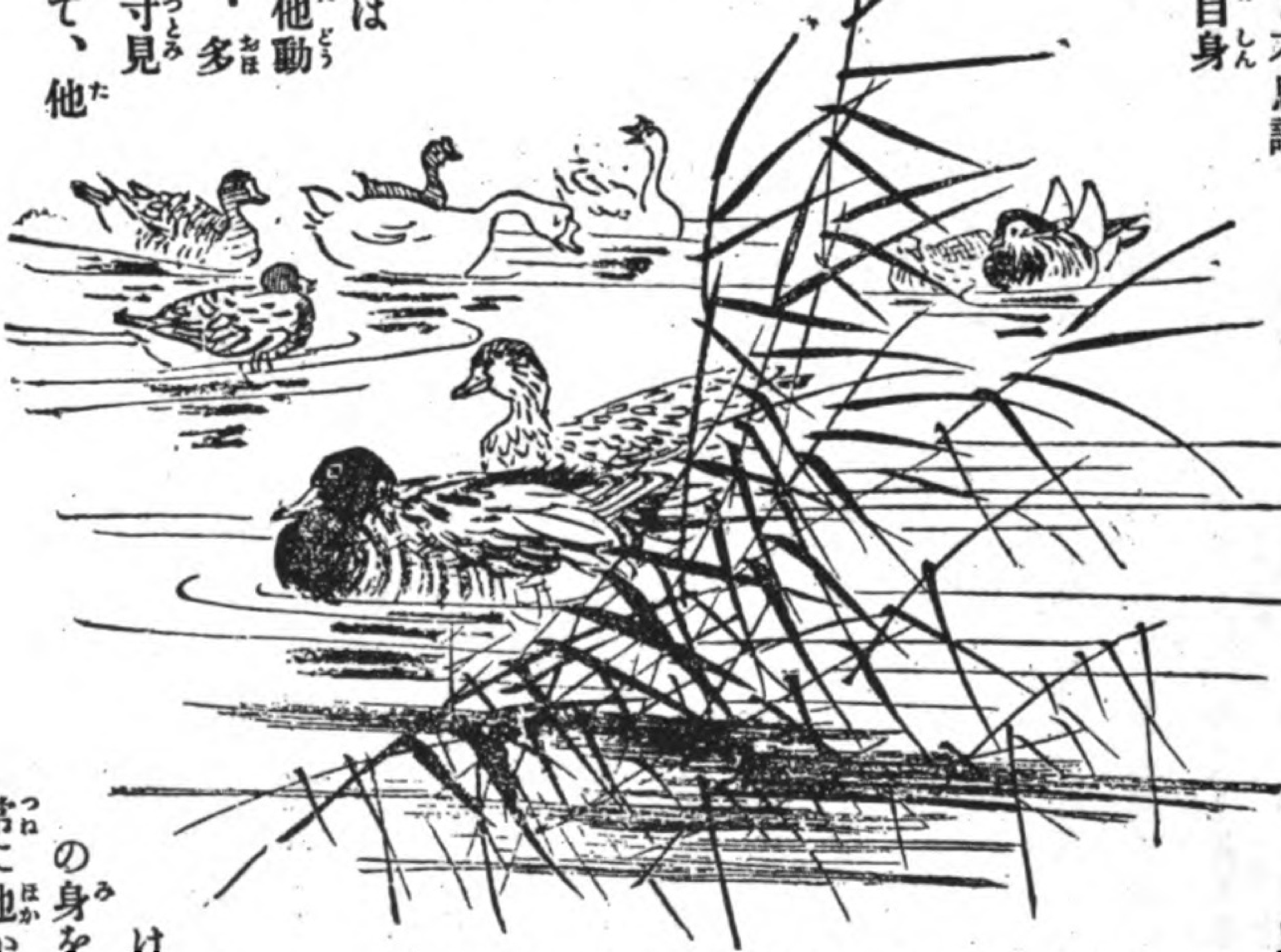
水の容易に得られない沙漠に住んで居る處の駱駝は皆人の知つて居る通りに腹の中に大きな水嚢を備へて其中に一ぱい水を貯へて、水の無い時にも不自由をしない樣にして居る。

之等は皆其土地に相當し、又自分の身のまはりの有樣に從つて、如何かして其身の安全を保つて行きたいと、長い間に自然に夫れに相當して變つて來た結果である、其土地が不便で有れば有る樣に、不便な處にも住まれる樣に、身體を變へて行く、自分のまはりに恐ろしいものが有れば有る樣に、自分の身を防ぐ方法を

考へて、自然に變つて行く、何と不思議な事では無いか、之れは其動物自身が如何に然うしたいと思つても一時に然うする事は出來ない即ち自然が何時とはなしに變へて行くのである。

暑い處に住むものは毛が自然と薄すくなり、又ある者は全く無くなり、寒い處に住むものは身體を保護する爲めに一般に毛が密生して、寒さの充分に防かれる樣にしてある。

常に雪の上に住んで居るものは黒や、赤い毛では目に立つて、他動物から襲はれる危險が有るから、多くは雪と同じ白い色に變て、一寸見ては雪か動物か分らない樣にして、他の動物の侵害を防いで居る。



以上の生存競爭は獸類ばかりでは無い、鳥類の間にも矢張りある、鳥と云ふものが已に自然に自分の身體を保護する爲に變つたのである、其骨組みを見ると矢張り脊髓が有つて四肢の骨がある。處が獸類の前足即ち地を歩むのに必要な前肢と云ふものが、鳥には翼といふものに變はつて居る、之から考へて見ると大昔は矢張り鳥も獸類と同じく地を匍匐つて居たかも知れない、處が其肉は美味しいから、矢張り他の動物から常に食はれるけれども元來が弱いので、己れの身を安全に保つ事が出來なくて、常に他から侵害を受けて、だん／＼と

其種族が少なくなつて行く樣になつて來た、其處で如何かして他の恐らしいものから逃れたい、逃れたいと思つて、夫れでは到底他の動物の樣に地の上に居ては何時迄立つても害を逃れる事は出來ないから、他の動物の來られない空にでも、行く樣になりたいと、常に思つて居た處から、今迄は地に着いて居た前肢は、終に上に向いて次第に毛が幅廣い羽子となり、翼と變つて來た、夫れでもまだ足りない、今迄の樣に身體が重くては、思ふ樣に高い處を飛ぶ事は出來ないから、今度は身體を輕くし樣として、長い間工夫した結果、骨の心に次第に孔が明いて來た、つまり管の樣な骨に變つたのである、鳥の骨を見ると皆中が空になつて居るのは、少しでも身體の重さを減す爲なのである、斯くて自由に空中を飛ばれる樣になつたから、幾らか他の動物から食はれる事を助かる樣になつたかも知れない。

其處で同じ鳥の中でも、亦種々に性質や種類が異つて居て、斯く他の動物からの侵害を逃れると、次第に其種族は增して行くばかりであるから、今度は鳥同志の間にも競爭をしなければ自分の子孫がだん／＼生活して行くに困難になつて來たので、矢張り他の動物と同じく種々の方面に向つて自分を他のものより强くし樣とした結果、又種々に變つて來た、中には只地の上や空中に居るのでなく、水の上にも自由に居られる樣に、足で水搔きが出來て、思ふまゝに游がれる樣になつたものもある而して食物の足りない分は水中からも取る樣になつた、其爲めには長い間水の中にくゞつて居ても苦しくない樣に、肺が變つて行き、又は首を水の中に入れて居る間は、肛門で呼吸して、何時迄も自由に水中の餌をさがされる樣になつたのである、又鶴や鷺の樣なものは常に淺瀨の魚を取つて食べる性質に依つて足と嘴とが大變に長くなつて、水を渉るにも餌を取るにも便利になつて居る。

又鳶や鷹などは眼の力が非常に鋭くて、人間がとても見えない處迄見る事が出來る、雀でさへ數丁先きにある一粒の麥でも見る事が出來ると云ふ事である。

夜靜になつてから寢鳥を襲うふくろうや、みゝづく

は何でも靜に動作をしなければ他の鳥が目をさまして思ふ樣に自分の餌を取る事が出來ないから、其羽毛は極く軟かで、飛んでも少しも音のしない樣に出來て居る。

空中を飛ばず、地上にばかり居るものは、足が大變に丈夫で馬よりも早く走る駝鳥の樣なもの蹴爪を以て敵を蹴倒す、鷄類など實に皆獸類と同じく其身に相當した處の防禦法を知り自分の一番大切な食物を取る事に勤めて居る魚類も亦之と同じく夫れ〴〵考へてある。

飛の魚が長いまるで翼の樣な鰭を持つて居るのは矢張鳥と同じ樣な防禦物で他の強い敵に追はれた時只水の中を逃げるだけでは到底だめで有るから、危險な時には水から外に出て此長い鰭



で飛んで逃げるのである。

鰈や平目魚などが片面だけ黒いのは何の爲であるか、之も矢張り他の魚の目に付かない樣に、その爲、黒い方は恰で砂の樣な色をして居るから海の底の砂の上に黒い方をむけて居れば、一寸見ては砂だか魚だかわからない而して常に斯う云ふ樣に黒い方を上にむけて海底にひそんで居るのであるから、下になつて居る方の目は要らない筈だ夫れ故此魚の目は黒い方に二ッとも付いて居るではないか、併し之れは大昔から次第に然うなつたのではなくて、卵から出た、幼い時には矢張兩面に有つたのが大きくなるに從つて終に黒い方に二ッとも寄るのであると云事だ。

南亞米利加の河や沼に住んで居るエレキ鰻と云ふのは、長さが六七尺もあ

る様な鰻で、其身體からは大變に強い電氣を出す事が出來るので、自分を攻めて來るものは皆此電氣で倒してしまふ馬の様な大きなものでも此電氣に中つて死ぬと云ふ程恐ろしいものである。

之によく似たものは彼のあかゑいで、矢張り夫れに觸れると其身體がある一種の電氣に感じて非常な苦痛を與へられるので容易に近寄る事が出來ない。

又魚の種類では無いが、蟹や鰕は彼の通りに恰で鎧の様なものを全身に着込んで、夫れを自分の住んで居る處と同じ様な色に彩色つて身を守つて居る。

烏賊は敵から襲はれた時之れと云ふ堅い鎧を以て防ぐ事が出來ないから、其代りに墨汁を腹の中に蓄へて置いて身體の危い時には其墨を噴き出して四邊を眞黒にして、敵の目をくらまして逃げる、何と面白い策では無いか。

更に又目を他の方面に向けて見ると、實に我々から見れば取るに足らない小さな蟲類でも皆自身を安全に保護し様として居る。

即其多くは色を以て自身を守つて居る、此最好い例は木の葉蝶で、羽子を種々の色を以て自分の止まる木の枝や葉と同じ様に彩色をして居る之は即自分を食べ様とする鳥類の目に觸れないやうにとの用心で實に我々が其處に蝶が居ると云ふ事を知りながらも矢張木の葉ではないかと迷はされる位よく似たのがある夫れから色ばかりでなく木の葉に筋がある様に何の必要もない蝶の羽子へも夫れと同じ筋を付けて居る。

雨蛙が木の葉の上に居る時は青い色をして居て、木の枝や土の上に居る時は茶褐色の色に變つて居る。

いなごやきり／＼すは常に綠の草の中に居るのであるから、常に綠色をして居る、枯草や砂の上に居るバツタは砂の様な色をして居る、更に巧みなのは熱帶地方に住むかめりおんと云ふ石龍子の一種である、之れは何處にでも行つた、先きの場所の色に自分の色を變へる事が出來る、青い葉の繁つた處では全身を青く變へ、茶色の枯草の處に行けば茶色に變へると云ふ様に、大抵は木の枝に止まつて居て其木の通りの色に似せて

少しも他の動物の注意に觸れない様にして居る、之れは其元の色は灰白色で體の中に青と黄色との二ッの色素を持つて居て、此色を種々に交せ合はせて巧みに思ふ通りの色を造るのである。

又中には他の動物の厭ふ樣な色で、恐ろしく身體を彩色して居るのがある彼の柳の木に居るいもむしなどは多く之れで只でさへ見悪い形の上に青や赤や茶色などを以て輪狀や紋狀に模様を付けた處は如何にも氣味が悪い。

合衆國の南の方に居る一種のものは大きさが六インチも有つて頭の上には赤い朱色を



した突起が幾つも出て居て、丁度鷄の冠肉の樣な形をして居て、怒る時は其突起を餘計に出して左右に振り立てる樣子が、如何にも他のものを怒嚇す樣に思はれて、別に夫れより外には害もしないものであるが、大抵のものは皆恐れて近寄らぬと云ふ事である。

斯う云ふ樣に只其身の安全をはかる爲めに自然が造つた夫れだけでも實に我々のはかり知る事の出來ない位である、更らに其子孫を殖やすに付て用ゐた處の力と云ふものは、亦一層微妙なもので、動物の雌雄が相識る手段から其卵子を保護する有樣、幼兒を

養ふ術等は實によく其動物々々に備はつて居る。

然らば人間は如何であるか、人間には其身に付いた敵を防ぐべき武器とては別に無い、早く逃げられるかと云ふに、人間より早く走られるものは幾らでもある、他のものに似せる色も持つて居ない、之れが若しも他の動物の樣なもので有つたならば、疾くに其種族は絶へてしまつたはづだけれども、中々然うでない、我々日本人抔は益々殖えて行くばかり、年々五六十萬人づゝの人が繁殖して行つて、次第に土地は狭くなつて、住む處が無くなると云ふ有樣だ、是れは抑如何な動物に勝つた武器が有るのか、即ち云ふ迄もなく他の動物には決して無い處の智識と云ふ人類固有の武器が有る



爲めに、走る事も力も他の動物に劣つて居ながら夫れで居て之等の動物を自由に使用して行くのである。

斯くて地球上に日に月に益々增して行くばかりである、增さうとつとめつゝあるのだ、而して此結果は如何なるで有うか、動物は斯く自分の子孫を殖やす爲めに働いて居るが、斯くて其目的を達して兎に角く子孫は益々增したなら如何であるか限りある地球に限りなく殖えて行つたなら仕舞には居る處が無くなる、食べるものが無くなる其處で生存競爭は益々烈しくなつて、少しでも弱いものはずんずん亡びて行く、まだ夫れでも足りないから自然はまだ此他に工夫をした、時には大きな海嘯を起して幾千萬の生物を水に溺らし、大きな噴火を起して數萬の生物を燒く事もある、之等はなる程其死

んだものに取つては大事な生命を奪つて生存競爭を止めた樣であるけれど其種族の上から考へたならば矢張り有益な事に當るのである。

ペストやコレラが盛な勢を以て我々を襲うて來るのも、其人に對しては不幸な話だが、種族や子孫の生活する餘裕を造る爲に、自然が然うするのであるから、考へて見れば見る程自然の秘密は深くて、中々我々の淺い智識では想像する事は出來ないので、俗に何が禍になるか幸になるかわからないとは、實に此自然の現象を表はした適當な言葉である。

以上述べた事は只動物界だけの事でまた此他に生物の内には植物と云ふものがある此植物だとて生物たる以上は矢張り其間に生存競爭の行はれて居るのは勿論の事で此間には又夫れ〳〵不思議な働きが有ります。

少女の防寒具

女子を持てる母親の注意せざるべからざる事項につき三島醫學博士の談によれば二三年此方婦人社會に專ら愛用せらるゝは彼のボーアなるが此ボーアは同じ肩掛類の中にても諸鳥の羽毛もて製せられ實用よりは裝飾を主とし外國にては既婚者若くは可婚期のものゝみ使用せるものにて日本の如く十二三歳の少女までが之れを用ふるといふは萬々なしそれ故外人の眼より見れば頗る異樣にて殊に吾々の頸部は無數の血管往來して溫の放散を保ち且つ皮膚と衣服との間に生ぜる溫暖の空氣を散失せしむる所なれば殊更に溫保する必要なく況して年少の婦女子に之を用ひしむるは早やくより皮膚の抵抗力を弱くし隨つて感冒に罹り易き習慣を作るものなれば此の如きは愛兒の請にまかせて與へざるをよしとす又マツフも近來非常に流行し誰れも彼も殆ど常用とせるが之れも外國にては高貴の婦人が夜會に赴く時などにあらざれば多く用ゐず且つ矢張り筋肉の運動を妨げ間接の害多ければ少女のうちよりこれを携用するは甚だ喜こぶべきことにあらず若し裝飾を主とする爲めならば他の方法によりて之れをなし又單に溫保の爲めならば普通の手袋を用ゆる方寧ろ良かるべし次ぎは少女用の靴なるが、之れも孰れも踵の細きものゝみなれど元來踵の小さき靴は外國にては裝飾用に供し專ら舞踏などに用ゐらるゝものにして决して少女の平生に使用するもの迄かゝるにはあらず然れば世の母親にして娘の靴を購ふに際し如何に流行なればとて右の如きを擇びなば足の運動不自由にして遂には全身の健康を害し然らざる迄も壓迫よりして種々の損傷起り爲めに畸形となること往々あり注意すべきことどもなりと

人情哲學

▲嫌いな人

若者自分の戀人の弟に出逢ひ是を手懐んと歩み寄り「坊様今學校からお歸りですか、私を知つてますか、え、私は誰です、少年は稍暫く若者の顏を熟視て「知てらあ、僕の姉さんの大嫌いな人だ、

▲買ひ物

或細君が食麵包を買ひに行つた、處が店の者の出したのは値段より怖ろしく少ないので「是は大變に小さいぢやありませんか、「否え貴女御持ちになるに重からうと存じまして、細君は聞いて「ぢや玆へ代を、勘定が御面倒でしようから少しにして置きます、

▲流行

A君何で其樣に急いでるンだ、いや今家内の簪を買つたから大急ぎで家へ駈け付ける處さ、夫や如何云ふ譯で だつて君、家へ行かない内に流行の形が變はると大變だもの、

▲お料理

相愛した二人が、最早近々に結婚する事となつて一日話をして居た、女は男の首にすがり付いて胸を躍らせながら、

女「許して下さいれ、貴君、妾秘密があるのよ、

男「な、何んです、秘密てのは、

女「妾れ、貴君を欺したの、お料理が出來ないんですよ、

男「好ござんすとも、其樣事、私は詩人だから料理なんか要らない、

▲共同事業

母「貴君は宅の娘を貰ひ度いと仰やるが、如何して彼女を養ひなさる、妾だつて中々養ひ切れない位掛りますよ、

婿の候補者「左樣ですか、では貴女と二人で養ふ事に致ましよう、

▲晩餐會

晩餐會に招待された一人、少し道草を喰ひ過ぎて腹をペコペコに減らして駈け付けたが、時間が遲れて珈琲の出た處であつた、主人役の貴婦人は氣の毒そうに、

「今夜は貴君が遲くお出でゝ眞實に殘念でした、一度裕御一所に食事を致し度う御座いますが何時頃が御都合が宜う御座いましよう、

客「奥樣、今でも結構で御座います、

▲野心

甲「君は何にも別に望もなし、呑氣で結搆だれ、

乙「望はあるさ財產家にならうと思つて居る、

甲「其樣なら何故働かないのだ、

乙「いや、僕はれ、君も知つてるだらうあの浦田が頻りに働いて金を貯

めてゐるのを見て居るのだ、彼は僕の爲めに働いてゐるのだよ、
甲「浦田が君の爲めに働いてるんだつて、
乙「さうさ、浦田は一生懸命に働いて、金が出來れば死ぬのさ、而して其寡婦さんが、僕の女房にならうと云ふ者さ、

▲記臆力

A「小寺の奴位い物覺の惡い奴はない、何でも直に忘れて仕舞ふんだもの、
B「其樣事はないよ、彼奴に金を借りて見給へ、何年經つたつて忘れる事つちやない、

▲最上の時

「女の一番好い時は何時だらう、
「恐らく眠つて居る時だらう、

▲若い御方

寡婦その娘に向ひ「あの若し若い御方がお見えになつたら、應接間へお通し申して待つて頂いてお呉れ、
娘「若いお方つて、妾しの？、お母さんのか？何方、

▲最要用なる書物

甲「僕は本を一册買つたがね、實に好い本だよ、
乙「何だ、又歷史か、小說だらう、
甲「いゝや、無心の口實を書いたもので、三百六十五日に分けて其日其日に應ずる樣に一日分が五つ宛ある、

▲子福者

遠慮のない人「如何だ、お前の伜の利口な事、親より子の方が餘程偉くなるぞ、
親爺「夫や當然でさ、私だつて親爺より餘程偉いんですよ、親爺は私一人きり子供を拵へませんでしたが、私は彼れを頭に六人拵へましたからなあ、

▲自殺

失戀の青年「ちやあお孃さん、僕は最早此世に望がありませんから、是からウンと飲で食つて自殺します、それでは御機嫌よう、
孃「貴君ほんとに左樣お極めなすつたの、
青年「えゝ、最早斷然實行します、決して變がへするやうな事はありません、
孃「けれども少は變へられましよう、自殺するのに飲んだり食べたりは無駄だから御廢しなさいましよ、

▲臨終

病床に瀕せる女房夫に向ひ「ではね、妾が死んだら、先の夫のお墓の傍へ埋めて下さいね、
夫「あゝ好いとも、其方が仕合だ、



觀察

女學生の男子觀

ハイカラ式部述
角帽子筆記

▲男子は蛇である

ハイ妾が其海老茶式部で御座います、それがどう致しました、近頃男子方の側では頻りに海老茶々々々と仰言いますが、海老茶でも薄茶でもようございます、妾共は妾共だけに自分と云ふことは存じて居ります、意氣地の無い、弱々しい、表面ばかりが强さうで、裏面へ廻ると、マルキリから無用な、今日の男子方の御世話になるものでは御座いません、海老茶色の袴を穿いて居るから妾共が海老茶式部なら、角帽麥稈帽の男子方は角帽の中將、麥稈帽の少將とでも申しませうか、靑い御顏で居らッしやるから靑大將も面白う御座いませう、蛇の名に差合がある、ホンに氣が附きませんでした、御免遊ばせ、乍併これは物の譬喩ですが、男子方は妾共から蛇だと申上げたとて、さう御憤りにならんでも可かと思ひますワ、何故かと申しますと昔樂園でイーブに智惠の果を食はした惡者はたしかに蛇だつたと思ひます、サタンが化けたのだと申しますが、何にせよイーブばかり惡いやうに云ふのは罪ですよ、要するに誘惑して陷れた罪惡は蛇に在るので御座います、それを只り女にばかり罪を嫁せて、海老茶式部は品行の惡いもの、女學生は墮落する者に定まつて居るやうに御噂になるは、すこしく片手落では御座いませんか、ヤレ社會風敎の上からどうの、世道人心の上からどうの、女に學問をさせるのはよくないの、婦人が利巧になるとロクな事は仕出かさないの、何のかのとひどく御心配でゐらッしやるやうですが、申さば餘計な御世話で御座いますよ、妾共の方へ御目を御配りなされる御隙があれば、すこしく御仲間の方へも御注意遊ばせ、御頭にも蠅が居ますよ、御氣が附かない

ので御座いますか、諺にも岡目八目と申します、況してや妾共は女ですもの、ヤハリ何のかのと仰言つても妾共へはスグ御目が附くので御座いませう、ちよつと歩いて居ましてもうるさく庇髪の上から靴の爪尖までヂロ〳〵と御覧なさるもの、後からうるさく隨いて居らツしやるもの、斯うすれば妾共が喜ぶだらうとでも思召すか知りませんが、御氣の毒樣、妾共の側ではみんなうるさい〳〵と言つて居ますよ、うるさいと云へばヤハリ男子方は蛇と御縁があるのでは御座いませんか、

▲昔の女は今の男

昔は女を蛇のやうだと云つたものです、妾共から見ると非常な侮辱たるに相違御座いませんが、實はサツパリした男子らしいと云はれた當時の男子方から見れば、弱々しい、内氣な疑深い、執念のあつた當時の女子を蛇だと御見立に爲たのも無理では御座いません、

昔は武家には武士道と云ふ者があり、今の東京人の先祖は江戸ッ兒と云つて、實に見上げた氣風が御座いました、これなら成程流石男子方は格別な者と感服する氣にもなります、それが今日ではどうで御座います、丸でアベコベに爲つて仕舞つたではありませんか、アベコベと云へば昔の男子は今の女子に爲り、昔の女子は今の男子に爲つたので御座います、もつとも昔の女子と申しましても大昔から奈良朝、平安朝、また鎌倉以來の武家の婦人は異に妾共の鏡とする所で、これはこゝで例にすることは出來ません、こゝで例に引く昔の女子と云ふのは、即ち前に申しました弱々しい、内氣な、疑深い、そしてたゞ男子をたより、生殺與奪の權を悉く男子に取られ、一生の禍福は他人に倚る、とまで安く見られた女子を云ふので御座います、其女子になつて御仕舞なさつたのが今の男子方で御座います、歷史を見ますと平安朝時代の男子は皆今日の男子方のやうだつたらうと想像されます、殿上人と云へば眉を畫いて鐵漿を含み、月を見ては泣き花を見ては物

のあはれを感ずるのを仕事にして居つたとあります、文明と云ふ者も歡迎すべき者には相違ございませんが、否な妾共女子の側からは實に双手を擧げて歡迎す可き者で御座いますが、男子方の側ではあまり歡迎なさらない方が善う御座います、御覽遊ばせ男子方が意氣地の無い弱虫に御成りなされる時代は、必ず文學美術の燦然として光を放つ時です、戰爭は野蠻の親玉で、氣の弱い者は聞いても身のけが立つと申す位で御座いますが、是ばかりは男子方の世界で、これが始まると流石の男子方



もみんな强い方、、、えらい方、見上げた立派な方、妾共が御慕ひ申して恥かしう無い方に御成りなさる、日露戰爭が始まつてからは出征なさつた方は申すに及ばず、内に居らッしやる方も底は世間の手前もあるから、出さなくなつて可い塲合へも力瘤を出して强がつて居らッしやるといふ始末、交番燒討などゝ馬鹿な騷も御座いました、こんな事を申すと御轉婆と仰言るでせうが、あの日妾共は日比谷へ見物に參りまして巡査さんに追はれ、お堀へ陷落ましたの、眞實でございますよ、乍併斯う戰

爭が濟んで藝妓の寫眞の澤山這入つた雜誌がイクラも出るやうな時代になりましたら、又男子方の御氣風は平安朝寫しといふやうな事になるでせう、現に軍人の方は風雪の間に一身を賭して轉戰して居らッしやる最中に、同じ月日の帝都の眞ン中では、藝妓に元祿姿をさして嬉しがることが大流行、それに日本第一の劇場では、聞くさへ貴い新聞記者といふ方々が、男子だてら御白粉つけて紅つけて、御茶番で無い大眞面目の御芝居を爲さつたと云ふ騷ぎですもの、それからあらゆる文士、歌人・俳諧師に至るまで、乃至學校の書生さん方が同じ男子方の中でも割に話の分つたと云はれる御人で、御芝居をなさつた方は少なく無いンですもの、茲が大國民の太ッ腹な點だと云つて仕舞へばそれ迄ですが、何だか苦々しいやうに感せられましたよ、男子方は戰爭の濟まないうちからモウ平安朝寫生の御稽古をして居らッしやる、

▲昔の男は今の女

昔の女子は今の男子、と申した譯は前述べました通りで御座いますが、序に昔の男子は今の女子、と申した譯を少し喋舌らして戴きませう、これも前申した通り昔の男子と云つたからとて所謂平安朝時代の男子などを云ふのでは御座いません、極淡白した男らしい武士氣質の男子方を指して云ふのであります、男子方は皆女々しく弱々しく爲てらッしやる今日の時代、却て女の方には男々しい淡々したのが居ます、それも男子方に媚を賣るを商賣にして居る藝妓娼妓、其他これに類似の女、或は歴とした良家に育つて居ながら其容貌と遊藝とを餌にお嫁に往かうと考へて居る半娼賣人とも云ふ可き女の仲間には居ません、(昔は藝妓娼妓には却てえらいのが居ました) 敎育ある良家の子女、見識ある獨立の婦人、妾共の仲間は大抵其側で御座います、衣服なども垢の附いた汚れたもので無い限は、縞柄がどんなであらうが、摸樣がどんなであらうが、流行後

には固より氣は止めません、只だ凜乎として他から侮を受けない丈の扮裝は致します、女の嗜と云ふ紅白粉なども已むを得ない塲合を除いては用ゐないことにして居ます、人樣の前へ出ましても、無論餘計な喋舌は致しませんが、必要の用件だけはドシ／＼と申します、多人數列坐して居らッしやッたからとて、別に怯するといふやうな事は御座いません、男子方の中だからとて羞耻むといふことも致しません、男子方に云はせると女は少しく羞耻がる位が風情が有て美しく見えると仰言る、妾共の側でも年老つた人



や、或は極頭の舊い家庭に育つた者には之を佳いことのやうに云つてる者も御座います妙齢い者などは故に之を粧ふと云ふやうな間違つた考を以て居るものも御座いましたが、追々には減て參ります、これは男子方が御自分の方に御都合の善いやうに御注文なさるので、中には女を玩弄物に爲ようとの下劣な考から仰言るのも御座います、女の側で之を遵守する義務はありません、さて運動も致します、散歩も致します、自轉車も走らせます、馬にも騎ります、慈善事業に奔走も致します、遊説も致します、演説も致し

ます、柔術も教はります、弓も彎きます、一旦緩急あれば義勇公に奉じ、救護班と爲て戰地に出張し、砲烟彈雨の中へも出入します、屍山血河の間をも往來します、其他平時に在ても官吏にも爲ります、敎員にも爲ります、會社工塲の技手にも爲ります、田圃に出でて耕し耘り、山林に入て薪を採る等は先祖傳來の仕事、決して男子方に讓りませぬ、追々には參政權も得て國家の大事にも直接に携はる考であります、下田歌子さんや奥村五百子さんや、其他御亭主を助けて政治上の奔走をなさる誰々さん、慈善事業に熱心し教育事業に身を入れて居らッしやる誰々さんを、餘程珍らしいやうに男子方は仰言るさうですが、ナニ彼方々だつて女です、妾共だつて女です、今に御覽遊ばせ、妾共の世界に成つた曉には彼方々が爲て居らッしやる仕事を十倍にもして御目に懸けます、

▲節操の掏兒

さて妾共は此意氣組を以て、斯新しく興隆せる大帝國に貢献する覺悟で御座いますが、男子方の側は如何でゐらッしやイます、日露戰爭で其本領を御見せ遊ばしたところを、永遠に御繼續遊ばす事が出來ますか、固より今日の男子方だつて悉皆意氣地の無い御方だとは申しません、中には妾共が御慕ひ申して差閊ない方も居らッしやるでせう、が失禮ながら萬綠叢中に一點の紅が有りましたからとて、其處を悉く紅の世界ぢやと申すことは出來ませぬ、寧ろ綠の世界ぢやと申します、平安朝々々々と申したのは、或は御氣に障つたかも存じませぬが、平安朝にも平將門が有ります、藤原隆家が有ります、源義家もあります、安倍貞任も有ります、けども妾共の申しまするは斯少かな人、及び地方の名山大川に其膽玉と腕節を煉つた人を指すのでは御座いません、其中央政府所在地たりし京都を中心として、當時一般の傾向より見たる風俗人情からして申すので御座います、さても二十世紀の平安朝はどうでございます、將來我日本を背負て立つとの御抱負が有る可き筈の男學生諸君はどうでございます、こ

れも一點紅は第二として萬緑の方から觀察致しますと實に御氣の毒で堪らないので御座います、何時の事で御座いましたか妾共は二三の友達と同伴に、日比谷公園へ空氣を吸に參つたことが御座います、燒討見物の時では御座いません、固より學生の事で御座いますから服裝と云つて大した事は御座いません、乍併故と時好に逆らふ必要も無いのですから、いづれも廂髮に海老茶袴だけは穿て出掛ました、妾共は男子方からは色々甘い御褒言葉を常住頂戴致して居りますけれど、まさか自分ながら美しいなと自惚れる



程の容貌では御座いませんが友達の一人に非常の美人が居るので御座います、これは實に天成麗色とでもいふので御座いませう、毫末の白いもの紅いものを施こしては居ませぬが、雪に旭の映ずるが如き顏の色、薔薇の一瓣を散らしたやうな唇、眼には秋水を湛へ、眉には遠山を畫くといふ有樣、迚も形容などが出來る美しさでは御座いません、相當の資産と身分の有る家の娘で御座いますから、自づから品格も備つて居り服裝も賤しうは御座いません、其外の友達もいづれも十人並以上の容色これで出掛けたので御座い

ます、折しも此日は非常の好天氣で、園内の秋景色紅葉黄花正に十分といふ風情風和にして水清く、日麗しくして人に宜し、新鮮の空氣を吸散策の興趣を恣にするには以て御座れの天氣です、人の出の澤山なのは道理でした、此處へ妾共一行が顯たのです、夫が前に申した次第ですから、女小兒まで覺えず妾共の方へ振向と云騷ぎ、況てや若き男子方の目には、實に一團の天女の群が天降たとも見えたで御座いませう、孰も目を据えて妾共の方を見つめて居らつしやる、素より男女に限らず醜い者に對すれば不快に感じ、美しい者を見れば愉快に思ふのは人情の自然で御座います、妾共でも男子方の凛然として犯す可からざる威嚴あり、風采堂々として颯爽四邊を拂ふやうな方を見れば、自然見返すことも御座います、實際です、振向くことも御座います、色の戀のと云ふ譯では御座いませんが、其方は果して其外貌の如く、しかく立派な方であらうか位は聞糺す氣になることも御座います、けれど引返して其方の後を尾けるといふやうなことは致しませぬ、其處は男子方はづう〳〵しく鐵面皮で居らつしやるからでも御座いませうが、三々五々此處に一群彼處に一團と云ふやうに、或は單獨の行動を爲さるゝ方もあり或は聯合軍を作つて攻圍の勢を御取りに成る方々もある、後から尾いて居らつしやるのがあり、馳け拔けて二三間前を歩いて居らつしやるのがあり、横手に引添ふやうにして御出になるのがあります、それで妾共の一擧一動に斷えず目を離さずに居らつしやるもあれば、見ぬやうな顏をしてちよい〳〵と同じく不斷に御覽になるのもあり、立止まればゆつくり歩行、或は後へ引返す方もあり、歩き出せば急ぎ足、中には後れては一大事と息喘き走つて來る方も有ります、何處まで往つても隨いて御出に爲る、園内に居れば言ふ迄も無く、公園を出ても其通り、電車へ乘れば同じく乘り、乘り替へれば乘り替へ、とゞ寄宿舍の門まで、御枉駕遊ばすのです、道でも買物をすれば立て待て居らつしやる、熱心な方に爲れば歸途知己を訪問して、ゆつくり遊んで歸るまで門前に待て居らつしやるのもありま

す、恰度其日比谷へ參つた日の事でございました、歸途に大概は電車で御斷念なさつたやうですが、非常な熱心な方と見えて寄宿舍まで居らつしやつた方がありました、又何時かで御座いました淺草から歸路に保證人の宅へ立寄り二時間ばかり遊んで、御飯を認めて居ますと、俄かに門前が騷がしい、立ち出でゝ聞くと二人連でハイカラ風の書生さんが二時間も前から此門前をウロ〱して、時々御宅を覗ふ樣子だから的切此頃流行る靴泥棒に相違無いと、近所の世話好が交番へ密告したから、直ちに警官出張で嫌疑が有るから來いと今の事交番へ連れて往つた云々との話です、其二人連の服裝容貌等を聞いて見ますと、豈料らんや淺草から妾共の後を尾いて來たニキビ盛りの書生さんなので御座いました、自業自得と云ひながら御氣の毒に感じましたから、直樣御飯を中途で其處を辭まして、交番へ參り、此方々は妾が一二度御目に掛つたことのある方、多分妾に何か御用が有て居らしつて妾の靴や蝙蝠傘が有るので妾が居ると云ふヿを知り、他家の事なれ

ばと御男子丈けに遠慮なさつて、妾共の辭るのを待て居らしたので御座いませう、といふやうな意味で辯解しましたから、警官も大概それと合點したのか、或は妾共と彼方々と何か譯が有るものと誤解したか、妾共の姿をヂロ、、、〱見ながら、頻りに笑を含んで二人の方を放免しました、すると二人の方は、妾が一片の義俠で御救ひ申したのを自分に意が有るから、あのやうにしてくれたとでも思つて居らつしやつたものか、流石に寄宿舍には尋ねて來られないから、禮狀を頻々と下さる、遂には交際をしたいなどゝ言ひ出す、益々增長して妾どもが出掛けるのを待ち受け、それ公園へ御伴を爲ようの、劇場へ御一所に參らうの、拙寓に御光來が願いたいのと言ひますから、さん〱其無禮を咎め、小ひどく辱かしめてやりましたら、はう〱の體で逃げて行きました、男子方ッたら何と云ふづう〱しい耻を知らぬ者でせう、靴泥棒でこそなけれ、うるさく附き纏つてあはよくば婦人無上の財寶たる節操を掏り取らうと云ふ考です、けれど元々意氣地無しの、

弱虫の、怯懦漢の事ですから、大膽に腕力を用ゐ、節操の強盗を働く程の事は出來ないので御座います、斯う云ふ男子方を稱して節操の掏兒と云ふ、ちよつと面白い見立では御座いませんか、

▲體が取替たい

さて此節操の掏兒は、如何なる風采、如何なる服裝をして居るかと申しますに、それが大變なので御座います、詳細はうるさいから御話しませんが、先づ各人個々に就て申しますと、頭髪はチックに甜めたやうに撫き付けたのが、通常で、凝つた方になると油持參で床屋這入を爲さる、揉上を削つて八字髭へ燒鏝を當て贅な方になると一個五十錢の角白粉で、出がけに御化粧をする、白粉代が一ヶ月に十五圓から二十圓、ハイカラも思ひ切て高いのは界の無い方で、何とか蚊とか種々な講釋付き程界重く、洗濯は借金を質に置ても毎白させるといふ、襟飾は玉虫色で無ければ海老茶の好み、蜥蜴の背見たやうなのは見るから嘔吐を催します

洋服、靴、いづれも時好を趁ふて拔目の無い扮裝、和服と爲ればその以前の衣は骭に到り袖腕に到るといふ風は夢にも見ることが出來ません、洋杖も太いのは檢問所で不審を打たれるとの豫防ですか、戒嚴令撤去の後までも見るから華奢な細好み、帽子には必ずリボンを附けるのが御定りのやうで羽織の紐にも時々見受けます、詰襟の學校服で襟飾の自慢が出來ぬ埋合に白襯衣の袖口にリボンを見せるなど何と云ふ氣際でせう、卷莨の持樣にも趣を見せ、ちよッと吸つて火鉢へ挿込で仕舞ふと云ふ見得、それで捨てるのかと思ふと妾共か立つた後では其吸掛を更に手に取てパク／＼吹かすので御座います、それで妾共の居る所では何を云ふかと……オヤ御免遊ばせ男子方に對して……何と仰言るかと聞きますと、どうも今日我邦一般の社會が女子に對して尊敬を拂はないには困る、丸で女子と云へば奴隷の如く心得て居る、それから見ると歐洲文明諸國の女子に對する社會一般の風習は感心なものだと、妾共が生れぬ先きに流行つた男女同權論の蒸返を聞かせら

れる、それで結論が毎でも、まだ〳〵日本人はだめだ野蠻的の戰爭が强いばかりで自慢は出來ない、と斯うで御座います、すれば此男子方が實際 妾共の爲に盡して下さるか、婦人に對して高潔な考を以て居て下さるかと思ふと、妾共の居らぬ所では、何事か前夜の回想談、舌を出したり、背をたゝいたり、机の抽出には男名前の女の手の鐵釘の折を行列さした女郞の文とかいふ男子方では非常な大切なものが仕廻つてあるさうで御座います、首に何か白い者を卷き付けてオホンと來るのは鼻持のならぬ者と神武以來相塲が極つて居るやうですが、男子方の癖に鏡に向ての化粧が一時間、匂袋や香水をやたらにプン〳〵させて、ゾロリとした衣裳の着ざま、疊付の元祿鼻緒といふのを爪先に引懸け、シャナラ〳〵と練つて行く御姿、これが明治の丹次郞樣かと難有涙が溢れるばかり、妾共の武骨なと、、、りなりが今更御耻かしく、自由になるなら、變生男子とか、變生女子とか云ふやうな方術を以て、男子方と妾共と體を取替度い願で御座います。(完)

●新年の床飾

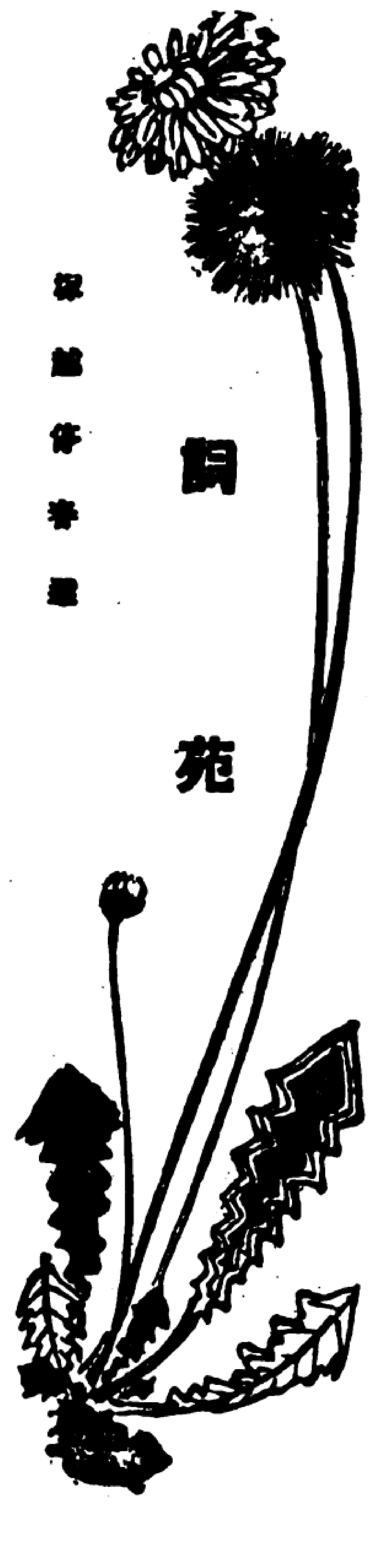
新玉の年の始め掃き清めたる大床に奇瑞の花卉を栽へて福壽を一室に占たるは勿體あるものなり、新年に飾るべき盆栽は松、竹、梅を第一とし藪柑子、千兩、萬兩、橘、橙などの實付より福壽艸、水仙、蕗の薹、雪割草、バイオレットの類なるが、今普通多く用ひらるゝ松竹梅に就て少しく語らむ。

松竹梅は槪れ一鉢に集め植ゑたるものにて、さして品質の吟味を要せざれば、價格も低廉にして通常五十錢以上なるが若しこれを一鉢づゝ植ゑて三鉢一組として見る時は枝振は勿論、鉢までも撰むべきを以て少くとも拾圓を下ると少し。

▲松 は元來山に生育するもの故、山土、或は赤土などもて植ゑ乾燥せぬ丈けに水を施すべく、木振は細くして軟柔なるものを第一とし五葉の松の古びたるもの又は黑松、相黑なども梅竹に取合せて見榮あるものなり。

▲梅 は木よりも實生の好み多く其種類百五十餘の中にては揚羽の蝶と稱する桃色の絞、極大輪にて武藏野、薄紅にて玉垣、極緋にて緋梅など重なるものなり、靑莖のものは何れも香氣高く、而して梅を植ゆるには肥土がよく又濕りを好む質ゆゑ、なるべく水を切さゞるをよしとす。

▲竹 は針金の如く細きをよしとす、孟宗、眞竹、注連、熊笹、四方竹、大明竹、寒山竹等いづれも皮を剝ぐことを怠らずば思ふ樣に細く仕立らるゝなり。



詞苑

[illegible][illegible]任峯選

（天）鏡

我思ふ心のうつる心地して向ふ鏡の耻かしきかな

河内　竹内敬子

（地）…

初結の鏡に寫つる姿さへあらたまりたる心地こそすれ

伊勢　藤堂しげ子

（人）新年風

いくそたび吹き返しても嬉しきは年立かへる今朝の初風

東京　武内森江

評。第一は處女の心を歌ひ、第二は人の妻の心を歌ひ第三は老女の心を歌ひたりとも見るべし。結婚の約初めて成りし時、嬉しさと心配とに滿ちたる處女が、光りまばゆき朝鏡に向ひたる情など、第一の如くなるべく、稍世馴じみたる人の妻が、初春の鏡に對して威儀を正したる時の心は、第二の如くなるべく、世途の辛酸を嘗め盡したる老婦人が、年立返る朝風に對する時の感は、思ふに第三の如くなるべき歟。第一はなまめきたる情あり。第二は凜たる姿あり。第三は感慨の意あり。

三首共に妙、殆ど甲乙すべき所以を知らず。今暫く私意を以て之を天地人に次第すと云爾。

[illegible]邊（擬鬪歌）

○○○（右）春　海靜

傳へ聞く蓬萊が島のこれやこの二見が浦の春のあけぼの

伊豫　渡邊榮子

、○○（左）春　海

わだつみの浪路遙かにうす霞む龍の都も春や知るらむ

安房　和田きん子

左も勢々たる氣象あれど、右のたけ高く含蓄多きに如かず。右を勝となす。

△○○（右）春　海持

汽船の港はなるゝ笛の音をのこして霞む春の浦つら

備前　駒井友子

△○○（左）春　海

和田の原[illegible]の立ちわらむ

京都　梅の枝

過ぎ行く舟も音ばかりして
笛の音を通して讀むと云ひ、霞幾重の立ちぬらむと云ふ、一對の妙想妙舞。持。

△〇〇(右)新年風物　山城　相川よね子
回禮の人ゆき過ぎて門松に
　まはらぬ程の秋風ぞ吹く

△〇〇(左)新年風　岡山　林　榮子
門松の上葉に今日の嬉しさを
　さゝやき渡る年の春風

左持。門松にまはらぬ程の春風と云ひ、上葉に今日の嬉しさをさゝやき渡ると云ふ、何等の好對ぞ。

△〇〇(右)春　海路　長崎　杉山うめ子
かすみ渡る春の海原夢に似て
　白帆の影のうごくともなき

、〇〇(左)春　海　淺草　富田こう
和田の原ほがら〳〵とあけそめて
　霞を渡る蜑の釣舟

左下句甚だ妙なれども、精緻巧、右の全什飽みなきにかなはず。右勝也。

〇〇(右)戀　愛知　ますみ
こひしさにかたみの鏡人知れず
　出しても見つ夕暮の窓

△〇〇(左)新年風詠　美濃　山田愛子
わが窓に待たぬ賀葉書飛り來なり
　あした嬉しき年の初風

左勝。
山田君の他の歌、春海
綠かさる衣が浦のうす霞春また淺き一重なりけり。
潮吹く鯨も空にかすむらむ霞きなどる熊野の海。

△〇〇(右)春　海路　和歌山　森　紫尾
伊豆の海や雲間に霞の月淡く
　ねむるに似たり春の七島

〇〇(左)春　海　牛込　岩崎いと子
濱の音も霞にこめて須磨の浦や
　夢となり行く春の[illegible]

左、夢となり行くの語穩かならず。右勝。

、〇〇(右)春　海　美濃　菅井[illegible]賀
梓弓春の海べにさくら貝
　拾ふ少女の袖かすむなり

〇〇(左)春　海　美濃　田中文子
長閑なる春のなぎさを漕ぐ見れば
　霞なうみ渡る海士とししもなし

左はやゝ俳風に落ちむとする恐あり。右勝。

〇〇(右)新年風詠　大阪　星合文子
四方の海に吹きすさみたる狂風も
　おさまれる代の春に逢ふ歡

〇〇(左)。●　[illegible]代　濱嶋世紀子
春の海の長閑けさは御代の姿にて
　深さは君の心なるらまし

右は調を以て勝り、左は着想を以て勝る。持。

〇〇（右）春　海詩　小倉市　林　とみの

海士のかるみるめも今朝はゆるくと
　かすみ渡れる海の面かな

〇〇（左）春　海　小樽　佐山すま子

白帆さえふな歌たへし後はたゞ
　霞たゞよう春の海ばら

本持となすべし。共に好歌なり。

、〇〇（右）新年風詩　赤坂　栗山しげ子

立ちかへるとしの初風靜かにて
　松にかゝりし羽根もうごかず

、〇〇（左）新年風　石見　宮内登美子

鞠歌も羽根つく音もかすむまで
　年立つ今朝は風靜なり

共に遠慮なく靜けき新年を歌ふ。持とす。

、〇〇（右）春　海詩　長野　奥村鈴子

眞帆片帆かけつられて海原の
　霞の奥もあとは絶えせじ

、〇〇（左）春　海　小田原　倉橋よし江

眞つむ商船の大船いならべて
　いかりおろせし春の海かな

是亦持。ひとしく新年の春の海を歌へるものにして、共に力あり。

〇〇（右）春　海詩　埼玉　長島敬子

岩にゐるかもめの夢ものどかにて
　霞流るゝ茅渟の海原

〇〇（左）春　海　大阪　藤井なを子

眉ひきの葉山かすみ日は落ちて
　ゆふ波けぶる茅渟の海原

是も甲乙し難き歌。

、〇（右）新年風詩　牛込　池田くめ子

立かへる年の光ののどけさを
　まづ吹き送るけさの初風

△〇（左）新年風　大阪　田中常子

平和のしらべにかへて山風も
　年立つけさをまづ祝ふらむ

同じく持。

〇〇（右）春　海辭　安藝　松阪雄子

戰ひしあとゝも見へず霞みけり
　對馬の海の春のあけぼの

、〇（左）春　海　愛知　梶田愛子

舟子等の小歌やさしき聲はして
　そこともわかず霞む海

右の歌やゝ勝るに似たり。

〇〇（右）春　海辭　三河　瀧澤菊々子

沖遠く見へつかくれつ眞帆片帆
　夢さながらの春の海かな

、〇（左）春　海　備後　高橋芳野

島もおぼろ白帆もおぼろ春の海は
　霞にわけて霞にくるゝ

是も右の歌勝る。

此外面白き歌なれども、題外にして擇ぶ能はざるものに、下谷靖子

嬢の
君は今いかなる浦にをしかもの浮寝かすらむ寒きこの夜を。
など云へるあり。又浅草富川しげ子嬢及丹後高橋眞子嬢の春海を詠じたる歌の
動くともなき大船の白帆のみかすみ殘せる春の海原。
は、全く一字の相違なし。暗合も亦甚しければ、亦之を採らず。

佳調

● まほ片ほ行くあとだにも見へぬまで霞たちこめり春の海原　兵庫　柳田のぶ子

● 朧夜の新月淡く雲をいでゝ涙しづかなる芽渟の海かな　大阪　瀬喜代子

● 立かへるとしの始めの長閑さに今朝は風さへあらたまりぬる　石見　河村高子

● 真帆片帆次第〳〵にうすれ行きて伊勢の海原のどかにかすむ　津市　榮子

● 仇船の日影もあとなく消へ失せて長閑なりけり青の海原　宇都宮　大谷淑子

● 朝風や松の玉琴かきたてゝ岸に漣楽しう舞はす　神奈川　中山奈加子

● 新玉の風の音さへ清けきな柳の結び目を解く如く　京橋　岡田つる子

● 君が代の榮ゆく春の朝なぎになみ静なる大わたのはら　長門　野崎妙子

● かぎりなき譽れを載せて兵士がしつかに歸る春の海原　滋賀　田中とみ子

● 誰か爲めにかたちつくらんたしなみの鏡も今は忘れられけり　新潟　小菅まさ子

● のぼりきて初日おろがむ山の上や神代ながらの朝風ぞふく　周防　中村てる子

● 島みえずふれもうごかず夢に似し春の海原浪も靄めり　兵庫　柳田梅子

● むさしの海かすみがくれにほの〳〵と帆ばしら見えて浪しづかなり　岐阜　井川松枝子

● 曇りなき鏡の上のまことこそうつす我身の心ともかな　山城　古川かつ子

● 松に吹く嵐の音も一夜さへ長閑き風となりにけるかな　河内　田中八須野

● み旗吹く風寒からず都路に愛しき少女等羽子うちかはす　山口　葉村露子

● 門松の枝もならさす吹風は春になりぬる心なるらむ　松山　みどり

● よきはよくあしきはそれとかざりなき鏡を人の心ともがな　本郷　菖人女

● をちかたのかすむ帆影とまがひつゝ白鷗あそふ春の海原　山城　北尾きぬ子

● よきはよくあしきはあしく其まゝにうつす鏡やまことなるらん　河内　田中美壽榮

信濃　小出春江

春くれど波もみだれてこぐ船の名のみ靜けき灘の海かな
● 下野　新井琴子

立ち返る年の小波おだやかに青海原は霞こめたり
● 大和　西尾とし枝

こゝもまた春立ちけらしなだの海のはなれ小島に霞匂へり
● 和歌山　山村順子

くもりなき鏡に向ひ朝夕に己が心をうつしみんかな
● 尾張　吉川京子

光琳の畫に見る如き春の海霞に浮かぶ沖つ島山
● 山城　木田逸子

あら玉の年たちかへる春なれば風も長閑にふき渡るらん
● 伊勢　戸倉鈴子

朝な〳〵むかふ鏡のうすくもりこゝろにかゝる雲もうすみて
● 出雲　岩井じん子

風鳴の音ものどかに聞ゆなりかすみに暮るゝ春の海原
● 越前　武田かほる

春の着る霞のきぬにおほはれて帆影ゆたけし灘の海原
● 奈良　藤岡慶子

仇浪の寄せてくだけしあたりから鯨しほふく春の海原
● 備中　有田たま子

和田の原入日の霞の末はれて雲かと見ゆる淡路島山
● 新潟　小原操

よろづよに國の光をますかゞみさかゆる御代の姿なるらむ
● 名古屋　清水みさを

うつすとも筆もおよばし沖遠く霞にうかぶ淡路しま山
● 甲州　吉田金子

梅かほる花の小みんの姿見にうつる姉君すがたやさしき
● 美濃　坪内清枝

悠々と登る月影おぼろなる土佐海遠く鯨しほふく
● 千葉　岡村よし子

朝夕の面影寫す鏡にも勝ちて磨かんおのが心を
● 本郷　一心女

四方は皆ふきおさまりて初日かげのぼる海の面波しづかなり
● 但馬　柏村貞

物思ふ心は影に且つ拂ひてうつす鏡の面に出にけり
● 小倉　秋山あき

ひた〳〵と浪やはらかき春の海や磯の香なくる風あたゝかき
● 周防　入千代

忘れてし室の鏡を春の夜の窓より月のそとのぞきこむ
● 本郷　玉谷秀子

我が胸に寫せぬ間は春の海の鳥も霞のしとね着るなり
● 赤坂　幹山ふみ子

むかひては神に奉らむ心地して形見のかゝみそゝろ戀しき
● 越後　荻野てる子

化粧室にふとあふぎたる大鏡丸まげ姿うらはつかしき
● 大阪　山中ます子

くもらじとみかく心の友かゝみ照らしあはせてとしもへにけり
● 美濃　菅井恵賀

ま帆一つ二つ浮ひてしらむなり霞なからに春の海はら
● 長門　杉山きくの子

いつはりのなき鏡こそ慎みなれ曇さまゝの影をうつせば

長門　大津安子

浪流ふ波音ゆるく夜はあけて海原十里春風のふく

奈良　保田順子

日の本のみいづのほどもしたふとしな二見の浦の春のあけぼの

京都　筒井操

朝ひかり比叡のみねに霽みえてかもの川風さゆる今朝かな

長門　杉山きくの子

白波は沖のくだけて日の本の海路静かに春の風ふく

岩代　松崎美子

千草萌ゆる朝けの丘に立ちよれば心ばかりの春風ぞ吹く

奈良　保田順子

うつし世のくもりけがれをよそにしていよゝ真澄の鏡たふとや

名古屋　奥村てる

島山の影はおぼろにさゝなみの音までかすむ春の海原

大阪　林はま子

新玉の年たつけさは高砂の松ふく風ものどけかりけり

福井　増田卿子

わかおもてうつしてもみんます鏡なきたらちねのしたはるゝまゝ

岡山　田上濱子

姿のみうつるものかはおのがじゝむこゝろにみる鏡なれば

香川　後藤くめ子

夢かとぞ霞に消えぬ沖の島かよふ白帆の遠つ海原

山城　おとし

船に帆を張らまほしとおもふ迄のどかにかすむ春の海原

大阪　井上登美子

高砂のこゑも交りてよとむなりとし立つけさの庭の松風

下野　須田志奈子

歓迎の聲をあつめて門松の上葉をわたるあらたまの風

備後　中尾幾代

美しきおもかげ見ゆる鏡なりにごる心はうつらざりけり

長崎　佐田秋江

旅にして十日を暮らす春の海や霞をはらふ風だにもなし

芝　まき子

ほの〴〵とはつ日ゆたかにとし明けてまつふく風の音しつかなり

岡山　田上濱子

風和ぎていさゝかげふれかげ霞む春の海づら浪静かなり

栃木　玉野とし子

錆うかりしいたづき癒えし喜びを鏡に笑みて歌思ふかな

山梨　衣川衣子

春の海や霞の底を行く舟の白帆ほのかにかもめ群れ飛ぶ

三重　中津小五百子

松の色見えて二見の浦かすみ波あたゝかく朝日さしいでぬ

周防　貞弘すみ子

夜中までもすさみし風の一夜へてしづかになびく軒の旗かげ

松山　越智仲子

朝ほらけ沖の小島はかすみこめて青海原は浪も静かに

久留米　時代いと子

新玉の年たつけふは和やかにも吹きてそ波れ御代の初風

美濃　瀬崎智女史

波の音もさゝやくに似て行く舟の帆影もかすむ春の海原 ● 美濃 田中久代

萬代をうたふつゝみにかよふなり千代をしらふるかとの松風 ● 長崎 大山さだ子

湯上りの亂れし髪をつくろひて鏡に笑める人若さかな ● 尾張 桑美代子

世と共にさかまく波もおさまりて長閑に見ゆる春の海かな ● 上野 萩原數江

大君の惠み深きみむねよりあふれて年のはつ風と吹く ● 伊勢 桑原つと子

うらゝけき平和の色に滿ちみちてやゝに明けゆく伊勢の大海 ● 大阪 伊東理子

和田の原しほみちくれと靜かなりはるの船路やのとけかるらむ ● 和歌山 吉田節子

くもりなき御代の光をます鏡君か萬代かれて見るらむ ● 福井 島萬壽子

大八洲しつけき御代の年たちておもわふく風もきのふには似ぬ ● 千葉 鎌田須賀子

扇麥風にゆらぎてさらく〳〵と鏡に笑める美しき人 ● 滋賀 田中とみ子

小舟あらば外國までも渡らなんあまりのどけき春の海面 ● 和歌山 曾野節

是やこの世にたぐへなき古鏡いく年月もうつし來にけむ ● 大阪 前川一蝶

聞ひたまふ海を見あくる我おものうつる鏡になんとこたへん

乙女子の貝ひろふさま花やかにいそ打つ波も長閑なりけり ● 姫路 松下敏惠

吹く風にかはりあらねど新玉の年たつけさはのとけかりけり ● 大阪 林きわ子

さしよするしほ霧のおはしまに春あけほのゝの海の見る哉 ● 尾張 佐藤廉子

新たまの年立かへる今日の空いとものどかに春風ぞ吹く ● 宇都宮 落合喜久子

はてしなくかすみこめたる春の海に長く眉引く淡路島山 ● 日本橋 白百合

朝なぎにつりするあまのこゑはして霞こめたり興謝の海原 ● 麹町 納谷よし子

巌の根をあらふ新潮ひたく〳〵とおとたゆらけし春の曙 ● 東京 桑西寛子

明らけく治る御代の初風にゆたかになびく四方の民草 ● 岐阜 井川松枝子

うらじなの海にうかべるロシ十艘のはたてもなびく年の初風 ● 伊勢 木谷壽子

島山の影のみどりもつゝまれてかすみたなびく海の面かな

二月和歌兼題

朝霞、竹林鶯、鞠

(〆切一月十五日)

雜錄

爐邊閑話　露國の冬景色

自在子

何と寒い晩ぢやないか、未だ早いのだから、悠り暖まつて行くが宜いよ、ドレ寒さ忘れに露西亞の話でも仕て進ぜようかの、ナニ面白いから聞きたいと、ソンナヲ咄さうがね、折角の談話が凍つちまふと不可ないから、先ア榾でも焚べて、悠くり焙りながら話すと爲ようよ。

皆なは若い癖に寒いの何のと委縮けて居るけれど、露西亞の寒さを見るが宜い、とても這麽もんぢやアないからね、此方では富士山の天邊に些と許り雪が降りても、初雪だとか何とか言つて大騒をし、手水鉢に氷が張つても肝を冷して、巨燵の温袍のと、騒ぎ出すんだが、露西亞の寒氣と來たら、何うして〳〵這麽生優しいンぢや無いので、年中毛皮のブク〳〵した外套に包まつて居なければ、迚も凌が付かない程なのだ、夫で雪が降らうものなら河の水が皆な凍つて了つて、其上を電車が通り、加之に此の氷つた河の上で、展覽會や共進會を催したり、觀物を興行したりするんだから、凄じい譯さね、お前方は豈乎這麽事はなかろうと、本統にしないかも知れないが、噓だと思ふなら一遍行つて見るが宜い、迚も實地を見なくッちやア解るものぢやアないんだよ。

俺は長い間彼國に居て、寒い思をして來たんだが、久振で日本へ歸て來て、初めて日本の時候の有難味を知つたよ、何たつても日本位良い氣候の處は世界中何處を捜したつて恐らくあるまいテ、其が證據には今度の和睦で日本から放還された露助の捕虜を見なさい、當然なら生れ故郷だもの、飛び立つ思ひで歸つて丁度だのに、然うではなくて却つて歸化を願ひ出て、此の儘日本に踏止まりたいと希望する者が澤山あるさうだ、是といふも露助奴、日本の時候の善いのにゾッコン惚込んだからで、露西亞の樣な時候の惡い土地に育つた身には、成程然ふ思ふも無理もなからうよ、だがのう、其に比べると、俺等は善い日の下に生れたものだ、寒いの冷いのと泣面をするもの〻、寒氣の爲めに稼業を妨められる樣な事は、北海道へでも行けば知らぬこと、此の邊では先づ無いんだ、稼がうと思へば年中何時でも時を嫌はず稼げもするし勞働もするんだから、仕合なものさ。

ソコへ行くと露西亞の百姓なんてものは此方等と違ひ可愍なものさね、年中寒氣にピー〱して、オマケに地主の壓制は受ける、其で野良の仕事にも唯だ夏の暖い間丈しきやア出られないものだから、冬になると都へ稼に出る、丁度越後の男が冬の間東京に稼ぎに來るのと同じ事を全露西亞一般の百姓が行つて居るんだが、惡い國に生れると、百姓も難儀なものさね。

でも、其の土地の者は、住めば都といふ奴で、如何に風が寒からうが、雪が深からうが、平氣の平左で、露人の言ひ草に『何の是式に畏縮えてたまるもんか、冬は此方等の友達だ、此方等の血は、寒氣によりて沸くんだ』など、痩我慢を言つてるから、よくしたものさ、だから露西亞の百姓は寒中氷靴を穿いて、雪に埋れた田甫に吹雪の渦巻く中を、威勢よく、「雪の歌」かなんぞを鼻聲で唄ひながら橇を驅つてるが、子供の時からの馴と見えて、別段寒いとも思つて居ぬらしい。

田舍の百姓家は、普請も極く疎末で、日本の在郷の農家と大した相違もないがね、何の家にも居間の片隅には乾度耶蘇の像が掛けて在て、夜分になると之に燈

明を上げる、而して其の下に机が置いて在て、祈禱書だの供物だのが、麗々しく其に飾つて在つて、四方の壁には大抵の家で宗教畫が貼付てある、棚には戦爭畫や歴史畫もあるがね、夫から聖像の側は、大概戸棚に成てゐて、壁の下には長い腰掛を据え、又た他の片隅の壁際には煖爐がある、煖爐に沿ふて、架が設けて在て、之に子供を寝かす――と云のが、一般に露西亞の百姓屋の體裁だが、此の煖爐と架とは家財の中でも大切なもので、戸外を雪に閉塞された冬の夜の如きは、之を圍んで一家團欒の樂みを取るんだから、仲々必要な道具で、彼等露人の間にも「冬は煖爐と架のある小家に限りやす」と自慢し合ふ風がある位だ。



日本では甚麼ひどい山家へ行つても、ランプを用ゐない所は先無いが、露西亞は然うはゆかぬ、少し偏鄙の土地へ這入つて見ると、今だに樺などの篝火を焚いて燈火にしてゐるのだから、隨分開けないものさ、ソレデ家族の者は煖爐のまはりに此の燈火を取卷いて、夜業に麻を紡ぐもあれば、網物をするもあり、裁縫をするもあり、娘達は又た優しい聲で、「篝火よ、樺に篝火よ、なせ明るく燃えぬ、篝火よ、

爐にをらぬで燃えぬのか、そも乾かぬ故に燃えぬのか、やよ、篝火よ。」

など〻面白さうに歌つて居るのだが、子供は何處へ行つても無邪氣なものさね。

何處の國でも都會と田舍では、生活向に雲泥の相違があるが、露西亞は別段甚いよ、專制政府の餘澤を蒙る都の貴族共は、冬が來ると交際季節だとか何とか勝手の好い事を言つて、瓦斯や電燈の眩しい程點いた倶樂部や、乃至は紅燈ほのぐらい靑樓の奧で、火酒を呷つて、贅澤三昧の豪遊を極めるのだが、其に引代へ、憐れな田舍者は年中苦々と、草を刈つたり薪を伐つたり、牛を追つたり羊を飼つたり、一生懸命に稼いで居てさ、其で娛樂と言つては、野良から戾つて、女房が手拵へのジャガ芋の油揚、野菜のスープ、黑麵包の晩餐に舌鼓を打つて、扨て後煖爐のほとりに一家集つて樂しむ位が關の山で、又た別段是以上の樂をしたいとは思つて居ないらしい、兎に角彼等に取つて一番の快樂は、冬の夜長家族共々煖爐を擁して、サモワルのたぎる音を聞きながら、よもやまの談話に耽るので在つて、屋外の風雪も知らぬ顏に面白可笑しく笑ひ興ずる爲體は、實際質樸なもので罪がないよ、總じて露西亞人は家庭を樂しむ風があるが、是は一つは雪國で戶外へ出られぬ故もあらうけれど、俺は至極善い事だと思ふよ。

ソコデ今も言つたサモワルの事だがね、是は日本で鐵瓶を重寶がるやうに、露人の家庭に必要の物なんだ、サモワルは眞鍮或は銅で拵へた小風呂やうの湯沸し器で、左樣さ、丈は一尺五六寸、横は一尺二三寸もあらうか、中央に細い筒が在て、之に炭を入れ、其の周圍に水を注して沸かす樣に出來てゐて、横の捻をひねると湯が出るんだが、露人の家では都會でも田舍でも屹度このサモワルを備へ付て在て、茶を入れる時には必らず此のサモワルの湯を用ゐることに成て居る。露人は此の湯を賞美する結果「外國では茶が飲めぬ、サモワルで沸かさぬから」とまで自慢する位で、丁度江戶子が水道の水でなければ茶がまづいと言ふのと同じ

やうな譯なんだと見える、サモワルは家庭の必要品たる許でなく、又た交際上の要具と成つてゐるので、例へば風雪窓を打つ晩に、來客があれば直ちにサモワルの備ある室に通してサモワルを中心として卓を圍み主客打解けて卓上にたぎる松風の音を聞きながら紅茶を喫して快談放語、縱ひまゝに笑ひ興じて夜を更かすといふのが、露人一般の風習なんだよ。

　さて今度は方面を改めて都の話を爲やうが、露西亞の都の聖彼得堡は、今から丁度二百三年前、即紀元千七百三年に彼得大帝が建設した都であつて、都としては極く新しい方であるが、仲々立派なものだよ、聖彼得堡と云ふ恐しく長たらしい名前は、彼得大帝が守本尊として信仰して居た基督の高弟聖彼得を崇めて付けた名なんだ相だよ、市はネワ河が曲り屈つて芬蘭灣に注ぐ所に建ち、十二區三十八坊、四接屬郡から成立て居て、人口も百五十萬程あるが、冬に增加して、夏になると著しく減つて了ふ、其の譯は前にも言つた通り、冬は田舍の百姓達が多勢稼ぎに出て來て、各所の工場や製造場に雇れ、夏になると金を握つて田舍へ引込むからだよ。



　露都の冬景色は、千門萬戸たゞ雪の中で、見渡す限り白雪を戴いた大厦高樓、

大路小路は平一面に白皚々たる銀砂子を敷詰めて了つてゐるんだから、他の首府に於ては迚も見られぬ景致があるよ、夏は諸方から入込む旅人の爲に相應に賑ふけれど、其れに引代へ、冬はヒツソリカンと鎭り返つて實に寂しいもんだ、雪が降り始めたら最後、馬車は悉く橇に化けて了つて、其の橇は矢張馬に引張らせるのだがね、輪がないから、雪の上を音も立てずに、氣味の悪い程、速く滑つて行くので、乘附ないと變挺だが、ナーニ乘馴て見ると面白くツて、電車の皮革に吊下つて動搖られるなぞと違ひ、餘程心持の快いものさ。

市中を走つて居る橇に限り、何れも馬の兩側に長い柄が突き出て、其の先にポン／＼が付けてあるがね、何の爲かと思つたら、是は衝突を避ける爲だ相だよ、橇の駄賃は普通十五分間で二十哥(約我二十錢)が相場であるが、上等の物を傭ふ日には其以上幾らでも相對づくで價が出來る、彼國では寒い天氣に外を歩行くと心臟病に罹ると言つてね、誰でも皆な橇に乘るから御者の財布は仲々重たいつてこツたよ、橇の御者は何れもよく肥え太つた、體格の善い、まるで角力取見たいな奴ばかりさ。何うかすると露帝が橇を走らして運動に出られる事があるが、儀式でない限りは極々質素で、別に行列も隨へず、二頭立の立派な馬に橇を曳かして、護衛としては後に哥薩克を一人隨へてる許さ、此事を前以て心得居るものは警視廳の役人ばかりで、誰も知つて居ない所を突然立派な橇が通る、何だかと思ふと皆なが帽子を脫る、其の間にスーツと疾風の如く通つて了つて、アツ皇帝がと思ふ間もなく、早や遠くかけ離れて薄黄色の被布が空中に翩翻たるを見るのみで、直ぐに姿が見えなく成て了ふんだから、飽氣ないや。

都を流れて居るネワ河は河尻へ來て三叉に分れ、其の一つが又た三つの支流に岐れて、枝に枝が差してる上に、縱横十文字に堀割が出來てゐるから、露都には河の多いこと、橋の多いこと、島の多いことなど、大阪によく似てゐる、橋の數は二百程あるが大本流のポルツヤヤ、ネワ河に架つてゐるのが一番立派だ、ソレ

デ此等の河筋が冬季になると皆な三四尺の厚サに氷結つて其上を電車が通つて居て、一人前五哥(約我五錢)で、岸から岸に渡して與れる、何しろ河の幅が廣い處で十一二丁もあるんだがね、是が一面に板のやうに凍つて了ふのだから、其の景色と言つたら、實に大したものなんだよ、彼方には日本の人力車みたいな重寶な物は無い代り、粗末な氷橇を穿いた人足が大きな椅子を押して待て居て、客が有り次第向河岸まで後から押して走るんだが、是が又た隨分速いよ、這麼風だから氷の上に自然と道路が出來て、電燈が



點くし、道の目標に並木が植ゑられもするから、夜でも晝でも道に迷ふことはないのさ、夫から河の上には氷滑りの遊が催されるし、又た展覽會も建てばパノラマも出來、興行物も始まるといふ風だから、寂しい所か、仲々賑やかなものさ。

冬になると街頭に軒を並べた人家が、悉く門を締め窓を閉ぢて居るので、一寸見ると戸内に小さく成て逼息してゐるやうだが、實際は仲々然うでなく、否な寧ろ交際季節として、家庭間の往來は頻繁になり、社交場裏の出入も劇しくなり、世間一般が陽氣にな

るね、家々には夜會が始まり、紳士淑女が裳を連ねての舞踏には、窓外の寒月も雲を披いて微笑むだらうと思はれる位なのさ、而して何處の芝居でもオペラでも悉く蓋を明けて、大入叶の上景氣、其に續いては娛樂的興行物、倶樂部、料理店、玉突の樣なものまでも大繁昌で、正に露都百五十萬の人間が、冬の間遊ぶ方に身を入れるといふことを證據立てゝ居ます哩。冬季の儀式で最も有名なのは、一月の水の祭と四月の氷捌の祭であるが、此の二つは餘程面白い祭で、露西亞の風俗を知るには屈竟のものだと云ふ事たよ。

露人は神信心にかけては世界に比類の無い凝り家で、寒中たとへ甚麼に外が冷えやうと、一向平氣なもので、神前に跪いて一心に禮拜祈禱してゐるが、斯樣に善男善女の多い國柄だけに、お寺も立派なのが澤山あるよ、寺の堂内は聖像だの油繪だの寶石だの眼も眩い程飾り立てゝ在て、仲々崇嚴なものだが、之が冬になると、殘らず雪を冠つて、圓いお堂や尖つた塔なんぞが宛ら雪の山か氷の嶺でも見た樣な鹽梅式になるのさ、殊にカザンスキー、ウラヂミル大寺院の圓塔の如きは、眞白い雪を戴いた屋根が、一頭地を披いて高く、降積む銀世界の上に聳え立つてるのだから、偉觀とも何とも、實に見物だよ、見物と言へば舊都モスコーのクレムリンの城廓は、城全體が雪を被つて、今にもあれ、招かざる客(奈翁の侵入軍)が寄せ來たならば、此の雪と此の寒さを襲つて、露國には彈丸硝藥の外に、雪の武器！氷の甲冑！冱寒の將軍！世界に敵なく武備のある事を知らして與れんずと威勢を示すかの樣であるが、何のクソ、遣付るとなれば、一揉さ、アハハハハ、今夜は先づ是で、大分冷えて來たやうだから、話も此位にして置かう。

韓國の正月

鷄林の人

日韓兩國は昔へから消息の相通じた處ろであるから、朝廷の儀式、坊間の風俗に似寄りの點が甚だ多い、

今韓國に於ける正月の習慣に就て少しく述べんに。まづ元旦宮中の御儀式といへば、萬乘の君親しく眞殿に出御して祭式を行はせられる、眞殿といふのは歴代宗廟を安置し奉る處ろである、次に永寧殿、各陵園へ勅使を差し立て祭式を行ふゝ、次で百官の參賀がある、各王族、大臣いづれも大禮服を着して正殿に參賀して祝詞を述べる、此日皇帝陛下は黄色の袍を召させられたものであるが、近年は日本に倣ふて大元帥の正服を召させらるゝとの事である。

民間の年禮は概していづこも同じ風習、さて家々に



ては家に宗廟壇を設けてそれへ餅湯、酒、柿、棗、梨、栗、などの供物をなし主人は衣冠を正して新年の祝詞を述べ、終つて父、母、兄姉に祝詞し、それより親戚故舊の方へ賀詞を展べるのである。尤も大晦日の晩に各戸人共親戚故舊を回訪し年越しの挨拶を述ぶるのであるが、中等以上の向は下男若しくは下女をして主人夫婦に代つて挨拶に行かしむる習慣になつて居る。

朝鮮でも正月には屠蘇を飲む風習である、併し日本の屠蘇は紅絹の袋に入れて酒に浸して飲むのであるけれども、韓國では酒に浸すのでなくて水に浸して飲むのである、即ち除

夜、寒冷紗の袋を造り、其の中に屠蘇を入れ、井戸の底に浸して置き、元日の朝其井戸水を汲んで飲むのである。さてそれを飲む順序は年の少いものから段々と年上に及ぼし、且つ飲む時には東の方を向いて坐するのである。兎に角屠蘇を酌むは日本と同じ緣喜で、延壽長命を祝ひ、一年間の疫病を除くといふ意味である。

朝鮮では元旦に髪焼の習慣がある。これはどういふ緣喜の物か、婦人が一年間頭を梳る時に出た髪の屑を貯へ置きこれを元旦の黄昏戸外に焼くのである。

又奇なる迷信は、元旦の夕、庭の真中に篩を出して置くといふ習慣がある。これは天上から神様が下つて来て一夜の中に篩の目を數へ暁に至つて天上あるといふ馬鹿氣た迷信であるが、其理由は果してどういふものか。

紙鳶揚げの習慣は中々古くからあつて且つ盛んなものである。紙鳶の形は大抵四角なもので、張方は日本の物と大差はないが紙鳶勝負は中々おもしろい、まづ正月二三日頃から小兒が郊外へ出て盛んにあげる、其の釣糸の處に膠を塗り、そこへ玻璃の粉屑を附けて飛揚中他人の釣糸に引掛けこれを截斷するのを勝者とする、又正月十五日には紙鳶に自家一年の災厄を書きつけて、風順によつて放ち去らしめる、これは厄を拂ふものとして盛んに行はれる。

朝鮮で女小供の遊びは大抵正月二日から始まり十五日頃までのべつに行はれる、其の中で跳板の遊びは一寸不思議なものである。これは長さ五六尺、幅一尺四五寸位、松板を適當の臺に乘せ其の兩端に人が立ちて踏み會ふのである。其の踏み手は双方相對して一條の麻繩を手に操つりて居て中心を失はない様にし、そして兩々一上一下するのである。其の上下毎に玉の如き愛らしき小娘が霓裳、羽衣を飜がへす様は又一種の美觀である。

正月十五日には種々なる遊び事があるが就中壯快なのは綱曳である、これは大麻繩の長さ五六丈のものを作り、其の人員を百人と限りこれを東西兩隊に區列

し、兩々互に雌雄を決するのである、又村々で組織される綱引もあるが、勝ては豊年、負ければ不作と言ひ傳へて中々激しい競爭が行はれる、

日本に七種粥の祝儀がある如く、韓國にも五辛菜の事がある、五辛菜は、韮、にんにく、わけぎ、唐がらし、生姜である、この五種の辛味を刻みて、飯、菜に撒りかけ食するのである。又薬食の習慣がある、これは新羅の遺習だといふ正月十五日に行はれる風習は毎戸其の人數に應じて各々一個の燈を點じ、徹夜これを門戸の間に陳ねて置くのである、これを食口火といふ、この風習は長生を祈るといふに基き、年齢の幼老に準じ、其の年ほど燈を陳ねるのであるから、家に老年の者あれば六十燈、七十燈を點ずるから門戸の邊一夜イルミチーションの如き現象を呈する事がある。



又十五日には朋友相會して聰耳酒を酌む習慣がある。酒は耳を聰くするといふ意で此日、いづれも多量の酒を酌むのである、又同日果物を食ふ習慣がある、其の種類は栗、松實、干柿、胡桃などで當日市中の店といふ店はいづれも果物賣の呼聲で頗る喧囂しい。

立春の日門戸に圖書を貼りつける風習がある、其の

圖は多く神將を描くのである、これも魔除けで、恰も田舍の百姓屋の門先に鎭西八郎、加藤淸正など書するのと同樣である。

又魔除けのまじないに藁人形を作る風習もある。枯草で人形を作り、これに彩色を施し、これに錢をつけて門先に出し、小供等に奪ひ取らせるのである。

新世帶日記

二秋生

二秋兄足下　こは生が新婚日記否新世帶日記なり。我等夫婦が締めて後日の紀念と爲さんと欲するものなれども、他人ならぬ足下の事故、御笑草にと一寸御覧に供す。ゆめ〳〵人に見せ給ふな。日記なれば、管々しき說明は書入れざれど、御存知の貧乏者、而も呑氣屋の默具、大抵御推察の付くとなるべしと信ず。あなかしこ。　革生拜

其の一日

引越と婚禮と同日になつた。前日に引越すべき筈であつたが、雨が降つたので今日になつたのだ。

今日は日本晴である。新宅は父母の家を距る一町許り、二三日前に漸く出來上つた。と云ふと、自分の家の樣だが、其實借家で、然かも約定濟として置いたのだ。二軒長屋の片一方で、玄關が三疊、座敷が八疊、奥が四疊半、と斯う三間で、長屋は可厭だが、夫婦者の生活には敢て狹隘を感ずるとは無からう。殊に父母の家の近傍ならざる可らずと云ふ必要條件があつたので、一先づ此家が選擇されたのだ。門も垣も附く筈だが、矢張前日の雨で、未だ附けてなかつた。疊は昨日敷いて呉れたが、古疊を買ひ集めたと見えて、肝腎の八疊の座敷が見苦しいと恥しい。これでは婚禮が出來ぬと云ふので、朝早く叔父が家主の所へ談判に行くと、家主が曰く、「でも貴方、何處を探したつて有りやしません。まア試しに探して御覧なさい。」

馬鹿々々しい、安くとも家賃六圓、敷金三つ即ち十八圓前納して、婚禮だと云ふのに古疊を當てがはれて、溜るものかと、叔父が業を煮やして、仕方が無いから新らしいのを買へと云ふので、叔父自ら市中へ探しに出掛けた。それと同時に父は、不足の世帶道具を買ひに行く。自分は理髮店へ行つた。

戻つて見ると、父母の家へは、祝ひ物を持つて來る人やら、手傳ひに來る人やらで、大分賑々しい。田舍流儀で、親戚の家の妻女などは、挨拶に來て賄方の手傳ひをして居る。男の方は、家の職人などゝ混じて引越の手傳ひである。

新宅の方へ行つて見ると、早や門と垣根(屛だ)が半分程出來上つて居

ろ。誠に雜作が無い。家の內では、二三人の男が障子を張るやら、其處らを拭き掃除するやらで、此所も大分忙しい。奧の四疊半だけは其儘であるが、玄關と八疊の座敷とは、綺麗に疊が剝いである。それで荷物は運んで來るが、置き場所が無いと云ふ始末。其中に叔父が歸つて來た。幸ひにして疊屋を見付け出し新に十一疊今日の四時頃までに拵へて持つて來ると約定したと云ふ。一疊の代金一圓四拾錢。總計拾五圓四拾錢の受取を見せた。約定はしたもの丶、果して時刻までに出來て吳れるか如何か、心配な譯だと、叔父が第一に痛心の體である。午後となる。障子は張れた。諸道具は悉皆運び込まれた。門と垣根とは先づ體裁だけ整ふた。併し疊は未だ來ない。止むを得んから無いは無いとして置いて諸道具の裝置を始めた。自分は脊物などを押入へ仕舞ひ込み、床の間へは軸を吊り、島臺を飾り、置物萬年草の鉢などを好加減に並べた。床の間が出來て、座敷の疊が無いのだから、頗る可笑しい。

二時ー それ停車場へ誰れか迎へに行かねばならぬと云ふので、親戚の一人が其役に當つた。



是れから先きは婚禮の幕になるのだから詳しくは記さず、荒筋だけを錄して置く。停車場へ迎へに行つた親戚と、嫁の一行とが行違ひになつて、嫁の一行は直接に此方へ遣つて來やうとした。今五六町で疊の無い家へ乘込まれやうとする處で、買物に行つた父と出喰し、停車場へ追返す。中宿に賴んで置いた媒酌人の家では、時刻が來ても嫁の一行が着かないので、如何した事かと、此方へ使ひを寄越す。兎角する中に嫁の一行は中宿へ着いた

が、荷物が未だ着かぬと云ふ報知。又別に親戚の一人が停車場へ出掛けて、通運會社に頼み込み、漸く夜に入つてから荷物を受取る。是より先、疊が五時頃に出來、次いで荷物が來、親戚一同が嫁の一行を迎へに出たのは、彼れ是れ八時頃であつたらう。

其の二日

新婚は勿論、父の名代として來た兄、叔父、其他附添の女一人、合せて四人、自分の外に此家に宿つたのである。不用心だと云ふので、此方の家には不寝番が一人附けられた。父母の家には、嫁の方の媒酌人夫婦並に其嫁の母（親戚）が宿つたが、別に不寝番を設けてなかつた隙に乘じて、泥棒が這入つた。婚禮の席で用ひた父母の衣服と、媒酌人夫婦の衣服とが持つて行かれた。其の價額は少くとも百圓がものはあらう。早速交番へ届け出る。巡査が來る。探偵が來る。其の吩付で、父は改めて警察へ届け出て來なければならぬと云ふので、朝から飛んだ騒動である。此方の不寝番の語る所に依ると、此方へも泥棒が這つて來て裏の戸を開けかゝつた樣であつたが、志を果さずに去つたらしい。多分其の泥棒が彼方の家へ行つたのだらうと云ふ事だ。

自分は四疊半へ寝た。起きて出ると、第一に眼に付いたのは、足許に立てた屏風に、隙間の無い程懸けてある女の衣類だ。云ふ迄もなく昨夜新婚が幾度か召更へた衣服の總體で、裾模樣の裲襠を初め、とり〳〵艶に、美しいものばかり。自分は一種の感に打たれて、思はず恍惚とした。あゝこれが新婚の感なるものであらう——

臺所には、附添に來た女が働いて居た。さらでも母や、叔母や、妹などが居るので、今日は未だ新婦の働く餘地が無い。襷を懸けて臺所へ出て見たが、附添の女に撃退されたと云ふ話。

客人一同と、自分と、彼方の家から來た父、祖父などを加へて、朝から一酒盛あつた。それが濟むと、客人は夫れ〳〵市内の親戚知己を尋ねると云ふ事で、前になり後になりして外に出て行つた。其後で御披露の支度、自分と新婚とは依然たる花婿花嫁である。

前夜の客が三十六人、此夜の客が廿二人、料理の代が、合計凡そ五十圓であつた。

其の三日

二日休んだから、今日は出勤した。

婚禮以來主なる會計は父母の方で掌理して居る。從て家は別になつても、未だ全然獨立したと謂ふ事は出來ない。併し自分一人で外に出ると、天晴一人前の旦那樣になつた樣な心持で、媒酌人氏は此間を稱して「肩身が廣い」と云はれたが、自分の心持は何となく人物が大きくなつた樣な心持だ。要するに心中少からず得意なので、往來を歩いても、電車に乘つても、平常とは世界が違つて居る樣な氣がするのだ。

「お歸りなさい」と女房に迎へられたのは、生れて初めてだからこれ

が頗る愉快である。

留守中に、嫁の兄は親戚の家から戻つて來て、そして出發したと云ふ事である。

媒酌人夫婦は歸つて來て此方に宿つた。前夜は不寢番を二人付けたがさう毎晩は出來ないので、今夜は廢したが、何だか薄氣味が惡い。



併し此家の戸障子は非常に具合が惡く新婦の手などでは容易に開閉が出來ない位ゐであるのが、却て何よりの頼りなので、悉皆錠を卸し、心張棒をかつて、せめてもの用心をした。泥棒に對する心配より外に心配と云ふものは無い。今迄餘り這麼心配はしたとが無いのだが、有繫に一家の主人となりにけりと思つた。眞夜中頃、戸外から聲を懸けた者がある。冷りとしたが、それは巡査であつた。そして「隣りの家の前に鉋屑が轉がつて居るが、不用心であるから、明日は大工に命じて片付ける様にしなさい」と注意して呉れたのだ。今度は火災に對する恐怖心が生じた。

其の四日

今日は叔父さんなる人が立つと云ふので、朝から一杯遣つた。汽車は午後一時何分で、自分が送りに出懸けた。其の爲めに缺勤した。

一寸今日までに買つた世帶道具を計算して見やう。

金三圓　竈
金一圓　銅壺
金四拾錢　俎板
金拾二錢　火箸
金五錢　長火箸
金六拾五錢　十能
金四拾錢　飯茶碗
金六錢　鉢
金拾六錢　庖丁
金三拾五錢　桶
金二拾八錢　鉢
金四拾錢　盃
金四拾錢　茶碗

金一圓　飯櫃
金二拾錢　手水鉢
金七錢　片口
金拾錢　箒はたき
金六錢　自在
金一圓六拾錢　釜と蓋
金四拾五錢　盥
金拾錢　豆洋燈手燈
金八拾錢　置物（古）
金拾錢　箸
金六圓二拾錢　簞笥
金三拾六錢　洋燈
金八錢　しやもじ
金四拾二錢　小鍋と蓋
金八拾錢　障子紙

小計金拾九圓五拾九錢

これが記憶して居る丈けだ。此外は父母の家から持ち運んだ物と、貰ひ物である。貰ひ物には、ボン〳〵時計一個、鼠入らず、茶簞笥、長火鉢、各一個、火鉢火箸、ばけつ、帽子掛各一個、飯櫃一個、小皿十枚、茶ぼ臺一個、箸箱付箸二人前、擂鉢、擂古木、笊、味噌漉各一個などがあつた。嫁の持つて來た中には、茶簞笥、茶道具、夜具蒲團、座蒲團膳椀、鐵瓶、置戶棚、金だらひ、の様な物があつた。茶簞笥が二個になつて、一個の置き場所に困つた。書き落したが、新調した座蒲團が十餘枚、これが何程であるか、聞くのを忘れた。

其の五日

今日は出勤する。留守中に、附添に來た女と媒酌人夫婦とが同時に立つた。愈々嫁一人となつたのである。

併し新婦と雖も、幾分か慣れて來た。一昨日か一昨々日であつたかは、島田が可厭だから、束髮に結ひたいと、直接自分に云ふ事が出來ず、附添の女をして云はせたのであつたが、今日は妹を連れて買物に出掛けたとやらで、自分が歸ると、色々な物が並べてあつた。それは大概細々した世帶道具であつて、自分が買ひ置く様に命じて置いた物が多い。勿論、其の爲めに自分は小遣錢を火鉢の曳出へ入れて置いたのだが、それを無斷で遣つては惡いと思ふたのか、皆自分の懷中を痛めて買つて來た樣だ。小遣錢を要求するすら恥かしいのであらうかと思ふと、矢張花嫁に違ひない。

買つて來た世帶道具はザット左の如くで。

金四拾三錢　煙草盆
金拾五錢　土瓶
金拾三錢　門鈴
金七錢　魚燒網
金拾錢　醬油入散蓮華
金拾二錢　銚子袴二個

此外に茶菓子中斤拾三錢五厘、番茶一斤拾六錢などを買つて來た。自分も氣が付いてビスケット一斤買つたので、菓子が重複した。番茶は一斤買つたら持ち切れない程あつて、驚いたと云ふ。

其の六日

今日は日曜である。朝から來客が多い事で、新妻君は少からず面喰つた樣である。

殊に午後某々君が見えたので、それ酒なと命じた時には、嚴め云ひ

含めて置いた事とは云ひながら、経験が無いので、大周章に周章てた。其の状態を記したら一場の喜劇が出来るのだが、そればかりは書いて呉れるなと、新妻君の要求があるから、先づ省略して置かう。

兎に角、今日から新妻君が飯を炊く様になつたので、これからが眞個の新世帯であらう。家内は、親戚の年寄(宿りに来た老婆)を加へて、今の處三人である。

斯くて一週間は夢の如くにして過ぎ去つた。

孤児の正月

佳水生

元日も最早お午過ぎ、お隣家の坊様やお嬢様は、美麗な衣服を着て、お庭でお松さんと鬼ごとや追羽子を為て、面白さうに遊んで居らつしやる、其御姿が餘まり美くしかつたものですから、思はず知らず、つひ裏の木戸が開いて居たものですから、坊様やお嬢様の側に行きましたが、不圖自分の着て居る衣服の、見るからが汚れて居て、足袋さへも履いて居ないのに氣が注いて、急に人に見られるのが羞かしくなり、匆々に以前来た途を辿つて、窃と急いで戸外へ飛出して了ひました。

泣くまいと思つて、ヂツと堪えて居ましたが、涙がぽたぽた零れて、如何しても耐え切れません、おゝ! お父様やお母様があつたらば、お隣家の坊様やお嬢様のやうに、お正月には新しい衣服を着て、お友達と遊ぶことが出来やうものを、彼の鬼のやうな伯母様は、用ばかしお吩咐けなすつて、些ともお褒美はくださらず、學校へも昇げてくださらない、あゝ、妾や口惜しい!

涙も拭かずに、家の勝手口まで歸つて来ますと、伯母様は又た盛飾して、今恰度何處かへお出掛けなさる處、妾を見付けて、お前何處へ行つて居たんだへ? 元日から人に探させてさ、眞實に仕様のない子ツちやないよ、お前のやうな横着者には、お正月だから少しは垢の付かない物でも着せて、お小使でも上げやうと思つても、根性骨が曲つて居て、些とも伯母様の云ふことを聞かないから、厭なこつた、眞實に親の無い子は何處か違ふよ、何時が日にも、一度でハイと素直に返事を為たことは無し、何と云ふ圖字々々しい子だらう! とのお言葉。

あゝ辛い、泣くにも泣かれず、伯母さん何卒堪忍して下さい、お隣家のお庭で、坊様やお嬢様の面白さうな笑ひ聲が為て居ましたので、何亦と思つて覗きに行つたばかり、何も悪いことを為たのではありませんか、之れから屹度仕ませんから、御免して下さい。

謝りますのに、伯母様は妾の云ふことなどは些とも聞かず、眼を光らかして、謝れば夫で濟むかと思つて、お前は今年幾歳にお成りだ、十二にもなつて、之れ位の事か分らんことはあるまい。仕方が無い、酷く言して上げやうが、伯母様は之れから一寸町へ行つて来るから、能く留

守番を爲て、洋燈の掃除よ、妾が喰べるお粥のお米を磨いでお置きよ、遊んで居ると許かないよ。

云ひ捨てゝ、意地悪るの伯母様は出掛けて了ひました。何故妾は斯様に不幸なのだらう！　お父様も、お母様も、何故妾を一人殘してお亡なりなすつたんだらう!?

他家では如何な家だつて三ヶ日はお暇が戴けると云ふのに、妾だつてお母様さへ居たなら、如何に家は貧乏でも、お正月だけは遊ばして貰ひ、お餅も喰べ、出來たての衣服を着て、羽根でも搗いて遊べやうものを……。

思ひながらお米を磨ぐ準備を爲て居る時、お隣家の坊様が、此方へ若しか羽根が飛んで來はしないかと云つて探しにお出でだが、妾が手を眞赤にしてお米を磨いで居るのを見て、眼を丸くなすつて、お正月だのにお米を磨ぐの？　と心から坊様は吃驚なすつたやうでした。坊様に斯う云はれたので、妾は羞しくつて〳〵、他家の子が羨しくつて、袖を顔に當てたまゝ、石の地藏様のやうに勝手口に熟と立つたまゝ、泣きました。

泣き止んだ時には、最早坊様は居ませんでした、妾が泣いたので、嘸ぞ坊様は吃驚なすつたらう。

お米を磨いで、洋燈に油を注いで、家内の掃除も爲て了つて、お庭の塵埃を掃いて居る時、前の往來を、美麗な衣服を着た、妾ぐらゐの女の子が、お父様お母様に連れられて、さも樂しげに打語らひながら通つて行きました。

何故妾のお父様やお母様は、妾を獨法師にして死んでお仕舞ひなすつたんだらう？　お母様さへ生きてお在でたなら、伯母様にも叱られず、お留守番もさせられず、遊ぶことが出來やうのに。

お正月が爲たわい！

思ひ込みましたら、元日だと云ふのに涙が出て、妾は又た泣きました處へ、伯母様が歸つて來て、お前また遊んで居たれ、火も無いれ、何だれえ此お米の磨ぎやうは！　と又た叱られました。

遲うくまで冷たい板の間に坐らせられ、叱られて、淋しい元日を漸くに暮らして、他家の子供は最早疾くに寢て了つた頃、氷のやうな寢床の中へ入りました。

寧そお正月なんぞ來なければいゝに！　と、妾はつく〴〵思ひました。

記者云、此稿を寄せられたる竹貫佳水氏は多涙多恨の士、世の不幸なる孤兒に同情する餘り、是等不運兒を涙より救はんとて、こたび奇特にも獨力を以て青山北町六丁目に竹貫育兒園といふを建てられぬ、記者は氏の事業が闇路を辿る人の子に向つて光明を投ぐるものなることを思ふて、其の成功を祈るものなり。

新世帶の元旦

舟人

今年の一月一日は私共が世帶といふものを持て以來初めて迎へる第一回の元旦で、且つは此の日を以て私共の家庭に新憲法を施かうといふのでしたから、私共に取つては取分け芽出度い吉辰、仍て當日は十分に祝意を表さうと、お飾りの、お喰積の、重詰のと十日も以前より着手せる數々の迎年準備遺る方なく整へ終り、扨て愈々元日は明朝、夙く起きて新しき光を新生涯の發途に立つ夫婦の身に浴びやうと、夢にまでほの〴〵と明石の浦を歌つて、まどろむ枕頭に、早くも告ぐる鷄の八聲。

私は驚いて跳ね起きて、勝手許に襷掛の、頭にはそツと手拭を載せて、昨夕髪結ひの宅で結つて貰つて來た大事の丸髷を庇護ひながら、若水を汲むやら、お雜煮の支度やら、軈て膳部の用意の出來上つた頃は、夜も早や白々明け、良人はと見ると、布團を被つて四邊の明るく成つたも、天地の改つたも白河夜舟。

「ネエ、貴郎、お起なさいましな、モウ元日のお日様がお上りに成りましたよ、……お雜煮も疾くに出來て了つてるんですから。」

斯う言つて私は良人の枕頭に蹲踞んで、夜着の襟へ手を掛けて、二三度動搖ると、良人は眼を覺まし、

「ナンダ、もう夜が明けたのか。」

と欠伸を一ツ、さも睡相でしたが、今日に限つては世話を燒かせず、私の言ふなりに素直に起上るのでした、マア珍らしいこと、平生は起しても容易に起て下さらず、折角お眼覺ても再び夜着の中に潜り込んで、朝眠の追加を貪る人にしては、えらい奮發。

私は、春の御不斷着にと昨夜遲くまでかゝつて仕立上げた許の、木綿ながらも上下シツクリ揃つたのを、炬燵から取つて來て、良人が寢衣脱ぐ後へ廻つて、着せ掛けやうとすると、良人は肌に當るや否や、イキナり、抛り出して了つて、

「オイ、不可んぢやないか、今年からは着物を温める

なつて、ソンナ老人扱ひの眞似は止めて貰ふ約束だつたぢやないか、……折角だが他のを出して呉れ。」
と眞裸のまゝ衝立つて入らッしやる。
「成程さうでしたッけね、私が惡う御ざんした、でも貴郞お風邪を召すと不可ませんから、今日丈は暖いので我慢して下さいましな。」
と再び取つて着せやうとする手を、邪慳に拂ひ退けて、
「イヤ、其が不可んぢや、今年から惡い習慣を改めると約束した以上は、斷じて勵行せんけりアならん。」
と嚴しく仰有るので、私は他のお召物を持つて來てお着せ申す、其を又た冷たいとも仰有らず、サッサと袖を通すいさぎよさ、宛で人が產れ變つたやう。
「昨夜は遲かつたのに、能く早く起きられたね、未だ五時ぢやアないか……。」
と時計の面を不思議相に見て入らッしやる。
「だつて、始めてのお正月ですから、夙く起きて、機嫌よく、平和の春を祝はうと思つたものですからね、大奮發で眼を醒ましたんですが、貴郞までお相伴をさして、御氣の毒樣だわねえ、貴郞まだお睡いんでせう、オホヽヽ。」
「イヤ、睡かアない、お蔭で早起の習慣が付くのは結構だ。」
グル〳〵と腰に兵兒帶を卷付ながら、椽側の方へ行かれるので、私は勝手から金盥と嗽茶碗を運んで、揚子と齒磨を添へて出すと、
「是は何うも憚り樣。」
「いやですね、他人行儀な。」
言ひ捨てたまゝ、寢間へ取つて返して、手早く夜具蒲團を取片付て了つた所へ、良人は早や嗽手水を終へて這入つて來られ、姿見の前で切に頭髮を梳いて入らッしやる。
私は此の間にと、次の間へ退つて着物を着換へ、羽織も紋付のにして、扨て今日の用意にとて去年の暮夫婦して勸工場で買つて來た生地塗の食臺を、茶の間の長火鉢の前へ持出し、
「貴郞、此處で宜しう御在ませうか、其ともお座敷に

致しませうか。」

聞くと良人は此方を振向いて、優しく、

「其處で可いぢやないか、態々表座敷へ御出張にも及ぶまい。」

と言はるゝので、良人の意に從つて平常の通り火鉢の横に食臺を据え、屠蘇の盃、銚子、重詰、杉箸、式の如く置き並べると、良人は腰を下して、

「ヤア、すツかり並んだね。」

不斷は食事の時も膝を崩す癖のある方が、有繋に今日は改まんなさる、長火鉢を側に、彼方の床の間を睨んで、端然と畏つた其の御樣子と言つたら、何う見ても新川家の旦那樣、つひ三月前までは、角帽を冠つて、小倉袴を穿いて、オイ君、僕ア——を口癖の方とは思へませんでした、だが今でも時々は昔時の書生氣を出して、とんだ罪のない、御笑談を仰有るから可笑しいので御在ます。

「貴郎、そんなに改まらなくツても宜う御在ますよ。」

「だツて今日は不斷とは違ふからね、如何に夫婦の仲でも禮儀は禮儀だらうぢやないか。」

「其の後は夫婦別ありと仰有るんでせう、私だつて其位の事は心得て居りますわ、ぢや、ドレ私も改りませう。」

と坐容を直す私の顏を、凝と爛々たる眼に見てお在でしたが、大方此の時良人の心にも、つひ此間まで廂髪に結つて、赤いリボンを挿して、テニスに海老茶袴の裾を切らしたお轉婆娘だから、妻とは名の付くものゝ、まだ何うも女學生風が脱けないで困るとでも思つて居なすツたことでせう。

「ぢや、態と始めませう。」

三組の盃臺を取つて恭しく良人の前へ差出すと、靜かに左手を延べて、上のを一個。

「そんなら、芽出度頂戴しやうか。」

滿々と注いで上げたのを三口に乾して、雫も殘さず。

「ドレ、お前に、私が酌をしやう。」

とお差しになるのを、手もて制し、

「イエ、不可ません、私はお後で、態と三獻召上るも

のだ相ですから、どうぞお重ねなすッて……。」

注ぐ、飲む、飲む、注ぐ、三度同じ事を繰返した後、更に良人の手から盃を頂いて、

「私、澤山注いで下すッてはいやよ、あと二度頂くんですから少し下さいよ、何だか御婚禮の時みたいね。」

斯うして芽出度く平和の家に、平和の人と共に春を迎へて、優しき其人の手からお屠蘇を祝つて戴く嬉しさには、つひしか心の滿足が包み切れないで我知らずほゝゑまれるのでした、良人も同じ心と見え機嫌好氣に笑つて、私がオヅ／＼差出す盃に滿々と、溢るゝ許り。

「アラ、這麽に私頂けないことよ、困るわ、何うしませう、醉つたら介抱して下すッて……。」

思はず口が逸んで馴々しく、母に甘える樣な遠慮の無い調子で言ふと。

「可いさ、正月だもの、少しは赤い顏にならなくッちや正月らしくないからね。」

と私の困つて居るのを面白相に、笑つて入らッしやる人の惡るさ。

「だつて飲めませんもの。」

「飲めんことがあるものか、甘いんだもの、頬邊が落ちさうだ。」

是亦た兄が妹を諭すやうな仰有り方。

私は漸との思ひで盃を明けて、一寸頂いて、坐容を正し、兩手を衝いて、

「貴郎、まづ明けましてお芽出度う御在ます、舊年中はいろ／＼……どうぞ本年も相變りませず。」

恭しく頭窓を下げたもの〻、是丈言ふが辛との事、要らぬ串談は言へても改まつた口上となると、何だかきまりが惡くて、顏がほてる許。

「お芽出度う、私こそいろ／＼世話になりました、今年も相變らず賴みますよ。」

良人は至極眞面目なので、私は頸を垂れて、

「ハイ、何分どうぞ宜しく……。」

今日は何うした事ぞ、自分にも怪まるゝ程聲が慄えて居るのでした、良人は昨日私が挿換へた床の間の南天を、今更のやうに眺めて、

「芽出度い、芽出度い、大ひに芽出度い、今日の元旦は僕等に取つては結婚後初めて迎へた新年なんで、謂はゞ僕等夫婦が新生涯に入る第一步なんだから、實際

芽出度く思ふよ、イヤ芽出度のは今年ばかりぢはない、此先十年、二十年、三十年、一生涯の末までもぢや、乃公とお前とは相顧り相助けて、家庭に波風立てずに、平和を理想として睦じく暮うさうぢやないか、其には一年の計は元日にあり、千里の路も踏み出す一歩にありと云ふんだから、今日より兼て定めて置いた家憲を實行し、之に依つて家門の繁榮を計らうと思ふんだからね、お前も其積りで確り行つて下さい。」と言葉にも顔色にも熱心を示してのお諭告。

「ハイ、畏りました、仰有るまでもなく斯うして御家に嫁つた以上は、行届きませんながら十分に致す積なんです、而して貴郎から助言を戴いて、將來は世間の模範と成る様な立派な家庭に造り上げて見たいと思つて居りますのよ。」

小聲ながら、極めて力の籠つた調子で、斯う答へると、良人は心地快氣に首肯いて、

「ア、然うか、ヨシ、其でこそ乃公の理想に適ふと云ふもの、前途の幸福期して待つべしぢや、愉快、愉快、ドレ最う一杯飲んでお前に献じやう、ウンと注いで呉れ。」

溢れる程一杯に注いで上げると、其を口へは持て入らッしやらず、頭の上に高く捧げて、何を仰有るかと思へば、

「僕は今、奥さんの健康を祝す。」

グイと呷つて其盃を、私の前へ、

「難有う御在ます。」

頂戴して、私も良人の爲た通り、盃を擧げて、

「謹んで旦那様の健康を御祝ひ致します。」

言ひ終つて、更に盃を酬すと、其を良人は一口に飲乾して下に置き、坐を立つて、

「サア萬歳を唱へやうぢやないか、お前も一緒に。」

と手を取て促しますので、私も起立つて、同音に、

「新川家萬歳！　新川家新夫婦萬歳!!!」

折しも旭の影は東向の障子一面に射して、外には早や廻禮の俥の音が聞えますので、良人は喫み掛のシガーを灰皿に投げ棄てゝ、

「ドレ、私も年始廻りに出掛やう。」

と、いつもの癖の、家の内を歩き出して、帶を解きかけたが、再び机の前に腰を据え、筆筒のペンを取つて走り書のインキ文字、拜見すると、

海山の幸をかたみの身に占めて
御光うけむ千代の後まで



女學生と服裝

昨今女學生の服裝に就て流行界の傾向を聞くにまず數多き女學生の中には地方から出た方と東京在籍の方との二種の區別がある東京在籍の方は保護者の手元に居るので學資にも衣服にも直接の痛痒を感ぜぬが地方から出て來た方になると打切りの學資の內から修業費も小費も將た着物食物まで取賄つて行かればならぬので其好みは同一であつても自然その買方には多少の加減が加はられればならぬ然ど先づ押並て今日一般女學生の嗜好と云ふは田舍銘仙が第一で此は價格にして四圓五十錢から五圓五六十錢迄此に次ぐは凱旋つむぎ又は東郷紬と呼れて居る紡績織で二圓二三十錢から上物で三圓五六十錢と云ふ所此の二つが中々の需用で尤も多く用ひられる此の他は昨今は少し衰へて居るが新紬と云ふ名で出た模擬銘仙で此は需用は遙に落る、さて柄と色とは流石に意氣向は矢張りと使用され無い、柄では縞の中に飛白が有るとか、又は飛白ばかりとか云ふのに限られて居るが、好みは確に華美なのが九分通りで、此は戰爭後からと云ふのでは無い、五六年此方次第に斯云ふ風に移つて居る、それで此の柄の華美な爲に著しく人の目を驚く所から、女學生の服裝は次第に贅澤に流れて行くと見る人もある樣だが、此は全く見當違ひで、西洋婦人の服色配合の美しいのに眩まされて那麼好い物を使つて居るかと驚かされるのと一對で、事實は質素な物を使つて居るのである、そこで色合は主に小豆色か、紫紺がゝつた色などが一般である、帶となつては總じて茶色が總ての配色に都合が好いので、七分迄は此色が選まる、物は山吹織、琥珀織、てりや織と云ふ樣な何れも似寄つた物で、華かな柄を見立る、價格は二圓五六十錢から四圓までゝ此に友禪のメリンス等を合せると云ふのが通例らしい、ソコデ地方の女學生と東京の女學生との嗜好の相違であるが、東京の方は多く自ら呉服店に行か無い大概は其の保護者である家庭の者が柄を見立て著るのが九分通りで、地方の女學生の好む柄と比較ると餘程華奢な好みである、此は地方の者は矢張地方の習慣性があるので、いくら都流にハイカラ振ても到底根本よりと云ふ譯には行かぬ、其に總てが多少種々の點に考へ合せなければならないから、自然派手といふ譯には行かないのである。

新年の床飾

床飾の盆栽としては、松竹梅の寄植、又は別植としたもの相應しく、梅は野梅、甲州木の上物より、篠立の安物、松は自然の木振なるが面白く、東京へ送り來るは重に播州と遠州の山松にて、地元では山より掘出して、大略作つて置くな植木屋が仕入れて、自然の形に作るなり、値段は五十錢より百圓迄あり。

五葉松も初春の眺には、適當の盆栽なるが、餘りに木振を作り過るものから、山松よりも雅致の乏しきやうに思はる、近年は作り元の(本所情地邊り)にても、餘り作らぬやうになりしかば、品物は至つて少なく、値段も騰貴の氣味にて、一圓より三十圓位なり。

竹の中にて、松や梅と寄植するに適當なるは熊笹にて、別植としては寒竹、鳳尾竹、大明竹などが面白く、松竹梅と、床の間に配置すれば一層趣きがあり、値段は何れも同じく、根株の直徑三寸位にて十錢より一圓位の見當なり。

實物にては千兩、萬兩は、名前の縁喜よき割合に、値段は至つて格安なり、千兩が十數本のものにて一圓より三圓位、萬兩は一本立十錢位なり、産地は埼玉縣の安行なり。

又橙、蜜柑の苗木も、安行が作り元にて、鉢植として實の一個附十五錢、橙は實附五六個五十錢、それより紫金牛は鎌山、前橋柑子が、七八本立十錢位なり。

寒牡丹は福よかの趣きありて、正月の床飾には至極適當なり、近年方々の植木屋にて澤山作り出すが、年數の經ちしものは割合に安からず、先づ一本二三十錢より十圓位、支那水仙は大抵一莖五錢位なり。

西洋館の飾には棕櫚竹が相應しく、作り元は大阪にて、一本三十錢位、蘇鐵も西洋館向にて、置物は琉球、上等は朝鮮產、値段は三十錢より五圓位が通例、飛切になれば百圓位の鉢植あり、それに生の強きものにて盆栽としては至つて持ち宜きものなり。

文苑

ふるさとより

佐久間芳子

かの停車場に惜しき御別れ、プラットホームにたゝずませ給ふみすがた、車の窓より飽かず〱、果てはみ情のかたじけなさに、別れまつりてのけふよりは誰を友に語り合はん、其淋しさを思ひて、嬉しかるべきふるさとの旅に怪しう涙のこぼれ候ひしが、親しきうからやからに迎へられてけふは西の家に、あすは南のおばの家にとゆめのごと、嬉しうなつかしき里居の日記もはや十日になり候ひぬ。さても此頃の秋の日和を逍遙の人の髪のかたち、帯の模様、元祿ぶりの好み目ざましう、いかに花やかに候はむ。都にはさる賑はしきさまはなくて、飽くまでも靜寂にはたおごそかなるものと秋をながめ居り候。早稲は大方刈りつくして中ておくての穂波ゆたかに、これもとり入れには十日を出でず候はむ、玉菜は目さむるばかり大きうなりて、天晴れたる日にはその上を胡蝶のゆるやかに舞ひ居る様やさしく候、そばの花大方は地にしぼみて殘れるも僅かに候、夏の日盛をさけむとて造りたる軒の葡萄棚に、小虫はむ四十からの囀りたかう、晴れたる空を鳶の大きやかに輪をゑがきてゆるらに飛びゆくなど、誰やらの申しゝ眼にたてゝ見る塵もなう、心も清くすみゆくやう覚え候、かゝる靜かなるさかひに身をおきて、耳におもねりの言葉をきかず、目にいつはりの色を見ず、何のよこしまの思ひなく、世を送り得られ候はむにはと思ひ入り候、よろづおくれがちの鄙にはあれど、秋のみは深う長け候て、けさ黄菊の庭に初霜をながめ候、朝川に大根洗ふをとめが姿寒げに、これよりや冬立ち候べし、幼き頃山へ遊びに行きて持ち歸りし實生の楓を、其まゝ庭の片隅に植ゑおき候ひしが、今は見上るばかり丈のび候て、此頃を美しうもみぢそめ候、こゝにひとひら巻きこめたるはそれに候、ふ



る思出の紀念となつかしう、朝夕ながめ居り候。昨日近きあたりに昔の友をたづね候ひしにいたう、面變りはしながらも、さすがに眉のあたりに有りし面影をとゞめたる、懐かしうて日ねもす語り暮らし月の出づる頃を家に歸り候。道にうぶすなの森をよぎり候ひぬ、こゝの石段に小石ならべてまゝごとせし折の事、扨は物の怪出づとおびやかされて、幼心にいたくも恐れし大銀杏の木かげ、ゆかしうしのびて、そゞろなるゑまひに鰐口引きて、我世のさちをば祈り候ひぬ、繪馬堂の羽目にかきちらされし樂書を、月に眺め入り候ひしに昔のまゝの見覺ある者二つ三つ、何となうほゝゑまれ候ひき、先は取あつめてかしこ。

花だより

森田妙子

かく田舍にとぢこもりゐ候身に、めづらしき音樂會、展覽會のさまなど、とり〲こまかにしめさせたまへる御ふみ、いと嬉しうくりかへし〱拜見いたし候。御返しには、こなた此頃の花だより申上候はん。外面に出れば、いまだ佐保姫のなさけはかれず。菫は野邊を匂はし、蓮華は田のもをいろどり、たんぽゝは黄に、さぎ草はまーろに候。庭の牡丹は花くづれそめ候へど、うらの池の藤は春の名殘をせきとめがほに、薔薇はさかりにて、今すこし立たば薔薇も咲くべく候。かくとり〲申上なば、さだめてうつくしき花葉の如おぼしめさんが、いづれも田舍家のやれ垣にそひて、さびしげに匂ひをるに候。今朝は畑のぢゞが、種ものをもとめに參り候よし。幸ひそれにもたせせどのあやめ御らんに入候。雨にあらされて、葉など見ぐるしう候へども、之をしるべに、春の名殘はいかにと、おとづれ給へかし。こゝ十日も立候はゞ、田うゑも始まり候はん。都人の御耳には、賤の女のひなうたも、またなかしうや候ふべき。先はとりつくろはぬ、ゐなかの花だよりを。あなかしこ。

のぞみ

松本德子

わが望み遂に達しぬ。故郷の母君より、よろこびを込めし文手にしたる時、われはおもはずたふれふしぬ。ゆめならばとくさめよかし。さはれゆめにもあらず。悦びの涙うたゝせきあへず。春の日影は窓の内にさし入りて、書棚の上ににほふ白梅のかをり清く、獨りたのしきゆくすゑを思ひつられて、なにとはなしにほゝゑみに入りぬ。

花うり少女

岩上勇子

例の聲よき花うり少女、我まど近く、清きこゑによびもてゆく。よび

とめてまどをおせば、籠ははやおろされたり。もりし花のつや〳〵しう一つにはしやくやく躑躅にほひあふれ、一つには紫に白にあやめのつぼみ、かたき葉のみどりいき〳〵としたるあり。いづれにせむとしばし心ぞ迷ふ。

年々に家たちこみゆく、市中のすまひ、せばき庭の、いよいよ尊く大きやかなる花室花ぞのは、のぞむべくもあらず。せめては片すみに、小さき花畑だにも作りて、かゝるうるはしき花、四季にたえずさかせたらんにはと思へど、及ばぬ願ひを如何すべき。



あはれかなしや、本誌愛讀者の一人たる吉田きみ子孃には、去年の霜月十五日といふに、庭の落葉に先立ちて歸らぬ旅路に赴かれたる由にて、其の姉なる人より左の書送りこされたるまゝ茲に其の全文を掲げて、廣く讀者諸姉の吟懷に訴ふる次第なり、幸ひに一片同情の吟詠を手向けられなば、獨り君子孃の靈を慰むるのみならず、又た以て歌選の本旨にもかなひつべし。

女學世界係皆々樣には御變らせもなく候や陳者私妹前田きみ事永らく女學世界を愛讀致居り候處去る十一月十五日に死去、今更申すも歸らぬ事ながら、せめては生前和歌を好みし事とて女學世界愛讀の方方の御歌一首御願ひ申度候間何卒御係樣より皆々樣へ御願ひ申し下され度、さ候へば妹も草葉の下より定めて喜ぶことならんと存じ候尚ほ頂戴の御歌は追て卷物に致す筈に御座候

十二月

香川縣丸龜市通町三三

吉田萬壽

女學世界記者樣御中

公爵母堂　毛利安子

日の本のみいつを四方にかゞやかし
　いさをの山をつみし君かな

三輪田眞佐子

かちときをあけてかへれる君こそは
　千代よろつよの國のいしすゑ

柳體詩

題「女の年齢」「羽子板」「餅」

天

名刺より小さい聲で御芽出度う　神戸市元町四丁目太田方　青瓢女史

評、年齢といふやうな御目出たいものは、由來詩にはしにくいもので出來るは出來るにしても平凡になり勝ち、蓋し已むを得ないところ、すると年齢といふ題で川柳を作れなどゝ云ふは、隨分六づかしい事で、それを特に女にして面白く詠めといふのは、是れ難題ではあるまいか、此句名刺の小さいところで女を利かし其小さいをスグに聲の小さいところへ配合して御目出度うと詠み流した手際、其間に云ふに云はれぬ趣がある、十七字以外に無限の餘情がこもり、婷嫋として長袖盛裝の美人を松竹旭旗相映ずる邊に現出し來る心地がする、

地

羽子板の美人三日で傷がつき　山梨縣中巨摩郡松島村　石川ひこの

評、羽子板の美人といふのも思ひ付きであるが、これ丈けでは誰でも出る趣で、まだ事とするに足らない、それを三日で傷がつきとしたところ、妙趣那邊より來る、われ之を知らざる也と云つて見たいところだ、正月早々縁起でもない、好事魔多しなどとケチをつける譯でもないが、一休然と御用心をきめ込むのも時にとつての川柳式、殊に大人しいところを頂戴する、鉄骨を振り廻すよりはヅーと高尚だ、

人

羽子板でお白粉の筆うけて逃げ　日本橋正町十四　新宮松子

評、美しい姐さんがシャリと羽子をついて居る、負けたらお白粉をつけると云ふ憲法、豈圖らんや姐さん敗北となる、同じく羽子板を以て仲間に這入つて居た男が、自分これまでしばしば敗北に及んで顔にお白粉の痕を印して居る、其仇討ござんなれとお白粉筆を持つて追ひかける、姐さんどうしてさるもの、つけんと迫る白粉筆を羽子板で支えてついと逃げる、瞬時の情景描き出して十七字外に躍動して居る、面白い事々、

秀逸之部

それだけでいゝかと鍋へ餅を入れ　下谷　科合かな江

評、餅に三才がないから、入れたかつたが、同想同調が一年頃前或人の句にある、たしか新聞へも出た、固より暗合だから一向差支ないが、お白粉の筆の方が面白いので、特に秀逸の上座に置くことにした、

年齢を涙で述べる未亡人　佐世保　深堀しげ子

評、品の善い、美しい、あはれな川柳で、三才の列に入れるとも毫末も遜色は無いのである、佐世保の人と聞くさへどうやら床しくそゞろ同情の念が起る、「お寫眞に涙落して叱られる」の句と共に後世に傳ふ可しだ、

子のついた名刺をとかく出したがり　大阪　三宅鶴子

評、絶妙、奇想、三才に直るべき句たるは勿論だが、さて「女の年齢」といふ題にしてアマリ離れ過ぎはしまいか、「訪問」といふ題にも、「面會」といふ題にもはまる、題を去つて句丈けで之を評すれば、冒頭の敷語を繰り返さざるを得ない、

明けましてと先づ先方の着物を見　信州　神津榮子

駒下駄にぢやれるを羽子でポンと打ち　越後　木島そう

おめでたう式部ひさしの鉢合せ　大阪　林はま子

年禮に行かばや年の社交ぞめ　姫路　樋口梅子

開いた數よりも二きれ餘計燒き　靜岡　增田富美
義姉と聞いて一日ふやす餅　河內　田中入須野
寫眞でも父ちやん雜煮上るかい　羽前　谷山たに子
羽子板にあばたがついてだいなしこれ　肥前　岸川さめ
羽子板のに押繪に料に墨がつき　日本橋　蝶子
團欒は團十郎を排斥し　能登　花すみれ
雜煮から金の入齒が紛失し　東京　藤田靜枝
年玉を自鼻で嫁の籠運り　埼玉　飯塚たい子
本年は內地で雜煮召す個り　伊勢　佐野みよし
お正月忘れた頃に女客　芝　松平つる子
嫁が君紅白かじるきついこと　三重　奧瀨かすみ
ハイカラの家庭は餅をバタでたべ　岩代　諸岡春江
御歌會お餅が出るはあはれ也　深津　中村澄子
羽子板のこれは姉さんこれは坊　安藤敏子

佳句之部

追ひ羽子をひさしで受けて得意顏　甲府　山田玉子
小額はついた傷あと撫でるなり　播磨　山下儉
羽子板の美人が失せて大騷ぎ　富山　小竹文子
羽子板を見ればなき子を思ひ出し　秋田　波奈子
丸髷で去年の暮建に來る　奈良　池原いわ
なつかしい手紙と餅が揃つて來　近江　林眞
御年始におとなじみたと里の母　日本橋　上田いれ子
羽子板の姫の御顏にあなが出來　岩代　足立喜野

羽子板をちよつとくはへて髮を撫で　八王子　大野ふさ子
切りやうにまでも花嫁氣をいため　尾道　中尾久子
お化粧に半日かけて年始なり　麴町　吉川なか
たべたあと入學の齒に鍋がつき　岩代　阿部つき子
お長屋が總出で餅を三臼つき　日本橋　てふ子
二日目はお餅の數をひかへて來　美濃　田中久代
羽子板の似顏にそつと接吻し　福井　小川つう子
羽子板の押繪坊やがはがして居　下谷　安西しげみ
是非やどが出るのですがと口ごもり　飛驒　遊多子
雜煮餅年ほど喰つた小さい子　佐世保　橫山汎愛子
我儘な娘羽子板泣いて買ひ　栃木　松本せん
餅の雲庫入齒が紛失し　京都　井手さみ
大男五はい目の餅もてあまし　本鄉　しげる
鏡餅すゑて淚の未亡人　高知　岩田いわ子
女の年齡曰く男女同權よ　山城　上野はるゑ
常陸山おかちんいくつたべるだろ　岡　古川米子
羽子板で式部扇をこわしけり　栃木　高橋菊子
餅搗の合職下女が司令官　上總　田村滿子
羽子板の其夜妹は眠られず　名古屋　奧村てる
長い事一日やつと二三軒　岡　橫井なみ子
羽子板の荒武者羽根に泣かされる　出雲　じん子
突くたびにあたら美人にきづがつき　大阪　山內愛子
いろいろよ鏡餅尻餅ひれり餅　山城　上野はるゑ
年齡に去年の餅の齒を云ひ　豐多摩　豐田關子
おかちんをヴヰンに取れてべそをかき　千葉　鎌田梅子

新世帶餅をきるにも二人して　大阪　岡崎新子
まアいやだペストが餅をかぢつてよ　大阪　鈴子
羽子板が三ッあるのを自慢なり　横須賀　中里萬壽子
酒の座がはてぬと傍で餅を焼き　京橋　古川すみれ
羽子板に顔をうたれる志願なり　大阪　林すて子
羽子板があばたになると泣き出し　山口　藤梅女
年禮に行つては見たし耻しゝ　名古屋　佐野春子
御化粧でけふも年禮午後になり　奈良　保田照子
羽子板の押繪に坊が髭を描き　大阪　清水花子
ハイカラの美形濱餅で禮廻り　和田　津田濱子
酒呑の女房年首の後廻り　長野　服部智惠子
姿見の前で三日も暮にけり　石見　篠田徽子
ホンノリと女年禮屠蘇に醉ひ　本郷　惠滿子
まア愛らしいお餅のやうな顔をして　大阪　河野作子
羽子板も東郷さんがいッち賣れ　能登　花薗女史
羽子板も東郷さんで賣れるなり　廣島　稲田鈴香
御年始に行くより衣裳見せに行き　小倉　林とみの
鏡餅坊がまるめて御寫眞に　藤井　梅子
ぬすみ目に嫁の年禮じろりなり　備後　幸子
年禮や女らしうはあるかれず　但馬　北垣信
去年より今年は餅の數がふゑ　東京　大谷はな子
田舎ものヌキの雜煮で探すなり　茨城　酒井いと子
自轉車で走る扉が羽子を取り　大阪　前川四三子
おそなへをなしてやつたりと鼠引き　千葉　須賀子
禮よりも衣裳に氣ひこめてゆき　越後　越石わか子

佛前の餅を鼠が拜見する　佐賀　松本錦子
姑の手前雜煮を二ッ喰ひ　福島　無名女
氣短かが焼いたかちんの焦臭き　下野　月笑女史
焼餅をこがしてやどに叱られる　越後　野菊
切下げの年始が多い今年なり　神奈川　遠藤喜知子
お留守居をたのんで妻は年始に出　下野　石川すみれ
羽子板がほしいばかりに勉強し　廣島　瀬眞英子
坊つちやまはめす餅數が自慢なり　新潟　遠坂きそ
年禮の若き女がお切り下げ　伊豫　水野菊子
笑はれて羽子板顔へそつとあて　河内　れい子
姉さんの羽子板よごし叱られる　岐阜　野田濱
酒好きの眉をひそむる杵の音　秋田　波奈子
鏡餅食へば去年の忍ばるゝ　東京　田中かく子
年禮はざッとすまして歡留多會　山城　古川かつ子
嫂さんがお雜煮を食ふ十二椀　神奈川　遠藤喜和子

次回課題　『梅』『犬』『雪達摩』（〆切一月十五日）

謎々

第一等

『西洋料理』『持参金』『寫眞』とかけて

▲持　羽前國西置賜郡長井町　谷山たに子

「論語」と解く心は「曰くが多い」

評、どこに妙があると問はれると困るが、謎々は斯う輕く往つて貰ひたい、第一等たることは勿論なるのみでない、近頃を通じての面白い解答だらう、

第二等

▲四　下野宇都宮上河原町五　大谷富子

「兩岸の對障」と解く心は「橋（箸）が見えない」

評、これは言葉の洒落だが、同じく言葉の洒落にして大體の結構が面白い、兩岸の對障とやつたのは無理のやうで、決して無理でない、

第三等

▲四

「蝶々髷」と解く心は「油で持たせる」

評、油で持たせるコツテリとした解方ではない、アッサリとうしほ汁か刺身かを食ふ心地がする、

▲四…尋常一年生の手紙」と解く　心は「片假名で書く　宇都宮　大谷淑子

▲四…外科醫」と解く　心は「切たり突たりして食ふ　河内　大西敏野

▲寓…梅の花」と解く　心は「香を（顔）うつす　神戸　ゆき

▲持…辯士」と解く　心は「演壇（縁談）につきもの　埼玉　飯塚たい子

▲四…渡守」と解く　心は「橋（箸）が無くて喰ふ　福島　無名女

▲持…菊見の時雨」と解く　心は「花（鼻）にかゝる　京都　田中とめ

▲持…ハイカラ眼鏡」と解く心は「鼻に掛て得意がる　千葉　無名女

▲持…三の字」と解く　心は「二（箸）の上にま一ツ　奈良　中西まさ

▲四…立派な葬式」と解く　心は「放鳥（庖刀）が濟ぶ　山城　上野はるゑ

▲四…辯護士」と解く　心は「法を知らぬと食へぬ　大阪　田中入須子

▲四…流行の元祿髷」と解く　心は「油氣澤山　但馬　北垣好乃

▲持…ハイカラ眼鏡」と解く　心は「とかく鼻に掛る　岡山　田上濱子

▲持…隆鼻器」と解く　心は「鼻を高うする　石見　篠田嘉子

▲持…隆鼻法の進歩」と解く　心は「低い鼻も高く見せる　京都　瀧野はま

▲四…ホワイトシャツ」と解く　心は「なれぬ内は胸に支へる　京都　藤田靜枝

▲四…大名」と解く　心は「小姓（胡椒）がつきもの　和歌山　田邊とよ

▲四…昔の戰爭」と解く　心は「切つたり突き刺したり　京都　濱部郭公女

▲持…ハイカラの眼鏡」と解く　心は「鼻にかける　横須賀　中里萬喜子

▲寓…反魂香」と解く　心は「死んだ人が見られる　信州　神津榮子

▲寓…仲買人」と解く心　は「口錢（光線）が無くてはならぬ　伊勢　佐野とせ子

▲持…眼鏡」と解く　心は「鼻に掛るのは見ツともない　下谷　かな江

▲寓…歳暮の進物」と解く　心は「とつたりやつたり　廣島　今津つる

▲寓…妊娠中」と解く　心は「出來て見るまで心配　大阪　しげ子

▲寓…毎月發行の愛讀雜誌」と解く心は「出來るのが待ち遠い　甲府　山田鶴子

▲寓…滿潮の嚴島」と解く　心は「逆さまにうつる　奈良　池原いれ

▲四…渡し守」と解く心は「ハシ無しで喰ふ　播磨　山下儉

次號課題

「ショール」とかけて

「燒芋と」かけて　（〆切一月十五日）

「凱旋門」とかけて

處女文壇開設

本誌は來る新春號より誌上に花を添ゆる目的もて新たに處女文壇を開設して女學生諸嬢が文章練磨の資に供すると共に其の錦心繍腸に成る美文字を大ひに歡迎せんとす讀者よ乞ふ下の規定により陸續投稿あらんことを。

●**和歌**（題　實）
端書に限る、一人一首

●**新體詩**
半紙一枚　十句以内

●**美文**
半紙廿四字詰、廿行以内

●**短文**
端書に限る、七行以内

●**消息文**
半紙廿四字詰、廿行以内

●**小說**
半紙十五枚以内、總假名付

▲各欄共題隨意

賞品規定

◎和歌◎新體詩◎美文◎短文◎消息文の優等當選者へは左の賞金（圖書切符）を呈す

▲天　參圓
▲地　貳圓
▲人　壹圓
▲秀逸　五十錢

◎小說の當選者へは

▲甲　貳拾圓
▲乙　拾圓

現金にて呈す

◎投稿は總て女學世界處女文壇係宛とし、字體を明瞭に記すべき事。

▲二月分〆切一月十五日



小説

若き愁

中村春雨

（一）

『ね、先生、私何うしたら善ございませう、眞實に困つて了ひましたわ』と、青柳國子は白い額に小皺を寄せて、睫毛の長い、感情の鋭い眼で昵と見て、すらりとした撫肩を搖り、手裏の、白薔薇のやうな縫縁の絹手巾を揉み〳〵しては、焦れたげに前齒で嚙んでゐる、廂髪が、はらりとほつれかゝつて赤白い耳を掠め、リボンの鶯茶の翼が、鬢づらを滑つてかすかに慄える

『何うしたらと云つて？矢つ張貴方の御決心次第なのよ、自分の好きな道へ一生を委ねて、折角賦つた天才を何處々々までも磨き上げて、立派な藝術家におなんなさり度い氣か、それとも御兩親の命令通り、神野さんとかと御結婚なすつて、一生此の田舍で極呑氣に暮してお行きなさるか、それは全く御自分の御考一つで御決めなさらん事には、是許りは他から干渉は出來ませんのよ』と、國子の舊師、此の村の小學校の唱歌受持の女教

員原田駒子は、歓骨高く秀で、額平く、眉は一文字に、眼が少し凹んで、猿の尻の様な赤い面の、容貌は至極醜いが、擧止に何處か温順した處があつて、人に接するに何時も愛嬌笑を湛えながら、口の利きざまも明確々々と男子らしい。

國子は村の豪農、靑柳助右衛門の長女で、この春、東京の某高等の學校を卒業して歸つて來たのだが、小學校時代から唱歌が好で、一度聴いたら調子を外さず、小い咽喉から玉の轉がり出るやうな美聲を張り上げて、如何にも節廻し巧に歌ひこなすので、原田敎師も十年修業の身がをさ〳〵及ばすと、オルガンの踏板を踏みながら感嘆の聲を發し、試驗の度毎に、滿點を與へてゐた程であるが、此度普通敎育を濟して、先づ一人前の女になつたので、今後、豫て原田先生からも勸められた音樂專門の學校へ入つて、修業がして見度いと、折入つて父へ願ひ出ると、この上、女に勉强は無益だ、音樂なんか稽古した處で、悪くすると法界屋のおかみさん、善く行つて、原田さんのやうに、一生獨身で小學校の唱歌の敎師位してるのぢやア始まらない話だし、それも聞けば、此頃は虫が附いたとか云ふぢやアないか、馬鹿な眞似は廢止て、折角、向から達て望んでゐる矢先だから、近郷切つての福々長者神野さんの家へ嫁に行けと、親の威光を笠に着て、一も二もなく壓し附けんとするのである、國子は今も猶、小學校内に寄寓してゐる舊先生原田駒子の外に、差當てかゝる事の相談柱と頼むべき人は、此村に一人も無いと思つてゐるので、父は原田先生が、學校の小使と怪しいといふ噂をちらと聞いて來たと云ふのを頭から眞實にしない、昔ながらの師と信じ切つて、今し方、御無沙汰の御詫旁々、尋ねて來た處である。

『だつて先生、自分で其處の決心が附かないから、何うしたら善かろうかと思つて、先生の御意見を伺つてるのぢやアありませんか、ね、先生は何う御思ひなすつて?』と、手巾を膝の上へ堅く抑へ附けて、瞳を涼しく

瞬つて、駒子の唇の動くのを見守つてゐる

駒子は輕く笑つて「ホヽヽ、國子さんも人困らせな方ね、私の意見は私の意見、國子さんの御考は御考で全く別の物ぢやアありませんか、他人の意見で、自分の一生の大事を決めやうなんて私、國子さんをそんな輕卒な人だとは、思つてないのよ」

「私、全く他人の意見で自分の一生の事を定めやうと思つてやしませんのよ」と、稍く照れて、俯目になつたが「唯ね、先生が、斯う云ふ場合に出會しなすつたら、何うなさるのでせうか、それを參考の爲に聽せて戴き度いと思ふ許なの」

「參考の爲に？隨分苦しく拔けましたねホヽヽヽ」と又笑つたが「それなら國子さん、別にお聽きなさらなくつても、御覽の通りの次第ですよ」

「エッ」と仰山さうに目を瞬いたが「先生、何んでございまつすて？」と合點が行かないやうな顏色である、

「私は斯うして、自分の好きな道に一生を委ねました、お庇で御覽の通り、小學校の唱歌の教員で身を終らなけりやならん事になりました」

と淋しげに笑つたが「是でも自分で、自分の造つた運命に從つて居る譯ですから、私は些とも悔んぢや居ませんけれど、併し、國子さんには又國子さんの自由がおあんなさるから、私は何うなさいと云つて、決して御勸めはしなくつてよ」

いたく同情したやうに、國子は原田先生を眺めてゐたが「眞實に、先生はそんなに云つて下さるのに、親なんていふ者は、何うして子の自由を奪はふとするのでせうねえ」

と、自棄に手巾を揉んでゐたが「眞實はね、先生、私は一生、何んな難儀をしても構ひませんから、好きな

道に身を入れて試つて見やうかと思つてゐますのよ、無意味な結婚なんかつまらない」

駒子も屹と見て「一生獨身といふ事もそりやア隨分考へ物ですけれど、ね、……私なんかも淋しい思をせん事もないですけれどもね親の命令で、無意味な結婚をするのも生涯の苦痛ですからね、私なんか天才が無い癖に、藝術家を氣取ろうとしたのが抑もの失策だつたかも知れませんが、それでもまア自分の腕で自分が食つて行つて、男から奴隷待遇を受けない丈が、まア優だと思つて自分で慰めて居てよ」

此人にも、男子を選擇する意氣があつたのか、それ丈の先生に、父の云ふやうな不品行の、塵つ葉程もあろう筈がないと、獨り頷いて、國子は今更のやうに、その醜い顏を、まじ〳〵と見入つたが、「私なんか、猶更藝術家を氣取つたら、後悔する事があるのでせうけれども、あんな神野なんて、學問も何にもない、唯財産を所有るといふ丈の人の處へ、一生を委す氣にはなれませんわ、私はもう〳〵先生の足跡を踏んで行く〳〵と決心しましてよ」

「國子さんなんか、そんなに私の足跡を踏むの何のつて、心細い事を仰やらなくつても、立派な天才がおあんなさるのだから、善い音樂者になれませうけれども、親御がそれを承知なさらんと、何うなさる御心算です？」

「然うでございますね」と、國子もハタと當惑したやうに考込む。

「東京の御親戚の方は、何ういふお人なんですか？」

「從兄なんですけども、父が反對すれば、とても世話なんかしてくれる氣遣はありませんわ」

「別に、御知己の方と云つて、おあんなさいますか？」

「否え……」と、愈々困つたやうな眼色で、上眼に駒子を見る。

「男子なら苦學といふ事も出來ますけれども、貴方のやうなお孃さまにはまさか、ね」

「眞實に、先生、何うしたら善ございませうね」
「然うですね、困りましたね」
「此儘、家に居れば、私はあの神野と、無理往生にでも結婚させられますわ」と、身を揉んで潤んだ眼を手巾で拭いてゐる。
「此所が貴方の御決心一つなんですよ」と力を附けるやうに云ふ。
「もう決心はして居りますけれども」
「何う御決心なすつたのです？」
「今も申したぢやアありませんか、結婚なんか決してしません、何處までも自分の好な音樂で身を立てると、もう然ういふ決心しましたのですけれども父が承諾しなかつたら、何うしたら善からうかと、それで迷ッてゐますので」
「ぢやア、矢つ張迷つて居らつしやるのよ、決心が出來たのぢやアありませんわ」と、嘲むやうな調子。
國子は、ほーと、溜息を吐いて「私、困つて了つたわ」又前のやうに、手巾を揉み／＼前歯で嚙んでゐる。
「私は、詰らない婿を押付られるのが忌さに、家を飛び出して了つたの、財布の中に五拾錢銀貨が三つしか無かつたのですが、木賃宿へ泊り／＼、漸と東京へ着いた時は、五厘錢が僅つた、二つ殘つてた限なのよ」
と、笑顔になる。
「オヤ、まア、始めて伺ひますわ、先生はそんなに強い御氣象でゐらつしやいますから、思ひ通り爲遂げる事がお出來なすつたのだわ」
「處が少とも思ひ通りに行けやアしなかつたのですよ、燒薯で漸つと腹を膨らして、二三日ほつき歩いて牛乳

配達の口を見付てから、都合よく師範科の官費生に入りは入りましたが、矢つ張天才がないから、駄目な事でした、此計は、意志の強い丈ではいけませんね」

「私なんか體が弱いから、とても先生の樣な眞似は出來ませんわ」と、國子は、ぐたりと頸を埀れて、ホッと力なげに太息をする

「イヤ、これは唯、私の身上話で、國子さんに、こんな事をやつて御覽なさいと、決して勸める譯ぢやアなくつてよ」

「先生、私、眞實に困つて了ひましたわ」

と、泣聲になつて國子は又しても同じ事を繰り返して云ふのであつた。

「貴方の御決心一つでは、又御相談に乘つて上げない事もありませんけども、兎に角よく考へて、確り、決心をしてから入らつしやいな」

明け放つた窓からは、靑葉の匂が風に動いて來て、牧場の彼方の森の中に、眞赤に熟れた酸漿のやうな夕陽が半ば沈みかゝつて、空には黃金色の、鷲の毛を掻き拗つて散らかしたやうな夕やけ雲が漂うてゐる、運動場の、鞦韆の鐵輪が、きら〳〵と煌めくのが見える。

(二)

やがて國子が別を告げて辭し去る時、駒子は玄關まで見送つて出たが、學校の門際にさし掛つた時、外から年の若い、色の靑白い、小使の八介が、手に撫子花や、芍藥など美はしい花の一把を持つて、小刻に駈けて來たが、ハタと出逢と、何んだか周章たやうに、赧くなつて、作笑しながら、門内へ急いで入つた。

國子はつい後姿を振返つて見ると、窓口から駒子が顏を出してゐたが、急に隱れて見えなくなつた。

『何んだか變に思ひながら、あんな卑しい小使なんかとまさか先生が……イヤ、世間の噂なんか信用して假初にも先生の事を彼此思ふのは失敬である、あの意志の强い、氣象の確然りした先生に、何うしてそんな後暗い事があつてよいものか……斯う思ひ返しながら、靑田の中の一本道を辿つて、本街道へと出た。

もう、夕日は落ちて、紫色の雲が、紫英雲の花束を搔き亂して淺黃色の水に流したやうに、西の山際の明るい空に泛んでゐる、靑田には薄りと靄が這ひかゝつて、榛の木の影を倒に照す小溝の中に、蛙の歌が、暮を促すのである、彼方の山寺で、今、鐘を撞き出した。

父の命令に忤いて、飽まで音樂の修業にこの身を委ねるとすると、田原先生の樣に苦學をしてゝも、志を貫く決心がなくては噓だ、親の家を脫け出すといふ事から、何んだか恐しいやうにも思はれるが、此儘、家に居た日には、否應なしに、神野の家に嫁入つて行かねばならぬ、神野の人物は善くも知らないけれど、四五年前、隨分放蕩して親を泣かせた事もある樣子、學問が忌ひで、讀書も碌々出來ず、自分が嫁に行けば、奥樣の方が、えら學者樣だア。と、村の掛茶屋で、馬子共が話してゐたのを、蓬摘の歸りに、小耳に挿んだ事もある、自分はその樣な平凡な人を終生の夫と賴んで、この世を平凡に送らなくてはならぬ約束はないのだから、何うしても忌だ、何うしても家に居やしない、恐ろしい思をしても、親の家を脫け出して行く氣だが、さてそれから先は何うしたら善かろう、牛乳配達なんか何んだか耻かしくて、とても私に出來やしないわ………

背後の方から、美い聲でしきりに野良唄を唄つて來る聲が聞える、牛が吽々とその合間〳〵に鳴いて近づいて來る。

程なく、その歌の文句も、手近の榛の樹の間を縫つて漂ふて來た。

『昔なじみと、つまづく石は、……憎いながらもふりかへる』

振へ附き度いやうな美音を張上げて、のそ〳〵と歩む牝牛の尻に従いて、歩んで來る野良歸の女を、國子は心憎しと振り返つて見た。

白い手拭に頭髪を包んで、甲斐々々しく手甲をかけ、脚絆を穿き、藁草履ばた〳〵と、草臥れたやうな足附であつたが、國子の顔を見ると、眼を圓うして、聲でもかけさうな樣子であつた、國子も見知つた顔だと思つて何か云はうとしたが、その中に、牛は尻尾を振り〳〵、行過て了つた。

『オ、、彼女だと、漸く思出して、後から追駈けやうとしたが、その時、牛の脊の鞍に引かけてあつた鍬が、ガラリと、大地に落ちて鳴つた、國子は馳せ寄つて、拾ひ上げると、女も氣附いたものか、馳戻つて、白手拭を取つて、

『コレハ何うも難有うござました』と、丁寧に叩頭した。

『何うしまして』と云つたが、黄昏の中に、その顔をつく〴〵透して見て『貴方はあの、芳野のお倉さんぢやアありませんか？』

向も屹と瞳を据えたが『ヤア、青柳の、お孃さんでしたか、コレハ何うも御見外申しました、御久しぶりでござりますね』

『眞實に、暫らくでしたわね、御機嫌はよろしくつて？』

『よろしいにも何んにもこんなざまで、昔のお友達にはもう面目がなくて、皆樣へ御無沙汰して居ります』

『小學校に居た時は、御宅へもよく遊びに參りましたが、貴方は隣村へ御嫁入なさつたし、私は東京へ出るやらしまして、それからは御音信もしませず、眞實に失禮しましたわ』

「私こそ、申譯がありません……」俯目になつたが、直と氣附たやうに、五六間も先へ歩く牛の後を追うて行つた。

　國子も追つ駈けながら、變り果たお倉の身上をつく〴〵と思つた、小學校にゐた時には、國子より一級上で、性來の美い聲を張り上げて、隣の教室で唱歌を唱ふ時は、隔の壁が凛々と慄えるやうであつた、原田先生も感心して、國子にも優れる天才だと云つてゐたが、親の家が水呑百姓、小學校を卒業すると間もなく、隣村の豪家から所望されたを幸に、早々と嫁付いて了つた、然るに、その亭主は山氣のある男で、諸方の鑛山へ手を出して失敗し、田地も山林も、皆人手に渡つたといふ話は聞いてゐたが、此所で相逢ふのは意外の對面であつた、

「東京から何時お歸りでござりましたか？」

　と、手綱を取りながら、お倉は問ふ、

「四月に學校が濟んだもんですからね」

「へエ、もうお濟みになりましたか、早いもんだね」と、つく〴〵感に入つた樣子、

「お倉さんは、まだ小いのはゐらつしやらないの？」

　と、慰めるやうな調子で問ふ。

「イヤ、三人居りますよ、餓鬼許殖えましてホヽヽヽ」と淋しげに笑ふ。

「オヤ、お三人も……皆家で大人く待つてらつしやるの？」

「私が斯うして、稼ぎに出ますので、良人が家で子守をしてくれます、良人もこの頃、足裏に踏拔をしましてね」

「オヤ、オヤ、それは嘸お困りでせうね」

「困るにも何にも、私は寧そ死んで了ひ度やうな氣が出る事もありますけれど、子供に引かされてまア一日一日と生延てゐるやうなもんでございますよ」

牛は、薄闇い中で、吽と鳴く、彼方此方の蔭に、燈がちら〳〵と見え出した。

「貴方なんか、御自分の思ひ通りに、充分御勉强も出來ますし、眞實にお幸福な方ね、音樂の方の學校へお上んなさるといふのは、何うなりましたか？」

「まだ何うとも定まりませんのよ」

「學資の御不足があるぢや無し、何にも上られない譯はないぢやアありませんか」

「私は上り度のよ、是非上り度いと思つてるのだけどもね」

「父さんが御不承知なんですか？もう何處かお嫁にでも行けと仰しやるの？」

「私、それで眞實に困つて了つてよ」

「親なんて、何うしてあんなに解らないんでせうね、私は原田先生に紹介狀を戴いて、東京へ出て苦學する心算なんでしたけども、親が無理から押附て、嫁に行つて了つたんですもの、今ぢやア、こんな難儀をして居ります」

「私は何うしたつて……苦學でもして、遣り度いと思つてよ」

「お孃さんなんか、苦學をなさらなくつても、御勉强の出來るお家ですから充分にお遣んなさつたが善ございますよ、原田先生に願つて、お父さんに然ふ云つて戴いたが善いぢやアありませんか」

「處が、父がなか〳〵頑固ですからね」

お倉は、又しても脱げかゝる草履を、履き締めながら

「お嫁入の先は、もう定まつてるのですか？」
「そんな事、極りが惡くて云へないわ」
「ホヽヽヽお孃さんの樣な時代が花ですわねえ、然ういふと、大さうお老婆さんのやうに聞えますが、一歳違ひでも、五ッ六ッ、違つて見えませう」
「そんな事はありやしないわ、聲なんか昔の通りよ、眞實に慄え付き度いやうだわ」
「ホヽヽヽお世辭が旨くおなりでした事ね、」
「否え、眞實の事よ、その聲を田舍に朽ちさせて了ふのは、惜しいわ」
「ぢやア、お孃樣も、田舍にすッ込んで、貴方の美い聲を牛や、馬に聞かしてそれでお終了になるやう事に、なさらんが善ございますよ」
「眞實にね……」、國子は、俯向いて考へ込んで了つた。
空には、星の光が、ちらほら煌めいて、夏草の青臭い匂の、むッと鼻へ立込む中に、虫の音が時雨のやうに、聞えてゐる。
掛茶屋の角で、國子は、お倉と別を告げたが、偶と立留つて、しきりと考へ出した、遠くかすかに、お倉の歌の聲が闇になつて行く、
此から、家へ歸れば、父は決答を迫るに定つてゐる、イヤ、否應云はずに、先方へ承知の旨を答へてやるに相違ない、然すれば、自分は、平凡な夫に連添うて、平凡な生活を送つて、平凡に死なねばならなくなるのだ、あのお倉の生涯がよい見誡である、自分は人が血の出る程傷けられながら涙を以て、辿つてゐる荊棘の路を後から同じ思ひで辿つて行くには、忍びない、先生もよく云つて聞かされる天賦の才ー、これは天が假りに人

間に預けた寶で、人間一人の勝手氣儘に浪費らす事は出來ない、廣く世間の役に立てねばならない約束があるので、自分は苦學でもやる、何んな難儀をしても、この志を貫かねば置かぬ、よし、今一度、原田先生に相談して、苦學すると堅く決心したから紹介狀を附けて戴き度いと願つて見やう、然うだ、今夜中にでも、決行せぬと、あのお倉の足跡を踏むやうになる、何うしてもこれから引返して、今一度相談をして來やう、眞實に決心したら、先生は相談に乘つてやると仰つたから……

振り返ると、東の森の端に、月は白くさし昇つた。

(三)

先刻は唯、薄墨を浸ませたやうであつた、其邊の景色が、今は月の下に明るく照らし出されて、飛び〳〵見ゆる彼方の黒い森影は、森として眠つたやう、桑畑の間々に、障子に赤黒い火影の射した百姓家が數へられる、蛙は遠近に鳴き交して、路傍の草むらには月の缺片のこぼれたやうな、螢火も點つてゐる。

お倉と逢つた處を通越して、國子は又更に女の運命の果敢さに、小い胸を冷すのであつた、自分も唯親の命令の儘に、神野といふ人の許へ嫁いて行つたら、この柔かな肩に重い鍬を操いで、箸か、ペンかより外、握つた事のない手で、牛の手綱を取らねばならぬ事になろうも知れぬ、然うだ、財産なんか、的になるやうで的にならぬものだから、そんな物に目を懸けて、自分の可愛い娘を他に緣付けやうとなさるなんて、お父さんは私が可愛くはないのか知ら、假令又、財産が滿足に保つて行けても、唯、安樂に着て、食うて、眠るといふ丈の事、それぢやア女は……私は、何の爲に此世に產れて來たのか、理が分らないわ。

國子は屹と瞳を上げて、彼方を見た、小學校の一室に、澄明の射してるのが、凝と眼に附く。

「もう私は何うなつても善いから、何んな難儀をしても善いから、東京へ出て好きな道を一生懸命、勉强する事に定めて了つたわ、先生に紹介狀か何か戴いて、もう直に實行する事にしよう、半ば口の中で呟きながら、國子は榛の並樹の街道筋から折曲つて、學校の門を目當に歩んで行つたが、表門はもう締つてゐる、柵に添ふて、裏門口へ廻ると、此所はまだ明いてゐた。

庭面は月に白く、國子の影法師は小く搖れて動いて行つたが、障子の家では、微かな笑ひ聲が聞える、「オヤ……御勉强かと思つたら……」と、聊か意外の思しながら、我にもあらず立留ると、何か小聲に語り合つて、又嬉しさうな忍び笑の聲が聞える。

誰が、話に來てるのかと、暫し小首を傾げて佇立つたが、「もう澤山……もう醉つちまひました」と云ふのは、慥か男子の聲、

先生の處へ話に來る男子の人ツて誰だろう、男の敎師なんか知ら、イヤ、言葉附の鄙しさから見ると、敎師などでないのは知れてゐる、誰だらうと、猶もしきりと考へてゐる。

「善い心持ね、恰度此位飮むと體の藥になつてよ、汝もあまり大酒しないやうに、氣を附けておくれよ、私心配だから」

「大丈夫ですよ、貴方に云つて聽かされてから、もう一合と定めちまひました、へヾレケに醉つちやつて、ベラ／＼喋舌つて了つたりなんかした日にや、お互の身上ですからね」

家外に國子は、體がわな／＼慄え出した、男子は疑もなく、先刻自分と門際で擦れ違つた、小使の八介である、さては先生が、學校の小使と怪しいといふ噂がちらほら聞えたのは事實の事なんであつたか、父に對して飽くまで原田先生を辯護して、自分の心にも、潔白な、理想の高い、意志の强い先生と信じ切つてゐたのが全

くの過誤であつたか、原田先生がそのやうな、不品行の事をなさるとは、ア丶世間の千人萬人が假令口を揃へて云つたつて、自分は信用しないのだか、併し、此場の有様は何うしたのだらう、夢ではないか知ら、自分の頭が何うかしてるのではないか知ら、……………

家内からは、又艶めいた笑ひ聲が聞える

國子は忌な、忌な、氣持がしたが、不思身を退くと、下駄がからりと鳴つた。

颯と障子を明けて、燈影を背に、半身を顯したのは、原田駒子である。

「何誰？ッ」

國子は只俯向いて、月下に佇立た。

「何誰です？何しに入らしつたのです？」

鋭い調子で、普通の原田先生とは何んだか人が變つてるやうに見える。

「姓名を仰やいッ、默つて人の家を窺ふなんて、不都合ぢやアありませんか？」

間は、三間許しか隔つてゐないのだが、國子といふ事は分らなかつたのである、障子をハタと閉て切つて、玄關口へ廻つた様子なので、國子は腕の下に冷汗の滑かなるを覺えながら、寧ろ立留まつて、先生の假面を脱がせて上げやうかと、寸時とそんな氣も射したが、急に怖しくなつて、あたふたと裏門口から駈け出した、息嚐きながら、榛の並樹の、街道筋まで駈け戻つた時、後を振向いて見ると、自分の歩いて來た道には、月が白く漠けてゐる許り、人影は見えないのである、今まで燈明の射してゐた原田駒子の室は、雨戸が早くも繰り出されたと覺ぼしく、小學校の建物は森として、眠つてゐるやう。

はーと太息を吐きながら、今更に、原田先生の品行が口惜しくて、歯痒くて、何んだか怨めしいやうにもあ

り、恐ろしいやうにも思はれる、先生は何うして小使なんかと……あんな鄙しい小使風情と、假にも世間の口にかゝる樣な事をなさるのだろう、まだ村の人が皆知つてゐない樣子だから濟んではゐるもの〻一旦ぱッとした日には、十年の御辛抱が水の泡になつて終ふのではないか、人望も、名譽も滅茶々々になるのではないか、否、自分の父の耳にさへ入つてゐるのを見ると、大分噂がぱッとしてるに違ひない。

何處までも、原田駒子を責める心も起るが、偶と國子の胸には、駒子の生涯が浮んで來た、親の家を脫け出して、纖弱い女の身の牛乳配達までして、苦しい修業を續けた後、思ひ通りに藝術家として世に立つ事もならず、空しくこの片田舍の小學校の唱歌敎員で、獨身淋しく老ひ朽ちて行かねばならぬ人かと思ふと、つい自棄な行爲を仕出されぬものでもない、靑春の夢早くも消えて、三十有餘の更けゆく歲を、何の希望もなく、樂もなく、明かし暮してゐる人かと思ふと、國子は何となく胸が塞がつて、眸から熱いしつぐがぽたりと落ちた。

と、思ふと、我が身の行末が幻の如く眼前に現れて來て、堅い、堅い、志が、ほろ／＼と脆い石の剝る〻が如く我胸から碎け、落ちてゆくのを覺えた、ア、、寧そ嫁入して、お倉さんと一緒に泣かうか……それとも遣れるまで遣つて見て原田先生と同じ身の果を味はふか？。

「女ッてものは、何うしたら眞實なんだろうね」と獨語ながら、溢れ出る淚を押へて、ホーッと太息を吐いて、ふと月を振り仰いた。

月は一點の曇りもなく淸らかに冴えて、限なく下界を照らしてゐる、何んとまア美しい事だろうと思ひ／＼、眺めてゐる中に、國子はもう恍乎となつて、身も心も、靑春の美き愁もその淸い光の中に吸ひ込まれて了ひさう、この時、處女の胸は、その月の如く無垢一點の塵も着けなかつた。

（をはり）



新年笑話

極樂の園遊會

千朶山　撰

本町三丁目石灰屋の丁稚チヨロ松が、ビールに醉ツ拂ツて永代橋の眞中からどぶんとなつて仕舞ひました、さてその魂魄はどうなつたかと段々穿鑿をして見ると、これは、この小僧、日頃あまり正直な奴ではないから無論地獄の方に參るべき筈のものでした、そこで娑婆と冥土の國境、暗い道や險しい山々を段々と登つて參りますと、忽ちにして夜がパツト明けました。見ると眼の前に大きな鐵柵があつて門の兩側に赤鬼、靑鬼が金棒を突いて控へて居る、成程こゝが娑婆で聞いた地獄の一丁目といふ處かと思ふと急に恐ろしくなりましたが、烏散な者でないから聲を掛けて案内を賴みますと、鬼共は恐ろしい顏に似合はず、莞爾と笑みを含んで、誰だいと尋ねましたから、大晦日の晩永代橋から入水した石灰屋の丁稚ですと答へまするとムヽウ、チヨロ松か、冥昨日閻魔樣から御報知があツた、ヨロシイ、通れといつて鐵の門を開いて呉れました、どうも有難い事で、

土にも近頃は憲法といふものが出來まして、無暗に亡者に對して壓制な事は致ません、のみならず、此頃は又極樂の方と同盟締結が成り立ちまして、正直不正直に拘らず一般の亡者を歡迎するといふ事ですから、惡事をして參ッた者は誠に仕合な事です、チヨロ松は有難い〳〵と言つて參るうち早くも閻魔の廳へと行着ました。

昔しは人間の血潮で塗つたといふ嚴めしい朱門も今は西洋風のサッパリとしたペンキ塗の鐵門に代り、正面の政廳に花瓦斯などがついて中々奇麗です、大王殿下は大理石の卓子の前に嚴然と構へて居られたが、チヨロ松を一と目御覽になり、につこりと遊ばしながら、其方は確か永代橋方面から參つた者ぢやな、よろしい、娑婆では隨分と不正直な奴であつたに依つて、當所に於ても十分の待遇をする譯には行かないが、本日幸い針の山公園に於て園遊會を催ふすに依て、それへ參れ、さア誰か案内をして遣せと大王の一言に牛頭、馬頭共先に立つて針の山へと導きました。

針の山といふは名ばかり、今は一切取拂はれて見渡す限り一面の花園です、珊瑚の木に瓔珞の花が咲き、黄金の臺にダイヤモンドの實が生ッて居る爲體、向ふの方に大きな池があつて、そこには八功德水が噴水を成して流れて居る、此ちらの方には百味の飮食を折詰にして、美人揃ひの女菩薩連が亡者に接待をして居る、遙か彼方を見渡すと金襴の幕を打はえた中に數萬の亡者共が、ワイ〳〵と噪いで居りますから不思議な事だと行つて見ますると、こゝは園遊會の餘興場で、仁王樣が相撲をとるやら、不動明王が輕業をやるやら、普賢菩薩が曲藝をやるやら、中々の大景氣であります、又此方の側を覗いて見ますと、こゝは歌舞の菩薩三十人大一座の音曲の合奏、見物の亡者どもは聲が粹だの容子が佳だのといつて佛樣達の批評をして居ります、アレお釋迦樣、御串戯遊ばしちやお厭ですよ、ほんとに貴郎はお人が惡いのよ、などゝ蝦茶袴の亡者までが阿彌陀樣に巫山戲て居る、そうかと思ふと又彼方では今しも達磨大師を胴揚にしやうとして大衆がゝりで萬歳を唱へるといふ大さ

わざ、アレ赤鬼さん、今度はお前さんの番ですよ、早く其虎の皮の褌をはづして素裸になつて踊んなさいよ、今に美術學校の亡者が來てお前さんを寫生して地獄新誌の口繪にするつてさ。ハツ、ハツ、ハツといふ大騷ぎ。

チヨロ松は實に不思議千萬な所ろへ參つたものだと、暫時は茫然として我身を忘れて居りますと、後ろの方からヤアお前は石灰屋のチヨロ松ではないか、といふ者がある、ハイと振返つて見ると成程貴老は高砂屋の隱居さん、どうしてこゝに、イヤおれも八十八の祝ひ日に芽出度い往生さ、閻魔様の仰しやるには、お前さんも永年よい〳〵で身體が利かないから、蓮の上に乘つて居た方が樂でよからうといふので、二三日が間乘つて居たけれども、何ぼおれだつて、蓮の上ばかりぢや退屈で仕様がないから、チヨツと世間の景氣を見やうと思つて、こうして杖にすがつてこの園遊會を見に來たのさ、ところがこの騷ぎ、就てはお前なんかほんとうに仕合なものだ、全くの處ろ地獄へ行くべき奴だが、今度の恩典で大仕合、不斷遊びが好で、お負けに喰意地が張つて居るといふ方だから、この園遊會ではさぞ食傷をするだろう。どうだい達磨汁粉を食つて見たかね、彼岸團子はどうだね、お盆屋のおはぎはどうだね、甘茶を飮るか、何そんな精進料理は嫌ひだと、それぢや閻魔の模擬店で賣つて居る鯛の鹽辛か、何だと千手觀音の御酌で般若湯が呑んで見たいと、ム、此奴中々生意氣に成り上つたな。

チヨロ松隱居の兩人極樂でめぐり合ひ、久しぶりで模擬店でたら腹食べましたからア、大分腹がよくなつて來た、どうだいこれから血の池の土堤ッふちでも散歩して、亡者連の海水浴でも見やうぢやないか、それとも沙羅双樹の下へ諸行無常の鐘の音でも聞きに行かうか、娑婆の寄席よりよつぽど異だよ、どうもあの音樂は別だね、實に幽妙なものだよ、ピヤノ、バイオリン、琴、尺八などの遠く及ぶ處ろでない、そう〳〵音曲といへは今日はたしか、極樂座で芝居がある筈だ、狂言は釋迦八相記、それから冥土協會でも何かあの、演説がある

そうだ、辯士は布婁那だよ、ア、快心持だと兩人が話し合つて居る處ろへ、一人の若い美人がやつて來ました、兩人びつくりして、ヤアお前は去年唐物屋の若旦那ハイカラ木戸郎と心中をした壽司屋のお里さんではないか。ハイ、誠にお久し振でした、何かね、彼のハイカラ旦那も矢張り此地に居なさるかね。イ、エ、まア聞いて下さい、彼のハイカラッ坊にも呆れて仕舞ひましたよ、娑婆からは手に手を取つて一緒に參りましたが、地獄の三丁目で離れて仕舞ひ私は獨ぼつち迷つて居ますと、どうでせう、有らう事か、あるまい事か、つい此間まで、彼の世では一緒と堅い約束までして置きながら、此頃はお地藏樣の腰元で、賽の河原の姆母を務めて居る阿娜陀羅女といふ蝦茶上りと夫婦約束をして居ます、ほんとうにまア憎いぢやありませんか、閻魔樣の戸籍帳では立派にハイカラ木戸郎妻お里としてあるのを、誰れの許しもなく自分勝手に阿娜陀羅式部と夫婦約束をするなんぞは立派な重婚犯です、いくら冥土の世界だとて重婚は許しますまい、ほんとうに妾は悔しくて仕樣がありません、それでねえ今幸ひとこゝでチヨロ松さんに遭ひましたからお前さんに一つ御頼みがあるんですが、聞いて御呉れでないか、ほんとうに後生だからよ、何それはこういふ譯さ、一寸ねえお前さんと妾が今こゝで夫婦になつた樣に見せてね彼の憎い木戸郎の面の皮をヒン剝いてやるのさ、それあの蓮池よ蓮の上にお前さんと妾と二人でちやんと乘つかつて居るのさ、すると木戸郎がステツキなんか振り廻して阿娜陀羅式部と一緒に散歩に來るのさ、ね、すると式部がチヨイとまア貴郎御覽なさい、佳い事ね極樂のベンチは天然的ですは、蓮の上で青春の男女が約婚して居るなんか、本統に理想的ですね、あれが眞實の美的生活の活模範でせう。なんぞといつて大變に羨ましがるに違ひない、そこで木戸郎が、異な聲を出して妾共の方を見る、さア大變娑婆で心中までした女が、極樂で知らぬ男と世帶を持つて居る、這奴めきつと驚ろいて眼を廻はすに違ひない。ね、どうでせうこの策略は、ね可だらうチヨロ松さん、と大きに口說れました。

成程それア面白い、佳趣向だ、直ぐと行つて見やうと兩人は蓮池に行つて釣床にでも乘るやうな心持でひよいと飛び上つて見る、何だかふわ〳〵して中心が取れない、こいつは異樣だ、お里さんお前あんまり端へ方へ乘かつて池へ落ちらなさんなよ。オツト險呑〳〵、ア、あぶねえ、お里さんお前は大變肥つて居るから隨分體量

がゐるだらう、え十八貫五百匁だと、こりや大變な女だね、俺は去年の暮赤ん坊負つて居て體重器に懸つて見たら、二人分でやつと十一貫しかなかつたよ。お前と俺がこう二人で蓮の上に乘つかつてゐると、丁度ソマトーゼの廣告になる、どうしてもこりや中心が取れない、お里さん半坐を分けるとお前さんの方が倍重いから、片ずんで今に覆りかへつて仕舞ふ、アヽこりや險呑な仕事だ、何だと蓮乘がまだ素人だと、そりや阿彌陀樣のやうに調子よくは行かないのさ。

あゝ最早そろ〳〵木戸郎がやつて來る時分ですよ。ねえ、一寸お前さん、あの向ふを御覽、色々な人が通るぢやありませんか、あれお釋迦樣が入らしつたよ、いつも御機嫌な事ねえ、それ閻魔樣が御巡回ですよ、御覽な今日は大禮服を召して居らつしやるよ勳章が澤山だこと、あれはきつと極樂と同盟をした勳功なんでせう。御覽なさい、まア疾いことね、韋陀天が自轉車に乘つて走ること、まア可笑いね鬼がシャツなんか着てさ、へへ、可笑い〳〵達磨樣が、ころ〳〵轉がつて居るよ、チヨイとお前さん彼れを御覽な、まア美しい、別嬪さんが象に乘つて琵琶を彈きながら來るぢやありませんか、成程ね、あれが普賢菩薩さ、極樂新聞で一等賞を取た美人よ。まアチヨイと向ふの野ッ原を御覽なさい、大變な人數ぢやないか、そして皆な肌脫で居るようだね、何でせう、そう〳〵今日は確か五百羅漢の郊外運動がある筈だから、きつと羅漢さんよ、そして御覽なさい、大佛樣が、山の上にたつた一人、あぐらを組で寫生して居らッしやる、まア佳御格服ね、どうも彼の御方は大變に般若湯が御好きで、脂肪太りですとさ。

ア、モウ木戸郎が來る頃だがね、まだ賽の河原の退ける時刻にならないかしら、御覽なさい牛頭馬頭も今日は非番だと見へて鳥打帽子に兵兒帶といふ扮裝ですね。可笑しい事ねえ、赤鬼が般若湯に醉ばらつて、千手觀音にしなだれかゝつて居るよ、あゝこりや大變ですよ、靑鬼が鐵棒揮り廻して此方を目蒐けて來るんだよ、まあどうするんだらう、あゝ大變、こりや大變、あゝ靑鬼ぢやない、あれは夜叉だよ、オヽ恐い夜叉よ、早く迯ないと夜叉に喰はれるよ、どぶん！　二人はあんまり騒いだものだから蓮の上から轉がり落ちて、ワッと大聲を揚げる、その聲に驚いて眼が覺めるとこれは夢でありました。

（完）

女學世界
春季增刊

女重寶記

一月十五日發行

女子が家庭に於ける仕事たるや、頗る多岐多端なるを以て、之を完全に處理せんと欲せは、是非共百般の事理に通ぜざる可からず、又た諸種の智識を須ゐざる可からず、本誌は茲に見るあり、本年一月の增刊を以て、婦人齊家に要する萬般の智識を網羅したるもの、「女重寶記」を編せんとす、内容收むる所何れも家庭と婦人の重寶ならざるなし、日々家事の繁務に鞅掌しつゝある諸姉請ふ、本編を坐右に備へて便利を享け給はんことを。

目次概要

二月分記事豫告（二月五日發行）

毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ヶ月分）	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
內（定刊數	十二册
增刊四回	一、四、七、十月價格同一）
郵稅 一册	二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引四十圓
一等	五十四錢	十七圓二十八錢	割引三十三圓
二等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
三等	三十七錢	十一圓八十四錢	割引二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文規畧

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せす
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治卅九年一月一日發行　第六卷第壹號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番
本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

博文館出版圖書拔萃目錄

△博文館發行の圖書は其種類數千種に亘り、古今東西汎百の學術を網羅す
△博文館は大は深遠の專門學藝より小は兒童用縮本に至る迄刊行せざるなし
△博文館出版品は價格の低廉と其發賣部數の饒多なるとを以て宇内に冠たり
△此拔萃目錄は紙面の都合に依り僅かに其一部分の重要なるものに止めたり
△此拔萃目錄には農業、工業、商業、政治、法律、經濟、軍事、醫學、理科、數學、哲學、外國語學等全然省略したるもの甚だ多し委細は**總目錄**に依られんことを

御註文規定

△博文館は自館出版品と一手專賣の委托品の外他店出版品は一切取扱ひ不申候
△御註文の節は必らず代金御添付被下度候、又郵券代用は一割增に限り申候
△郵便爲替の御送金は受取局を東京郵便局、受取人を博文館と券面へ御明記被下度候
△書狀の宛名は必らず日本橋區本町三丁目**博文館小賣係**と御認め被下度候小石川區の印刷工場又は博文館編輯局等筋違の宛名にての御註文は延着は勿論書狀の紛失其他の錯誤あるも弊館は其責に任じ難く候
△書狀は文字を分明に御認め被下度候殊に御住所御姓名は最も御注意願上候
△金高一圓以上の御送金には受領證差上げ可申候得共壹圓以下は送本丈けにて用辨可仕候
△御進物賞品等に最便利なる全國取引店共通の**圖書切符**發賣す金高は御隨意に調製可仕候

女(後付の一)

明治卅九年博文館九大雜誌

太陽
毎月一回 一日發行

年刊十二冊▲臨時增刊年四回（定價同一）▲四六判二倍大紙數二百五十六頁▲光澤寫眞版四頁普通十六頁▲本文中寫眞版數十個挿入

正價（●一冊參拾錢 郵稅參錢）　前金（●四冊金壹圓拾五錢●八冊金貳圓貳拾錢●十六冊金四圓貳拾錢●外に要郵稅）

實業世界 太平洋
毎月二回 一日、十五日發行

年刊二十四冊●外に臨時增刊發行▲太陽判（四六判二倍）紙數百十二頁▲光澤寫眞四頁挿入

正價（●一冊拾貳錢 郵稅一錢五厘）　前金（●六冊金六拾八錢●十二冊金壹圓參拾五錢●廿四冊金貳圓六拾錢▲外に要郵稅）

日露戰史
毎月二回 五日、廿日發行

太陽判（四六判二倍大）▲毎編本文二百餘頁▲寫眞銅版十二頁▲銅版戰局面及戰鬪地圖數多挿入

正價（●一冊參拾錢 郵稅貳錢五厘）　前金（●四冊金壹圓拾五錢●八冊金貳圓貳拾錢●十六冊金四圓貳拾錢▲外に要郵稅）

寫眞畫報
毎月一回 八日發行

太陽判（石版刷彩色表紙）▲石版極彩色刷二頁 ▲光澤寫眞版四頁 ▲石版及寫眞銅版三十四枚▲本記事六十四頁

正價（●一冊貳拾錢 郵稅貳錢）　前金（●四冊金七拾五錢●八冊金壹圓四拾五錢●十六冊金貳圓八拾錢▲外に要郵稅）

文藝倶樂部
毎月一回 一日發行

年刊十二冊▲定期增刊年四回（定價同一）▲菊判三百廿頁▲木版摺錦繪一枚▲原色版一枚▲寫眞版アートペーパー二頁、普通寫眞八枚挿入

正價（●一冊貳拾五錢 郵稅貳錢五厘）　前金（●四冊金九拾五錢●八冊金壹圓八拾錢●十六冊金參圓五拾錢▲外に要郵稅）

女學世界
毎月一回 五日發行

年刊十二冊▲定期增刊年四回（定價同一）▲菊判、紙數三百餘頁▲習字及習畫帖八頁（內二頁彩色刷）▲寫眞版アートペーパー四頁、普通寫眞版四枚挿入

正價（●一冊貳拾錢 郵稅貳錢）　前金（●四冊金七拾五錢●八冊金壹圓四拾五錢●十六冊金貳圓八拾錢▲外に要郵稅）

中學世界
毎月一回 十日發行

年刊十二冊▲定期增刊年四回（定價同一）▲菊判、紙數二百四十頁▲習畫帖五頁（着色水彩鉛筆ペン畫等）▲光澤紙寫眞版四頁、普通四枚挿入

正價（●一冊貳拾錢 郵稅貳錢）　前金（●四冊金七拾五錢●八冊金壹圓四拾五錢●十六冊金貳圓八拾錢▲外に要郵稅）

少年世界
毎月一回 一日發行

年刊十二冊▲定期增刊四回（定價同一）▲菊判紙數百三十六頁▲原色版標本畫一枚、石版彩色毛筆畫一枚、光澤紙寫眞版四頁挿入

正價（●一冊拾錢 郵稅一錢五厘）　前金（●四冊金參拾八錢●八冊金七拾五錢●十六冊金壹圓四拾錢▲外に要郵稅）

幼年畫報
毎月一回 五日發行

年刊十二冊▲菊判美麗畫本 ▲石版極彩色刷繪畫十六頁 ▲色刷木版寫眞版刷込十六頁

正價（●一冊金拾錢 郵稅五厘）　前金（●三冊金貳拾九錢●六冊金五拾六錢●十二冊年分金壹圓拾錢▲外に要郵稅）

家庭書類



- 華族女學校學監下田歌子女史著 **家政學** 全二册和並綴 大判四三〇頁 正價一册參拾錢 郵税一册六錢
- 岸上操君著 彩色木版寫眞銅版挿入 **家政案内** 全一册洋並綴 大判二五六頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 博文館記者近藤正一君 新撰 **家事問答** 全一册洋裝上綴 袖珍二六六頁 正價貳拾錢 郵税四錢
- 華族女學校學監下田歌子女史著 **家事要訣** 全一册和並綴 大判二八二頁 正價參拾五錢 郵税八錢
- 中村鈴子女史編 **家庭の模範** 全一册洋布上綴 中判四二四頁 正價參拾八錢 郵税六錢
- 曾我部純一君著 **最新家計簿記** 全一册洋並綴 大判一三四頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 華族女學校學監下田歌子女史著 **女子手藝要訣** 全一册和並綴 大判二六二頁 正價參拾五錢 郵税八錢
- 飯田吳服店裁縫部主任小岩井規太郎君 同副主任鹽田直三君合著 **實用裁縫全書** 全一册和並綴 大判二六六頁 正價五拾錢 郵税八錢
- 刺繡術專門 磯村大次郎君著 **實用刺繡術** 全一册洋並綴 大判一二四頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

- 山田興松君著 木版刷錦繪及寫眞銅版挿入 **實用造花術指南** 全一册洋並綴 大判一〇〇頁 正價貳拾五錢 郵税四錢
- 吉田調子君著 木版刷錦繪及寫眞版挿入 **裁縫と編物** 全一册洋並綴 大判二六二頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 博文館編輯局編纂 木版刷錦繪及寫眞版挿入 **衣服と流行** 全一册洋並綴 大判二三六頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 坪谷善四郎君著 木版刷錦繪及寫眞版挿入 增訂 **女子女禮式大全** 全一册洋布上綴 大判五九二頁 正價九拾錢 小包送拾五錢 △蒔繪函入特製 和上綴正價壹圓貳拾錢 小包送拾五錢
- 華族女學校學監下田歌子女史著 女子 **普通禮式** 全一册洋並綴 大判二六二頁 正價參拾五錢 郵税八錢
- 大橋乙羽君著 木版刷錦繪及寫眞銅版挿入 **和洋禮式** 全一册洋並綴 大判二四八頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 中島義式君著 **新撰女子作法書** 全一册洋並綴 大判一四〇頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 中島義式君著 密畫挿入 **新撰小學女禮式** 全一册洋並綴 大判二二〇頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 阪本隆哉君著 **衞生食物調理法** 全一册和並綴 大判一五四頁 正價參拾錢 郵税六錢

女（後付の三）

●病者の食餌	阪本隆哉君著	全一册紙皮上綴 中判長形二五六頁	正價貳拾錢 郵税四錢
●家庭料理法	洋庖會第四教場主幹龜井まき子女史著	全一册洋並綴 大判二三〇頁	正價參拾五錢 郵税八錢
●料理手引草	華族女學校學監下田歌子女史著	全一册洋並綴 大判三三〇頁	正價參拾五錢 郵税八錢
●實用料理法	藤本藤陰君著 木版刷錦繪及寫眞銅版挿入	全一册洋並綴 大判二八四頁	正價貳拾五錢 郵税六錢
●西洋料理法	佐々木孝君著 木版刷錦繪及寫眞版挿入	全一册洋並綴 大判二五四頁	正價貳拾五錢 郵税六錢
●八百善料理通	八百善主人著	全二册和裝 中本和紙刷	正價參拾八錢 郵税六錢
●漬物早指南	小田原屋主人編	全一册和裝 中本和紙刷	正價拾貳錢 郵税四錢
●料理早指南	醍醐山人編	全二册和裝 中本和紙刷	正價貳拾五錢 郵税六錢
●料理いろは庖丁	風羅山人編	全一册和裝 中本和紙刷	正價拾八錢 郵税四錢
●家庭衛生訓	千葉勝景君鹿島櫻巷君共編	全一册洋並綴 小判四〇八頁	正價參拾五錢 郵税六錢
●女子衛生學	海軍大軍醫隈岐敬治郎君譯	全一册洋並綴 小判三二〇頁	正價參拾錢 郵税四錢
●育兒と衛生	西田敬止君著 木版刷錦繪及寫眞版挿入	全一册洋並綴 大判二四四頁	正價貳拾五錢 郵税六錢
●婦女家庭訓	華族女學校學監下田歌子女史著	全一册和並綴 大判三六二頁	正價參拾五錢 郵税八錢
●泰西所見 家庭教育	同	全一册和並綴 大判二五二頁	正價參拾五錢 郵税六錢

●家庭の心得	華族女學校學監下田歌子女史著	全一册和並綴 大判二六八頁	正價參拾五錢 郵税六錢
●はゝのつとめ	醫學博士三島通良君著	全一册洋布上綴 大判三一二頁	正價七拾五錢 郵税拾錢
●母親の心得	華族女學校學監下田歌子女史著	全一册和並綴 大判二六八頁	正價參拾五錢 郵税八錢
●學校の心得	同	全一册和並綴 大判二三〇頁	正價參拾五錢 郵税六錢
●女學生訓	文學士大町桂月君著	全一册洋並綴 小判二五六頁	正價貳拾五錢 郵税四錢
●女學生の栞	松原岩五郎君著	全一册洋並綴 大判三三〇頁	正價參拾五錢 郵税六錢
●當世交際社會	博文館編輯局編 石版彩色刷及寫眞銅版數葉挿入	全一册洋並綴 大判二〇八頁	正價貳拾錢 郵税貳錢
●女訓評釋	千河岸櫻所君評釋	全一册和上綴 大判四一六頁	正價六拾錢 郵税拾錢
●繪入下女讀本	村井弦齋君著	全一册洋並綴 大判一一〇頁	正價拾五錢 郵税四錢
●日本女子立志編	千河岸櫻所君編 木版錦繪口繪挿入	全二册和並綴 大判七三六頁	正價一册六拾錢 郵税一册八錢
●帝國女子修身鑑	東京女學館講師西田敬止君著	全四册和並綴 大判四二四頁	正價一册拾錢 郵税一册貳錢
●外國少女鑑	華族女學校學監下田歌子女史著	全一册和並綴 大判二三八頁	正價參拾五錢 郵税六錢
●內國少女鑑	同	全一册和並綴 大判二二八頁	正價參拾五錢 郵税六錢
●庭訓お伽噺	華族女學校學監下田歌子女史著	全一册和並綴 大判二三四頁	正價參拾五錢 郵税六錢

女(後付の五)



巖谷小波君編　每編有名和洋畫伯挿繪入

●少年日露戰史

附錄　軍國讀本

全部十六册　洋裝並製 大判美本

此戰史は今の少年の爲め斗りにあらず今から後の少年の爲めに帝國空前の大事業を永遠に記臆させる爲めに書いたもの附錄の讀本は此戰爭に干係した美談逸事を平易に書いて愛國の好範を永く少年に示すための本である

巖谷小波君編

- ●少年日露戰史 開戰の巻　全一册洋並綴 大判一〇六頁　正價拾貳錢 郵税四錢
- ●少年日露戰史 決死隊の巻　全一册洋並綴 大判一〇四頁　正價拾貳錢 郵税四錢
- ●少年日露戰史 九連城の巻　全一册洋並綴 大判一〇二頁　正價拾貳錢 郵税四錢
- ●少年日露戰史 南山の巻　全一册洋並綴 大判一二〇頁　正價拾貳錢 郵税四錢
- ●少年日露戰史 得利寺の巻　全一册洋並綴 大判一〇〇頁　正價拾貳錢 郵税四錢
- ●少年日露戰史 摩天嶺の巻　全一册洋並綴 大判一一〇頁　正價拾貳錢 郵税四錢
- ●少年日露戰史 大石橋の巻　全一册洋並綴 大判一〇〇頁　正價拾貳錢 郵税四錢
- ●少年日露戰史 黃海の巻　全一册洋並綴 大判一〇四頁　正價拾貳錢 郵税四錢
- ●少年日露戰史 遼陽の巻　全一册洋並綴 大判一〇四頁　正價拾貳錢 郵税四錢
- ●少年日露戰史 沙河の巻　全一册洋並綴 大判一〇四頁　正價拾貳錢 郵税四錢
- ●少年日露戰史 旅順の巻　全一册洋並綴 大判一〇四頁　正價拾貳錢 郵税四錢
- ●少年日露戰史 奉天の巻　上下二册洋並綴 大判二一二頁　正價一册拾貳錢 郵税一册四錢
- ●少年日露戰史 日本海の巻　全一册洋並綴 大判一〇六頁　正價拾貳錢 郵税四錢
- ●少年日露戰史 樺太の巻　全一册洋並綴 大判　頁　正價拾貳錢 郵税四錢
- ●少年日露戰史 講和の巻　全一册洋並綴 大判　頁　正價拾貳錢 郵税四錢

石井研堂君著　每編有名和洋畫伯挿繪

●少年工藝文庫

全廿四册洋並綴 正價一册拾五錢 大判美本 郵税一册四錢宛

本書は各種とも皆專門の學者當事者によりて質議し其補助を得て完成せしものゆへ世の杜選の者とは異なれり今日工業日進の時なれば少年たる者大に此の資料に依りて理科工業の實効を研究せざるべからず其目左の如し

第一編 ●鐵道の巻
第二編 ●水道の巻
第三編 ●瓦斯の巻
第四編 ●寫眞の巻
第五編 ●電話の巻
第六編 ●硝子の巻
第七編 ●紡績の巻
第八編 ●活版の巻
第九編 ●汽船の巻
第十編 ●製紙の巻
第十一編 ●銅山の巻
第十二編 ●電燈の巻

第十三編 ●陶器の巻
第十四編 ●漆器の巻
第十五編 ●時計の巻
第十六編 ●マッチの巻
第十七編 ●織物の巻
第十八編 ●染色の巻
第十九編 ●煙草の巻
第二十編 ●砂糖の巻
第廿一編 ●釀造の巻
第廿二編 ●石油の巻
第廿三編 ●機械の巻
第廿四編 ●建築の巻

少年世界編輯部（彩色各國徽章其他口繪十數葉挿入）

●明治少年節用

全一冊洋布上綴 新形中判六百頁 正價七拾五錢 郵税拾貳錢

大和田建樹君著 每編有名畫伯密畫數個挿入

●日本歷史譚

全部廿四冊洋並綴大判美本 正價一冊八錢 郵税一冊四錢宛

第一編 日本開闢
第二編 畝傍山
第三編 三韓征伐
第四編 聖徳太子
第五編 菅公
第六編 九郎判官

第七編 曾我兄弟
第八編 惡七兵衛
第九編 相模太郎
第十編 楠公
第十一編 日蓮
第十二編 大塔宮

第十三編 豐太閤
第十四編 七本槍
第十五編 關ケ原
第十六編 水戸黄門
第十七編 四十七士
第十八編 平田篤胤

第十九編 櫻田門外
第二十編 七卿落
第廿一編 彰義隊
第廿二編 城山
第廿三編 平壤
第廿四編 威海衛

落合直文君、池邊義象君合著 畫伯數名密畫入

●家庭教育歷史讀本 花の白雲

全一冊洋並綴 大判一九二頁 正價拾八錢 郵税四錢

目次（●日本武尊の事蹟 ●曾我兄弟の復讐 ●神功皇后の事蹟 ●護良親王の事蹟 ●和氣清麿の事蹟 ●菅原道眞の事蹟

落合直文君、池邊義象君合著 畫伯數名密畫入

●家庭教育歷史讀本 卯花月夜

全一冊洋並綴 大判二一四頁 正價拾八錢 郵税四錢

目次（●源義家の事蹟 ●佐々木高綱事蹟 ●那須與一の事蹟 ●平重盛の事蹟 ●俊寛僧都の事蹟 ●袈裟御前の事蹟 ●靜御前の事蹟 ●忠興夫人の事蹟

落合直文君、池邊義象君合著 畫伯數名密畫入

●家庭教育歷史讀本 紅葉の錦

全一冊洋並綴 大判二一〇頁 正價拾八錢 郵税四錢

目次（●平敦盛の事蹟 ●阿新丸の事蹟 ●森蘭丸の事蹟 ●藤原師賢の事蹟 ●兒島高徳の事蹟 ●楠正成の事蹟 ●加藤清正の事蹟

落合直文君、池邊義象君合著 畫伯數名密畫入

●家庭教育歷史讀本 枯野の雪

全一冊洋並綴 大判二三六頁 正價拾八錢 郵税四錢

目次（●北畠親房の事蹟 ●新田義貞の事蹟 ●楠正行の事蹟 ●赤穗義士の事蹟 ●林子平の事蹟 ●高山彦九郎事蹟

石井研堂君著 有名畫家密畫十數個挿入

●理科十二ヶ月

全部十二冊 洋並綴大判 正價一冊拾錢 郵税一冊貳錢宛

女（後付の七）

第一編 新風船
第二編 雪達磨
第三編 花の錦
第四編 汐干狩
第五編 植物園
第六編 蜻蛉祭
第七編 游泳臺
第八編 富士詣
第九編 暴風雨
第十編 銃獵者
第十一編 幻燈會
第十二編 歸省錄

● 少年動物畫談　石川博士校閲　武田櫻桃君 木村小舟君共編　和田英作君挿畫　全一册洋装 大判二〇四頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

● 日曜の植物採集　池田米太郎君著　全一册洋装 小判一二四頁　正價拾五錢 郵税貳錢

● 日曜の昆蟲採集　池田米太郎君著　石版密畫四葉挿入　全一册洋装 小判一三六頁　正價拾五錢 郵税四錢

● 春夏秋冬 理科手引草　木村小舟君著　全一册洋装 大判三二四頁　正價參拾八錢 郵税八錢

● 理科春秋　木村小舟君著　全一册洋装 大判一八六頁　正價貳拾錢 郵税四錢

● 寫眞及幻燈　藥學得業士金澤巖君著　寫眞版挿入　全一册洋装 大判二四〇頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

● 實驗應用 寫眞術　橋本奇策君著　全一册洋装 小判一八〇頁　正價拾錢 郵税貳錢

● 夜學讀本　堀江秀雄君著　全一册洋装 大判一九二頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

● 繪入小僧讀本　村井弦齋君著　全一册洋装 大判七〇頁　正價拾貳錢 郵税四錢

● 少年商業文庫 商業の栞　天城安政君著　全一册洋装 大判一三二頁　正價拾五錢 郵税四錢

● 少年商業文庫 簿記の栞　全一册洋装 大判一一四頁　正價拾五錢 郵税四錢

● 少年商業文庫 商業算の話　全一册洋装 大判一一八頁　正價拾五錢 郵税四錢

● 少年商業文庫 勤儉貯蓄　全一册洋装 大判一三二頁　正價拾五錢 郵税四錢

● 少年商業文庫 商人修身訓　全一册洋装 大判一二二頁　正價拾五錢 郵税四錢

● 少年商業文庫 世界金傑譚　全一册洋装 大判一三七頁　正價拾五錢 郵税四錢

● 少年文學 大石良雄　原抱一庵主人君著　木版口繪挿入　全一册和装 中判一二〇頁　正價拾貳錢 郵税貳錢

● 少年文學 高山彦九郎　村上浪六君著　木版口繪挿入　全一册和装 中判一二六頁　正價拾貳錢 郵税貳錢

● 少年文學 紀文大盡　村井弦齋君著　木版口繪挿入　全一册和装 中判一五六頁　正價拾貳錢 郵税貳錢

● 少年文學 二宮尊徳翁　幸田露伴君著　木版口繪挿入　全一册和装 大判一一四頁　正價拾貳錢 郵税貳錢

● 少年文學 近江聖人　村井弦齋君著　木版口繪挿入　全一册和装 中判一四四頁　正價拾貳錢 郵税貳錢

● 少年文學 河村瑞賢　高橋太華君著　木版口繪挿入　全一册和装 中判一三六頁　正價拾貳錢 郵税貳錢

● 少年文學 賴山陽　三宅青軒君著　木版口繪挿入　全一册和装 中判一一六頁　正價拾貳錢 郵税貳錢

● 少年文學 親の恩　宮崎三昧君著　木版口繪挿入　全一册和装 中判一二二頁　正價拾貳錢 郵税貳錢

● 少年文學 二人むく助　尾崎紅葉君著　木版口繪挿入　全一册和装 中判一一四頁　正價拾貳錢 郵税貳錢

● 繪本 孫子童觀抄　中村經年君編　全十三册 和裝大本　正價壹圓八拾錢 小包送拾五錢

女（後付の八）

巖谷小波君著

日本昔噺

有名畫家密畫十數個挿入

- 一編 桃太郎
- 二編 玉の井
- 三編 猿蟹合戰
- 四編 松山鏡
- 五編 花咲爺
- 六編 大江山
- 七編 舌切雀
- 八編 俵藤太
- 九編 かち〳〵山
- 十編 瘤取
- 十一編 物臭太郎
- 十二編 文福茶釜
- 十三編 八頭の大蛇
- 十四編 兎と鰐
- 十五編 羅生門
- 十六編 猿と海月
- 十七編 安達ケ原
- 十八編 浦島太郎
- 十九編 一寸法師
- 二十編 金太郎
- 廿一編 雲雀山
- 廿二編 猫の草紙
- 廿三編 牛若丸
- 廿四編 鼠の嫁入

全廿四冊
洋並綴大判
正價一冊五錢
郵税一冊貳錢宛

巖谷小波君著

日本お伽噺

有名密畫十數個挿入

- 一編 八咫烏
- 二編 田村將軍
- 三編 玉取
- 四編 源三位
- 五編 八幡太郎
- 六編 武藏坊
- 七編 一休和尚
- 八編 東照宮
- 九編 姨捨山
- 十編 川中島

全部廿四冊
洋並綴大判
正價一冊六錢
郵税一冊貳錢宛

巖谷小波君編

幼年讀本

毎卷名家密畫挿入

- 十一編 玄武門
- 十二編 白虎隊
- 十三編 鎭西八郎
- 十四編 最明寺
- 十五編 朝比奈
- 十六編 櫻井驛
- 十七編 草薙劍
- 十八編 日吉丸
- 十九編 文覺上人
- 二十編 和唐内
- 廿一編 高千穗
- 廿二編 鬼童丸
- 廿三編 熊本城
- 廿四編 宇治川

- 日本歴史
- 日本地理
- 日本立志談
- 世界歴史
- 世界地理
- 世界立志談

▲世界地理 世界立志談に限り賣價拾錢

全六冊
洋並綴大判
正價一冊拾五錢
郵税一冊四錢宛

巖谷小波君編

明治お伽噺

毎卷名家密畫挿入

- 第壹編 お伽十番
- 第貳編 お伽三幅對
- 第參編 新八犬傳(上)
- 第四編 新八犬傳(下)
- 第五編 お伽四天王(上)
- 第六編 お伽四天王(下)
- 第七編 新伊蘇普物語
- 第八編 お伽十二支(上)
- 第九編 お伽十二支(下)
- 第十編 お伽洋行船(上)
- 第十一編 お伽洋行船(下)
- 第十二編 お伽立志噺

全部十二冊
洋並綴大判
正價一冊拾貳錢
郵税一冊四錢宛

女(後付の九)

武田櫻桃君 木村小舟君共編

●教訓繪ばなし

第壹編●家庭の巻
第貳編●お噺の巻
第參編●海軍の巻
第四編●陸軍の巻
第五編●動物の巻
第六編●植物の巻
第七編●ポンチの巻
第八編●遊戯の巻
第九編●地理の巻
第十編●歴史の巻
第十一編●立志の巻
第十二編●冒険の巻

第十三編●修身の巻
第十四編●お伽の巻
第十五編●戰爭の巻
第十六編●逸話の巻
第十七編●奇談の巻
第十八編●娯樂の巻
第十九編●理科の巻
第二十編●博物の巻
第廿一編●發明の巻
第廿二編●衛生の巻
第廿三編●尚武の巻
第廿四編●談話の巻

全部廿四册
洋並綴大判
正價一册五錢
郵税一册貳錢宛

巖谷小波君編

●世界お伽噺

第一編●世界の始
第二編●五色の石
第三編●珊瑚島
第四編●魔法博士
第五編●無人島大王
第六編●鬼婆と少女
第七編●法螺先生

第八編●二人王子
第九編●小人島
第十編●孫悟空
第十一編●驢馬姫
第十二編●大國人
第十三編●豫言書
第十四編●王城乘取

全部百册
洋裝大判
正價一册金八錢
郵税一册貳錢宛

第十五編●續法螺先生
第十六編●猿智惠小僧
第十七編●酋長征伐
第十八編●夢の三郎
第十九編●鷺の踊
第二十編●光明姫
第廿一編●鷄の使
第廿二編●日の車
第廿三編●三人片輪
第廿四編●白い鳥
第廿五編●消炭太郎
第廿六編●十二王妃
第廿七編●狐の裁判（上）
第廿八編●狐の裁判（下）
第廿九編●奇體の洋燈
第三十編●獵師の大臣
第卅一編●九重の塔
第卅二編●虹の橋
第卅三編●魔法の卵
第卅四編●岩の船
第卅五編●鐵の王子
第卅六編●鐵の猿
第卅七編●浮かれ胡弓
第卅八編●豆の王
第卅九編●三つの難題
第四十編●德利の長者
第四十一編●梨の殿樣
第四十二編●黑足の小僧
第四十三編●黄金の船
第四十四編●幸福の花
第四十五編●大洪水
第四十六編●刀三本

第四十七編●石の行方
第四十八編●手無し姫
第四十九編●啞の女王
第五十編●骸骨島
第五十一編●三筋の金髪
第五十二編●鬼大名
第五十三編●魔法學校
第五十四編●鶯王子
第五十五編●朝星夕星
第五十六編●法螺くらべ
第五十七編●指環の魔力
第五十八編●双子草紙
第五十九編●鬼だまし
第六十編●二人半助
第六十一編●病魔降伏
第六十二編●金馬將軍
第六十三編●熊娘
第六十四編●龍宮の使者
第六十五編●森の女
第六十六編●日の罰
第六十七編●うかれ笛
第六十八編●活水死水
第六十九編●光の劍
第七十編●木兎太郎
第七十一編●少年國
第七十二編●小人鼻助
第七十三編●龜の智惠
第七十四編●世は情
第七十五編●變身術
第七十六編●薔薇姫
第七十七編●地獄巡り
第七十八編●九番目の人形

史傳地理書類



▲歴史傳記書類

東京帝國大學教授文學博士萩野由之君編
●**大日本通史**（全三冊…中下卷近刊）
上卷 大判一〇〇〇頁 脊皮上綴 正價壹圓五拾錢 小包送拾五錢

法學博士有賀長雄君著
●**帝國史略**
全一冊 大判一〇三〇頁 脊皮上綴 正價壹圓參拾錢 小包送拾五錢

落合直文君 池邊義象君共著
●**新撰日本外史** 畵伯數名密畵挿入
全一冊 大判一一〇二頁 脊皮上綴 正價壹圓貳拾錢 小包送拾五錢

文學博士萩野由之君著
●**中等教育日本歴史** 沿革地圖挿入（文部省檢定濟）
上下二冊 中判六七五頁 脊皮上綴 正價各五拾五錢 郵稅各八錢

文學士木寺柳次郎君著
●**日本歴史**
全一冊 大判三七六頁 洋並綴 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

松井柏軒君著
●**新撰大日本帝國史**
全一冊 大判五六四頁 洋並綴 正價四拾錢 郵稅拾貳錢

文學博士栗田寛君校閲 增田于信君著
●**新撰日本小歴史** 西洋木版畵挿入
全一冊 大判二一七頁 洋並綴 正價拾五錢 郵稅六錢

足立栗園君著
●**通俗日本歴史**
全一冊 大判三三四頁 洋並綴 正價貳拾五錢 郵稅八錢

坪谷善四郎君著
●**通俗明治歴史**
全一冊 大判三五〇頁 洋並綴 正價貳拾五錢 郵稅八錢

岸上操君著
●**通俗德川十五代史**
全一冊 大判三三四頁 洋裝並綴 正價貳拾錢 郵稅八錢

川崎紫山君著
●**增補西南戰史**
全一冊 大判一三五〇 洋布上綴 實價八拾錢 小包送貳拾錢

陸軍大將野津道貫君序 藤野房次郎君著
●**平壤包圍攻擊** 寫眞版挿入
全一冊 大判七八二頁 洋布上綴 正價七拾錢 小包送拾五錢

海軍大將伊東祐亨君題辭 平田勝馬君著
●**黃海大海戰** 寫眞版挿入
全一冊 大判八三八頁 洋布上綴 正價九拾錢 小包送貳拾錢

文學士久保天隨君著
●**東洋通史** 全部十二冊割引金五圓 小包送五拾錢
全部十二冊和裝 大判一冊三百頁 正價一冊五拾錢 郵稅一冊八錢

●第一卷より第二卷……………漢族生育時代
三皇五帝の世より楚漢の角逐迄

●第三卷より第六卷……………漢族繁榮時代
前漢の世より唐の中世迄

●第七卷より第九卷……………蒙古優勢時代
唐の末世より朱元間の人文迄

●第拾卷より第拾貳卷……………歐人東漸時代
明の初世より最近東洋事局迄

女（後付の一二）

文學士木寺柳次郎君著
中等教育 **東洋歷史** 沿革地圖及密畫挿入（文部省檢定濟）
全一册脊皮上綴 正價八拾錢
大判二八八頁 郵税拾貳錢

文學士幸田成友君著
東洋歷史 ▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册洋並綴 正價四拾錢
大判三二四頁 郵税八錢

法學士須崎芳三郎君著
現代露西亞 ▲特製本 洋布上綴 銅版地圖挿入 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册洋並綴 正價四拾錢
大判四二六頁 郵税八錢

法學士須崎芳三郎君著
露國侵略史 ▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册洋並綴 正價四拾錢
大判二七八頁 郵税八錢

文學士木寺柳次郎君著
中等教育 **西洋歷史** 沿革地圖及密畫挿入（文部省檢定濟）
全一册脊皮上綴 正價七拾錢
大判二六六頁 郵税拾貳錢

文學士吉國藤吉君著
西洋歷史 ▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册洋並綴 正價四拾錢
大判三四八頁 郵税八錢

文學士（史學專攻）阪本健一君著
世界史 上卷
洋裝脊皮上綴 正價壹圓六拾錢
大判一〇八〇頁 小包送拾五錢

同
同 下卷
洋裝脊皮上綴 正價貳圓
大判一四五四頁 小包送貳拾錢

長谷川天溪君著
通俗世界歷史
全一册洋並綴 正價貳拾五錢
大判三三四頁 郵税八錢

文學博士高山林次郎君著
世界文明史 ▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册洋並綴 正價四拾錢
大判三七六頁 郵税八錢

文學士大町桂月君著
日本文明史 ▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册洋並綴 正價四拾錢
大判三〇二頁 郵税八錢

文學士白河次郎君 國府種德君共著
支那文明史 ▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册洋並綴 正價四拾錢
大判三二六頁 郵税八錢

文學士久保天隨君著
朝鮮史 ▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册洋裝 正價四拾錢
大判三三六頁 郵税八錢

國友重章君閲 恒屋盛服君著
朝鮮開化史 地圖挿入
全一册洋布上綴 正價壹圓
大判五六六頁 郵税拾四錢

文學士阪本健一君著
日本風俗史 密畫挿入 ▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册洋並綴 正價四拾錢
大判三四二頁 郵税八錢

重田勘次郎君著
世界風俗志（各國風俗寫眞廿三個入）
全一册洋並綴 正價五拾錢
中判四六三頁 郵税八錢

法學士山内正瞭君著
世界殖民史 ▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册洋並綴 正價四拾錢
中判三〇四頁 郵税八錢

文學博士萩野由之君編述
中等教育 **日本歷史要解**
全一册洋布上綴 正價五拾錢
中判四二四頁 郵税六錢

宮田修君著
新撰 **日本歷史問答**
全一册紙皮上綴 正價貳拾錢
小判二二八頁 郵税四錢

松原岩五郎君著
新撰 **東洋歷史問答**
全一册紙皮上綴 正價貳拾錢
小判二三六頁 郵税四錢

長谷川誠也君著
新撰 **西洋歷史問答**
全一册紙皮上綴 正價貳拾錢
小判二四〇頁 郵税四錢

法學博士阪谷芳郎君編
青淵先生六十年史 ▲一名近世實業發達史
全二册洋布上綴 賣價壹圓五拾錢
大判二二二〇頁 小包送参拾錢

文學博士前田慧雲君述
親鸞聖人
全一册大和綴 正價貳拾五錢
大判一二五頁 郵税四錢

博文館編輯局校訂
●佛教各宗高僧實傳　全一册脊皮上綴 中判一〇五〇頁 正價六拾錢 郵稅拾四錢

江見水蔭君校訂
●佛教各宗續高僧實傳　全一册脊皮上綴 中判一〇二〇頁 正價六拾錢 郵稅拾四錢

太陽評論記者 烏谷部春汀君著
●明治人物小觀　全一册紙皮上綴 中判四二八頁 正價參拾八錢 郵稅八錢

長田秋濤君著
●世界富豪の表裏　全一册洋並綴 大判二六二頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

太陽評論記者 烏谷部春汀君著
●明治人物評論　全一册紙皮上綴 小判四二三頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

同
●續明治人物評論　全一册紙皮上綴 小判四四八頁 正價參拾錢 郵稅六錢

●少年讀本　洋裝大判全部五十册 每册約百卅頁密圖數多入
正價一册拾參錢 全部金五圓拾錢 郵稅一册四錢

少年讀本全部五十卷皆是れ德川治世の能臣幕末の俊傑ならざるはなし、此五十の偉傳が每編讀み切りとして當世五十の知名文士に依りて遺憾なく描寫せらる、眞に是れ少年理想の良模範青年達志の好指南たらざるはなし。

●世界歷史譚　洋裝大判全部三十六册 每册約百卅頁密圖數多入
正價一册拾參錢 全部參圓八拾錢 郵稅一册四錢

世界歷史譚は世界歷史の各時代と其國民を代表するに足るべき偉人傑の傳記なり、著者は何れも知名能文の學士なれば、事實の正確にして評論の妥當なる云ふまでもなく、文章亦簡明雅馴にして何人も興味を以て解し得べし。

松井柏軒君著
●上杉謙信　全一册紙皮上綴 小判一三四頁 正價貳拾錢 郵稅四錢

慶應義塾教授菅綠隆君著
●カーネギー　全一册紙上皮綴 中判一五四頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

▲地理紀行書類

理學士山崎直方君 理學士佐藤傳藏君共著
●大日本地誌　全部拾册大判脊皮上綴 總紙數約一千頁

全部を十部に分ち、其地形地勢より說き起して、歷史上の沿革、產業の盛衰、行政、司法、宗教、教育、軍事、交通、等に至る迄、精査細述、漏す所なし、蓋し本邦地理書中の巨擘たるを疑はず、

第壹卷 關東　都市彩色地圖拾葉 寫眞銅版貳百餘圖 紙數九百三十頁 ◎正價貳圓五拾錢 ◎小包送料拾五錢
相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野、伊豆七島及小笠原島

第貳卷 奧羽　石版彩色地圖八葉 寫眞銅版百七十圖 紙數九百六十頁 ◎正價貳圓五拾錢 ◎小包送料拾五錢
磐城、岩代、陸前、陸中、陸奧、羽前、羽後の七ヶ國

第三卷 中部　石版彩色地圖九葉 寫眞銅版二百圖 紙數千五十餘頁 ◎正價貳圓五拾錢 ◎小包送料貳拾錢
尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、美濃、飛驒、信濃、

第四卷＝近畿

山城、大和、河內、和泉、攝津、伊賀、伊勢、近江、丹波、丹後、播磨、紀伊、淡路、

石版彩色地圖拾葉　寫眞銅版九拾四圖　紙數千三百餘頁　◎正價三圓　◎小包送料貳拾錢

理學士佐藤傳藏君著
●日本新地理　▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢
全一册洋並綴　大判三一四頁　正價四拾錢　郵税八錢

大和田建樹君著
●通俗日本地理　全一册洋並綴　大判二九六頁　正價參拾錢　郵税八錢

上村左川君著
●新撰日本地理問答　全一册紙皮上綴　小判二三八頁　正價貳拾錢　郵税四錢

野崎左文君　田山花袋君　島田定知君　藤本藤陰君共著
●日本名勝地誌　全十二册洋並綴　中判五一〇〇頁　正價一册參拾錢　郵税一册六錢

八木奘三郎君著
●學生必携修學旅行案內（關東の部）　全一册洋布上綴　三六判六九二頁　正價四拾五錢　郵税八錢

理學士佐藤傳藏君著
●中等教育地理學教科書（上卷日本ノ部）（下卷外國ノ部）　全二册脊皮上綴　大判四二四頁　正價一册五拾錢　郵税一册八錢

理學士佐藤傳藏君著
●萬國新地理　▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢
全一册洋並綴　大判三三八頁　正價四拾錢　郵税八錢

澁江保君著
●通俗世界地理　全一册洋並綴　大判三四〇頁　正價參拾錢　郵税八錢

武田櫻桃四郎君著
●新撰世界地理問答　全一册紙皮上綴　大判二八二頁　正價貳拾錢　郵税四錢

理學士吉田弟彥君著
●地文學　▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢
全一册洋並綴　大判三二八頁　正價四拾錢　郵税八錢

法學士山本信博君著
●政治地理學　▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢
全一册洋並綴　大判三三〇頁　正價四拾錢　郵税八錢

理學士佐藤傳藏君著
●地質學　▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢
全一册洋並綴　大判三三六頁　正價四拾錢　郵税八錢

理學士佐藤傳藏君著
●中等教育日本地圖　統計表及寫眞版三十二葉入　全一册洋上綴　大判七〇頁　正價四拾五錢　郵税八錢

理學士佐藤傳藏君著
●中等教育萬國地圖　統計表及寫眞版四十葉挿入　全一册洋上綴　大判八〇頁　正價六拾錢　郵税八錢

理學士吉田弟彥君著
●改訂日本商業地圖　大判縱一尺二寸橫八寸八分附錄重要統計四十圖　全一册洋上綴　大地圖十一圖　正價壹圓　小包料拾五錢

法學士勝部國臣君著
●清國商業地理　▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢
全一册洋並綴　大判三五八頁　正價四拾錢　郵税八錢

文學士田淵友彥君著
●韓國新地理　▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢
全一册洋並綴　大判三五〇頁　正價四拾錢　郵税八錢

松永聽劍君編纂
●樺太及勘察加　全一册洋並綴　大判三六〇頁　正價五拾錢　郵税八錢

博文館編輯局主幹坪谷善四郎君著
●日本漫遊案內（上下共）（上下）府縣廳所在地銅版圖二十餘頁、風景寫眞八十餘圖、全國兩半部彩色刷大地圖添附　▲上下共製本既成發賣
全二册洋布上綴頗美本　中判一三〇〇頁　正價一册壹圓　郵税一册拾錢

野崎左文君　田山花袋君共著
●改訂增補漫遊案內　全一册洋布上綴　小判六二六頁　正價五拾錢　郵税八錢

大橋乙羽君著
●增補千山萬水　寫眞版二十八葉挿入　全一册洋布上綴　小判七〇二頁　正價五拾錢　郵税拾錢

女（後付の一四）

- 大橋乙羽君著　寫眞版二十八葉挿入　●續千山萬水　全一册洋布上綴　小判　六五〇頁　正價五拾錢　郵稅拾錢
- 文學士久保天隨君著　●檜木笠　全一册紙皮上綴　小判　五〇〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢
- 大町桂月君著　寫眞版八葉挿入　●一蓑一笠　全一册紙皮上綴　小判　三七六頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- 竹越與三郎君著　●臺灣統治志　全一册洋並綴　大判　五七七頁　正價六拾五錢　郵稅拾貳錢
- 河口慧海君著　石版地圖及寫眞銅版挿入　●世界の秘密國西藏旅行記　全二册洋布上綴　大判　八九〇頁　正價一册壹圓　郵稅一册拾貳錢
- 巖谷小波君著　寫眞銅版數葉挿入　●小波洋行土產　全二册洋布上綴　中判新形八四〇頁　正價一册一圓二拾錢　郵稅一册拾貳錢
- 大橋乙羽君著　彩色美麗寫眞版及木版密畫挿入　●歐山米水　全一册特別上綴　大判　一七〇頁　正價壹圓五拾錢　郵稅八錢
- 大橋乙羽君著　寫眞版挿入　●歐米小觀　全一册洋布上綴　小判　二六二頁　正價四拾錢　郵稅四錢
- 鎌田榮吉君著　寫眞版挿入　●歐米漫遊雜記　全一册紙皮上綴　小判　四二四頁　正價四拾錢　郵稅六錢
- 永田榮雄君著　寫眞版挿入　●大英國漫遊實記　全一册紙皮上綴　小判　七〇〇頁　正價七拾錢　郵稅拾錢
- 松井廣吉君著　寫眞版十六枚挿入　●米國漫遊雜記　全一册紙皮上綴　小判　二八六頁　正價參拾八錢　郵稅六錢
- 安部磯雄君著　●北米の新日本　全一册洋並綴　中判　二二三頁　正價參拾五錢　郵稅四錢
- 飯島榮太郎君著　寫眞版挿入　●米國渡航案內　全一册紙皮上綴　小判　三七二頁　正價四拾錢　郵稅六錢

- 中央新聞從軍記者岡田雄一郎君著　●滿洲起業案內　全一册紙皮上綴　三六判　二六六頁　正價參拾錢　郵稅四錢
- 西園寺侯爵題字・白岩子雲君校　安井正太郎君編纂　●湖南　全一册洋並綴　大判　四二八頁　正價壹圓　小包送拾五錢
- 木村芳五郎君　井上胤文君共著　●最新正確布哇渡航案內　全一册洋並綴　大判　二三六頁　正價參拾八錢　郵稅六錢
- 田山花袋君著　●第二軍從征日記　全一册洋並綴　大判　四八〇頁　正價六拾錢　郵稅拾貳錢
- 石倉重繼君著　寫眞銅版三十四葉入　●本派本願寺名所圖會　全一册洋並綴　大判　三九四頁　正價六拾錢　郵稅拾錢
- 石倉重繼君著　石版密畫及寫眞銅版十六葉入　●大谷派本願寺名所圖會　全一册洋並綴　大判　二二八頁　正價四拾錢　郵稅八錢
- 石倉重繼君著　寫眞銅版十六葉挿入　●佛光寺名所圖會　全一册洋並綴　大判　一〇八頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢
- 石倉重繼君著　寫眞銅版二十二葉挿入　●日蓮宗各本山名所圖會　全一册洋並綴　大判　三五六頁　正價五拾錢　郵稅拾錢
- 石倉翠葉君著　寫眞銅版廿三葉挿入　●成田山名所圖會　全一册洋並綴　大判　一五八頁　正價參拾五錢　郵稅六錢
- 石倉翠葉君著　寫眞銅版數多挿入　●善光寺名所圖會　全一册洋並綴　大判　二七六頁　正價四拾五錢　郵稅八錢
- 高野山座主原心猛大僧正題辭　石倉翠葉君著　寫眞銅版三十餘枚挿入　●高野山名所圖會　全一册洋並綴　大判　三四二頁　正價六拾錢　郵稅拾錢
- 石倉翠葉君著　寫眞銅版二十四葉挿入　●日光名所圖會　全一册洋並綴　大判　五一〇頁　正價六拾五錢　郵稅拾貳錢

文學及作文書類

● 文學博士高山林次郎君著　姉崎博士　齋藤學士共輯（全部六卷）
樗牛全集第一卷　美學及美術史　全一冊洋布上綴　大判五五二頁　正價壹圓五拾錢　小包送拾五錢

● 同　樗牛全集第二卷　文藝及史傳上　全一冊洋布上綴　大判一〇〇〇頁　正價壹圓五拾錢　小包送貳拾錢

● 同　樗牛全集第三卷　文藝及史傳下　全一冊洋布上綴　大判七七〇頁　正價壹圓五拾錢　小包送拾五錢

● 同　樗牛全集第四卷　時論及思索　洋布上綴美本　大判一一一八頁　正價壹圓五拾錢　小包送貳拾錢

● 奥村信太郎君著　日本文學汎論　全一冊洋並綴　大判三二六頁　賣價貳拾錢　郵稅八錢

● 文學士久保天隨君著　日本儒學史　全一冊洋並綴　大判二九二頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

● 文學士笹川臨風君著　支那文學史　全一冊洋並綴　大判三二二頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

● 文學士小川銀次郎君編　世界美術史上下　全二冊洋並綴　大判六四八頁　正價一冊四拾錢　郵稅一冊八錢
▲特製本　洋布上綴　正價一冊五拾五錢　郵稅一冊拾錢

● 文學士小川銀次郎君著　近世美術史　全一冊洋並綴　大判三二八頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅一冊拾錢

● 文學博士高山林次郎君著　時代管見　全一冊紙皮上綴　小判五二〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢

● 文學博士　高山林次郎君著　文藝評論　全一冊紙皮上綴　小判四八〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢

● [illegible]田不知庵君著　文藝小品　全一冊紙皮上綴　小判六一〇頁　賣價貳拾五錢　郵稅六錢

● 國府犀東君著　龍吹鶴語　全一冊紙皮上綴　小判二六四頁　賣價拾五錢　郵稅四錢

● 文學士大町桂月君著　大絃小絃　全一冊紙皮上綴　小判四二〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢

● 齋藤綠雨君著　みだれ箱　全一冊紙皮上綴　小判三九八頁　正價貳拾八錢　郵稅四錢

● 齋藤綠雨君著　あられ酒　全一冊紙皮上綴　小判四六五頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

● 與謝野鐵幹君作　うもれ木　全一冊紙皮上綴　小判二六八頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢

● 石井研堂君著　雅俗三四　全一冊紙皮上綴　小判二〇〇頁　賣價拾五錢　郵稅六錢

● 紫山川崎三郎君著　古人今人執是執非　風雲月露大珠小珠　小文章　全一冊紙皮上綴　小判三〇四頁　賣價拾錢　郵稅四錢

●雨絲風片　文學士笹川臨風君著　全一册紙皮上製　小判二三六頁　實價拾五錢　郵稅四錢

●國民作文軌範　文學博士重野安繹君序　石崎篁園君編述　全一册紙皮上製　三六判五六〇頁　正價四拾錢　郵稅六錢

●新撰作文問答　西村眞次君編　全一册紙皮上製　小判二四四頁　正價貳拾錢　郵稅四錢

●作文寶典　大和田建樹君著　全一册總皮上製　中判一七二〇頁　正價貳圓貳拾錢　小包送料拾五錢

●袖珍實用作文寶典　大和田建樹君　百東持中君編　全一册洋布上製　小判一〇二〇頁　正價六拾五錢　郵稅六錢

●作文熟語字典　全一册洋布上製　小判九八〇頁　正價八拾錢　郵稅拾錢

●中等教育作文法　文學博士萩野由之君著　全一册洋並製　中判五〇〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●通俗文章學　宮川鐵次郎君著　全一册洋並製　大判三〇〇頁　正價參拾錢　郵稅八錢

●記事論說文範　上村左川君編　美麗寫眞版挿入　全一册洋並製　大判二四四頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●女子作文の栞　華族女學校學監下田歌子女史著　全一册和並製　大判二三六頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

●作文自在　岸上操君編　彩色木版寫眞銅版挿入　全一册洋並製　大判二七四頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●作文組立法　大和田建樹君著　全一册洋並製　大判一六九頁　正價拾五錢　郵稅六錢

●今體作文六大秘訣　池田一倒君著　全一册紙皮上製　小判三二二頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●學生必携作文資料　堀江秀雄君著　全一册洋並製　小判二一六頁　正價拾五錢　郵稅四錢

●國語漢語類語作文錦囊　井上敏夫君著　全一册紙皮上製　小判四三〇頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

●修辭學　文學士武島又次郎君著　全一册洋並製　大判三〇六頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●作文資材美辭寶典　西村眞次君著　全一册洋並製　小判四一二頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

●作文資材續美辭寶典　鹽井雨江君序　西村醉夢君著　全一册洋並製　小判五一〇頁　正價四拾錢　郵稅六錢

●祝辭演說法　博文館編輯局編纂　彩色木版寫眞版挿入　全一册洋並製　大判二五〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●演說活法　附演說法名家談　中島氣峥君著　全一册洋布上製　小判二二六頁　正價參拾錢　郵稅四錢

●書翰文研究　中川靜君著　全一册紙皮上製　中判長形四五三頁　正價六拾五錢　郵稅八錢

●書翰文大成　中村秋香君著　全一册洋布上製　大判三四八頁　正價壹圓　小包送料拾五錢
▲和裝箱入　正價壹圓　小包送料拾六錢

●明治書翰文大全　內山幻堂君著　寫眞版八葉挿入　全一册洋並製　大判四六〇頁　正價五拾錢　郵稅拾錢

●書簡組立法　大和田建樹君著　全一册洋並製　大判一六〇頁　正價拾五錢　郵稅六錢

●通俗書翰文　樋口一葉女史著　彩色木版▲眞版挿入　全一册洋並製　大判二四六頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢



▲國文書類

●文學士岡田正美君著 解說批評 **日本文典** 上下二冊洋並綴 大判六〇八頁 正價各四拾錢 郵稅各八錢
▲特製本 洋布上綴 正價一冊五拾五錢 郵稅一冊拾錢

●落合直文君著（文部省檢定濟） 中等教育 **日本文典** 全一冊脊皮上綴 中判四八八頁 正價六拾錢 郵稅拾錢

●落合直文君著 中等教育 **文法教科書** 全一冊脊皮上綴 大判一二六頁 正價四拾五錢 郵稅六錢

●華族女學校學監下田歌子女史著 **女子普通文典** 全一冊和並綴 大判二四六頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

●內藤耻叟君校閱 大宮宗司君校註 **校註神皇正統記** 全一冊洋並綴 大判二五八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

●中村秋香君校訂 **吉野拾遺詳解** 全一冊洋並綴 大判一五二頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

●大和田建樹君刪定（文部省檢定濟） 中等教育 **刪定徒然草** 全一冊洋並綴 大判一一二頁 正價拾八錢 郵稅四錢

●佐々木信綱君校註 **校註徒然草** 全一冊洋並綴 大判二〇六頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

●佐々木信綱君校註 **校註竹取物語** 全一冊洋並綴 大判七六頁 正價拾貳錢 郵稅貳錢

●同 **校註土佐日記** 全一冊洋並綴 大判五〇頁 正價拾錢 郵稅貳錢

●同 **校註方丈記** 全一冊洋並綴 大判六〇頁 正價八錢 郵稅貳錢

●同 **校註伊勢物語** 全一冊洋並綴 大判一〇六頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

●同 **校註更科日記** 全一冊洋並綴 大判九四頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

●文學博士萩野由之君 落合直文君 池邊義象君校註 **文學全書** 全部廿四冊 中判一冊約四百頁 正價一冊廿五錢 郵稅參錢宛

●第一編 ○竹取物語 ○伊勢物語 ○住吉物語 ○徒然草 ○紫式部日記

●第二編 ○土佐日記 ○枕草紙 ○更科日記

●第三編 ○方丈記 ○十六夜日記 ○落窪物語 ○辨內侍日記

●第四編 ○とりかへばや物語 ○堤中納言物語 ○四季物語

●第五編 ○中務內侍日記 ○蜻蛉日記 ○讃岐典侍日記 ○和泉式部日記

●第六編 ○濱松中納言物語 ○大和物語 ○唐物語

●第七編
○宇治拾遺物語
○多武峰少將物語
●自第八編至第十二編
○源氏物語五冊に分本
●自第十三編至第十五編
○榮花物語上、中、下三冊

●自第十六編至第十八編
○太平記上、中、下三冊
●第十九編
○保元物語
○平治物語
○秋夜長物語
○鴉鷺合戰物語
●第二十編
○平家物語

●第廿一編
○古今著聞集
●第廿二編
○公事根源
○十訓抄
●第廿三編
○水鏡
○大鏡
●第廿四編
○増鏡

大和田建樹君選 **古文讀本** 全六册和 並綴 大判七五六枚 正價壹圓六拾錢 郵税各四錢
▲正價一卷ヨリ五卷迄各貳拾五錢 六卷參拾五錢

國學院編纂 **名文評釋** 全一册洋 並綴 大判四五二頁 正價五拾錢 郵税拾錢

落合直文君編 **中等教育國文軌範** 全一册洋 並綴 中判三八〇頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

鷹野勇雄君著 **新撰國文問答** 全一册紙皮上綴 小判二六六頁 正價貳拾錢 郵税四錢

大和田建樹君著 **新撰假名遣活法** 全一册洋 並綴 小判一七〇頁 正價拾五錢 郵税貳錢

大和田建樹君著 **日本大辭典** 全一册總皮上綴 大判一八〇〇頁 正價貳圓貳拾錢 小包送拾五錢

大和田建樹君著 **日本小辭典** 全一册洋布上綴 小判一一八〇頁 正價七拾五錢 郵税八錢

ノ宮宗司君編纂 **日本辭林** 全一册洋 並綴 小判七二〇頁 正價參拾錢 郵税六錢
▲特製本 洋布上綴 正價四拾錢 郵税八錢

棚橋賓君著 **日本いろは新字典** 全一册銅刻和綴 小判二二〇頁 正價參拾錢 郵税四錢

▲和歌書類

大和田建樹君著 **歌まなび** 全一册洋布上綴 中判一〇三八頁 正價壹圓五拾錢 小包送拾五錢

佐々木信綱君著 **増補詠歌自在** 全一册洋布上綴 中判七八〇頁 正價壹圓 郵税拾貳錢

落合直文君著 **新撰歌典** 全一册洋 並綴 中判六一〇頁 正價四拾錢 郵税八錢

華族女學校學監下田歌子女史著 **詠歌の栞** 全一册和 並綴 大判二一〇頁 正價參拾五錢 郵税八錢

佐々木信綱君著 **詠歌辭典** 全一册洋布上綴 小判一三七六頁 正價七拾五錢 郵税八錢

宮澤春文君著 **作歌自在**（彩色木版寫眞版挿入） 全一册洋 並綴 大判二四〇頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

有賀長伯君著 **和歌八重垣** 全七册和紙木版 小判 正價五拾五錢 郵税八錢

文學士武島羽衣君著 **霓裳歌話** 全一册紙皮上綴 小判三四〇頁 正價貳拾錢 郵税六錢

佐々木信綱君校註 **賀茂眞淵翁全集** 全二册洋 並綴 中判一〇〇〇頁 正價一册卅五錢 郵税一册八錢

佐々木信綱君校註 **本居宣長翁全集** 全一册洋 並綴 中判五四二頁 正價參拾五錢 郵税八錢

佐々木信綱君校註 **香川景樹翁全集** 全一册洋 並綴 中判一〇一三頁 正價一册卅五錢 郵税一册八錢

佐々木信綱君校註 **小澤蘆庵翁全集** 全一册洋 並綴 中判五二二頁 正價參拾五錢 郵税八錢

女（後付の一九）

●佐々木信綱君校註 **近世名家々集** 全二冊 洋並綴 中判一〇七二頁 正價一冊卅五錢 郵税一冊八錢

●佐々木信綱君校註 **近世長歌今様歌集** 全一冊 洋並綴 中判五七〇頁 正價參拾五錢 郵税八錢

●佐々木信綱君校註 **桂園門下家集** 全一冊 洋並綴 中判五七〇頁 正價參拾五錢 郵税八錢

●賀茂眞淵翁編 **明治名家々集** 全二冊 洋並綴 中判一一五四頁 正價一冊卅五錢 郵税一冊八錢

●黒澤翁滿翁 **賀茂翁家集** 全五冊 木版刷 中判二百廿三枚 正價六拾錢 郵税拾錢

●**むぐらぬ集** 全三冊 和本綴 大判木版刷 正價八拾錢 郵税拾錢

●佐々木弘綱君 佐々木信綱君校註 **日本歌學全書** 全部十二册 正價一册廿五錢 中判每册約四百頁 郵税六錢宛

●第一編 ○古今和歌集 ○躬恒家集 ○友則家集 ○貫之家集 ○忠岑家集

●第二編 ○後撰和歌集 ○元輔家集 ○順家集 ○能宣家集 ○天德歌合

●第三編 ○拾遺和歌集 ○紫式部家集 ○公任家集 ○清少納言家集

●第四編 ○後拾遺和歌集 ○相模家集 ○經信卿母集 ○高陽院歌合

●第五編 ○金葉和歌集 ○詞華和歌集 ○堀川百首

●第六編 ○千載和歌集 ○永久百首 ○忠度朝臣集 ○後京極自歌合

●第七編 ○新古今和歌集 ○自讃歌

●第八編 ○鴨長明集 ○林下集 ○源三位頼政集 ○山家集 ○金槐集

●自第九編至第十一編 ○萬葉集 上、中、下三册

●第十二編 ○悦目抄 ○無名抄 ○歌がたり ○にひまなび ○新學異見 ○歌ぶくろ ○調の直路

●佐々木信綱君校註 **校註明倫歌集** 全一冊 洋並綴 大判二二二頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

●岸本宗道君校註 **校註古今和歌集** 全一冊 洋並綴 中判二四八頁 正價拾五錢 郵税四錢

●佐々木信綱君校註 **百人一首講義** 全一冊 洋並綴 中判三〇〇頁 正價貳拾錢 郵税四錢

●佐々木信綱君著 **おもひ草** 全一冊 洋布上綴 中判一五二頁 正價五拾錢 郵税六錢

●佐々木信綱君編纂 **竹柏園集** 第一編 全二冊 紙皮上綴 小判一〇七〇頁 正價一冊卅五錢 郵税一冊六錢

●子爵黒田清綱君、税所敦子女史共撰 **庭の摘草** 附歌德記 村松今朝太郎君編 全一冊 和上綴 中判二六二頁 正價參拾五錢 郵税六錢

●從五位末松房泰君著 **冠詞例歌集** 全一冊 紙皮上綴 小判二一〇頁 賣價拾五錢 郵税四錢

▲新體詩及軍歌唱歌

●中郁秋香君著 **新體詩歌自在** 全一冊 洋布上綴 中判八三四頁 正價壹圓貳錢 郵税拾錢

●鹽井雨江君、武島羽衣君、大町桂月君合著 美文韻文 **花紅葉** 全一冊 洋布上綴 小判四二二頁 正價參拾錢 郵税六錢

●文學士大町桂月君著 美文韻文 **黄菊白菊** 全一冊 紙皮上綴 小判四〇二頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

●文學士土井晩翠君著 **天地有情** 全一冊 洋布上綴 小判二三〇頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

文學士武島羽衣君著
美文韻文 **霓裳微吟**
全一冊紙皮上綴 小判三六八頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

文學士鹽井雨江君著
美文韻文 **暗香疎影**
全一冊紙皮上綴 小判三五四頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

國府犀東君著
新體詩集 **花さくろ**
全一冊洋並綴 小判二五六頁 賣價拾五錢 郵稅四錢

佐々木信綱君、印東昌綱君合著
美文韻文 **磯馴松**
全一冊紙皮上綴 小判四一二頁 正價貳拾八錢 郵稅六錢

大和田建樹君著
散文韻文 **雪月花**
全一冊紙皮上綴 小判六二六頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

大和田建樹君著
散文韻文 **深山櫻**
全一冊紙皮上綴 小判七〇二頁 正價四拾錢 郵稅六錢

大和田建樹君著
散文韻文 **藻鹽木**
全一冊紙皮上綴 小判五九〇頁 賣價貳拾五錢 郵稅六錢

大和田建樹君作歌 高等音樂學校教授上眞行君作曲
日露開戰軍歌
全一冊洋並綴 小判美本 正價參錢五厘 郵稅三册迄貳錢

佐々木信綱君作歌 上眞行君作曲
露西亞征討の歌
全一冊洋並綴 小判美本 正價參錢五厘 郵稅三册迄貳錢

文學士久保天隨君作歌 上眞行君作曲
征露新軍歌
全一冊洋並綴 小判美本 正價四錢 郵稅二册迄貳錢

文學士大町桂月君作歌 上眞行君作曲
露國征伐軍歌
全一冊洋並綴 小判美本 正價四錢 郵稅三册迄貳錢

文學博士井上哲次郎君作歌 山田源一郎君作曲
征露の歌
舶來上等洋紙 大判厚口折本 正價貳錢五厘 郵稅八枚迄貳錢

巖谷小波君作歌 山田源一郎君作曲
征露軍歌 **旅順の海戰**
舶來上等洋紙 大判厚口折本 正價貳錢五厘 郵稅八枚迄貳錢

巖谷小波君作歌 東儀鐵笛君作曲
征露軍歌 **決死隊**
舶來上等洋紙 大判厚口折本 正價貳錢五厘 郵稅八枚迄貳錢

野口寧齋君作（戰詩）
征露 **宣戰歌**
全一冊洋並綴 小判美本 正價五錢 郵稅二册迄貳錢

佐藤六石君作（戰詩）
征露大捷歌
全一冊洋並綴 小判美本 正價五錢 郵稅二册迄貳錢

國府犀東君著（戰詩）
伐露樂譜 **大陸劍歌**
全一冊洋並綴 小判美本 正價五錢 郵稅二册迄貳錢

佐々木信綱君 大和田建樹君 中村秋香君 外數君共著
上眞行君 小山作之助君作曲
日露戰爭 **國民唱歌**
全二冊洋並綴 大判美本 正價一册八錢 郵稅二册迄貳錢

女子大學校教授 文學士鹽井雨江君作歌
女子大學校音樂教授 白井規矩郎君作曲
女子軍歌
全一冊洋並綴 大判美本 正價拾錢 郵稅貳錢

海軍大主計竹内十次郎君著
征清 **海軍軍歌**
全一冊洋並綴 小判四六頁 正價參錢 郵稅三册迄貳錢

木村小舟君作歌 田村虎藏君作曲
家庭唱歌
全十二冊洋並綴 小判一册四〇頁 正價一册貳錢五厘 郵稅三册迄貳錢

第一編 桃太郎
第二編 舌切雀
第三編 松山鏡
第四編 花咲爺
第五編 浦島太郎
第六編 文福茶釜

第七編 勝々山
第八編 羅生門
第九編 一寸法師
第十編 猿蟹合戰
第十一編 俵藤太
第十二編 瘤取り

技藝及遊戯書類

- 石橋思案君序文　加野孤雁君編　新案 **福引種本**　全一册新形美本　中判一六〇頁　正價拾八錢　郵稅四錢
- 石橋思案君序文　加野孤雁君　有田鐵笛君共編　征露紀念 **續福引種本**　全一册新形美本　中判一四六頁　正價拾八錢　郵稅四錢
- 安藤謙吉君著 **福引集**　全一册洋並綴　小判一四四頁　正價拾貳錢　郵稅貳錢
- 日本遊戯研究會編纂 **模範運動會法**　附新式舞踏遊戯　全一册洋並綴　中判三〇〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- 早稻田大學野球撰手橋戸信君著 **最近野球術**　全一册紙皮上綴　三六判二七五頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- 前山口縣知事法學士武田千代三郎君著　理論實驗 **競技運動**　全一册洋布上綴　大判六七八頁　正價壹圓貳拾錢　小包送拾五錢
- 同　心身鍛錬 **少年競技運動**　全一册洋並綴　小判一五四頁　正價拾八錢　郵稅四錢
- 津田素彦君著 **ベースボール クリケット**　全一册洋並綴　小判一二六頁　正價拾貳錢　郵稅貳錢
- 野田圭園君著 **庭球術**　全一册洋並綴　小判一五〇頁　實價八錢　郵稅貳錢
- 小川文雄君著　新案圖解 **玉突術**　全一册紙皮上綴　大判二二八頁　正價七拾五錢　郵稅八錢

- 三宅鐵骨君著 **玉突術**　全一册洋並綴　小判一六〇頁　正價拾貳錢　郵稅貳錢
- 戸田主獵局長校閲　報知新聞記者高橋迎月君著　名家實談 **銃獵秘訣**　全一册洋布上綴　三六判二四六頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- 志岐守二君著 **室内遊戯法**　全一册洋並綴　小判二三二頁　正價拾貳錢　郵稅貳錢
- 太田才次郎君著 **全國兒童遊戯法**　全三册洋並綴　大判四五〇頁　正價一册拾錢　郵稅一册四錢
- 岡崎淵沖君著　各傳比較 **點茶活法**　全四册和上綴帙入　大判六〇〇頁　正價貳圓五拾錢　小包送貳拾錢
- 江刺家協一君著 **茶の湯大全**　全一册洋布上綴　中判五〇八頁　正價六拾錢　郵稅八錢
- 博文館編輯局編纂　木版刷錦繪及寫眞銅版挿入 **茶の湯と生花**　全一册洋並綴　大判二五八頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢
- 吐月齋惠一烏君編纂　挿花盆石 **四時の詠**（優雅木版畫）　全三册和紙上綴　大判一四〇枚　正價五拾錢　郵稅六錢
- 秀貫齋月一珦君編纂　挿花盆石 **正風花鏡**（優雅木版畫）　全三册和紙上綴　大判二〇二枚　正價五拾錢　郵稅六錢
- 大露庵河村一洗君選 **新撰活花圖式**　全二册木版刷　美濃紙　正價四拾錢　郵稅六錢



立志及受驗書類

●軍國訓　文學士大町桂月君著　全一冊洋並綴　小判三三六頁　正價貳拾八錢　郵稅四錢

●學生訓　文學士大町桂月君著　全一冊紙皮上綴　小判二四八頁　正價貳拾錢　郵稅四錢

●續學生訓　文學士大町桂月君著　全一冊紙皮上綴　小判二五六頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢

●青年訓　文學士大町桂月君著　全一冊洋並綴　小判三一八頁　正價貳拾八錢　郵稅四錢

●處世訓　文學士大町桂月君著　全一冊洋並綴　小判二五〇頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢

●成功要錄　慶應義塾教授菅綠陰君著　全一冊紙皮上綴　中判二二〇頁　正價貳拾八錢　郵稅四錢

●言行要錄　慶應義塾教授菅綠陰君著　全一冊紙皮上綴　中判二六八頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●改正西國立志編　文學博士中村正直君譯述　全一冊洋並綴　中判六〇八頁　正價貳拾七錢　郵稅八錢

●益軒十訓　東京女學館教授西田敬止君編　全一冊背皮上綴　中判一一〇二頁　正價壹圓　小包送拾五錢

●帝國修身軌範　文學士萩原朝之助君著　全四冊和並綴　小判三六九頁　實價一冊拾錢　郵稅一冊四錢

●偉人修養錄　風間禮助君著　全一冊洋並綴　中判四〇八頁　正價四拾錢　郵稅八錢

●處世要訓　高等師範學校教諭本田增次郎君著　全一冊洋並綴　中判二四〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●學生立身策　法學士田中次郎君譯述　全一冊洋並綴　小判一七六頁　正價拾貳錢　郵稅四錢

●成功遂志勤學要訣　米國ジョン、トツト氏原著　吉田巳之助君譯述　全一冊洋並綴　中判四七〇頁　正價貳拾八錢　郵稅六錢

●日常行爲法則　法學士丸尾雄君著　彩色木版密畫寫眞版挿入　全一冊洋並綴　大判二五六頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●勤學と處世　法學士桐生政次君著　彩色密畫挿入　全一冊洋並綴　大判二四〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●世界格言大全　澁江保君著　全一冊洋布上綴　小判一三七二頁　正價四拾錢　郵稅四錢

●讀書法　星野久成君著　全一冊洋並綴　小判二二二頁　正價拾錢　郵稅四錢

●武士道叢書　文學博士井上哲次郎君　文學士有馬祐政君共編（全部出來）
▲下卷に限り郵稅拾四錢
全三册洋裝　大判約一、六〇〇頁　正價一册五拾錢　郵稅一册拾二錢

●現代大家武士道叢論（全部完成）　秋山悟庵君編纂　赤堀又次郎君校訂
全一册洋並製　太判約四百餘頁　正價五拾錢　郵稅拾錢

●心學叢書　全六册和本上製　大判約一九〇〇頁　正價一册四拾錢　郵稅一册拾錢

●一年有半　故中江兆民君著
全一册洋並製　大判二八八頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

●續一年有半　同
▲一名無神無靈魂
全一〇洋並製　大判三六六頁　正價參拾八錢　郵稅八錢

●博士試驗論文集　山田樋太郎君編
全一册洋並製　大判二八六頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

●官私立諸學校就學案內　博文館編輯局編纂　寫眞版挿入　改訂新版
全一册洋並製　大判二二八頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●學術自習法　飯泉規矩三君著
全一册洋並製　小判二四八頁　正價拾貳錢　郵稅四錢

●現行試驗規則大全　北一龜君編纂
全一册紙皮上製　小判六八八頁　正價四拾五錢　郵稅六錢

●受驗問答叢書

▲全部卅六册洋裝袖珍紙皮金文字入上製

正價｛●壹册金貳拾錢　●十册金壹圓八拾錢　●貳拾册金參圓五拾錢　●卅六册金五圓四拾錢｝

▲郵稅壹册四錢宛

（全部書目）

●第一編　新撰日本地理問答……上村左川君編
●第二編　新撰日本歷史問答……宮田修君編
●第三編　新撰世界地理問答……武田櫻桃君編
●第四編　新撰東洋歷史問答……松原岩五郎君編
●第五編　新撰西洋歷史問答……長谷川誠也君編
●第六編　新撰國文問答……鷹野勇雄君編
●第七編　新撰漢文問答……太田才次郎君編
●第八編　新撰算術問答……竹貫登代多君編
●第九編　新撰代數問答……竹貫登代多君編
●第十編　新撰幾何問答……竹貫登代多君編
●第十一編　新撰化學問答……武田櫻桃君編
●第十二編　新撰物理問答……上村貞子君編
●第十三編　新撰動植物學問答……寺崎留吉君編
●第十四編　新撰地文天文問答……木村定次郎君編
●第十五編　新撰法制經濟問答……中村重造君編
●第十六編　新撰文官普通及裁判所書記試驗問答……小野拓君編
●第十七編　新撰倫理教育問答……永邇藤一郎君編
●第十八編　新撰鑛物地質問答……寺崎留吉君編
●第十九編　新撰心理論理問答……徳谷豐之助君編
●第二十編　新撰和英文典問答……上村貞子君編
●第廿一編　新撰農業要項問答……志岐守二君編
●第廿二編　新撰英語會話作文問答……森美文君編
●第廿三編　明治三十六年文官高等試驗答案集……相澤新八君編
●第廿四編　新撰商業要項問答……濱田四郎君編
●第廿五編　新撰獨逸文典問答……藤井憲君編
●第廿六、七編　新撰工業要項問答（上下二册）……加野友次郎君編
●第廿八編　新撰作文問答……西村眞次君編
●第廿九編　新撰衛生生理問答……醫學士石原喜久太郎君　首藤褒君編
●第三十編　新撰家事問答……近藤正一君編
●第卅一編　新撰憲法行政法問答……法學士辻安吉君編
●第卅二編　新撰商法問答……法學士太田資時君編
●第卅三編　新撰國際公法私法問答……土屋法學士編
●第卅四編　新撰刑法問答……法學士石原磊三君編
●第卅五編　新撰民刑訴訟法問答……法學士清水孝藏君編
●第卅六編　新撰民法問答（未刊）……宮川大壽君編

女（後付の二四）

理科及數學書類



理學士福井政一君著
●普通物理學
上下二册洋並綴 大判 近刊 正價一册四拾錢 郵稅一册八錢

理學士龜高德平君著
●有機化學
全一册洋並綴 大判 四〇〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢

理學士眞島利行君著
●無機化學
全一册洋並綴 大判 三五四頁 正價四拾錢 郵稅八錢

仙臺醫學專門學校教授須崎勝三郎君著
●應用定量分析
全一册並綴 大判 三四四頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲右四種共各洋布特製一册正價五拾五錢郵稅拾錢宛

藤野修吉君、花井七三郎君、草野堅藏君共著
●通俗理化一斑
全一册洋並綴 大判 三三〇頁 正價參拾錢 郵稅八錢

池上秦次郎君著
受驗必携 **●物理學演習**
全一册洋並綴 小判 一五〇頁 正價拾五錢 郵稅四錢

理學士須藤傳治郎君著
●星學
全一册洋並綴 大判 三三二頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

農學博士稻垣乙丙君著
農藝物理 **●氣象學**
全一册背皮上綴 大判 五四〇頁 正價壹圓五拾錢 小包送料拾五錢

理學士岡田武松君著
●近世氣象學
全一册洋並綴 大判 三三八頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

理學士藤野敬三郎君編
科學藝術 **●純正寫眞術**
全一册洋布上綴 中判 三五八頁 正價壹圓 郵稅八錢

第二高等學校教授理學士安田篤君著
増補訂正 **●植物學汎論**
密畫挿入 全一册背皮上綴 大判 六四八頁 正價貳圓 小包送料五錢

理學士飯塚啓君著
●植物學新論
全一册洋並綴 大判 三一四頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

理學士遠藤吉三郎君著
日本有用 **●海產植物**
全一册洋布上綴 大判 二二八頁 正價壹圓廿五錢 郵稅八錢

理學士會田龍雄君著
●新撰動物學
全二册洋布上綴 大判 五六〇頁 正價一册四拾錢 郵稅一册八錢
▲特製本 洋布上綴 正價一册五拾五錢 郵稅一册拾錢

川村守義君著
密畫入 **●通俗動物學**
全一册洋並綴 大判 三〇〇頁 正價貳拾錢 郵稅八錢

永島長五郎君著
●通俗昆蟲學
全一册洋並綴 大判 二八〇頁 正價參拾錢 郵稅八錢

女(後付の二五)

腹巻助太郎君編
●實用鑛物及地質 全一册洋並綴 中判 二五九頁 正價參拾錢 郵稅六錢

理學士大塚佛郎君 理學士八谷彪一君共著
●鑛物學 全一册洋並綴 大判 三六四頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

理學士吉田乙彥君校閱 腹巻助太郎君著
●學生必携鑛物採集鑑定 全一册紙皮上綴 中判長形 一四八頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

理科及數學書共受驗問答叢書中のもの數種あれども受驗書類中に掲載せしを以て此欄に除けり

東京帝國大學教授理學博士高木貞治君著
●新式算術講義 全一册洋布上綴 大判 四七〇頁 正價壹圓貳拾錢 郵稅拾錢

東京帝國大學教授理學博士高木貞治君著
●新撰算術 全一册洋並綴 大判 三〇六頁 正價四拾錢 郵稅八錢

東京帝國大學教授理學博士高木貞治君著
●新撰代數學 全一册洋並綴 大判 三〇四頁 正價四拾錢 郵稅八錢

京都帝國大學教授理學士林鶴一君著
●新撰幾何學 全一册洋並綴 大判 三〇四頁 正價四拾錢 郵稅八錢

理學士松村定次郎君著
●新撰解析幾何學 全一册洋並綴 大判 三〇〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢

理學士松村定次郎君著
●新撰三角法 全一册洋並綴 大判 二八二頁 正價四拾錢 郵稅八錢

理學士松村定次郎君著
●新撰微分積分學 全一册洋並綴 大判 三五六頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲右四種共各洋布特製一册 正價五拾五錢 郵稅拾錢宛

理學士藤田外次郎君著
●商業叢書商業數學 全一册洋並綴 大判 四〇二頁 正價五拾五錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價七拾錢 郵稅拾錢

工學士重見道之君著
●工業叢書工業數學 全一册洋布上綴 中判 四三〇頁 正價九拾錢 郵稅貳錢

第六高等學校教授松尾哲太郎君著
●新撰中等用器畫教科書解說 全一册洋布上綴 大判 一七三頁 正價五拾錢 郵稅八錢

同
●新撰中等用器畫教科書圖式 全一册厚表紙綴 太陽版 石版摺 正價五拾錢 郵稅六錢

理學士林鶴一君著
●初等平面三角法教科書（文部省檢定濟） 全一册洋布上綴 中判 一二〇頁 正價四拾錢 郵稅四錢

理學士藤田外次郎君著（上卷算術代數の部 下卷幾何學の部）
●文部省檢定受驗用新撰數學講義 全二册洋並綴 中判 五七八頁 正價一册卅八錢 郵稅一册六錢

佐久間文太郎君著
●中等教育算術教程 全一册洋並綴 大判 二二二頁 正價四拾錢 郵稅六錢

竹貫登代多君編（算術、代數、幾何の三科とし各科共各十二册にし完結）
●數學世界 全卅六册洋並綴 大判一册各八〇頁 正價一册拾錢 郵稅一册壹錢

竹貫直人君編
●記憶すべき公式と答案の書き方 全三册 上卷算術と三角 中卷代數學 下卷幾何學 三六判洋並綴 各册約百七十頁 正價一册拾錢 郵稅一册壹錢

竹貫婁文君補 竹貫登代多君編
●實用新式速算法 全一册洋並綴 中判 二九四頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

三田暉信君著
●算術手引草 全一册脊皮上綴 中判 四七六頁 正價五拾錢 郵稅六錢

竹貫直人君著
●實用數學一萬題 全一册洋並綴 中判 五一〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢

竹貫登代多君編
●數學遊戲 全一册紙皮上綴 小判 二五〇頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

竹貫登代多君編（全三册 上卷算術 中卷代數 下卷幾何）
●數學お伽雙紙 大判洋並綴 各一册九十餘頁 正價一册拾錢 郵稅一册壹錢

峰是三郎君著
●地理歷史教育兵事理科實用新題算術 全一册洋並綴 中判 二六〇頁 正價四拾八錢 郵稅四錢

辭典書類

●石川鴻齋君校訂 音釋鼇頭康熙字典（銅刻上帙入）
全六冊和紙刷 中判一五二二枚 正價四圓五拾錢 小包送貳拾錢
▲桐函入上製 正價五圓五拾錢 小包送參拾錢

●市河清流君、高井思明君校訂 三音四聲字貫（銅刻上帙入）
全五冊和紙刷 中判一六一〇枚 正價五圓參拾錢 小包送貳拾錢
▲桐函入上製 正價六圓 小包送參拾錢

●石川鴻齋君校訂 篆文詳註日本大玉篇（銅刻上帙入）
全三冊和紙刷 中判七二八枚 正價貳圓六拾錢 小包送拾五錢

●土生柳平君校正・木村品太郎君編輯 明治大廣益會玉篇大全（銅刻上帙入）
全三冊和紙刷 中判六六四枚 正價貳圓六拾錢 小包送拾五錢

●石川鴻齋君著 新撰日本字典（銅刻上帙入）
全二冊和紙上綴 中判一〇一〇頁 正價壹圓 郵税八錢

●千河岸貫一君撰 作文演說格言辭典
全一冊洋布上綴 小判五八四頁 正價五拾錢 郵税八錢

●青木輔清君編 廣益中字典
全一冊洋布上綴 中判八三〇頁 正價八拾錢 郵税拾錢

●戸田翠香君著 文章字典（銅刻上等和紙刷）
全一冊和上綴帙入 中判五八二頁 正價七拾錢 郵税六錢

●大田淳軒君著 新撰歷史字典（銅刻上等和紙刷）
全一冊和上綴帙入 中判四九五頁 正價六拾錢 郵税六錢

●石川鴻齋君補閲、川田孝吉君編輯 増補和漢歷史文章字引
銅刻和紙上綴 中判二〇四枚 正價五拾五錢 郵税拾貳錢

●大田淳軒君著 新撰明治字典
銅刻和紙上綴 小判四七〇頁 正價參拾八錢 郵税四錢

●齋木寛直君著 明治文選字引
銅刻和紙上綴 小判二一六枚 正價貳拾五錢 郵税四錢

●風月庄左衛門君編 校正三版増字文選字引
全一冊和紙上綴 中判銅刻 正價貳拾五錢 郵税四錢

●長岡道謙君著 新刻正字通
銅刻和紙上綴 小判五二七枚 正價參拾五錢 郵税四錢

●棚橋廣君著 新撰漢語字引
銅刻和紙上綴 小判一三八枚 正價貳拾五錢 郵税貳錢

●大月曙四郎君編 懷中玉篇
銅刻洋布上綴 小判三三六頁 正價貳拾錢 郵税四錢

●文學士大町芳衛君 文學士久保天随君 大田淳軒君共編 新式いろは引節用辭典
全一冊洋布上裝 三六判亖〇〇頁 正價貳圓 小包送拾五錢
▲總皮特製本 正價貳圓五拾錢 小包送拾五錢

●博文館編輯局編纂 家傳寶典明治節用大全 彩色美麗木版畫挿入（事物節用）
全一冊背皮上綴 大判一二三二頁 正價壹圓六拾錢 小包送貳拾錢

小說書類



女（後付の二八）

●紅葉全集

故尾崎紅葉君著、小波君思案君校訂

全部六冊洋裝大判總クロース金字金模樣附……堅牢美本

▲正價一冊壹圓八拾錢全部金拾圓小包料拾五錢宛

▲紙數一冊約九百餘頁總紙數五千六百頁

第一卷　●色懺悔　●巴波川　●戀の蛻　●關東五郎　●猿枕　●二人むく助　●風雅娘　●南無阿彌陀佛　●此ぬし　●新色懺悔　●わかれ蚊帳　●二人女房　●新桃花扇　●枯華微笑　●夏瘦　●文ながし　●七十二文命の安賣

第二卷　●伽羅枕　●紙きぬた　●おぼろ舟　●夏小袖　●むき玉子　●戀の病

第三卷　●三人妻　●心の闇　●俠黑兒　●袖時雨　●男ごゝろ　●むらさき

第四卷　●隣の女　●三箇條　●靑葡萄　●不言不語　●冷熱　●八重襷　●鷹料理　●浮木丸

第五卷　●多情多恨　●千箱の玉章　●安知歇貌林　●寒牡丹

第六卷　●金色夜叉前編　●續金色夜叉　●煙霞療養　●金色夜叉中編　●續々金色夜叉　●紅葉山人傳　●金色夜叉後編　●紅葉著作年表

●露伴叢書

幸田露伴君著

全一冊洋布上綴　大判一八九〇頁　正價貳圓五拾錢　小包送貳拾錢

●巖谷小波君著　伯林土產　**戀の畫葉書**　和田英作君畫　▲一名　留學生氣質　全一冊洋布上製　中判四六〇頁　正價壹圓　郵稅拾錢

●海軍主計中監窪田重弌君著　日露戰役紀念　**彈片**　全一冊洋布上綴　三六版五〇〇頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

●千葉紫草君纂譯　**最近外交秘密**　全一冊洋布上綴　小判三一七頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●泉鏡花君外十四名合作　**換菓篇**　全一冊新形美本　中判三〇〇頁　正價六拾錢　郵稅八錢

●村井弦齋君著　**女道樂**（木版彩色密畫挿入）　全一冊和裝上綴　大判四六六頁　正價八拾錢　郵稅拾貳錢

●村井弦齋君著　**酒道樂**（木版彩色密畫挿入）　全二冊洋布上綴　大判五五四頁　正價一冊五拾五錢　郵稅一冊八錢

●押川春浪君著　**海底軍艦**　全一冊紙皮上綴　小判三九八頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●同　英雄小說　**武俠の日本**　全一冊紙皮上綴　小判四八二頁　正價四拾錢　郵稅六錢

●同　海國冒險奇談　**新造軍艦**　全一冊紙皮上綴　小判三五一頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●押川春浪君著 英雄小説 武侠艦隊 全一册紙皮上綴 小判三三二頁 正價參拾錢 郵稅六錢

●押川春浪君著 傳奇小説 銀山王 全一册洋並綴 小判三二七頁 正價參拾錢 郵稅六錢

●押川春浪君著 海島探險 塔中の怪 全一册紙皮上綴 小判三三二頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

●江見水蔭君著（極彩色木版畫口繪挿入） 軍事小説 武装の巻 全一册石版表紙 大判二四八頁 正價貳拾五錢 郵稅八錢

●理學士依綠軒主人著 社會主義新小説 文明の大破壊 全一册洋並綴 大判四五四頁 正價四拾錢 郵稅八錢

●内田不知庵君著 社會百面相 全一册洋並綴 大判五五四頁 正價五拾五錢 郵稅拾貳錢

●若松賤子女史遺稿 櫻井鷗村君編纂 忘れがたみ 全一册洋布上綴 中判六三二頁 正價壹圓 郵稅拾錢

●樋口一葉女史著 一葉全集 全一册洋並綴 大判四八六頁 正價四拾錢 郵稅拾錢

●大橋乙羽君著（彩色大版密畫挿入） 花鳥集 全一册洋布上綴 中判一二〇八頁 正價壹圓 小包送拾五錢

●大橋乙羽君著（彩色木版密畫挿入） 初子集 全一册洋布上綴 小判五九六頁 正價四拾錢 郵稅六錢

●大橋乙羽君著（彩色木版密畫挿入） 風月集 全一册洋布上綴 小判四二二頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

●大橋乙羽君著（彩色木版密畫挿入） 若菜籠 全一册和本綴 小判三二〇頁 正價貳拾八錢 郵稅四錢

●大橋乙羽君著 政治小説 累卵の東洋 全一册洋並綴 小判二〇六頁 正價拾八錢 郵稅四錢

●幸田露伴君著（木版彩色密畫挿入） ひげ男 全一册洋並綴 大判三四八頁 正價參拾錢 郵稅六錢

●饗庭篁村君著 聚寶盆 全一册紙皮上綴 小判四九二頁 實價貳拾五錢 郵稅六錢

●巖谷小波君著（寫眞銅版挿入） 女波男波 全一册紙皮上綴 小判六二二頁 正價四拾錢 郵稅八錢

●巖谷小波君著（寫眞銅版挿入） 笑 全一册紙皮上綴 小判五三八頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

●江見水蔭君著（寫眞銅版挿入） 戀 全一册紙皮上綴 小判三八二頁 正價參拾錢 郵稅四錢

●江見水蔭君著（寫眞銅版挿入） 星 全一册紙皮上綴 小判六八四頁 實價貳拾五錢 郵稅八錢

●山田美妙君著 腕だめし 全一册洋並綴 小判一五六頁 實價五錢 郵稅貳錢

●塚原蓼洲君著 密告 全一册洋並綴 小判一五〇頁 實價五錢 郵稅貳錢

●文學博士元良勇次郎君評論 文學士戸澤姑射君譯述 愛と心 全一册洋並綴 大判一一八頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

●櫻井鷗村君譯（西洋木版密畫挿入） 少看護婦 全一册洋並綴 大判一三二頁 正價拾五錢 郵稅四錢

●佛國文豪ユーゴー作 尾崎紅葉君譯 鐘樓守 全一册洋布上綴 大判八九二頁 正價貳圓 小包送拾五錢
▲分本並製 上卷正價九拾錢郵稅八錢 下卷正價壹圓郵稅拾錢

●長田秋濤君譯（コロタイプ及彩色寫眞銅版三葉挿入） 椿姫 全一册洋並綴 大判四八〇頁 正價八拾五錢 郵稅拾貳錢
▲特製本 洋布上綴 正價金壹圓 郵稅拾四錢

若松賤子女史譯述 肖像入
●小公子
全一册洋装並製 大判三七四頁 正價參拾五錢 郵税八錢

森田思軒君譯述 寫眞版密畫入
●十五少年
全一册洋装並製 大判二九六頁 正價參拾五錢 郵税八錢

露國レオ、トルストイ伯著 田山花袋君譯
●哥薩克兵
全一册洋装並製 大判二三〇頁 正價拾八錢 郵税六錢

高橋光威君譯述 ロビンソン
●絶島漂流記
全一册洋装並製 大判四九八頁 正價四拾錢 郵税八錢

櫻井鷗村君譯述 勇少年冒險譚
●初航海
全一册紙皮上製 小判三一八頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

櫻井鷗村君譯
●世界冒險譚
全部十二册 中判 毎編一册二百四十餘頁
正價一册參拾錢 郵税六錢宛

一編 ●金掘少年
二編 ●遠征奇談
三編 ●二勇少年
四編 ●續遠征奇談
五編 ●決志少年
六編 ●漂流少年
七編 ●殖民少年
八編 ●航海少年
九編 ●不撓少年
十編 ●朽木の舟
十一編 ●俠勇少年
十二編 ●絶島奇談

博文館編輯局編纂
●初芝居
全一册洋装並製 大判三二〇頁 正價貳拾五錢 郵税貳錢五厘

同 新撰
●落語大全
全一册洋装並製 大判三二〇頁 正價貳拾五錢 郵税貳錢五厘

●帝國文庫
全部五十册 一册約千頁 洋装中判總布脊皮金文字入
正價 ●壹册金六拾錢 ●拾册以上五分引 ●參拾册以上壹割貳分引 ▲郵税拾六錢宛 (小包送二百廿匁許)

一編 眞書太閤記巻一
二編 眞書太閤記巻二
三編 眞書太閤記巻三
四編 眞書太閤記巻四 ▲附太閤朝鮮軍記
五編 源平衰盛記
六編 南總里見八犬傳上
七編 南總里見八犬傳中
八編 南總里見八犬傳下
九編 東海、奥羽、木曾、江の島道中膝栗毛
一〇編 梅暦春告鳥
一一編 通俗三國志上
一二編 通俗三國志下
一三編 三馬傑作集
一四編 柳澤、越後、黒田、加賀、伊達騒動實記
一五編 京傳傑作集
一六編 種彦傑作集
一七編 星月夜鎌倉顯晦録 北條九代記
一八編 通俗十二朝軍談 通俗武王軍談 通俗明清軍談
一九編 甲越軍記
二〇編 通俗呉越軍談 通俗漢楚軍談
二一編 楠廷尉秘鑑
二二編 風來山人傑作集
二三編 西鶴全集上(禁賣)
二四編 西鶴全集下(禁賣)
二五編 滑稽名作集上
二六編 滑稽名作集下
二七編 其磧自笑傑作集上
二八編 其磧自笑傑作集下
二九編 人情本傑作集上
三〇編 氣質全集
三一編 珍本全集上
三二編 珍本全集中
三三編 珍本全集下
三四編 人情本傑作集下
三五編 赤穗復讐全集
三六編 水滸傳上
三七編 水滸傳下
三八編 忠臣藏淨瑠璃集

女(後付の三〇)

三九編 四大奇書上
四〇編 續氣質全集
四一編 四大奇書下
四二編 近松時代淨瑠璃
四三編 大岡政談
四四編 佛教各宗高僧實傳

●續帝國文庫

正價 ●壹冊金六拾錢 ●參拾冊以上壹割二分引 ●貳拾冊以上八分引

▲全部五十冊 紙數壹冊千頁以上洋裝中判 クロース背皮金文字入美本

▲郵稅壹冊拾六錢宛 小包送二百廿匁內外

一編 眞田三代記 ▲附日本武士鑑
二編 近世說美少年錄
三編 日本歌謠類聚上
四編 日本歌謠類聚下
五編 諺紫田舍源氏
六編 竹田出雲淨瑠璃集
七編 朝夷巡島記
八編 兒雷也豪傑譚
九編 江戶作者淨瑠璃集
一〇編 前々太平記 ▲附前太平記
一一編 太平記
一二編 紀海音淨瑠璃集
一三編 續近松淨瑠璃集

四五編 仇討小說集
四六編 馬琴傑作集
四七編 淨瑠璃名作集
四八編 俠客傳全集
四九編 續仇討小說集
五〇編 近松世話淨瑠璃

一四編 近松半二淨瑠璃集
一五編 後太平記 ▲附北條五代記
一六編 脚本傑作集上（禁賣）
一七編 京山全集
一八編 校訂落語全集
一九編 並木宗輔淨瑠璃集
二〇編 紀行文集
二一編 一九全集
二二編 漂流奇談全集
二三編 邯鄲諸國物語 續種彥傑作集
二四編 校訂續紀行文集
二五編 續水滸傳
二六編 傾城水滸傳

二七編 文耕堂淨瑠璃集
二八編 白縫譚上
二九編 白縫譚下
三〇編 北雪美談時代鏡
三一編 常山紀談
三二編 萬物滑稽合戰記
三三編 續一九全集
三四編 校訂黃表紙百種
三五編 校訂俳優全集
三六編 校訂俗曲大全
三七編 續々紀行文集
三八編 續馬琴傑作集

三九編 脚本傑作集下
四〇編 續京傳三馬傑作集
四一編 釋迦八相倭文庫上
四二編 釋迦八相倭文庫下
四三編 種彥短編傑作集
四四編 俊傑神稻水滸傳上
四五編 俊傑神稻水滸傳中
四六編 俊傑神稻水滸傳下
四七編 校訂近世奇談全集
四八編 校訂名家短篇傑作集
四九編 佛教各宗續高僧實傳
五〇編 校訂名家漫筆集

曲亭馬琴翁著（本箱入）
●南總里見八犬傳
全五十冊和本綴 大判三〇五一枚 正價九圓五拾錢 運賃五拾錢

文學博士坪內逍遙君序文 青々園伊原敏郎君著
●日本演劇史
全二冊洋並綴 大判七八五頁 正價一冊八拾五錢 郵稅一冊八錢
▲特製合本 洋布上綴 正價壹圓八拾五錢 小包料拾五錢

福地櫻痴居士新作 肥後武士 江戶藝者
●花盛劇楓葉
全一冊洋並綴 大判一一八頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

福地櫻痴居士作（密畵挿入）
●山中平九郎
全一冊洋並綴 大判一六八頁 正價參拾錢 郵稅六錢

福地櫻痴居士作（密畵挿入）
●芳哉義士の譽
全一冊洋並綴 大判一五二頁 正價參拾錢 郵稅六錢

依田學海君著 脚本
●小御門
全一冊洋並綴 小判一八二頁 正價五錢 郵稅貳錢

習字繪畫書類

▲習字

- ●楷行薈編（上等和紙木版刷） 市河米菴君著 全十五冊和上綴 大判六二五枚 正價參圓 小包送貳拾錢
- ●草叢（上等和紙木版刷） 瀬尾鴎齋君編纂 全十二冊和上綴 美濃判七〇〇枚 正價參圓五拾錢 小包送貳拾錢
- ●十體千字文 河村學篠君著 全一冊和紙木版 中判一八二頁 正價貳拾參錢 郵税四錢
- ●三體千字文 柳澤小陽君書 全一冊和紙木版 半紙判七五枚 正價四拾錢 郵税四錢
- ●一六蘭亭帖 巖谷一六君書 全一冊和紙刷 半紙判二七枚 正價貳拾錢 郵税貳錢
- ●鳴鶴蘭亭帖 日下部鳴鶴君書 全一冊和紙木版 半紙判二五枚 正價貳拾錢 郵税貳錢
- ●明治書翰文 巖谷一六居士書 大和田建樹君著 全一冊和紙木版 大判一〇〇枚 正價參拾錢 郵税四錢
- ●新撰應用書翰 巖谷一六居士書 依田學海君著 全一冊和紙木版 大判八五枚 正價參拾五錢 郵税四錢
- ●初學手紙の文 河村青之輔君書 全二冊和紙木版 大判一〇〇枚 正價參拾五錢 郵税六錢

▲繪畫

- ●子供遊び畫帖 少林永濯君畫 全一冊和裝上製 大判錦繪木版刷 正價參圓五拾錢 郵税貳拾錢
- ●花鳥畫譜 瀧和亭翁畫 全一冊和裝上製 大判錦繪木判刷 正價參圓 郵税拾四錢
- ●光琳百圖 酒井抱一畫伯編 全二冊和紙木版 大判七二一枚 正價五拾錢 郵税四錢
- ●探幽百富士 狩野探幽畫伯筆 全四冊和紙木版 大判一一〇枚 正價壹圓 郵税拾四錢
- ●聚珍畫譜 探幽縮圖 狩野廉信君編 全三冊和紙木版 本書大判六九枚 正價貳圓 郵税拾四錢
- ●本朝畫纂大全 谷文晁畫伯筆 全四冊和紙木版 大判一一〇枚 正價壹圓貳拾錢 郵税拾錢
- ●祐信畫鑑 西川祐信君著 全三冊和紙木版 大判五三枚 正價四拾五錢 郵税拾錢
- ●亭齋畫譜 小島亭齋君著 全二冊和紙木版 大判四二枚 正價參拾錢 郵税六錢
- ●初心毛筆畫譜 毛筆畫研究會編 全五冊和裝木版 和紙彩色刷 正價一冊拾貳錢 郵税一冊四錢
  ▲山水之部 一冊 ▲人物及魚之部 一冊 ▲花鳥之部 一冊 ▲雜之部 一冊 ▲獸類之部 一冊

女學世界臨時增刊

女重寶記

女子が家庭に於ける仕事たるや頗る多岐多端なるを以て、之を完全に處理せんと欲せば、是非共百般の事理に通ぜざる可からず、又た諸種の智識を須ゐざる可からず、本誌は茲に見るあり、本年一月の增刊を以て、婦人齊家に要する萬般の智識を網羅したるもの、『女重寶記』を編せんとす、内容收むる所何れも家庭と婦人の重寶ならざるなし、日々家事の繁務を鞅掌しつゝある諸婦請ふ、本編を坐右に備へて便利を享け玉はんことを。

一月十五日發行

正價貳拾錢　郵稅貳錢

目次概要

新女子訓
娘十年記
女學生の日課
主婦の日課
新處帯組織法
臺所十二ヶ月
衛生十二ヶ月
家運必富法

家庭の三大務
家庭心得草
金錢出納の秘訣
庶物整理法
普請と修繕
室内の装飾
庭園四季の眺
盆栽と盆景

家庭の調度
衣裳簞笥
小間物の栞
化粧新法
洋服と洋食
旅行と遊散
贈答と接客
女房十二時

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女學世界

(明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可) 第六巻第壹號 (明治卅九年一月一日發行 毎月一回五日發行)



(定價金貳拾錢)

Vol. VI. (博文館印刷所印行) No.1.